天平の甍　山王廃寺跡の瓦再現

大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録４　2018　前橋市教育委員会

地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

The Omuro Park

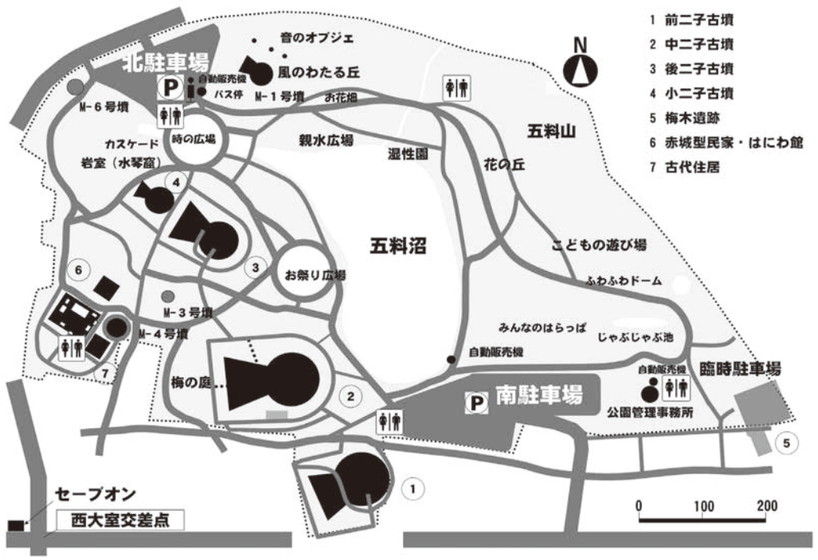
大室古墳の教室

考古学講演会・講座の記録 4

見事に焼きあがった上西原遺跡の６基の瓦塔

2018.3

前橋市教育委員会事務局文化財保護課



大室公園案内図

平成29年度　地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

大室古墳の教室
考古学講演会・講座の記録４

発行日　2018（平成30）年３月５日
発　行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853　群馬県前橋市総社町三丁目11-4
電話　027-280-6511　ファックス　027-251-1700
Eメール　bunkazai@city.maebashi.gunma.jp
印　刷　朝日印刷工業株式会社

目　　次

1　平成29年度大室古墳の教室事業について …… 1～ 16

2　匠の教室・制作品完成記念考古学講演会
「『世界の記憶』上野三碑－山上碑と山王廃寺－」
（前澤　和之：上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会委員）…… 17～ 32

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」

1　「石刃技術の交差点－堀越甲真木Ｂ遺跡のあり方から－」
（諸星　良一：株式会社　東京航業研究所）…… 33～ 54

2　「群馬県と埼玉県に分布する坏形土器－上毛野地域の開発と内斜口縁坏－」
（山本　良太：坂戸市教育委員会）…… 55～ 68

3　「総社二子山古墳の大刀をめぐって」
（徳江　秀夫：公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）…… 69～ 78

4　「渤海から上野国府へ渡った帯金具」
（田中　広明：公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）…… 79～ 90

5　「群馬大学附属中の地下に眠る縄文晩期　西新井遺跡」
（設楽　博己：東京大学大学院）…… 91～102

6　「榛名山東南麓の古墳めぐりバスツアー」
（深澤　敦仁：群馬県立歴史博物館）…… 103～118

付録　前二子古墳石室復元市民プロジェクト事業

1　平成24年度埴輪制作完成記念考古学講演会
「前二子古墳から見つかった杖形埴輪の謎」
（和田一之輔：独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所）… 119～136

2　「前二子古墳石室復元市民プロジェクト事業の経過」
（前原　　豊：前橋市教育委員会）…… 137～142

1　本書は、平成29年度に地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業で開講した考古学講演会・講座の講演をまとめた記録集である。

2　本書の編集は文化財保護係　前原　豊が行った。

3　本事業の開催にあたっては、市民ボランティア（展示）の阿部信一、宇佐美　渡、上島和子、柴崎まさ子、柴田敏子、戸丸澄江、野下登志子、萩原保弘、峰岸あや子、吉田真理子、各氏の協力があった。

4　講演会・講座については講演内容と配布レジュメを掲載し、原則として当日使用したスライドについては、紙数の都合から割愛した。

「前二子古墳石室復元市民プロジェクト」と「大室古墳の教室」事業の経過

項目	一般向け体験学習																	小学生向け体験学習							講演会	市民プロジェクト 教室事業		年報
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		26
年度	馬・石見、盾持人、動物の埴輪	前二子、筒形器台、装飾の須恵器	山王廃寺の瓦	上西原遺跡の瓦塔	前二子古墳の土師器	群馬と全国の土偶	群馬の耳飾り	法隆寺と山王廃寺の塑像	前二子と全国の馬具	前二子古墳のガラス玉	前二子古墳の鏡	金冠塚古墳の冠	元総社蒼海遺跡群の前期土偶	アイロン金色ストラップ	プラ板ストラップ	鬼瓦、土偶、埴輪のお面	古代文様タイル	小学生はにわ	小学生どぐう	小学生かがみ	小学生まがたま	小学生ばぐストラップ	小学生アイロン金色ストラップ	小学生プラ板ストラップ	考古学講演会の講師	市…前二子古墳石室復元市民プロジェクト 教…大室古墳の教室		文化財保護課年報
H16																												35号
H17																									高久健二			36号
H18		●前			●																				白石太一郎	市01	前二子の土器	37号
H19									●																杉山秀宏 平出　豊	市02	馬具	38号
H20										●	●														右島和夫	市03	鏡・ガラス玉	39号
H21													●															40号
H22		●筒																							山本孝文	市04	装飾器台	41号
H23												●				●									右島和夫	市05	金冠	42号
H24	●馬																								和田一之輔	市06	石見・馬	43号
H25	第２回古代東国文化サミット～ググっとぐんま・大室古墳フェスタ～																								白石太一郎 柳澤一男 右島和夫 高久健二 前原　豊			44号
H26		●壺					●		●							●		●		●	●	●			右島和夫	教01	装飾壺	45号
H27	●盾					●		●法	●				●	●	●	●		●	●	●	●		●		日高　慎	教02	盾持人	46号
H28	●動					●		●山	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●		●		三浦茂三郎	教03	動物埴輪	47号
H29			●	●					●				●		●	●	●	●		●	●			●	前澤和之	教04	瓦・瓦塔	48号

●カラーパンフレットシリーズ
1　『赤城山南麓の旧石器～1946年、ここで旧石器が発見された～』
2　『赤城山南麓の縄文 part１～移り行く縄文土器～』
3　『底の尖った土器～赤城山南麓の縄文 part２～』
4　『朝倉・広瀬古墳群～群馬の古墳時代はここから始まった‼』
5　『前橋市大室古墳群～赤城南麓の大豪族の威勢～』
6　『東国の雄　総社古墳群』
7　『赤城山南麓の古墳～裾野は長し赤城山～』
8　『榛名山東南麓の古墳～古代群馬の中心地　ここから群馬が始まった』
9　『国指定史跡　山王廃寺跡～よみがえる白鳳の世界へ～』
10　『史跡　女堀～赤城山南麓を横断する巨大用水路～』

●記録集
1　平成26年度　大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録１
2　平成27年度　大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録２
3　平成28年度　大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録３
4　平成29年度　大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録４

1　平成29年度大室古墳の教室事業について

1　事業名称

地域の特色ある埋蔵文化財活用事業
「大室古墳の教室」

2　目　　的

大室古墳群史跡整備事業は古墳の整備は完成したが、当初計画された資料館の建設は実現していない。そこで「大室古墳の教室」で体験学習や考古学講座を開講し、展示場を開設し、市内の埋蔵文化財の活用や本市の古代文化を紹介するとともに郷土愛を育むことを目的とする。

3　事業費

2,880,000円（50％国庫補助対象）

4　開催した普及事業

⑴　小学生夏休み森の考古学教室

期　間：平成29年７月27日㈭から８月25日㈮までの毎週木・金曜日
時　間：午前９時から午前12時まで
講　師：文化財保護課職員
会　場：前橋市総社歴史資料館学習室

第１回　はにわ・どぐうをつくろう１
期　日：平成29年７月27日㈭17名
第２回　はにわ・どぐうをつくろう２
期　日：平成29年７月28日㈮８名
第３回　金属を溶かしてかがみをつくろう１

図１　小学生夏休み森の考古学教室・鏡つくり

期　日：平成29年８月３日㈭16名
第４回　金属を溶かしてかがみをつくろう２
期　日：平成29年８月４日㈮22名
第５回　まがたまをつくろう１
期　日：平成29年８月10日㈭23名
第６回　まがたまをつくろう２
期　日：平成29年８月11日㈮17名
第７回　プラ板をつくろう１
期　日：平成29年８月24日㈭９名
第８回　プラ板をつくろう２
期　日：平成29年８月25日㈮10名

〇小学生作成の埴輪と土偶の焼成
平成29年８月17日㈭一心窯の穴窯焼成
平成29年８月22日㈫一心窯の窯出し

〇作品引渡
平成29年８月24日㈭から25日㈮まで

⑵　考古学講座2017・赤城と榛名山麓の古代を学ぶ

期間：８月19日㈯から10月７日㈯までの土曜日
時　間：午前９時半から午前11時半まで
会　場：前橋市総社歴史資料館学習室

第１回　「石刃技術の交差点－堀越甲真木Ｂ遺跡のあり方から」
講　師：諸星　良一氏（株式会社　東京航業研究所）
期　日：平成29年８月19日、参加者：54名
第２回　「群馬と埼玉に分布する古墳時代の坏形土器の謎」

図２　考古学講座2017「赤城と榛名山の古代を学ぶ」

講　師：山本　良太氏（坂戸市教育委員会）
期　日：平成29年８月26日、参加者：64名
第３回　「総社二子山古墳の大刀をめぐって」
講　師：徳江　秀夫氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
期　日：平成29年９月２日、参加者：64名

第４回　「渤海から上野国府に渡った帯金具」
　講　師：田中　広明氏（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
　期　日：平成29年９月16日、参加者：66名
第５回　「群馬大学附属中学校の地下に眠る縄文晩期西新井遺跡」
　講　師：設楽　博己氏（東京大学大学院教授）
　期　日：平成29年10月７日、参加者：67名
番外編　「榛名山東南麓の古墳めぐりバスツアー」
　講　師：深澤　敦仁氏（群馬県立歴史博物館）

図３　榛名山東南麓の古墳めぐりバスツアー

　期　日：平成29年９月８日㈮定員：22名
　会　場：総社古墳群、保渡田古墳群ほか

⑶　匠の教室

第１回　山王廃寺の瓦をつくる
　講　師：石井　政幸氏（一心窯主宰）
　講　師：永井　智教氏（株式会社コクドリサーチ）
　期　間：平成29年６月24日㈯から７月２日㈰まで

図４　匠の教室・山王廃寺の瓦をつくる

　時　間：午前９時から午後４時まで
　参加者：20名　延べ人数：93名
　会　場：大室民家園主屋・離れ

第２回　上西原遺跡の瓦塔をつくる
　講　師：石井　政幸氏（一心窯主宰）
　講　師：坂田　敏行氏（北本市教育委員会）
　期　間：平成29年９月30日㈯から10月10日㈫まで

図５　匠の教室・上西原遺跡の瓦塔をつくる

　時　間：午前９時から午後４時まで
　参加者：16名　延べ人数：129名
　会　場：大室民家園主屋・離れ
第３回　前二子古墳の剣菱形杏葉をつくる
　講　師：杉山　秀宏氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
　日　時：平成29年11月24日㈮
　時　間：午前９時から午後４時まで
　参加者：11名
　会　場：前橋市総社歴史資料館学習室
第４回　山王廃寺の古代文様タイルをつくる
　講　師：中島　侑子氏（タイルアート研究家）
　期　間：平成29年12月２日㈯・３日㈰
　時　間：午前９時から午後４時まで

図６　匠の教室・山王廃寺の古代文様タイルをつくる

　参加者：22名　延べ人数：28名
　会　場：前橋市総社歴史資料館学習室

⑷　制作品完成記念考古学講演会

日　時：平成30年２月３日㈯
　　午後２時から午後４時まで
演　題：ユネスコ「世界の記憶」上野三碑
　　『山上碑と山王廃寺』
講　師：前澤和之氏（上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会委員）
会　場：前橋市総合福祉会館多目的ホール

図７　制作品完成記念考古学講演会・前澤和之氏

参加者：205名

⑸　大室はにわ館の展示

開設年月日：平成26年11月３日
会　場：西大室町2510大室民家園土蔵
面　積：１階24㎡・２階24㎡計48㎡
開　館：４月から12月まで
　　木曜日から日曜日・祝日
　　１月から３月まで
　　土・日曜日・祝日、年末年始は休館
時　間：午前９時から午後４時まで
展示資料：
①大室古墳群・内堀遺跡群出土品。旧石器・縄文・古墳時代の遺物・埴輪など
②前二子古墳石室復元市民プロジェクトの市民ボランティア制作品
　埴輪・馬具・玉・鏡・須恵器・冠など
③韓国慶州民俗村新羅窯の新羅焼。高杯・壺・装飾土器など
④東京福祉大学柴田研究室制作学習教材。
　「３Ｄ映像でみる大室古墳群」
⑥お面をつくる・土偶をつくる・縄文文様体験しようコーナー
⑦大室古墳群模型・前二子古墳石室模型・後二子古墳石室模型
⑧入館者数：平成29年度8000人

⑹　制作瓦・瓦塔の展示

展示日時　平成30年２月５日㈪
瓦塔Ａ　前橋市総社歴史資料館
瓦塔Ｂ　前橋市粕川歴史民俗資料館
瓦塔Ｃ　大室公園民家園主屋床の間
瓦塔Ｄ　大室公園民家園大室はにわ館
瓦塔Ｅ　文化財保護課ロビー展示
瓦塔Ｆ　文化財保護課ロビー展示
山王廃寺瓦　総社歴史資料館（軒平瓦６枚、平瓦24枚、軒丸瓦５枚、丸瓦10枚）

⑺　ボランティア活動

第１回　古墳の除草・藤棚整備
　期　日：平成29年９月１日㈮参加者：８名
　会　場：小二子古墳除草、大室公園こふんの藤棚整備
第２回　匠の教室・瓦塔つくり会場準備
　期　日：平成29年９月29日㈮
　会　場：大室公園民家園主屋・離れ　参加者：４名
第３回　瓦梱包
　会　場：大室公園民家園
　日　時：平成29年10月27日㈮
　　午前９時から午後４時まで
　参加者：８名
第４回　瓦を窯に詰める
　指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
　会　場：鼻毛石町一心窯
　日　時：平成29年11月９日㈭
　　午前９時から午後４時まで
　参加者：11名
第５回　瓦窯焚き
　指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
　会　場：鼻毛石町一心窯
　日　時：平成29年11月10日㈮～11月11日㈯午前９時から翌日の午後１時まで
　参加者：11名
第６回　瓦塔梱包
　会　場：大室公園民家園
　日　時：平成29年11月17日㈮
　　午前９時から午後２時まで
　参加者：７名
第７回　瓦窯出し
　指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
　会　場：鼻毛石町一心窯
　日　時：平成29年11月21日㈫
　　午前９時から午後３時まで

図８　瓦塔窯焚きボランティア

参加者：12名

第８回　瓦塔窯詰め

指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）

会　場：鼻毛石町一心窯

日　時：平成29年11月28日㈫

午前11時から午後３時まで

参加者：11名

第９回　瓦塔窯焚き

指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）

会　場：鼻毛石町一心窯

日　時：平成29年11月30日㈭

午前11時から午後３時まで

参加者：11名

図９　おっきりこみを食べてもうひと踏んばり

第10回　瓦塔窯出し

指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）

会　場：鼻毛石町一心窯

日　時：平成29年12月10日㈰

午前９時から午後３時まで

参加者：16名

第11回　考古学講演会準備・撤去

期　日：平成30年２月３日㈯

会　場：前橋市総合福祉会館多目的ホール

参加者：６名

第12回　藤棚の剪定

期　日：平成30年３月16日㈮

会　場：大室公園こふんの藤棚、参加者：８名

⑻　印刷物の刊行

①赤城山南麓の旧石器パンフＡ４判16頁2000部

②底の尖った土器パンフＡ４判16頁2000部

③朝倉・広瀬古墳群パンフＡ４判16頁2000部

④大室古墳群パンフＡ４判16頁4000部

⑤総社古墳群パンフＡ４判16頁2000部

⑥赤城山南麓の古墳パンフＡ４判16頁2000部

⑦榛名山南東麓の古墳パンフＡ４判16頁2000部

図10　完成した瓦塔６基

⑧山王廃寺跡パンフＡ４判16頁2000部

⑨史跡女堀パンフＡ４判16頁2000部

⑩「考古学講演会・講座の記録３」Ａ４判144頁400部

⑪「考古学講演会・講座の記録４」Ａ４判144頁400部

大室古墳の教室・考古学講座2017
「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」

『榛名山東南麓の古墳バスツアー』番外編・深澤敦仁先生（保渡田古墳群にて）

『石刃技術の交差点―堀越甲真木B遺跡のあり方から―』
第１回・諸星良一先生（総社歴史資料館）

『群馬と埼玉に分布する古墳時代杯形土器の謎』
第２回・山本良太先生（総社歴史資料館）

『群大附属中の地下に眠る縄文晩期・西新井遺跡』第５回・設楽博己先生（総社歴史資料館）

『総社二子山古墳の大刀をめぐって』
第３回・徳江秀夫先生（総社歴史資料館）

『渤海から上野国府に渡った帯金具』第４回・田中広明先生（総社歴史資料館）

『群大附属中の地下に眠る縄文晩期・西新井遺跡』
第５回・設楽博己先生（総社歴史資料館）

大室古墳の教室
小学生夏休み森の考古学教室

わたしの鏡が一番光ってるよ(総社歴史資料館)

「まがたま」の作り方よく聞いてください(総社歴史資料館)

私の「まがたま」いいでしょ(総社歴史資料館)

プラ板がきれいに縮み、うまくできました(総社歴史資料館)

やっぱり僕の鏡が良く映るよ(総社歴史資料館)

たくさん焼きあがった小学生の力作たち(鼻毛石町一心窯)

よく聞いて!これから粘土で筒をつくるよ(総社歴史資料館)

金属が溶けてるからヤケドしないよう気をつけてね(総社歴史資料館)

大室古墳の教室・山王廃寺跡の 瓦をつくる

●山王廃寺跡の瓦

山王廃寺は東に塔、西に金堂をもつ奈良斑鳩の法起寺に似た伽藍配置です。またユネスコ「世界の記憶」上野三碑である山上碑に刻まれた「放光寺」と考えられます。また、群馬県重要文化財に指定された塑像群約3000点は神将像、菩薩像、羅漢像、駱駝像、猪像、山岳などで構成され、釈迦の生前を表現したジオラマが存在していました。

その屋根を飾った軒先の瓦は、蓮華の文様などを施した軒丸瓦や軒平瓦でした。山王廃寺の創建期とされる７世紀後半の軒丸瓦には、「素弁八弁蓮華文」や「複弁七弁蓮華文」、「複弁八弁蓮華文」があります。いずれも、均整のとれた肉厚かつ、シャープな作りで蓮弁を表現しています。今回は、素弁と複弁の軒丸瓦と三重孤文の軒平瓦を制作しました。

石井政幸先生から焼成の講評（鼻毛石町一心窯）

見事に焼きあがった山王廃寺の瓦（鼻毛石町一心窯）

丸瓦にスタンプされた「方光」（鼻毛石町一心窯）

27時間の窯焚き　最高温度1150℃　窯出しを終えて（鼻毛石一心窯）

大室古墳の教室・山王廃寺跡の 瓦をつくる

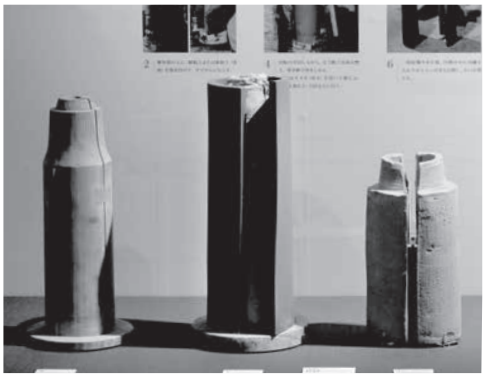
●古代の平瓦の作り方

「桶巻づくり」と「1枚づくり」の2つがあります。「桶巻きづくり」は、大円錐台形の桶に粘土を巻き付け、叩きしめて成形し、4分割して一度に4枚の平瓦をつくります。「1枚づくり」は瓦の大きさにした粘土板を蒲鉾形の型に乗せて成形します。瓦作りの初期、飛鳥時代は「桶巻きづくり」で熟練した職人の手によりましたが、大量生産が求められた奈良時代には、養成された工人が1枚ずつ手早く作っていく「1枚づくり」へと変わっていきました。今回は両方で制作しました。

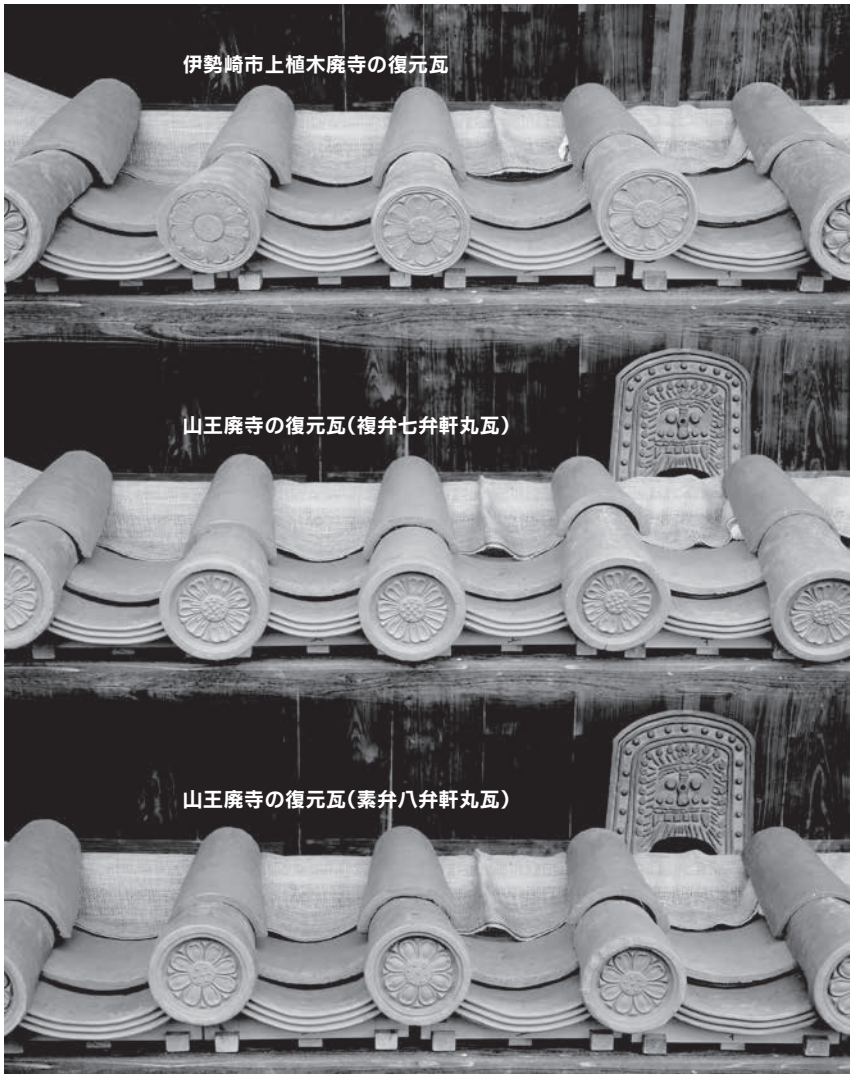
桶巻きづくりの桶
（竹中大工道具館2017より）

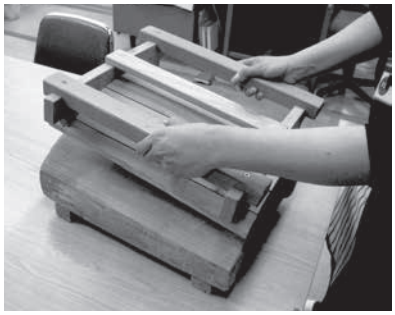
桶に麻布袋をかぶせ粘土を巻く（竹中大工道具館2017より）

桶を抜き去り　鎌で4分割
（竹中大工道具館2017より）

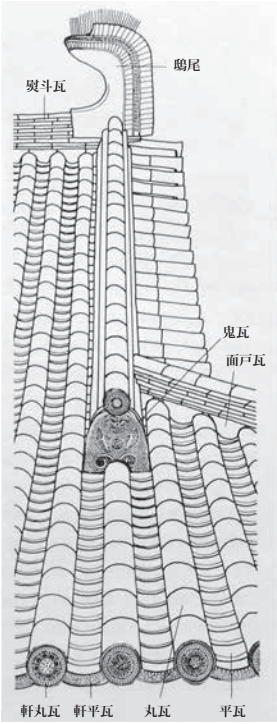


丸瓦の木型　粘土を巻いて2分割
（竹中大工道具館2017より）





「1枚づくり」の成形台（鳩山町教育委員会提供）



古代の屋根瓦
（山崎信二2011より）

大室古墳の教室・山王廃寺跡の 瓦をつくる

丸瓦に瓦当面をつける二人の息はピッタリ
（大室民家園）

軒丸瓦の瓦当面石膏型を修正しています
（大室民家園）

平瓦に軒平瓦の瓦当面をつけています
（大室民家園）

たくさん出来上がった丸瓦（大室民家園）

桶巻きづくりは全員参加
（大室民家園）

丸瓦制作のようす
（大室民家園）

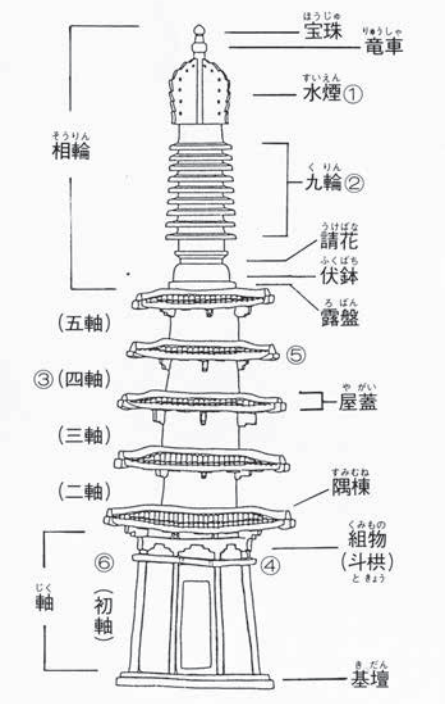
1150℃　27時間焼成　昼夜問わずに薪をくべました
（鼻毛石町一心窯）

大室古墳の教室・上西原遺跡の 瓦塔をつくる

●上西原遺跡と瓦塔

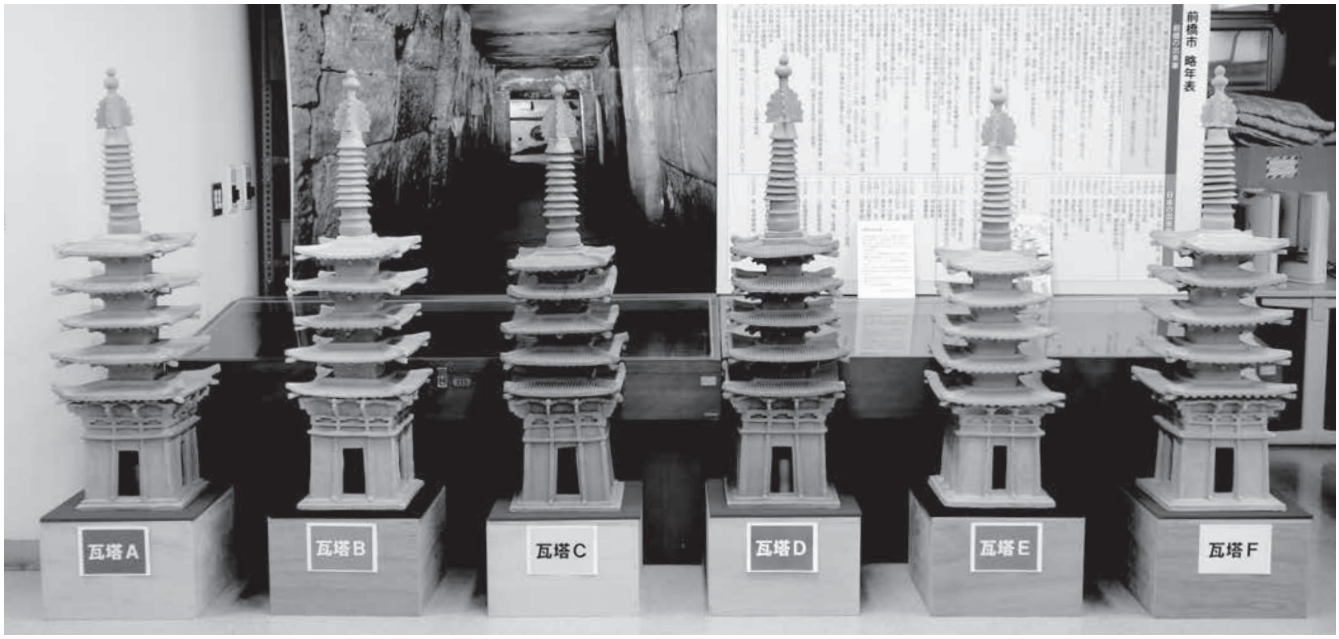
上西原遺跡は前橋市東部の荒砥地区にあり、古代勢多郡の役所跡と推定されています。「瓦塔」は郡役所の中の寺院跡にある仏堂基礎の周辺から出土しました。同じ場所から、塑像片も多数見つかっており、大きな塔を建立する代わりに、この仏堂の中に瓦塔は置かれて礼拝されていました。「瓦塔」は、粘土を焼いて作られた小型の塔で、実物の木造塔を模倣して屋根、軸などを個別に作り組み立てられました。奈良時代の中頃に出現し、平安時代に盛んに作られ、群馬県と埼玉県の遺跡に集中して出土します。

埼玉県美里町東山遺跡の瓦塔
高さ115.7cm
（埼玉県立歴史資料館1994より）



瓦塔部分名称図
（埼玉県立歴史資料館1994より）

群馬県前橋市上西原遺跡の瓦塔
高さ117.6cm
（群馬県教育委員会提供）



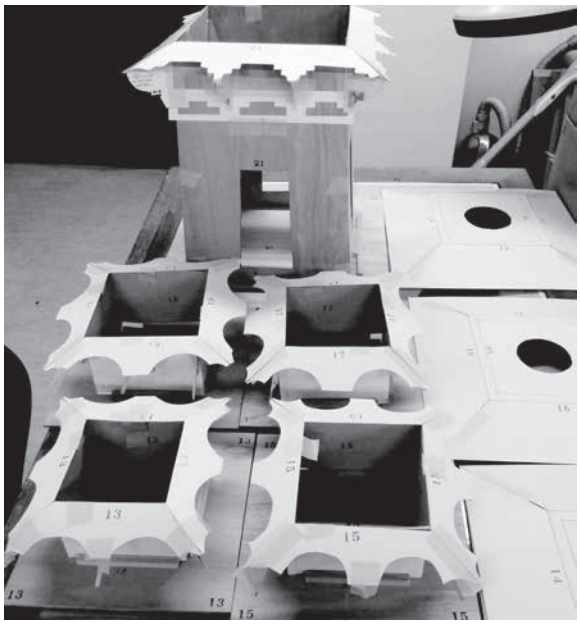
見事に完成した瓦塔６塔、左よりＡ班からＦ班の制作品

大室古墳の教室・上西原遺跡の 瓦塔をつくる

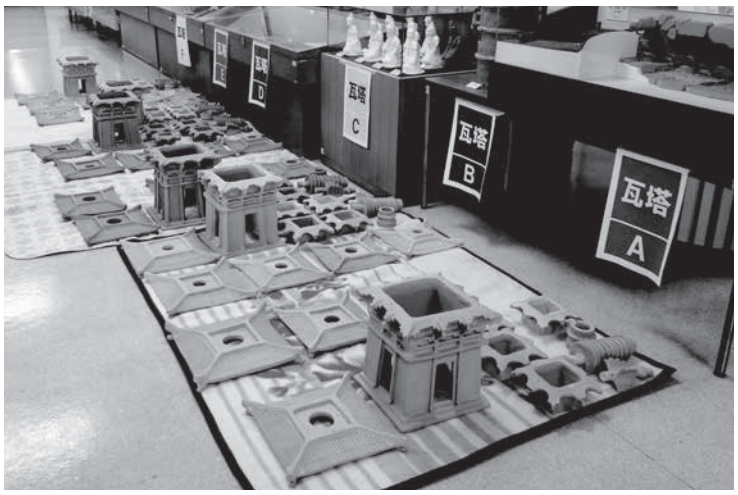
組み立てられた６基の瓦塔

●瓦塔制作方法

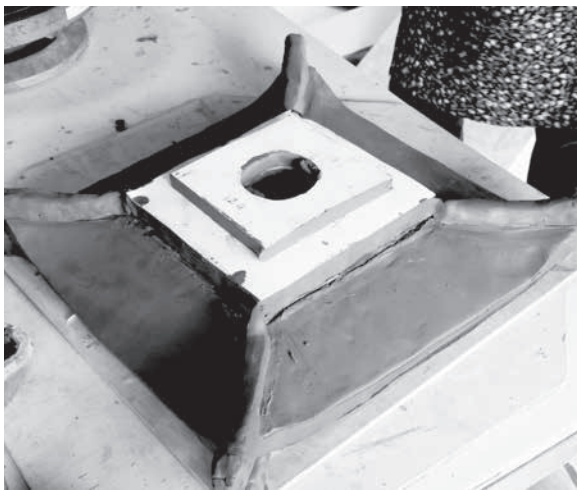
上西原遺跡の瓦塔図面を基にボール紙と薄いベニヤ板で型紙を制作個数分用意。この型紙を基に均一の厚さに延ばした粘土板を作成。屋蓋部は粘土板1枚を使用して成形し、内側の垂木部分は別の粘土を付け加えました。軸部も粘土板1枚によって壁面とし、それを4面貼り合わせました。宝珠・竜車、斗供は型紙から、九輪と請花・伏鉢は石膏型から作りました。屋根内型は、建築用の発泡スチロールにベニヤ板をマスキングテープで貼り合わせた簡便なものを使用しました。



ボール紙とベニヤ板の型紙を用意



ＡからＦの瓦塔　各パーツ毎に分けられこれから組み立て



5層目の屋蓋部はたいへん　隅棟のほか露盤と伏鉢があります

大室古墳の教室・上西原遺跡の 瓦塔をつくる

6基の瓦塔の窯出しを無事に終え組み立てました(鼻毛石町一心窯)

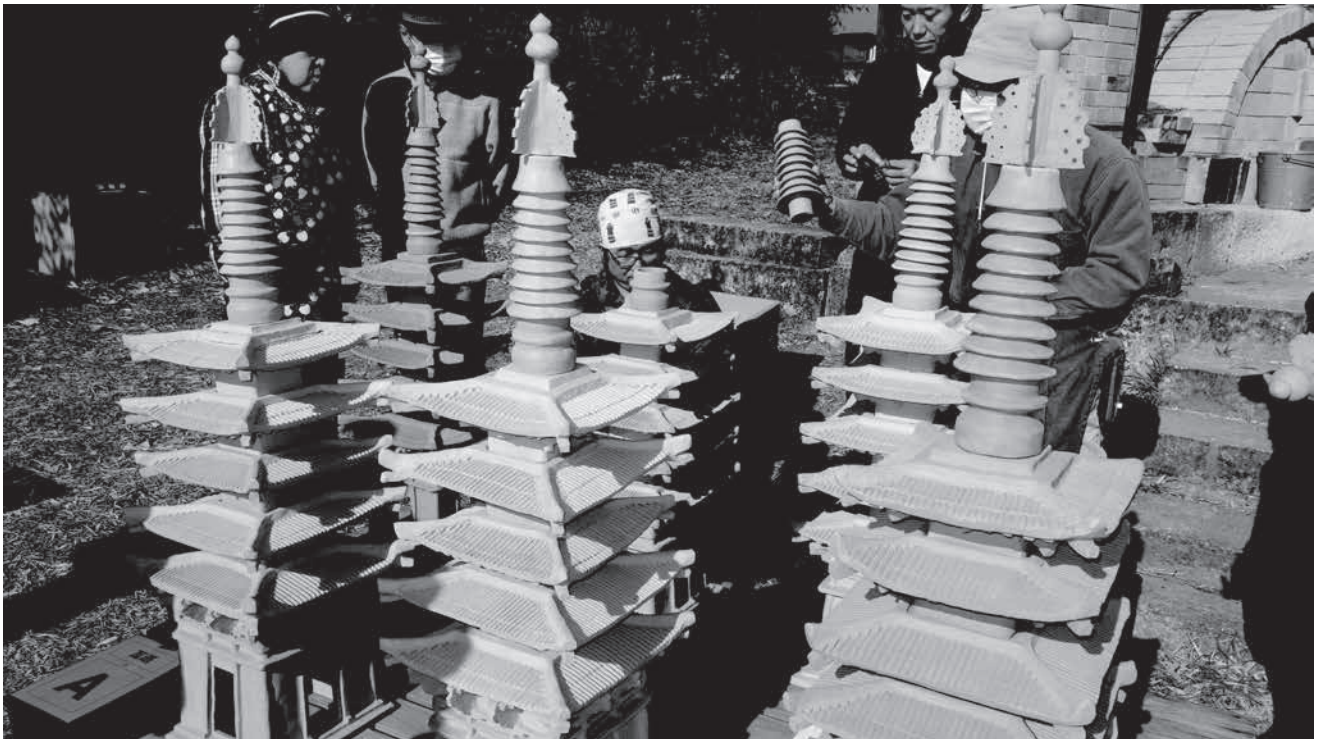
A班の瓦塔　入念かつ繊細にできました(鼻毛石町一心窯)

B班の瓦塔　奇想天外 ダイナミックな瓦塔ができました
(鼻毛石町一心窯)

C班の瓦塔　時間がなくて大変でしたが助っ人の参加で完成
(鼻毛石町一心窯)

D班の瓦塔　砂入りのテラコッタ粘土 乾燥が早くて大変でした
(鼻毛石町一心窯)

大室古墳の教室・上西原遺跡の 瓦塔をつくる



最後の１塔の組み立て これで6塔が完成（鼻毛石町一心窯）

半分に割った篠竹で屋根瓦に筋を平行につける（大室民家園）

さあ追い込みだ 坂田敏行先生も大忙し（大室民家園）

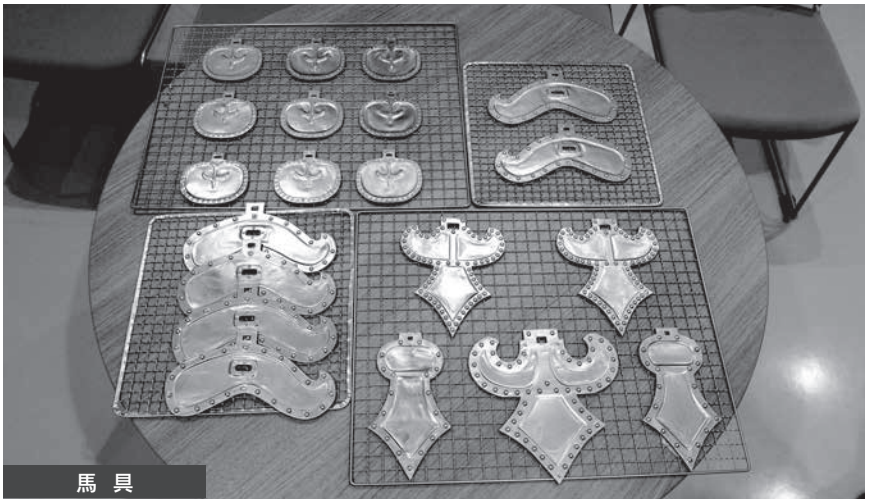
おっ切り込みができたよ～!お昼にしましょう（鼻毛石町一心窯）

作品を囲んでお昼 たくさん食べてください（鼻毛石町一心窯）

大室古墳の教室
前二子古墳の馬具・古代文様タイルをつくる

中島侑子先生のお手本に見入る（総社歴史資料館）

細かいところに色をつけてます（総社歴史資料館）



完成した杏葉と鏡板（総社歴史資料館）

焼きあがったタイル

杉山秀宏先生の講評（総社歴史資料館）

こまかなカーブは銅板が上手くかぶさらない
（総社歴史資料館）

細かいところに色をつけます
（総社歴史資料館）

「匠の教室」制作品完成記念　考古学講演会

匠の教室制作品完成記念・考古学講演会ユネスコ世界の記憶「上野三碑」『山上碑と山王廃寺』講師：前澤和之先生

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「古代文様タイル」

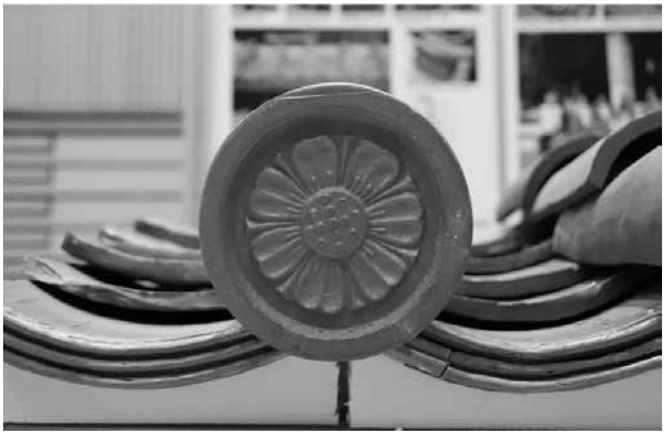
匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「古代文様タイル」

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「瓦塔」

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「瓦塔」

「匠の教室」制作品完成記念　考古学講演会

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「上西原遺跡の瓦塔」



匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「山王廃寺の瓦」

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「馬具」

匠の教室制作品完成記念・お披露目展示「古代文様タイル」

匠の教室制作品完成記念講演会の様子

2　匠の教室・制作品完成記念考古学講演会

「世界の記憶」上野三碑（こうずけさんぴ）－山上碑（やまのうえひ）と山王廃寺（さんのうはいじ）－

前澤和之（まえざわかずゆき）（上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会委員）

はじめに

群馬県高崎市の西南部にある上野三碑（山上碑・多胡碑・金井沢碑）は、2017年10月にユネスコの「世界の記憶」（Memory of the World）に登録されました。日本の古代社会の変化を言い表す言葉として「古墳から寺院へ」があり、前橋市総社地区にある総社古墳群と山王廃寺は考古学の面からそれを良く表していることで知られていますが、上野三碑はその様相を文字によって私たちに伝えてくれる全国的にも貴重な記憶遺産です。ここではそうした上野三碑と山王廃寺のかかわりを中心にして、東国での地域社会の動きを探ってみます。【図表１】

１　ユネスコ「世界の記憶」とは

「世界の記憶」とは何なのか、どの様なものが登録されているのかを説明しておきます。

⑴　「世界の記憶」の目的

歴史的な出来事や人びとの暮らしを記録した文書や絵画、写真などは、放っておくと次第に傷んだり、盗まれたり壊されてしまう心配があります。そのためユネスコ（UNESCO、国際連合教育科学文化機関）は世界的に重要な記録物と認定されたものを登録し、国際的な協力のもとで高度な技術を使って保存するのにあわせて、その価値を広く知ってもらうため1992年この事業を始めました。1997年から２年ごとに登録を行っており、2017年はその年に当たり審査が実施されました。

⑵　対象となる記録物

手書き原稿・書籍・新聞・ポスター・図面・地図・音楽・フィルム・写真などですが、碑銘（碑に書かれている文章）も含まれています。

⑶　登録された記録物

エジプト：スエズ運河の記録
ドイツ：ベートーベン『交響曲第９番』手書き楽譜
スウェーデン：アルフレッド・ノーベル家の記録
オランダ：『アンネの日記』
フランス：ルイ・パスツールの記録
タイ：ラームカムヘーン大王碑文
ベトナム：1442年から1779年までの科挙の石碑記録

2017年10月の登録で427件となり、石碑は８件があります。

⑷　日本の登録記録物

2011年　「山本作兵衛コレクション」（筑豊の炭鉱画など約700点、福岡県田川市・福岡県立大学）

＊国内初の登録、これにより急速に関心が高まりました。

2013年　「御堂関白記（みどうかんぱくき）」（国宝）、「慶長遣欧使節関係資料」（国宝、日本・スペイン）

2015年　「東寺百合文書（とうじひゃくごうもんじょ）」、「舞鶴への生還1945―1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」（舞鶴市）

⑸　今回の登録

2015年の国内公募では全国から16件の申請がありましたが、「上野三碑」（上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会が申請）と「杉原リスト － 1940年、杉原千畝が避難難民救済のために発給した日本通過ビザの記録」（岐阜県八百津町が申請）の２件が選ばれて、2016年にユネスコ本部へ申請書（英文）を提出しました。

そして、2017年10月31日（ユネスコ本部があるパリでは30日）に、「上野三碑」の１件の登録が認められました。これと同時に、日本と韓国の民間団体が共同申請していた「朝鮮通信使に関する記録」も登録となりました。

２　山上碑と放光寺について

上野三碑の始まりとなる山上碑と、その碑文に書かれている放光寺との関係をみていきます。

⑴　山上碑【図表３】

名　称：国指定特別史跡　山上碑及び古墳
所在地：高崎市山名町字山神谷（旧上野国片岡郡、後に多胡郡）、丘陵上部に位置し東側に並んで山上古墳（山寄式円墳、截石切組積横穴式石室）が

あります。

年　代：辛巳歳（681年、天武天皇10年）

形　状：輝石安山岩の自然石（榛名山由来の転石）自然石を使った石碑では日本最古であり、朝鮮半島の新羅の戊戌塢作碑（578年）・南山新城碑（591年）などに似ています。【図表６】

特　色：古代の石碑と銘文をもつ石塔は全国に18例が現存するだけですが、山上碑はその中で２番目に古く、全体が残るものとしては最古になります。碑文は日本語の言葉の順に漢字を並べる方法で記されており、外来の漢字を日本語の表現に応用した最も早い例としても注目されています。【図表２】

⑵　山上碑と古墳

石碑の建立と古墳の築造がほぼ同時期であることから、古墳と墓碑の組み合わせを示す唯一の例とされてきました。その後、山上古墳の発掘調査や古墳研究の進展によって、横穴式石室の構造から見て山上古墳は７世紀中頃に造られたとする説が有力になり、古墳の築造から30年近く経て建立された山上碑を墓碑と見るのは難しくなりました。

そこで古墳と石碑の関係を、碑文の構成と内容から探ってみます。碑文は３つの段落で構成されており、佐野三家（みやけ）の管理者となった健守命（たけもりのみこと）の子孫である黒売刀自（くろめと）と大児臣（おおごのおみ）との間に生まれた長利（ながとし）（音読みでは「ちょうり」）が、母のために記したものであるとしています。この解釈で注目したいのは、２箇所で「僧」が使われていることです。先ず「長利僧」ですが、「健守命」・「黒売刀自」が〈個人名＋尊称〉であることから、この「僧」も社会的に尊敬される立場であるのを示した表記と考えられます。一方の「放光寺僧」は、本文末から１字分空けて署名のように書かれており、長利が「放光寺の僧」として石碑の建立に当たったのを明らかにしたものとみることができます。ここに、山上碑と古墳との関係を解く鍵があると考えます。

⑶「放光寺僧」の意味

そこで、この時期の寺院をめぐるに動きに眼を向けてみます。

○『日本書紀』594年（推古天皇２）２月に「君親の恩の為、競いて仏舎を造る、即ち是を寺と謂う」と古代社会での寺院に対する見方が示されています。

○『日本書紀』645年（大化元）８月に「天皇より伴造に至るまで造る所の寺、営むこと能ざるは、朕が皆助け作る」と豪族たちに寺院建立を促す策が出されました。

○『日本書紀』675年（天武天皇４）４月に大斎を設けた際には2400余人の僧尼を集めたとあり、この50年間に1000余人の僧尼が生まれていたことがわかります。

こうした状況は、全国各地で７世紀中～後期に豪族によって建立された寺院跡が多数見つかっていることからも窺えます。群馬県内でもこの時期に創建された寺院として、山王廃寺（前橋市）・上植木廃寺（伊勢崎市）・寺井廃寺（太田市）などが知られています。

その一方で、寺院の乱立や正式認可を得ていない僧尼の横行が目立つようになりました。

○『日本書紀』679年（天武天皇８）４月に寺封（寺院に税を納めるのを認められた家）の統制と併せて、「諸寺の名を定める」との策が出されました。

これは国家が公認する寺院を選別するもので、僧尼を置くことが寺院としての必須条件であったのは間違いありません。放光寺はこの選別を経て、国家から寺名を認証された有力寺院であったと見ることができます。長利はそうした寺院の僧であったのです。

以上のことから、碑文の「長利僧」は君親の恩に報いる仏者としての立場を表したもの、「放光寺僧」は長利が国家から認証を得た寺院で、枢要な立場にあったのを後世にも伝えようとしたものと考えます。山上碑はこうした報恩意識に基づいて、母の墳墓の側らに建立されたと見てよいでしょう。碑文に母の出自を「佐野三家を定め賜える」とヤマト王権との関わりで示したのも、自分を育んでくれた母への強い想いを表したものと理解できます。中国や韓国の研究者からは、こうした個人的な家系意識を刻んだ石碑は両国内にはみられず、上野三碑に独自なものであることが指摘されています。

このように山上碑は、古代における国家の寺院政策を反映した、仏教史上高い意義をもった金石文と見ることができます。それと同時に上毛野地域における有力者の社会的力量や立場の象徴が、伝統的な古墳築造から新来文化である寺院建立へと変化する、具体的なようすを記憶にとどめた記念碑でもあります。

⑷　山上碑の建立

上野三碑の建立はその形態の類似から、朝鮮半島 - 特に新羅から伝えられた渡来文化の一つとみることができます。そうした新しい文化の意義を理解し、いち早く受け容れて実現したのは、長利が有力寺院である放光寺の僧であったことが理由にあげられます。

『日本書紀』や仏教説話集である『日本霊異記』などをみると、当時の寺院は最新の文化（文物と技術）と情報が集まる拠点であり、それらをもたらす知識人や技術者が集う場所であったのがわかります。

７世紀後半には660年の百済の滅亡、663年の白村江の戦い、668年の高句麗の滅亡といった朝鮮半島の政治的変動にともなって渡来した、多くの人々が東国に移り住むようになりました。次の『日本書紀』の記事にそれを窺うことができます。

○681年（天武天皇10）８月の詔では、三韓から渡来した人々とその子孫らに税を免除することが示されました。

○687年（持統天皇元）３月には、新羅から来た14人を下毛野国に住まわせて、田を与えて生業を整えさせ、４月には新羅からの僧尼と百姓22人を武蔵国に住まわせたとあります。

注目されるのは、その中に新羅からの僧尼や官人といった知識人が多数含まれていたことです。李成市氏によると、高句麗滅亡後の668年から696年までの28年間に新羅から25回、日本から９回の使節の往来があり、697年から731年までの34年間には新羅から10回、日本から10回の使節派遣がありました。これによる使者・留学生・留学僧らによって新羅の文物・学芸・制度などが日本に伝えられましたが、石碑建立の情報もその一つであったと考えられます。

また、この頃には東国の仏教政策の中心となる下野薬師寺（栃木県下野市）の創建、698年（持統天皇３）正月に陸奥国の蝦夷の脂利古の息子の麻呂と鐵折を沙門とする、同年７月には同国の蝦夷の沙門自得に金銅薬師仏像・観世音菩薩像や種々の仏具を与えるなど、蝦夷に対して仏教による教化策が盛んに進められていました。そうした政策にかかわるヤマトや畿内からの僧尼・技術者・官人たちが、東山道の駅路を通って東国に着き、真新しい堂塔が建ち並んだ放光寺に立ち寄って、御仏に新たな地の鎮護や安寧を祈願したとしても不思議はありません。

そうした中の誰が石碑建立の情報を伝えたかを特定することは出来ませんが、仏教への強い帰依心と高い学識を備え、家系表記にみられる鋭い歴史感覚、漢字の日本語表記への応用を発想する創意力などの才に富んだ長利が、そうした人々との交流の中から着想したのではないかと考えます。山上碑をはじめとする上野三碑の出発点は、放光寺にあったとみることができるわけです。

3　山王廃寺について

放光寺はどの様な寺院であったのか、山王廃寺の発掘調査の成果との関係から探ってみます。

⑴　山王廃寺の調査

名　称：国指定史跡　山王廃寺【図表８】

所在地：前橋市総社町総社2408　日枝神社（旧上野国群馬郡）。

由　来：大正時代中期に地元の方が日枝神社境内で穴を掘っていた際に塔心礎を発見。
1921年（大正10）に塔心礎の調査が行われ、1928年（昭和３）に史蹟名勝天然紀念物保存法により「山王塔阯」として史蹟に指定。

発掘調査：1974年（昭和49）～1981年（同56）に前橋市教育委員会による発掘調査が行われ、塔心礎の西側で金堂基壇が見つかりました。1996年（平成９）からの発掘調査では講堂・回廊跡などが発見されています。

⑵　伽藍配置

発掘調査により、回廊の内部に塔・金堂が東西に並ぶ法起寺式の伽藍配置であるのが確認されました。

回廊範囲　東西79.7m×南北81.0mの単廊で中門と講堂に取り付く　柱間隔は3.6m。

金堂基壇　東西22.0m×南北16m以上　基壇は丁寧な版築、角閃石安山岩切石の基壇化粧。

塔 基 壇　一辺13.6m　基壇は丁寧な版築、改修後は瓦積基壇化粧。

塔 心 礎　東西３m×南北2.5m×厚さ1.5m以上　安山岩製の一枚岩で中央に円形の舎利孔があり、その周りに円形の溝がめぐる精巧な加工技術を示している。

根 巻 石　蓮弁形の石７個を円形に組み合わせたもの、中央部の穴の直径は約96㎝で塔心礎の円形溝と一致し、心柱の根元を飾るものです（全国で唯一の例、重要文化財）。

⑶　出土品

塔本塑像　遺跡の南西部の調査で穴に埋められた状態で、4000点を超える塑像片（如来・菩薩・神将・羅漢・婦人・胡人像、猪・駱駝像、山岳・磯形・雲、箱型天蓋、壁画など、彩色・金箔押し・截金を施す）が出土。720～30年頃に製作され、根巻石に代って塔心柱の根元を飾った塔本塑像と推定。有力寺院としての格と、それに見合う荘厳が実施されたことを示すものです。

緑釉陶器　塔跡の南東約200mで、緑釉の水瓶・椀

椀・皿、銅鋺などが台石の上に埋納された状態で発見され、寺の四至を鎮めるための仏具と推定（重要文化財）。10世紀後半のものとみられ、放光寺の存続時期を知る上で重要な資料です。

石製鴟尾　金堂や講堂の屋根の大棟に取り付けられる鴟尾（しび）は瓦製が普通ですが、近辺から石製のものが２個見つかっています。類例は塑像片が出土している大寺廃寺（鳥取県伯耆町）の１例が知られるのみで、639年に舒明天皇が発願した百済大寺（吉備池廃寺、奈良県桜井市）でも石製鴟尾が使われたとの記録があります（重要美術品）。

瓦　創建時期の軒丸瓦は山田寺（奈良県桜井市）式系の単葉八弁蓮華文のもの。八重巻窯跡（安中市秋間）で生産され、山王廃寺と同窯群とは平安時代まで関係をもっていました。

⑷　**存続時期**

存続時期：発掘調査による所見では創建は660～70年頃、廃絶は10世紀末期とされています。

伽　藍：遺構と遺物は京近辺の寺院に匹敵するもので、中央政権との強い繋がりを窺わせる荘厳は地方寺院としては傑出しています。

立　地：旧群馬郡にあり、近くに営まれた総社古墳群の宝塔山古墳の石棺脚部に刻まれた仏教に由来する格狭間意匠、同古墳とそれに続く蛇穴山古墳の石室の高度な石材加工技術との類似から、これらを構築した氏族による建立と考えられます。

建立者：総社古墳群との関係から、群馬郡・勢多郡に居住が知られ、一族が中央政権に参画して東国統治や外征に大きな功績をあげた上毛野君（後に朝臣）氏を想定することができます。

⑸　**「放光寺」銘瓦の出土【図表８】**

1979年（昭和54）に行なわれた発掘調査で、塔と金堂の間に堆積した瓦の中から「放光寺」とヘラ書きされたものが見つかりました。これ以外に「方光」の押印をもつ瓦が多数出土しています。これによって、山王廃寺跡は「放光寺」の寺名をもつ古代寺院の跡であることが明らかになりました。山上碑に書かれている「放光寺」は、創建時期や位置からして山王廃寺がこれに当たるとみて間違いない、古代の地方寺院の寺名が判明した全国でも稀な例です。

４　定額寺としての放光寺

放光寺が古代社会の中でどの様な役割をもっていたのか、関係する史料から調べてみます。

⑴　**「上野国交替実録帳」の放光寺【図表８】**

放光寺の名は1030年（長元３）に上野国の介（すけ、親王任国であるため実質的な国守）が交替する際に作成された、「上野国交替実録帳（こうずけのくにこうたいじつろくちょう）」と呼ばれる記録の中の「定額寺（じょうがくじ）」に関する項目の中にも見えています。

定額寺は奈良時代の749年（天平勝宝元）に定められた官大寺（京にある東大寺などの有力寺院）・国分寺に次ぐ寺院としての格付けです。財政や運営面で一定の優遇が与えられ、国家鎮護をはじめとする政府が求める行事を執り行うものとされました。また国分寺が火災に遭うなどの事態が生じた場合は、直ちにその機能を代替する役割をもっていました。地方の有力寺院や京内の氏族寺院の中から選ばれ、仏像や経典、堂塔や資財などの維持管理では国守による監督を受けました。山王廃寺から上野国分寺に使われているのと同じ瓦が出土するのは、こうした関係にあることを示しています。

山王廃寺の発掘調査で明らかとなった伽藍配置や高い品質の資財類は、定額寺に格付けられた有力寺院の姿を良く示したものであり、国分寺との関係を具体的に示すものとしても貴重な事例となっています。

⑵　**氏人の力**

「上野国交替実録帳」には上野国に在る定額寺として、放光寺・法林寺・弘輪寺・慈広寺の４つが記載されていますが、その冒頭にあげられているのが放光寺です。各寺院の記載内容を見ると、３ヵ寺では既に滅失したり破損した堂塔や仏具が箇条書きされていますが、放光寺には「件の寺、氏人の申請に依り定額寺と為さず、仍って除き放つこと已に了んぬとてへり」との注記があるだけです。定額寺の格付けを返上した理由は不明ですが、この部分の記載方法によりその時期は、1010年頃から1014年（長和３）の国司交替までの間であったとみることができます。「氏人の申請」が自発的意思によるのか、政府の意図によったものかは不明ですが、少なくとも氏人（檀越・創建氏族）からの申し出による形をとっているのは、11世紀初期においても氏族による運営が維持されていたためと考えてよいでしょう。

これにより放光寺は財政と仏教信仰に強固な基盤をもつ氏族によって創建され、他の定額寺より長く経営が維持された、上野国で最も有力な私寺であったとみることができます。律令政治の衰退が進んだ10世紀代には、定額寺のような寺院の格付けの制度は意味を失っていたと思われますが、その中にあって放光寺の

運営には尚も氏族の意志が働いていました。たとえ堂塔は往時の姿をとどめていなかったとしても、地域の仏教文化の象徴として存在し続けていたことがわかります。

その氏族として、総社古墳群との関係や居住地から上毛野君氏を想定することができます。そして『日本書紀』には、上毛野君氏と朝鮮半島との関係を示した記事がいくつもみえています。

○応神天皇15年条に、上毛野君氏の祖である荒田別（あらたわけ）が天皇の命を受けて、「論語」「千字文」を日本にもたらした学者の王仁（わに）を招くために百済に派遣されたとあります。

○仁徳天皇53年条に、上毛野君氏の祖である竹葉瀬（たけはせ）を新羅に遣わして、朝貢を欠いた理由を問い質させたとあります。この時に竹葉瀬の弟の田道（たみち）が、新羅の四邑の人々を連れ帰ったと書かれています。

○663年（天智天皇２）の白村江（はくすきのえ）の戦いにおいて、上毛野君稚子（わかこ）は前将軍として27000人の兵士を指揮して新羅を攻めました。

また『日本霊異記』に載る記事には、白村江の戦いで朝鮮半島に派遣された備後国三谷郡の氏族が、彼の地の僧を招いて本拠地に寺院を開いたことがとり上げられています。これらの史料を参照すると、新羅での石碑建立の情報は放光寺に関係する氏族である上毛野君氏によってもたらされたと考えることもできます。

５　金井沢碑と知識

山上碑と様ざまな面でつながりをもつ金井沢碑について、地域における仏教の展開の面を中心にみていきます。

⑴　金井沢碑【図表５】

名　称：国指定特別史跡　金井沢碑

所在地：高崎市山名町字金井沢（旧上野国片岡郡、後に多胡郡）、山上碑の北西約1.4㎞の丘陵中にあります。

年　代：神亀３年（726）２月29日

形　状：輝石安山岩の自然石（榛名山由来の転石）山上碑と同じ石材を使っています。

特　色：石材・立地の共通性、「三家（みやけ）」姓と居所の「下賛郷（しもさの）」から、建立者の「三家子□」は、山上碑に記されている「佐野三家」の系譜につながる人物とみることができます。

⑵　知識を結ぶ

金井沢碑は仏教の教えによって一族が結縁（知識を結ぶ）を強めた証として、三家子□が建立した「石文」です。碑文は風化のために判読が難しい箇所もありますが、717～740年の間だけ実施された「国－郡－郷－里」の制度や、家族関係を「次」で示していること、「鍛冶」と職名を書き加えている点に戸籍造りとの関係が窺えるなど、歴史書だけではわからない地方での律令政治の動きを読み取ることができます。また、「家刀自」の表記や知識を結ぶ中に娘と孫は加えられているのに、婿である物部君（孫の姓からわかる）氏は除かれていることからは、家族内での女性の地位や女系でのつながりの強さといった、山上碑文の母への想いと共通する当時の社会の在り方を知ることができます。

この知識には上野国西部一帯に力をもつ物部氏が加わっていましたが、史跡上野国分寺跡（前橋市・高崎市）から出土する修繕用の瓦には「山字物部子成」など、多胡郡に居た物部氏が提供したことを示す文字が書かれたものが多数見つかっています。国分寺は741年（天平13）の詔勅によって国家鎮護のために国ごとに建立された国営寺院ですが、その運営では知識を結んだ人々が大きな役割を担っていたのがわかります。山上碑→金井沢碑と見てきた僧や知識の人々の広がりがさらに強まり、活動が継続されていたのを窺うことができます。

こうした形態や素材の類似、立地や碑文に示される系譜や仏教とのかかわりなど、山上碑と金井沢碑との密接な関係は、日本列島において石碑を建立する意思が継承されたことを示す最古の例です。このことも上野三碑がもつ記憶遺産としての価値の一つといってよいでしょう。

６　多胡碑と緑野寺

上野三碑の中で最も良く知られている多胡碑、それと山上碑・金井沢碑とのかかわりを考えてみます。

⑴　多胡碑【図表４】

名　称：国指定特別史跡　多胡碑

所在地：高崎市吉井町池（旧上野国甘楽郡、後に多胡郡）

年　代：和銅４年（711）３月９日頃

形　状：牛臥砂岩、笠石・方柱形の本体・台石の組み合わせで形を整えています。新羅の真興王が建立した磨雲嶺碑（568年）などに似ています。【図表７】

特　色：那須国造碑（700年、栃木県、国宝）、多賀

城碑（762年、宮城県、重要文化財）と併せて日本三古碑と称されています。碑文は楷書体で大きな字で刻まれており、見せて（牓示）読み聞かせる（口示）ように作られたものと考えられます。

⑵　**郡の新設**

710年（和銅３）の平城京遷都の直後に、古代国家の東国政策に欠かせない産業（窯業・瓦生産・製鉄・織物・林産業・鉱業・石材加工など）と交通（陸路と水路による武蔵・信濃国への経路）の要所に、地域を再編する形で多胡郡が置かれた事情が記されています。こうした地域の政治的重要性は、平安時代に編さんされた辞書の『倭名類聚抄』に、多胡・緑野・碓氷郡に蝦夷を集住させた俘囚郷の記載があることにも窺うことができます。この多胡郡の新設により、山上碑のある場所は多胡郡に含まれ、金井沢碑は本郡内に建立されることになります。【図表１】

碑文の読み解きから建立者は新しい郡の首長に任命された「羊」と考えられ、中世以降にはこの人物に因む様ざまな「羊大夫」伝承が生まれました。この碑は多胡郡家（郡役所）内か近傍に建立されたと考えられていましたが、近年の発掘調査で真南約350mの付近で大型の瓦葺礎石建て倉庫をはじめとする正倉院の跡がみつかったことから、その可能性がより高まりました。

⑶　**渡来人の存在**

上野三碑が建立された地域の周辺には、５世紀中期から６世紀後半に営まれ、朝鮮半島のものと同じ積石塚古墳やそこから出土した耳飾り、馬を埋めた穴から出土した轡などにより、馬の飼育に慣れた渡来人が居住していたことがわかる剣崎長瀞西遺跡（高崎市剣崎町）があります。そして、６世紀後半の観音山古墳（高崎市綿貫町）と６世紀末期の観音塚古墳（高崎市八幡町）から出土した鏡・冑・馬具・銅鋺などからは、この地域の人びとが継続して朝鮮半島や中国大陸と交流をもっていたことがわかります。

また『続日本紀』の766年（天平神護２）５月の記事には、上野国の新羅人・子午足ら193人に吉井 連の姓が与えられたとあります。そして、もとは甘楽郡であった多胡郡の韓級（辛科とも表記）郷の地名は、ここに韓（朝鮮半島）から渡来した人々が多く住んでいたことを示しています。上野国分寺跡から出土する瓦には「辛科子浄庭」などの文字が書かれたものがあり、実際に辛科郷には新羅から渡来した人々やその子孫が居住していたことが明らかになりました。さらに渡来人が創建したと伝える多胡郡総鎮守の辛科神社の存在なども合わせると、多胡郡の地域には古くから在来の人々と渡来の人々とが共生する社会が築かれていたことがわかります。このような地域の歴史的な基盤があってこそ、新しい渡来文化である石碑建立の意義を受け容れて実現することができたと考えます。

⑷　**知識の活動**

上野国分寺は碓氷郡の石上部君諸弟、勢多郡少領の上毛野朝臣足人を中心とした知識の尽力により、全国でも最も早く749年（天平勝宝元）頃に塔・金堂・僧坊が完成をみました。これには上野国西部の碓氷・多胡・緑野郡、中東部の勢多・佐位・新田・山田郡から多量の瓦が提供されたことが、出土する瓦に押された郡・郷名の印によってわかります。

それが９世紀前期頃の修繕の段階になると、もっぱら多胡郡に居住する物部・伴・子氏などが知識として瓦を提供していたことが、ヘラ書きされた地名や人名を示す文字から明らかになりました。多胡郡と周辺の人々は身近にある様ざまな生産活動をとおして、継続して国分寺への知識の活動を強めていたのです。上野三碑にはそうした地域が形成される背景となった、仏教信仰と文字文化の存在や広がりの記憶が刻まれています。

⑸　**緑野寺と道忠**

それらの知識の人々の中心にいたのが、「東国化主」と呼ばれ「菩薩」と崇められた僧の道忠でした。生まれた年や場所、経歴などは不明ですが、鑑真和上の下で戒律を学び「持戒第一弟子」と称されていました。北関東地域で活動を始めたのは８世紀後期頃と見られますが、上野国で拠点としたのが旧緑野郡の藤岡市浄法寺に在る緑野寺（浄法寺・浄院寺とも呼ばれる）で、寺伝によると８世紀後期に道忠によって開かれ現在まで続く古刹です。

この他にも道忠は大慈寺（栃木市）や慈光寺（埼玉県比企郡ときがわ町）の創建も行っており、武蔵国北部から上野国を経て下野国南部に至る範囲で教化伝道に努めていました。その一つが活発な写経活動で、797年（延暦16）には最澄の求めに応じて2000巻の経典を写しています。また、緑野寺では教興など、大慈寺で広智など、武蔵国では円澄などの弟子を育て、一大仏教集団（道忠教団）を形成していました。

⑹　**道忠教団**

その道忠は政治的役割の強い国分寺や下野薬師寺に頼らず新たに拠点を開き、地域の人々の信仰と経済力

に拠って活動を進めたと考えられます。埴輪作りの時代から各種の生産活動が盛んで、古くに屯倉（大王による地方拠点）が置かれた緑野郡はそのような条件に適った場所でした。そして前に述べた上野国分寺の瓦のことを考え合わせると、道忠教団の形成は国分寺創建をきっかけとして拡大した、知識の人々を背景としていたと見ることができます。818年（弘仁９）３月に第２代天台座主となる円澄が、緑野寺の法華塔前で200人に結縁灌頂（仏陀と縁を結ぶ儀式）を授けているのも、多数の熱心な知識がいたことを示しています。また多胡郡と緑野郡の境近くにある黒熊中西遺跡（高崎市吉井町）は、９～11世紀に活動した小規模な寺院とそれに関係する集落の跡ですが、７～８世紀の住居跡なども見つかっていることから、この地域の知識が設けた拠点の一つであった可能性があります。【図表１】それまでの律令政治に組み込まれた寺院とは別に、知識を結んだ人々を基盤にして教化活動を進めた道忠教団は、新しい形の仏教のあり方の先駆けとなりました。

⑺　最澄の来訪

817年（弘仁８）に最澄（伝教大師）は、北関東地域への行脚をしています。大慈寺の広智から託され弟子となっていた円仁（慈覚大師）を伴った最澄は３月初めに大慈寺に到着し、５月15日には緑野寺で円澄と広智に両部潅頂を伝授しました。また緑野寺と大慈寺に法華経を安置した宝塔を建立し、その下で法華経の講義を行いましたが、緑野寺では延べ９万余人が集まったとされています。信濃国の大山寺の知識が書写した法華経1000部を緑野寺に届けていることからも、広範な人々の参加があったのは間違いありません。この行脚の理由としては、京での空海（弘法大師）との不仲、陸奥国会津の恵日寺に拠点を置いた法相宗の徳一との教義論争、また、道忠教団からの招きであったなどが推測されていますが詳しいことはわかっていません。

北関東地域への行脚から京に戻った最澄は翌年に『守護国界章』を著し、比叡山を中心とする国家鎮護の活動を強めました。教化伝道の最前線に出向いた際の東国の知識の人々との交流が、これへの大きな力となったのでしょう。それだけでなく道忠教団からは、第２代天台座主の円澄、広智の弟子で第３代天台座主となる円仁、同じく第４代座主の安恵、第７代座主の猷憲などが出ています。このことを考えると、現在につながる日本での仏教の発展において、道忠とその知識の人々が果たした役割の重大さに改めて気づきます。【図表９】

⑻　鑑真和上と石碑

『唐大和上東征伝』よると道忠の師である唐の高僧・鑑真和上は、743年（天平15）に日本への最初の渡航を試みた時に、修文（文章つくりの達人）と鐫碑（石碑つくりの工匠）を同行していました。この渡航は失敗に終わりましたが、石碑建立が仏教や寺院とかかわるものであったのがわかり、前に述べた放光寺僧の長利と山上碑との関係を検証する参考になります。これは漢字・仏教・律令（法令）制度、そして石碑建立そのものが中国大陸や朝鮮半島など、東アジアの国々とつながる文化の伝播の仕方を伝える貴重な記録としても注目されます。もしこの時の渡航が成功していたならば、緑野寺などには螭首（頭頂部が半円形で龍の彫り物をもつ）と亀趺（亀の形をした台座）を備えた隋・唐風の石碑が建立され、上野三碑と合わせて貴重な記憶遺産となっていたに違いないなど、私たちの歴史探索への想いを脹らませてくれます。

また、この記事は石碑がつくられる要件〈意図が的確に伝わる文章を作る能力（修文）→ 文章を石に刻んで建立する技術（鐫碑）〉を示しており、山上碑の「記定文」は「修文」、金井沢碑の「石文」は「鐫碑」に当たると考えることができます。この鑑真和上の行為を通してみると、山上碑と金井沢碑を建立した人たちは、それぞれの想いや業績を広く伝え残す方法として、新たに渡来した石碑文化の意義をきちんと理解していたことがわかります。

おわりに

山上碑と山王廃寺を手掛かりにして、上野国地域の様ざまな歴史遺産を繋いでいくと〈総社古墳群の築造：有力氏族の存在 → 仏教の伝播：山王廃寺（放光寺）の建立 → 長利の僧就任：山上碑の建立 → 新たな地域形成：多胡碑の建立 → 三家子□らの知識の展開：金井沢碑の建立 → 上野国分寺経営：多胡郡地域の知識の活躍 → 緑野寺の創建：道忠教団の布教活動 → 最澄の天台宗確立：今日につながる仏教世界の形成〉といった、日本通史と結びつく道筋を考えることができます。そして、「世界の記憶」に登録された上野三碑が成立した原点は、放光寺＝山王廃寺にあったことがわかります。このような見方をしてみると、地域の歴史遺産を知ることの面白さ、それを伝え残すことの大切さを、改めて知ることができるのではない

かと思います。

この報告の作成で参照した著書・論集や報告書・図録、論文には次のものがあります。

【著書・論集】

尾崎喜左雄『上野三碑の研究』（1980年）

『群馬県史　資料編４　原始古代４』（群馬県、1985年）

『群馬県史　通史編２　原始古代２』（群馬県、1991年）

平野邦雄監修・新しい古代史の会編『東国石文の古代史』（吉川弘文館、1998年）

東野治之・佐藤信編『古代多胡碑と東アジア』山川出版社、2005年）

前沢和之『古代東国の石碑』（山川出版社、2008年）

眞保昌弘『日本の遺跡25　侍塚古墳と那須国造碑』（同成社、2008年）

松田猛『上野三碑』（同成社、2009年）

土生田純之・高崎市編『多胡碑が語る古代日本と渡来人』（吉川弘文館、2012年）

熊倉浩靖『増補版　上野三碑を読む』（雄山閣、2017年）

『ユネスコ「世界の記憶」登録記念　上野三碑　日中韓国際シンポジウム』（上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会他、2017年）

【報告書・図録】

『内務省　史蹟精査報告　第一』（1926年）

『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』（群馬県教育委員会、1989年）

第48回企画展図録『日本三古碑は語る』（群馬県歴史博物館、1994年）

展示解説図録『古代の碑』（国立歴史民俗博物館編集、1997年）

国際企画展図録『文字がつなぐ古代の日本列島と朝鮮半島』（国立歴史民俗博物館、2014年）

【論文】

前沢和之「「上野国交替実録帳」の性格について－定額寺　資財帳と不与解由状－」（『永島福太郎先生退職記念　日本歴史の構造と展開』山川出版社、1983年）

小池浩平「古代上毛野地域の氏族支配構造と上毛野氏－上野国に関する調庸墨書銘の再考証を中心に－」『ぐんま史料研究』第20号、2003年）

菅原征子「写経活動と緑野寺」「最澄の東国伝道」（前掲『群馬県史　通史編２　原始古代２』所収）

菅原征子『日本古代の民　間宗教』（吉川弘文館、2003年）

東野治之「上野三碑」（『日本古代金石文の研究』（岩波書店、2004年）

松原弘宣「日本古代の石碑と情報伝達」（『古代東アジアの出土資料と情報伝達』愛媛大学法文学部、2006年）

高島英之「日本古代の碑とその背景」（『古代東国地域と出土文字資料』（東京堂出版、2006年）

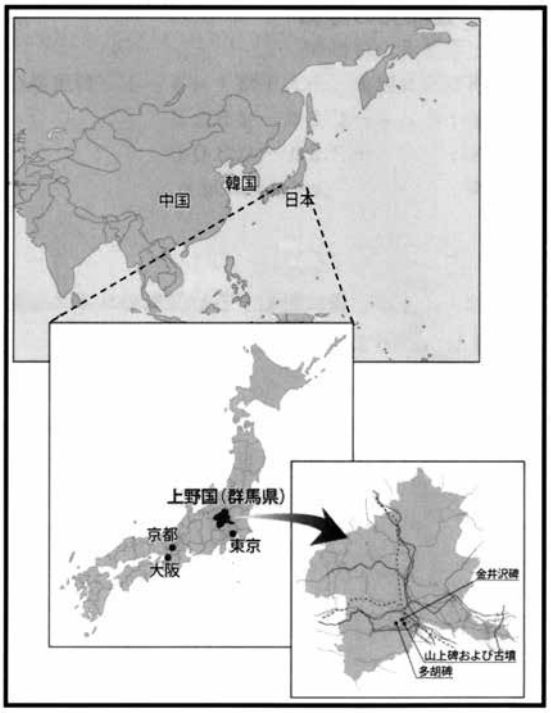
前沢和之「古代東国の石碑をめぐる二、三の問題」（『ぐんま史料研究』第26号、2009年）

李成市「古代日朝文化交流史」（『歴博国際シンポジウム　古代日本と古代朝鮮の文字文化の交流』大修館書店、2014年）

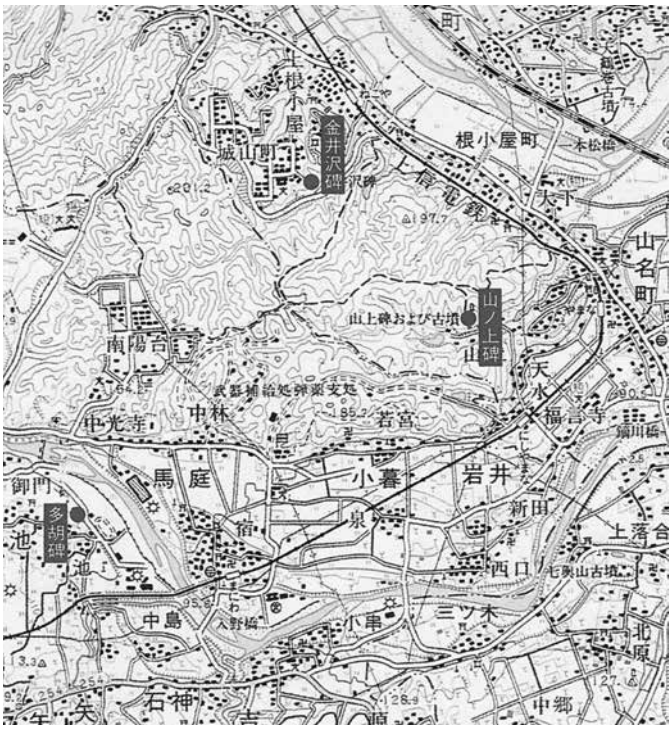
三舟隆之「古代東国の仏教受容と寺院」（佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』（山川出版社、2017年）

前澤和之「上野三碑にみる石碑文化の伝播と受容」（『群馬文化』第331号、2017年）

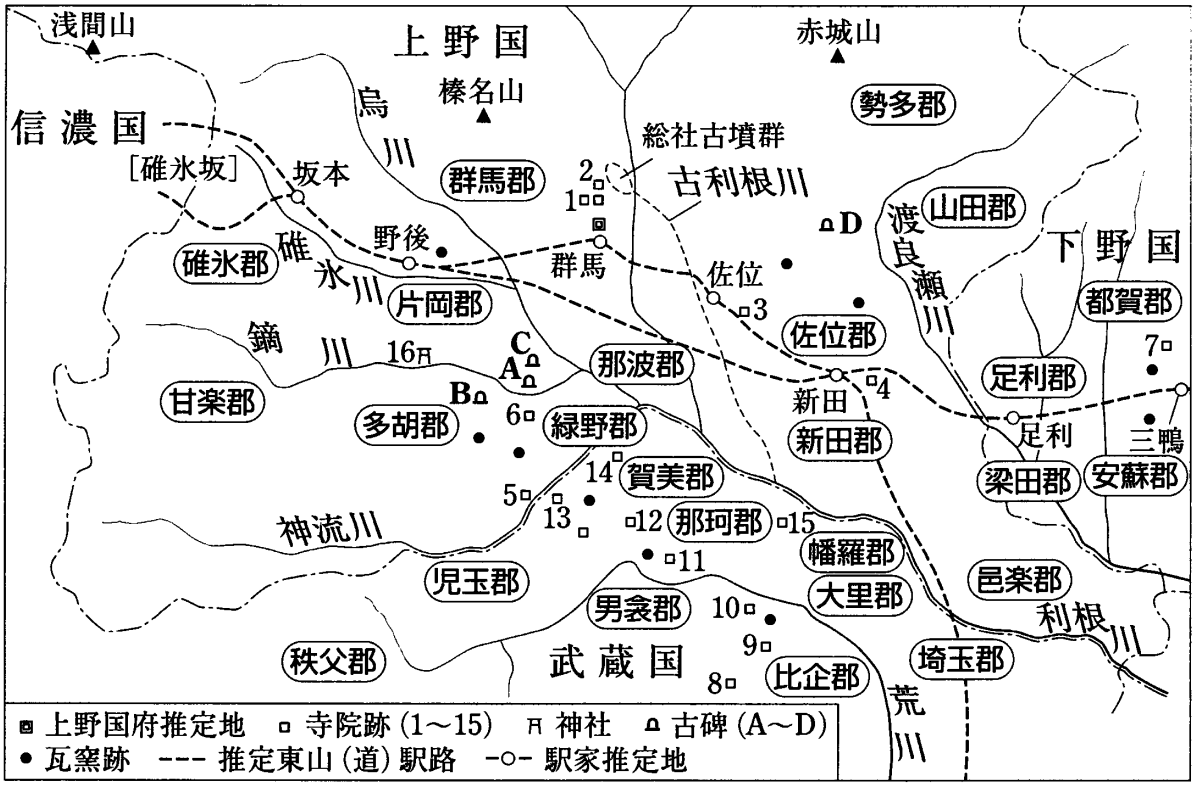
前澤和之「地域資料による古代史研究 - 上野三碑と上野国交替実録帳を中心に」（新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』勉誠出版、2018年）



「上野三碑」の位置



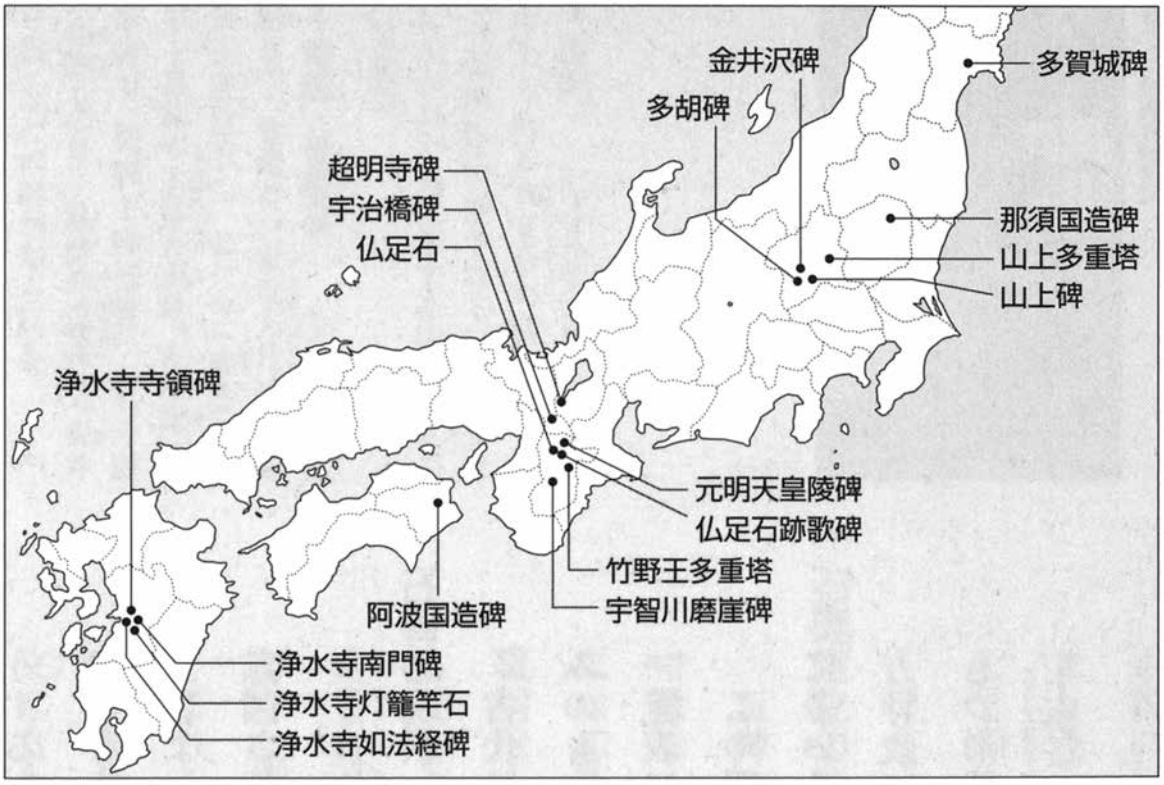
上野三碑（多胡碑・山上碑・金井沢碑）位置図



1上野国分二寺、2山王廃寺、3上植木廃寺、4寺井廃寺、5緑野寺、6黒熊中西遺跡、7大慈寺、8慈光寺、9寺谷廃寺、10諦光寺廃寺、11馬騎の内廃寺、12大仏廃寺、13城戸野廃寺、14五明廃寺、15西別府廃寺、16貫前神社（上野国一宮）、A山上碑（681年）、B多胡碑（711年）、C金井沢碑（726年）、D山上多重塔（801年）。

上野三碑・山上多重塔の関連地図

図表１　上野三碑



石碑・石塔の所在地

古代日本の石碑・石塔

NO.	名　　称	所在地または由来地	年　　代	種類区分
1	宇治橋碑	京都府宇治市	大化２(646)年以降	架橋記念碑
2	山上碑	群馬県高崎市	辛巳(681)年	追善供養碑(僧)
3	那須国造碑	栃木県大田原市	庚子(700)年	墓碑・顕彰碑(評督)
4	多胡碑	群馬県高崎市	和銅４(711)年頃	建郡碑
5	超明寺碑	滋賀県大津市	養老元(717)年	記念碑(僧)
6	元明天皇陵碑	奈良県奈良市	養老５(721)年	墓碑
7	阿波国造碑	徳島県石井町	養老７(723)年	墓碑
8	金井沢碑	群馬県高崎市	神亀３(726)年	供養碑(知識結縁)
9	竹野王多重塔	奈良県明日香村	天平勝宝３(751)年	記念銘(造塔)
10	仏足石	奈良県奈良市	天平勝宝５(753)年	仏足石
11	仏足石跡歌碑	奈良県奈良市	天平勝宝５(753)年ヵ	歌碑
12	多賀城碑	宮城県多賀城市	天平宝字６(762)年	記念碑(修造)
13	宇智川磨崖碑	奈良県五條市	宝亀９(778)年	磨崖碑(偈文)
14	浄水寺南門碑	熊本県宇城市	延暦９(790)年	造寺碑
15	浄水寺灯籠竿石	熊本県宇城市	延暦20(801)年	寄進碑(僧)
16	山上多重塔	群馬県桐生市	延暦20(801)年	造塔銘(如法経)
17	浄水寺寺領碑	熊本県宇城市	天長３(826)年	寺領碑
18	浄水寺如法経碑	熊本県宇城市	康平７(1064)年	如法経塔
a	伊予道後温泉碑	(愛媛県松山市)	法興６(596)年	記念碑(温泉)
b	藤原鎌足碑		天智８(669)年	墓碑
c	采女氏塋域碑	(大阪府太子町)	己丑(689)年	塋域碑
d	南天竺波羅門僧正碑	(奈良県奈良市)	神護景雲４(770)年	造像碑
e	大安寺碑	(奈良県奈良市)	宝亀６(775)年	造寺碑
f	沙門勝道歴山水瑩玄珠碑	(栃木県日光市)	弘仁５(814)年	顕彰碑
g	益田池碑	(奈良県)	天長２(825)年	記念碑(造池)

１～18＝現存するもの，ａ～ｇ＝滅失したもの。

図表２　石碑・石塔

山上碑（やまのうえひ） ―僧になった息子が母を思い建てた石碑―

完全な形で残る日本最古の石碑

大きさ：高さ111cm／幅47cm／厚さ52cm
碑文：縦書き4行・53字、輝石安山岩製

碑文の意味

辛巳年（681年）十月三日に記す。
佐野三家の最初の管理者となった健守命の子孫の黒売刀自、この方が新川臣の子の斯多々弥足尼の子孫である大児臣と結婚して産まれた子どもの長利僧が、母（黒売刀自）のために記した文である。　放光寺の僧

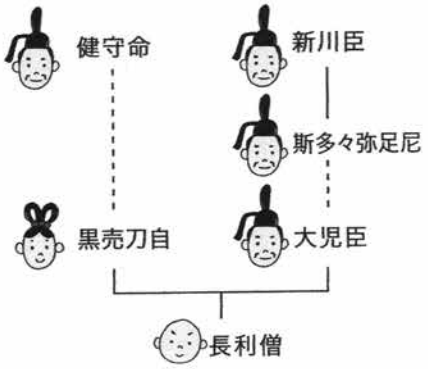
読み方

辛己（巳のこと）歳集月三日に記す。佐野三家を定め賜える健守命の孫の黒売刀自、此れ新川臣の児の斯多々弥足尼の孫の大児臣に娶いて生める児の長利僧が、母の為に記し定むる文也。　放光寺僧

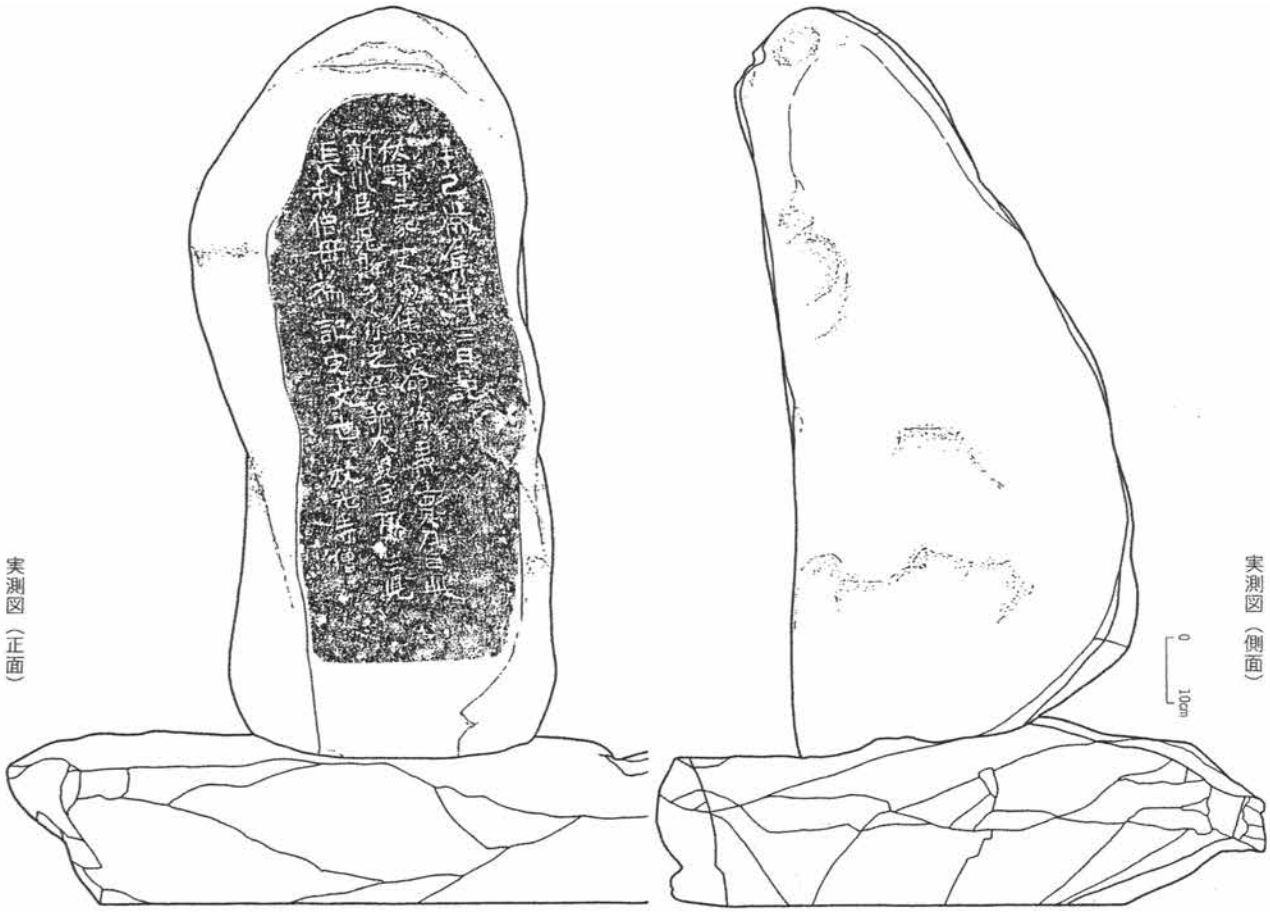
日本語の順に漢字が並ぶ

辛己歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

山上碑の人たち



- **三家（＝屯倉）**　6～7世紀に置かれた大王の直轄地。
- **刀自（とじ）**　女性をうやまう呼び方。
- **放光寺**　前橋市総社町にある山王廃寺で、東国で最古級の寺院。



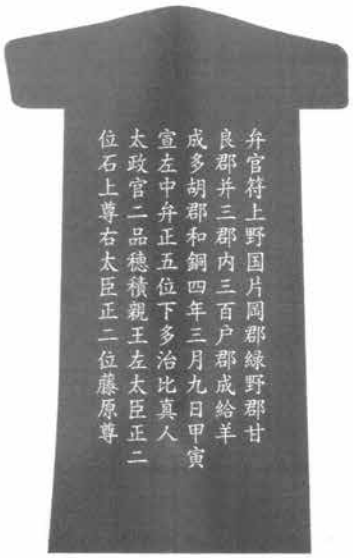
図表３　山上碑

多胡碑（たごひ） ―多胡郡が成立した事情を伝える石碑―

「日本三古碑」の一つ

笠石の大きさ：幅95cm／奥行90cm／中央厚さ27cm／軒面厚さ15～17cm
碑本体の大きさ：高さ129cm／幅69cm／厚さ62cm
碑文：縦書き6行・80字、牛伏砂岩製

多胡郡の範囲（推定）



碑文の意味

政府の弁官から命令があった。

上野国の片岡郡・緑野郡・甘良（楽）郡の三郡から三百戸を分けて新たに郡をつくり、羊に治めさせる。郡の名は多胡郡とする。

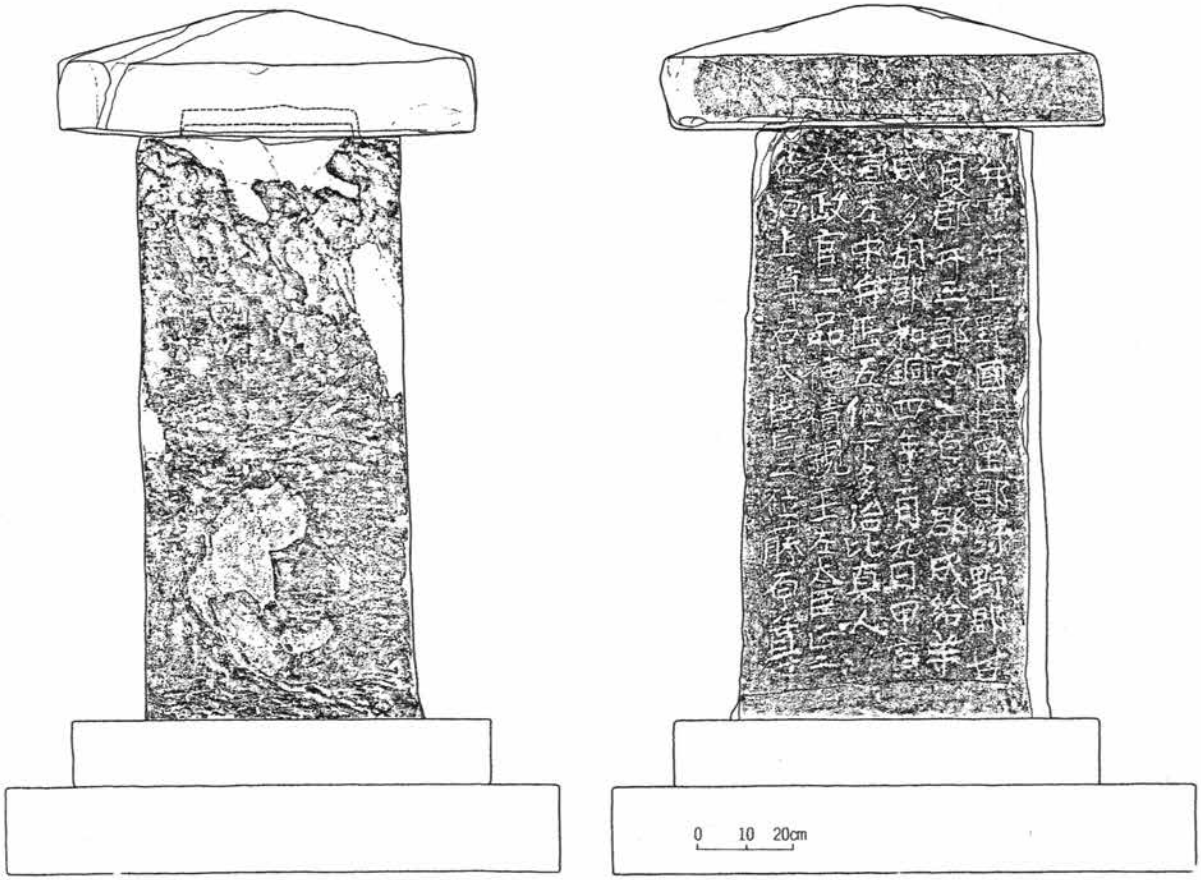
和銅四年（711年）三月九日甲寅のことである。

左中弁正五位下多治比真人から天皇の命令書が伝えられた。太政官は二品穂積親王、左大臣は正二位石上尊、右大臣は正二位藤原尊である。

読み方

弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁・正五位下多治比真人。太政官・二品穂積親王、左太臣・正二位石上尊、右太臣・正二位藤原尊。

- **藤原尊**　藤原不比等（659～720年・藤原鎌足の子）大宝律令の制定に大きな役割を果たした人物。
- **日本三古碑**　多胡碑、那須国造碑（なすこくぞうひ）（700年）【栃木県】、多賀城碑（たがじょうひ）（762年）【宮城県】のこと。
- **羊太夫伝説**　多胡郡を治めていた羊太夫が、毎日奈良の朝廷まで通ったという伝説で、羊と朝廷の親密な結びつきを示す。



実測・拓本合成図　右・南面（正面）　左・東側面

図表４　多胡碑

金井沢碑（かないざわひ） ―仏教の教えによる結束表明の石碑―

「群馬」の文字が使われた県内最古の例

大きさ：高さ110cm／幅70cm／厚さ65cm
碑文：縦書き9行・112字、輝石安山岩製

碑文の意味

上野国群馬郡下賛郷高田里に住む三家子□が、祖先と父母の為に、家刀自の他田君目頬刀自、その子の加那刀自、孫の物部君午足、馬刀自、乙馬刀自の合せて六人、また、知識となっている三家毛人、知万呂、鍛師の礒部君身麻呂の合せて三人、これら仏の教えで結びついた私たちが、（一族の繁栄を願って）祈り申し上げる石文である。

神亀三年（７２６年）丙寅二月二十九日

読み方

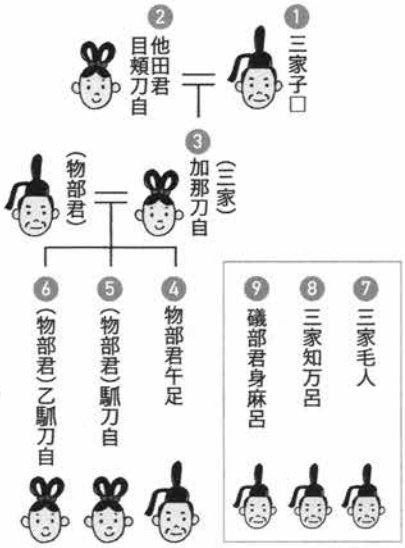
上野国群馬郡下賛郷高田里の三家子□が、七世父母と現在父母の為に、現在侍る家刀自の他田君目頬刀自、又児の加那刀自、孫の物部君午足、次に馬刀自、次に乙馬刀自の合せて六口、又知識を結びし所の人、三家毛人、次に知万呂、鍛師の礒部君身麻呂の合せて三口、是の如く知識を結び而天地に誓願し仕え奉る石文

神亀三年丙寅二月二九日

（□は読めない文字です）

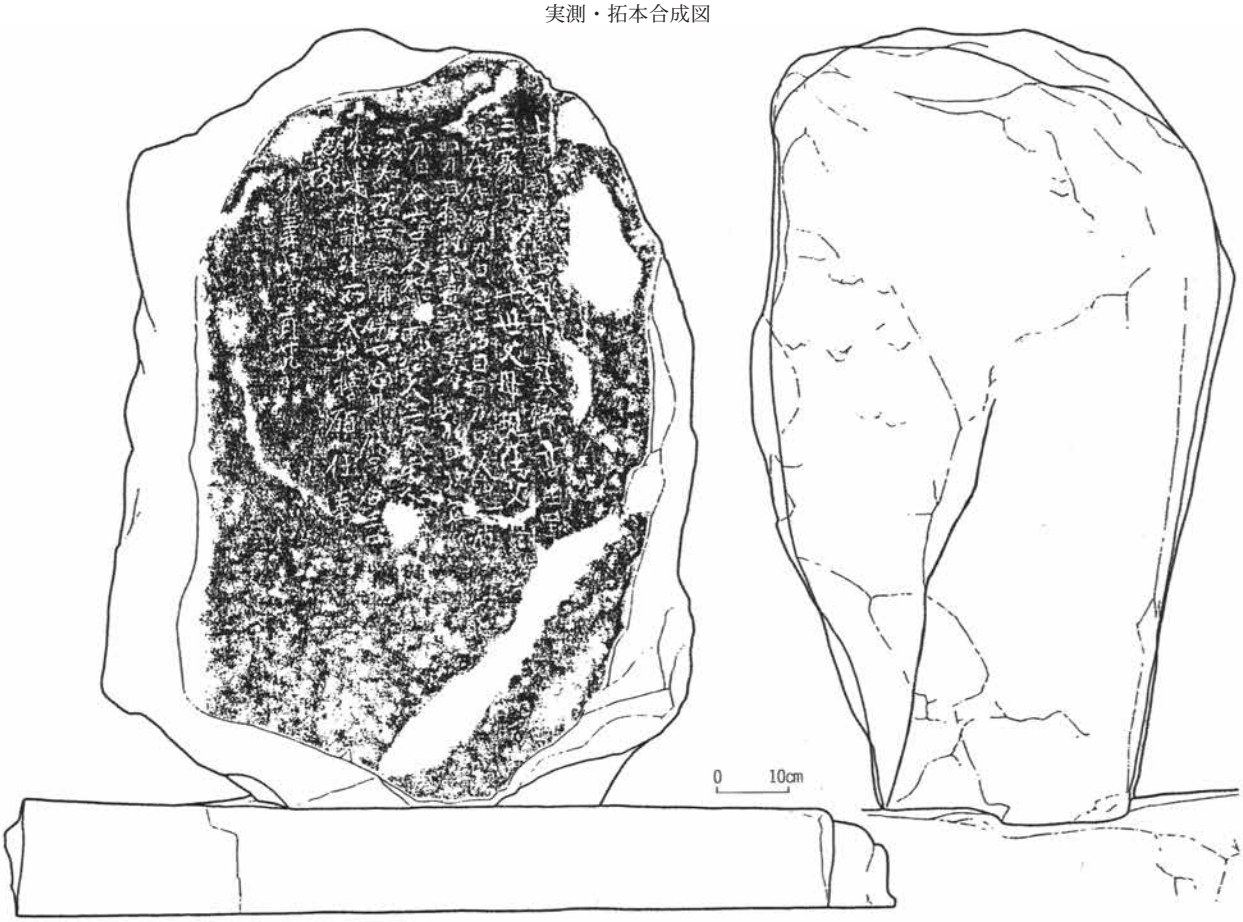
上野国羣馬郡下賛郷高田里
三家子□為七世父母現在父母
現在侍家刀自他田君目頬刀自又児加
那刀自孫物部君午足次馬刀自次乙馬
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師礒部君身麻呂合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神亀三年丙寅二月廿九日

金井沢碑にみる家族と氏族



・家刀自　家を統括する女性。
・乙馬刀自　若馬刀自と読む説もある。
・知識　仏教の教えで結ばれること。

実測・拓本合成図



図表５　金井沢碑

山上碑（681年）

金井沢碑（726年）

丹陽赤城碑（545年）

昌寧眞興王拓境碑（561年）

大邱戊戌塢作碑（578年）

慶州南山新城碑（591年）

図表６　自然石の碑

多胡碑（711年頃）

那須国造碑（700年）

磨雲嶺碑（568年）

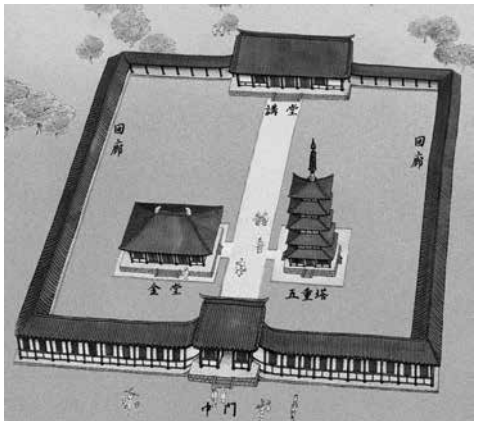
黄草嶺（568年）

北漢碑（555年頃）

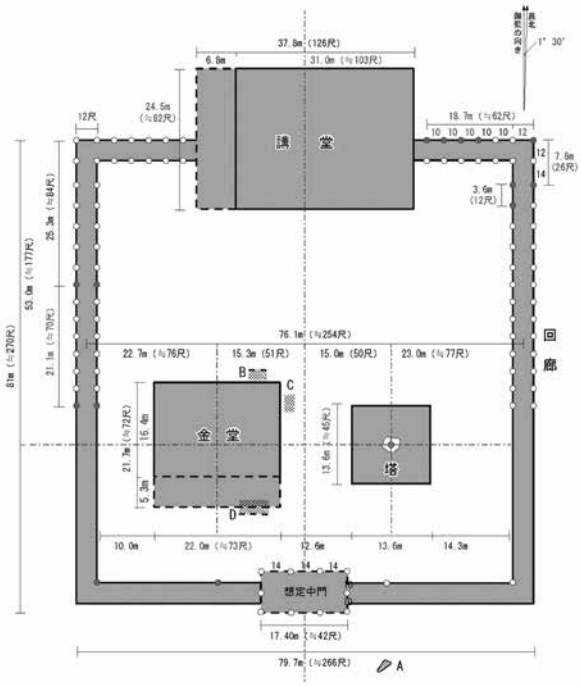
図表７　笠石を持つ碑

緑釉水注、椀、皿

一対の女性像



山王廃寺伽藍配置想像復元図



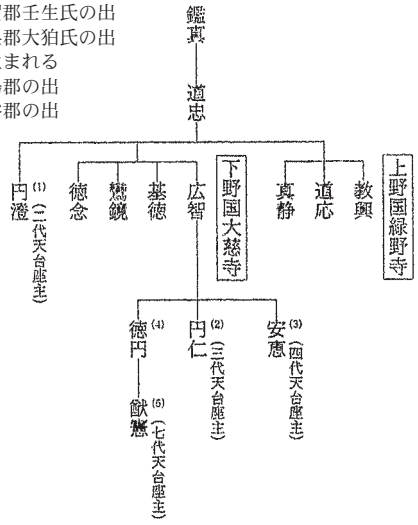
山王廃寺伽藍配置復元図

定額寺
放光寺、
件寺、依氏人申請、不為定額寺、仍除放已了者

「上野国交替実録帳」定額寺の項

瓦の「放光寺」

(1) 武蔵国埼玉郡壬生氏の出
(2) 下野国都賀郡壬生氏の出
(3) 河内国大県郡大狛氏の出
　下野国で生まれる
(4) 下総国猿島郡の出
(5) 下総国塩谷郡の出



図表９　道忠教団系譜図

山上碑の「放光寺」

図表８　山王廃寺

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」第１回

石刃技術の交差点―堀越甲真木Ｂ遺跡のあり方から―

諸　星　良　一（株式会社　東京航業研究所）

はじめに

本日のお話しは、石刃技術とナイフ形石器という旧石器時代の石器製作技術と石器にまつわるお話しです。まず初めに、この石器を製作、使用していた主人公に関するお話、次に現在私が３年間かけて発掘調査報告書を作製している前橋市堀越甲真木Ｂ遺跡の石刃技術とナイフ形石器を主体とした石器群についてのお話をし、最後に赤城山南麓の後期旧石器時代の石刃技術とナイフ形石器の製作技術の歴史的な変化や特徴についてお話をして、結論に繋げてゆきたいと思います。

主人公について（第１図）

旧石器時代の主人公である人類進化について、まずはお話しいたします。本日の主題である石刃技術は、後述しますが約30万年前の年代のものがフランス北部で発見されています。第１図で確認しますと何と、原人の終末から旧人あるいはネアンデルタール人の生存した時期になります。

この図ですと旧人は20万年前の出現となっていますが、実は今年の６月にモロッコのジェベル・イルード（Jebel Irhoud）遺跡から人骨や石器が発見されました。出土した石器の中で、焼けたフリント製の石器に放射線を当てて年代測定を実施したところ、何と31.5万年前の年代が提示され、人骨の特徴もネアンデルタール人ではなく古代型のホモ・サピエンス、われわれの親戚の人類の可能性があるとの発表がありました（MPG2017）。そうなりますと、我々の枝分かれした祖先は、ネアンデルタール人より古い時代から存在した可能性も出てきました。

主題となる遺跡と年代（第２図）

本日、石刃技術のお話しで取り上げる遺跡とそれらの時間軸、年代についてお話ししておきたいと思います。赤城山南麓の後期旧石器時代は研究者により石器の製作技術の特徴や主要な道具のデザインなど当時の社会、文化システムの特徴、火山から噴火して台地に堆積して地層に含まれている指標火山灰の降灰年代を基に、年代的な物差し（編年）が作られています（第２図）。古い時代は「Ⅰ期」・約3.2万年前ごろの年代で、今回はみどり市の岩宿遺跡Ⅰ文化層と前橋市内堀遺跡を取り上げます。「Ⅱ期」は、今回の主役である堀越甲真木Ｂ遺跡を含む時期ですが、やや古い時代のみなかみ町後田遺跡、前橋市上泉唐ノ堀遺跡、同じ時期の亀泉坂上遺跡、伊勢崎市書上遺跡、波志江西宿遺跡などです。そして、「Ⅲ期」は約2.3万年前以降の伊勢崎市今井見切塚遺跡、渋川市上白井西井熊遺跡です。

遺跡の位置（第３図）

本日お話しする堀越甲真木Ｂ遺跡の位置を中心にした地図で示してみました。一番遠い遺跡が、北西のみなかみ町後田遺跡で地図には乗らない位置にあります。次に遠いのが上白井西井熊遺跡で約17～18㎞でしょうか。他の遺跡に関しては、東側に岩宿遺跡が約十数キロメートル離れていますが、多くの遺跡が基本的に堀越甲真木Ｂ遺跡から10㎞圏内に位置しています。この直線距離は、狩猟採集民の行動距離としては日常移動距離に相当しますので、当時の狩猟採集民の行動領域の一部であった可能性があるでしょう。ここでは多言しませんが、こうした遺跡の空間分布の在り方を研究する分野は、水文学の研究を援用しているサイト・キャッチメント分析と言います。

堀越甲真木Ｂ遺跡（第４～７図）

堀越甲真木Ｂ遺跡は、前橋市堀越町、旧大胡町に所在します（第４図）。遺跡の位置する地形は赤城山南麓の段丘上の南緩斜面から斜面で南に視界が開ける見晴らしが良い場所です。調査は2000年（平成12年）８月～11月に実施され、姶良丹沢火山灰（約2.8万年前）の降灰以降から浅間－板鼻褐色軽石群（約2.4万年前）降灰までに堆積したローム層の地層から石器1,681点、礫・礫片22点が平面的に11ヶ所の集中区を形成して発見されました（第５図）。主な使用石材は、一番

多く使用している石材が、地元石材である黒色安山岩で787点（総重量15.2kg）と黒色頁岩（こくしょくけつがん）176点（総重量5.45kg）、次に地域石材である黒曜石が692点（総重量1.68kg）です。黒曜石は50点が蛍光Ｘ線を使用した成分分析により信州の小深沢産の可能性があることが指摘されており、その他の黒曜石も肉眼による観察による限りでは信州産であると推定されます。この黒曜石の産地は、堀越甲真木Ｂ遺跡から100㎞以上隔たっていますが、ヨーロッパの石材研究におけるフリントという石材の流通や狩猟採集民の行動距離を考慮すると、十分に移動可能な距離であると思います。

黒曜石の遺跡への搬入状態、消費の在り方を分析しましたが、遺跡に原材を直接搬入して消費尽くして廃棄、遺棄し、残りを他の遺跡へ持ち出していると思われます。当時の狩猟採集民の社会集団たちが頻繁に長野に出かけたとは思いませんが、冬季を除き定期的に狩猟採集をしながら片道一週間から十日間ぐらいの旅程で黒曜石を採集しに行ったのかもしれません。その際は、社会集団総出でなくて、特別な編成部隊が社会集団から選抜されて出かけたこともあったでしょう。

出土した石器は、ナイフ形石器、台形石器、スクレーパー、鋸歯縁石器、抉入石器、彫刻刀形石器などの加工された剥片製の道具が主体となり、素材である剥片、石器を作るための原材と原材を加工して素材を生産するための石核、石器製作の際に生じた砕片、破片や石器を作るための敲石、磨石、台石などの重量のある礫石器などです（第６・７図）。

遺物の集中区は11ヶ所ありますが、その中で被熱した黒曜石がまとまって出土した集中区が確認されていますので、遺跡で石器を作り、作業に使って生活していた場所で焚火をしていたと思われます。

堀越甲真木Ｂ遺跡の石器は、剥片製石器の製作技術やデザインの特徴から、地域的な時間の物差しで示しますと、北関東地方の「Ⅱ期」に相当します。また、技術的特徴としては、信州産黒曜石を大量に消費して、ナイフ形石器を沢山製作し、地元の黒色安山岩と黒色頁岩を遺跡に搬入して、石刃という石器素材の剥片を製作している点に特徴があります。この時期の遺跡として、信州産黒曜石がまとまって出土している遺跡は、堀越甲真木Ｂ遺跡しかありません。

石刃技術とナイフ形石器（第８・９図）

本日の主役の石器について、お話しいたします。まず、石刃ですが、この言葉を外国の旧石器研究の概念から導入したのは、故芹沢長介東北大学名誉教授です。芹沢氏は、1957年に出版された『先史時代　Ⅰ　無土器文化』という本において、石刃という言葉を始めて使用し、その形態的特徴や製作方法や地理的分布について言及しています。この点は日本の旧石器研究の歴史を学ぶ上で理解しておくべき重要な点であると思います。さらに、この石刃を連続的に原材料である石刃石核から生産する技術のシステムと構造を石刃技術と言います。

この石刃を素材としたナイフ形石器についてお話しいたします。ナイフ形石器という石器は、1953年に芹沢長介氏と麻生優氏が長野県杉久保遺跡を発掘しその報文において、Blade と Knife blade が表記されました。これが日本の旧石器研究における石刃とナイフ形石器の初めての記述でした。ナイフ形石器は、素材、加工、かたちの特徴から「Ａ形・Ｂ形－茂呂形、Ｃ形－杉久保形」に分類されています。

1959年には、芹沢長介氏、中村孝三郎氏、麻生優氏が調査された新潟県神山遺跡の発掘調査報告書が刊行されましたが、この調査により本州における石刃技術とナイフ形石器の石器群が層位的に、平面的に確認されました。

こうした石刃技術とナイフ形石器の研究を顧みると、その研究の嚆矢は芹沢長介氏の理論的、実践的研究に負うところが非常に大きいのではないかと思います。

次に、ナイフ形石器の作り方を素材の用い方、加工部位、仕上がりの形の各要素を基に、模式図（第８図）で観てみましょう。ナイフ形石器は、今お話しした石刃を素材とした石器の仕上がりの形を想定して、石刃の配置を回転させます。

1．石刃は素材ですが、基本的には石刃石核から石刃を敲いて割り取る際に石核の敲く面、打面を上にして観察します。
2．石刃の配置を変更する。一つは石刃の打面と先端部を180°回転させほぼ真直ぐに配置します。他方は石刃の打面と先端部を180°以上回転させて斜めに配置します。石刃の配置を上下逆にする理由は、石刃の厚さが先端の方が薄く、形状が尖っているなどの機能的特徴からです。
3．素材である石刃を加工してナイフ形石器に仕上げますが、加工は石刃の側辺に対して、形を変形して背を作る加工、縁辺を潰して丁寧に仕上げる加工が一般的です。これら以外に素材を斜めに置いた場合は、最初に素材を切断して縦長の形に仕上げる加工、さらに素材が厚い場合は素材の表面から裏面に側辺の厚みを整える加工、裏面の厚さ

を薄くする加工などがあります。

こうした加工によって、ナイフ形石器はいくつかの形のヴァリエーションに分けられます。一つは、素材の基部のみ、あるいは基部と先端を加工したナイフ形石器、一つの側辺だけを加工したナイフ形石器、さらに一側辺全てと他の側辺を部分的に加工したナイフ形石器の大きく三つに分けられます。また、素材の生産の仕方が異なり横長剥片を素材とした一側辺加工のナイフ形石器もあります。

ナイフ形石器を作るには、素材の生産、素材を整形するために回転させる、素材を切断し、背を作る加工や縁辺を潰す加工、薄くするために平坦な加工などの技術を用いています。

これらの石器は、時代、地域、文化や素材となる石器の原材である石材により異なります。また、この石器の使い方も槍に使ったり、ナイフやカッターみたいに使ったり、包丁みたいに使ったりと必要や形に応じて使われていたと思われます。

次に、石刃技術の工程の模式図（第９図）で説明します。これは岩宿博物館の小菅将夫館長が作成した石刃技術の模式図です。最初は、石刃を生産するための原材である石核の素材を準備します。第二に、石核の形を整えてゆきます。第三に、石刃を生産するために敲石で敲く打面の形と角度を整えてゆきます。第四に、石核の側面に整形して整えた角の稜線部分を剥ぐために打面を叩きます。この作業で得られた剥片を稜付石刃と呼びます。この作業によって石刃生産の入り口が開きます。第五に、石核ごとに様々な工程になりますが、石刃を生産する、さらに石核の形を整えるなどの工程を進めます。作業が進むと、個体の容積がどんどん減ってゆきます。必要に応じて、石刃を剥ぐ面を整える作業面調整や打面の形状や角度を修正する打面刷新を行います。最終的に、各個体で石刃が生産できなくなった、あるいは不要になった段階で石刃石核は遺跡に廃棄されます。また、まだ利用可能な石刃石核は、移動の際に携帯するか、次の機会に同じ場所に戻る時のために備蓄として遺跡に残してゆきます。

こうした石刃技術の在り方について、アメリカの考古学者ブライアン・ハイデン（Brian Hayden）氏は、「我々は、ルヴァロワ型石核や特に石刃石核のような多くの調整石核が、実際に最初に石核形状の要求、さらに明確な（石核の）サイズや形状の要求、より高品質の原材や全ての段階における高い確率での失敗によって、原材（石材）を消費している」と述べています（Hayden, et al. 1996 p 37）。つまり、石刃技術という石器素材を生産する技術は、石刃石核を作る段階から材料のサイズ、形、品質が求められ、作業工程における不慮の事故による生産工程の失敗などを含んでいることを指摘しており、簡単に石刃を生産できるわけではなく、高いリスクや制約がこの石器技術に所与として介在していると考えられます。

後期旧石器時代以前の石刃技術（第10～12図）

赤城山南麓の後期旧石器時代の石刃技術についてお話しする前に、ヨーロッパや中近東の後期旧石器時代以前の遺跡の石刃技術について年代の古い順にいくつかお話ししておきたいと思います。まずは、フランス北部のサン＝ヴァレリー＝シュー＝ソンム遺跡（第10図・Heinzelin and Haesaerts1983）です。図を見ると高さ約25㎝ほどの接合資料です。連続して剥がされた形の整った石刃と上の方に打面刷新剥片が接合しています。また、打面は下の方にもあり両設打面の石核であったようです。年代は24.4～28万年前です。ネアンデルタール人や古代型新人の生きていた時代に、すでにこのように上手に石刃を作る技術が存在していました。

次もフランス北部、スクラン遺跡です（第11図・Révillion 1993）。図を見ると５～15㎝ほどの石刃が生産されていて、稜付石刃も生産されています。また、石核と石刃の接合資料もありますが、石核は円筒形で周辺を移動しながら生産するものと小口を打面として打面上の打点を交代しながら生産するものがあるようです。年代は約９万年前で、すでに稜付石刃があり、円筒形の石刃石核を使用した完成された石刃技術が存在しています。

最後は、イスラエルのボーカー・タチット遺跡です（第12図・Volkman1983）。石核上の打面において打点を左右に移動しながら石刃を連続的に剥いでいますが、それらの石刃と石核が接合して形が復元されています。この接合図を見ると無駄のない連続的な石刃生産がなされていることがわかります。年代は、約3.8～4.7万年前で中期旧石器時代の終末で、日本の後期旧石器時代初頭より少し古い時代です。

以上、簡単に外国の中期旧石器時代の石刃技術を概観しましたが、どうやら日本より西の地域では古い時代から石刃技術が存在し、完成された技術が駆使されていたことが解ります。

赤城山南麓の石刃技術とナイフ形石器（第13～25図）

では、いよいよ赤城山南麓の後期旧石器時代のお話

しに移りたいと思います。最初は、みどり市（旧笠懸町）に所在いたします岩宿遺跡です（第13図）。岩宿遺跡は皆さんご存知のように、相沢忠洋さんが行商の途中に切り通しから石器を発見したことに端を発して、芹沢長介氏を介して、1949年の明治大学考古学研究室による発掘によりローム層中から初めて層位的に旧石器が発見されたことにより有名です。この遺跡は群馬県の旧石器文化の編年では、Ⅰ期前半期に位置します。岩宿遺跡の石器文化は三つの時代に分かれますが、石刃技術に関連するのは一番古い岩宿Ⅰ文化層の石器です。

図は、ナイフ形石器３点を図示しています。技術的特徴は、石材として利根川流域で採集できる地元の黒色頁岩を使用していること、石刃は縦長で形が整っており、素材の長軸も揃っていて斉一性があります。石器の加工は、素材の打面を下において、基部に部分的にしか加工を施さない（基部）部分加工の形態です。

次に、群馬編年Ⅰ期中頃の前橋市内堀遺跡（うちぼりいせき）です（第14図）。こちらは、私が大学院生の頃に調査報告書の作成作業に参加させて頂き、実測、トレース、原稿執筆などを担当した遺跡です。遺跡の特徴として、石器は信州産の黒曜石を主体的に大量に遺跡に持ち込んで、ほぼ一気に消費している点です。黒曜石製のナイフ形石器は、素材の形状は縦長と菱形で、実は明確に石刃を製作しておらず、素材、石器としてしか搬入していません。おそらく、手持ちの黒曜石資源の数量や質の制約により石刃技術を遺跡で十分に適用できなかったのではと推定しています。素材の長軸は揃っており、素材の用い方もほぼ全て打面を下に置いています。石器の加工は、素材の形を生かして、側辺、あるいは打面部を主体に基部に部分的な加工を施しています。

黒曜石の接合資料を観察すると、石刃技術を適用している資料で、元の原石近くまで接合した資料があるのですが、石質が悪く流離構造が発達していて敲打具で石核を打撃した際に、石核内で力が上手く抜けずに破砕面が発達して、思った形の剥片を剥ぐことが出来ずに終わっています。縦長剥片もありますが、そのまま使用せずに、切断して台形、三角形にして使用しています。

次に、群馬編年Ⅰ期後半の遺跡として、みなかみ町の後田遺跡を観てみましょう（第15図）。後田遺跡は、利根川上流域の大量の黒色安山岩と黒色頁岩を持ち込んで石器を製作した原産地近郊型の製作遺跡です。この遺跡は、経済的に石材資源に恵まれているため、石器の点数のみならず、サイズも大きいものがあります。ナイフ形石器について観てみますと、素材の形状は他の遺跡より大形の石刃が多いです。素材の長軸は、石刃の長軸と一致するもの、一致せず斜めのものなど軸がずれる様々な方向のものがあります。素材の用い方は、真っ直ぐのもの、斜めに多くもの、上下逆に置くものなど様々な素材の用い方を適用しています。石器の加工は、素材の用い方に連動して、切断を含めて様々な形に加工しており、ヴァリエーションがあります。

群馬編年Ⅰ期の三つの遺跡の石器製作技術を観てきましたが、どうやらこの時代あたりから、石刃技術と石器製作技術が変化してゆくようです。

次は、群馬編年Ⅱ期前半期の前橋市上泉唐ノ堀遺跡です（第16図）。図版にはナイフ形石器12点を載せていますが、素材の形状は石刃や縦長剥片など様々な形のものを使用しています。素材の長軸は、一致するものが多いですが、斜軸のものもあります。素材の用い方は、打面を下にして真っ直ぐのものが多いですが、斜めに置くものや上下逆に置くものがあり、様々な用い方をしています。素材の加工は、素材の縁辺を断ち切る、縁辺を潰す加工を主体としますが、それ以外に素材を断ち切る、基部を鋭く作り出す、あるいは表側からも縁辺に加工を施し厚さを減じたり形状を整えたりする加工が特徴的に観られます。これらのナイフ形石器の技術的特徴は、堀越甲真木Ｂ遺跡の石器群より一段階古い時代の特徴であると言えます。石核と剥片の接合資料は、黒色安山岩が原石に近い形まで接合した接合資料№６の例ですが、素材を分割して、礫面を除去して剥片を生産していますが、実はナイフ形石器の素材は生産されていません（第17図）。一つの石に工夫を凝らしながら割って消費しているのですが、石質が悪かったらしく石刃は生産出来ていません。

次はⅡ期後半の伊勢崎市書上遺跡です（第18図）。ナイフ形石器は５点載せていますが、素材の形状は縦長の石刃で整ったものです。素材の長軸は、一致するもの、斜軸のものがあります。素材の用い方は、真直ぐのもの、上下逆に置くものがあります。素材の加工は、それぞれの石器で異なっており、規則性がありません。右側には稜付石刃がありますが、表面に石核素材の分割面を残しています。

接合資料は、黒色安山岩の石刃や稜付石刃が接合した接合資料№１です（第19図）。この接合資料は、石刃、稜付石刃のみの接合例でして、肝心の石核は遺跡外に持ち出されているようです。特徴としてこの接合資料は、黒色安山岩という地元の粗粒の硬い石材、扱

うことが非常に難しく、石刃を製作することが難しい石材にも拘らず、長さ、幅、厚さが見事に整った石刃を連続的に生産しており、ナイフ形石器の素材を生産することは十分に可能であったと思われます。この接合資料を残した人は、おそらくかなり石器づくりが上手な人だったと思われます。接合資料は、本当に見事な石器素材を作ったお手本です。

次は、群馬編年Ⅱ期後半の前橋市亀泉坂上遺跡です（第20・21図）。この遺跡は、黒曜石製の接合資料№.１についてお話しいたします。この接合資料は、信州産の黒曜石の原材を分割したものから剥片を生産しています。しかし、石質が悪く夾雑物が多いため石核を敲いたときに力が上手く伝わらずに割れてしまい、思ったような剥片が作れなかったようで、石刃を上手に生産出来ていません。これは、石器を作る上で石質が剥片のデザインを制約している事例です。

群馬編年Ⅱ期後半期の最後は、伊勢崎市波志江西宿遺跡です（第22図）。この石器群は黒色安山岩と黒色頁岩を主体としていますが、黒色安山岩の接合資料№.１について観てみますと、分割した素材を石核として石刃を生産していますが、途中で割れてしまい、連続的に形の整った石刃を生産出来ていません。最後には、石刃を作る方法を変更しています。この接合資料も石材の石質により石刃生産、デザインが制約されている事例です。

以上のように、Ⅱ期は石刃技術が駆使されていますが、石刃を生産する機能が十分に果たされておらず、ナイフ形石器もその素材の供給関係が不安定だったようで、その問題への対応として素材の用い方と加工方法を駆使して様々な形のナイフ形石器を生産しています。どうやら、ナイフ形石器を主体とした石器技術の適用に矛盾が生じたために、加工技術を発達させて、技術構造とシステムの安定を図ったようです。

次は、群馬編年Ⅲ期の遺跡です。最初は渋川市の上白井西井熊遺跡です（第23・24図）。この石器群は、これまでの北関東地方の文化伝統的な石器技術ではなく、西方からの人々の到来と情報、知識と物の「文化受容（Acculturation）」（Redfield　et al. 1936. シーガル他1995、Berry1997）によりもたらされた石器技術で、瀬戸内技法が技術構造の基盤として、石核からお刺身を削ぎ切るように翼状剥片、横長剥片を生産するシステムとして機能しています。これらの素材は、そのまま刃物やナイフ形石器あるいは二次加工石器の素材として利用されています。おそらく、ドイツの社会学者ジンメルの言うような「余所者たち（Strangers）」（ジンメル1979、Simmel1950）が、この石器文化の利根川流域への流入の主人公であったと思われます。上白井西井熊遺跡では、地元の黒色安山岩、黒色頁岩を主体として、黒曜石が若干混じりますが、地元石材を使用して他地の文化伝統的な石器技術を使用しています。ナイフ形石器について観てみますと、素材の形状は申し上げたように横長剥片のみで、素材の長軸は横方向と斜め方向、素材の用い方は横方向か斜め方向に置きます。素材の加工は、様々な加工を駆使して形状を整形して、一側辺加工、二側辺加工などに仕上げています。瀬戸内技法の接合資料では、大きな原石を分割、整形して盤状、板状の石核を準備して、翼状剥片や横長剥片をシステム的に生産していますが、石質などの制約によるもの、あるいは技術的差異による習熟度の制約によるものか判断できませんが、連続的かつ効率的な剥片生産、ナイフ形石器の生産システムは確立されていません。明らかに、石器技術の機能要件を考慮すると瀬戸内技法の技術構造が変動している事例であると言えます。

最後に、伊勢崎市の今井見切塚遺跡です（第25図）。まず、ナイフ形石器を観てみますと、素材の形状は横長、縦長で不定形で、素材の長軸は一致するもの、斜めの方向のものなどがあります。素材の用い方は、打面を下に置くもの、斜め下に置くもの、横方向に置くものなど様々な置き方です。素材の加工は、様々な加工を駆使して、様々な形状に整形して、切出形、あるいは二側辺加工を生産しています。これらのナイフ形石器はこれまで以上に加工に依存する形で生産されています。

接合資料について観てみますと、黒色安山岩の接合資料№.65は、分割した個体を原材として利用して剥片を生産していますが、生産された剥片の形状や大きさは様々で整っていません。石核も芯の部分まで消費尽くされていますが、効率的、効果的な剥片生産には至っていません。

今井見切塚遺跡の石器群は、技術構造の機能要件において、これまでの地域文化伝統における技術基盤であった石刃技術の構造が明らかに変動、崩壊し、ナイフ形石器の製作技術の構造も変動していると言えます。

石刃技術とナイフ形石器製作技術、使用石材のあり方（第１表）

１）前　提

次に、これまでお話しした各時期の各遺跡のナイフ形石器、石刃技術のあり方についてまとめてみたいと思います。これまでお話しした各遺跡の石刃技術とナイフ形石器、使用石材のあり方について第１表にま

とめてみましたので、そちらを参照しながら進めてまいりましょう。その前に、表の内容について、簡単に各項目についてご説明しておきます。石刃技術の技術進化を確認するために、まず、素材の分割の有無、打面刷新の有無、石核における打面のあり方、そして生産性です。ナイフ形石器についてはその製作技術が、素材の形状を活かしたもの、二次加工に依存して形状を整えるもの、異文化由来の国府型に分けました。石材は、地元石材（local lithic resources）の黒色安山岩、黒色頁岩、チャート、さらに地域石材（regional lithic resources）のあり方についてまとめてあります。

２）石刃技術のあり方

石刃技術について項目ごとに観てみますと、まず素材の使用方法、分割の有無ですが、これはほぼ全ての遺跡で認められます。分割は狩猟採集生活における資源の携帯性という運用効率と物理的な石質吟味のための方策であると思います。そのように考えますと、石核素材の分割技術は、群馬編年Ⅱ期の黒曜石製石器群の内堀遺跡とⅢ期の上白井西井熊遺跡と今井見切塚遺跡以外に認められます。つまり、赤城山南麓の後期旧石器時代の石刃技術においては普遍的であり、現状では年代的指標には成り得ず、共時態における技術構造上の機能要件であると言えます。

石核消費における打面刷新の有無ですが、この要素も分割素材の有無同様に、群馬編年Ⅰ期の岩宿遺跡と内堀遺跡、Ⅲ期の遺跡以外の遺跡では認められ、石刃技術において普遍的に行使される技術であると言えます。

打面設定のあり方ですが、これは、瀬戸内技法の上白井西井熊遺跡は除きますが、石核に一つの打面を設定する単節打面はほぼ通時的に存在するようですし、石核に二つの打面を設定する両設打面も岩宿遺跡の段階から存在するようですので、これも普遍的な技術要素であるといえます。

最後に生産性ですが、資料の一括性の都合から岩宿遺跡、技術基盤の差異（différence）の問題から上白井西井熊遺跡は除外しますが、石刃技術の生産性は、これまでの各遺跡の内容から評価しますと原産地近郊の後田遺跡と書上遺跡の石刃技術以外は意外に低かったと言えます。本来、人類の歴史が発展的に進化する、定向進化の思考で考えるならば、時間の経過とともに石刃技術の生産性も効率化し発展する傾向を示すはずですが、そのような現象は見られないようです。むしろ、これまで確認しましたように、各遺跡の石刃技術の接合資料は、その技術基盤の効率的な適用に苦慮していたように思います。

３）ナイフ形石器のあり方

ナイフ形石器の製作技術のあり方は、群馬編年Ⅰ期の岩宿遺跡と内堀遺跡では、石刃や縦長剥片の素材を生かして、部分的な加工でナイフ形石器を仕上げる素材活用型の技術構造を適用しています。また、内堀遺跡では、黒曜石を使用していますが加工によって素材の形状を整える加工依存型のナイフ形石器も若干存在します。

加工依存型のナイフ形石器は、群馬編年Ⅱ期の後田遺跡、上泉唐ノ堀遺跡、堀越甲真木Ｂ遺跡、書上遺跡、波志江西宿遺跡、そして群馬編年Ⅲ期の今井見切塚遺跡において普遍的に組成します。なお、段階ごとに加工の特徴が異なりますが、その説明は専門的ですし、時間を要しますのでここでは省かせていただきます。加工依存型のナイフ形石器の増加と連動して、素材の長軸が剥片の剥離軸とズレるものが増え、素材の用い方も打面を上に、素材を斜軸に用いるものが増えてきます。兎に角、ナイフ形石器が必要ならば、使える素材をあらゆる方法で加工して作り上げるようになっていきます。

４）使用石材

石刃技術に使用する石材は、群馬編年Ⅰ期から地元由来の黒色安山岩と黒色頁岩を主体的に使用するという、社会選択（Social choices：アロー1997、Arrow1963）、文化パターンが根付いてゆきます。この点は、赤城山南麓を社会領域とする後期旧石器時代の社会諸集団の普遍的かつ文化的な技術的特徴の一つであると言えます。また、これらの石材に、貫入的に地域石材である信州産の黒曜石が使用される遺跡があります。先にお話ししましたが、おそらく定期的に狩猟採集グループが組織されて、信州に黒曜石を間接的、直接的入手しに、あるいは中継地で間接的入手に出向くか、もしくは信州を生活領域とする社会諸集団が、季節的に赤城山南麓方面に出向いて生活しながら黒曜石を集中的かつ一元的に消費していたとも考えられます。さらに、良質の石質を採集できれば意外とどのような石器づくりにも適用可能な石材として、地元由来のチャートが、石材欠乏の緊急時に対応するために、補完的、予備的に少量組成することが多い様にも見受けられます。例として、堀越甲真木Ｂ遺跡で少量含まれているチャート製石器や石刃は良質のものです。

石刃技術の交差点（曲がり角）

１）赤城山南麓の石刃技術とナイフ形石器

最後に、今日のお話しをまとめて締めくくりたいと

思います。以上の赤城山南麓の後期旧石器時代前半期を中心とした石刃技術、ナイフ形石器、使用石材のお話をまとめますと、赤城山南麓では、後期旧石器時代の初めから地元由来の黒色安山岩、黒色頁岩を主要な資源、石材として石刃技術に適用し石刃を生産して、ナイフ形石器を生産するという、行為を通じた生成的規則と資源という石器技術の構造（ギデンズ1986ａ）が存在します。この点が、赤城山南麓の後期旧石器時代石器群の普遍的技術構造の一つであると思います。生成的規則において、意味論的規則、つまり言葉の文法規則のような文化的なルールを持った石器製作技術の個々の要素と社会集団の日常生活の道徳的規則が存在していたと思われます。さらに社会システム論的な視点で言えば、石器製作技術の行為における、石器の作り方の「規則」と資源、具体的には石材や有機質の工具の適用によって、石器製作技術システムが生産、再生産されること（ギデンズ1986ａ・ｂ、パーソンズ1974）が当時の社会・文化システムの一部の残影として石器と礫を通じて遺跡に残されています。

しかし、当時生活場所であったそれぞれの遺跡で、この技術構造、システムには重大な問題がありました。それは、主要な資源、石材の石質による制約という石器技術のデザイン（Hayden et al. ibid）上の問題です。黒色安山岩、黒色頁岩は赤城山南麓から日常的に利根川、あるいは上流域の原産地において入手可能でしたが、石刃技術への適用において、石質、敲き割る時の硬さ（硬度）などが大きな制約となっていたと思います。こうした技術上の制約は、先のお話しで述べました。

黒曜石については、地域石材として赤城山南麓に流通しますが、石質、距離と入手難易度、季節性が大きな制約となり、原材、石刃、ナイフ形石器のあり方、石器技術のデザインの大きな制約となりました。

このような石質の制約を考慮して適用された石刃技術により生産された石刃や縦長剥片、剥片を活かすための石器製作技術が当時の赤城山南麓の社会諸集団と個々人により工夫、発案され適用されました。第一に、石刃素材の形態を活かすための打面と作業面の方向の回転、斜軸方向への素材の配置です。さらに、こうした素材に対して、形状を整えるべく、切断、形を整える加工、縁辺を潰す加工、さらに、厚手の素材の背面の背を整える対向加工、厚さを減じる平坦加工などの加工技術の開発と適用、そしてこれらの加工を組み合わせて様々な加工の組み合わせにより石器の形（技術形態）を仕上げる技術です。これらの加工技術の適用により、石刃技術における素材生産の問題を解消して、主要な石器の道具であったナイフ形石器を生産し続けました。また、他の地域の社会諸集団との文化受容も石器技術の在り方に影響したと思います。これが加工依存型ナイフ形石器製作システムの開発、確立、適用です。この加工依存型のナイフ形石器の製作が、群馬編年Ⅱ期以降、普遍化して定向的、文化的傾向となることが、赤城山南麓の後期旧石器時代前半期の歴史的特徴であると言えます。

こうした石刃技術とナイフ形石器製作技術の技術構造の機能要件の問題、不安や摩擦を解消して技術構造を維持、安定させることで、赤城山南麓の社会諸集団と個々人は、群馬編年Ⅰ期～Ⅱ期の生態系への適応を制御し、狩猟採集生活を送りました。

２）植生、気候、災害

当時の植生と気候について確認しておきますと、約３～２万年前頃は花粉分析によりますと、マツ科針葉樹とカバノキ属の冷温帯から亜寒帯の落葉広葉樹の混合林が形成されていて、気候は今よりも低温で冬季の積雪はほとんどない、乾燥した気候でした（下岡2015）。また、植物に含まれるガラス質の物質、植物珪酸体分析によると、ササ類の比率は基本的にクマササの主体であることから寒冷であった理解されています。

こうした寒冷、乾燥な気候の時期に、約3.0～2.8万年前に九州の姶良Tn火山灰が降灰していますし、約2.3～2.7万年前に浅間板鼻褐色軽石（群）（As-BP Group）が降灰しています。特に、この浅間板鼻褐色軽石群の連続的な噴火は、浅間山から東側に位置する赤城山南麓では、火山灰の降下により生態系が大きなダメージを受け自然環境が破壊されたと推定されます。当時、赤城山南麓を主要な生活領域としていた社会諸集団と個々人は、おそらく住む場所が自然災害を被り生活することが困難になった住み慣れた土地から一時的な避難を余儀なくされたと思います。寒さと災害、当時の赤城山南麓の人々にとっては、大きな災難だったと思います。

３）石刃技術の交差点（＝技術構造の変動）

最後に、本日の主題となりました「交差点」とはどういう意味であるのか、この点をお話しして、本日の締めくくりにしたいと思います。

今回のお話しで重要な点は、第一に赤城山南麓の後期旧石器時代群馬編年Ⅰ期～Ⅱ期の石刃技術は、以外にも時代と共に史的唯物論的に定向的、進化的に発展せず、効率的でもなく、不安定な生産性を保持して存続していたことです。この点は、各遺跡の接合資料とナ

イフ形石器への素材の供給状況、作り方からご説明した内容からご理解頂けたと思います。この地域で石刃技術が十分に発達しなかった理由は、石器製作に関する基本的で経済的な理由、入手できる良質な石材資源に制約があったことが大きな要因であったと思われます。赤城山南麓の社会諸集団と個々人は、地元由来の黒色安山岩、黒色頁岩を主体的に石材資源として開発、利用して石刃技術を適用して石刃を生産し、ナイフ形石器を作り続けました。これが赤城山南麓の後期旧石器時代の社会諸集団と個々人の文化伝統、社会規範（北折2000）であったのだと思います。彼らは、本当に硬い石を使いナイフ形石器を作り続けるという行為にこだわり続けました。この「黒くて硬い石でナイフ形石器を作る」という社会選択（アロー前掲、Arrow ibid）がなければ、おそらく赤城山南麓の後期旧石器時代の狩猟採集生活は成り立たなかったのではないかと思います。むしろ、死活問題であったのではないかとも思えます。

先ほど、ハイデンさんの石刃技術に関する見解をお話ししましたように、石刃技術はその適用の初めから終わりまで高いリスクを伴う技術ですので、日本では北海道の黒曜石や東北地方の硬質頁岩などのような良質な石材資源に恵まれた経済エリアでない限りは、必ずしも生産性が高く、効率的な石器素材生産技術とは評価できないのではないかと思います。もし、信州の黒曜石の質量が北海道のような様相であれば、おそらく信州を中心とした黒曜石の流通と石刃技術の発達、部分加工のナイフ形石器がそのまま作り続けられるという歴史のシナリオが生まれたのではないかと思います。

また、石刃技術とナイフ形石器の唯物論的な歴史は、気候変動や生態系の変化からも影響を受けていたことも考慮しなければなりません。例えば、雨が降り石材原産地の石材入手の難易度という資源入手条件の変動が石器製作技術に影響すると考えられます。また、降雨、降雪などで生活領域、生活導線が変化する、遮断されるなどの制約も想定されます。他に、動植物相の変化による、食料、他の生活資源の入手条件の変化も狩猟採集生活に大きな影響を与えたことは想像に難くありません。また、当時の赤城山南麓の社会諸集団と個々人と他地域、例えば、便宜的に社会諸集団を仮想しますが、栃木方面のチャート地帯、信州、南関東、西毛、北毛、東毛、さらには三国峠を越えた各地域の社会諸集団との文化受容のあり方と社会交流も生きてゆくうえで非常に重要だったのではないでしょうか。

さて、タイトルの交差点の意味についてですが、二つの例え（隠喩）があります。一つは、歴史的に堀越甲真木Ｂ遺跡の頃を境に石刃技術とナイフ形石器の在り方が大きく変化することです。それは、浅間板鼻褐色軽石群の降灰以降に石器群の剥片の作り方とナイフ形石器の作り方が変化する、あるいは瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器、尖頭器などが作り始められるなど、それまでの技術構造に摩擦や問題が生じて、技術構造とシステムが変動することを意味しています。もう一つは、構造化における「資源」（ギデンズ1986ａ）としての石材のあり方です。堀越甲真木Ｂ遺跡は、赤城山南麓に位置しますが、信州産の黒曜石を集中的に消費しています。同じ地域の他の遺跡と比較しても、堀越甲真木Ｂ遺跡の黒曜石の消費の在り方は群を抜いています。また、地元由来の黒色安山岩、黒色頁岩もたくさん持ち込んで、集中的に消費して新たな場所へ移動しています。つまり、堀越甲真木Ｂ遺跡は地元由来の石材と約100㎞以上隔たった地域石材である黒曜石の消費が交わる場所として、狩猟採集生活における経済活動の分岐点としての生活上重要な意味があった場所だったのではないかと考えました。

このような、時間的な、歴史的な意味、あるいは空間的な相対関係という構造的な観点から堀越甲真木Ｂ遺跡を交差点に例えてみました。

おわりに

以上、今日は赤城山南麓の後期旧石器時代前半期の堀越甲真木Ｂ遺跡の石器製作技術、石刃技術とナイフ形石器の在り方を主題として、他の遺跡と共に比較検討を通じて、技術史的なお話をいたしました。その内容は、従来と異なった石刃技術とナイフ形石器の歴史的な評価が出来たのではないかと思います。こうした各遺跡の石器のあり方を一定の分析のルールを持ってしっかり見ることから、技術的な特徴を導き出して、構造的、システム的に石器技術の規範と資源のあり方を理解すること（ギデンズ1986ａ）、そしてその結果を今日的に動態的に歴史的に位置づけることが、石器研究で非常に重要であり、基本的な先史考古学の研究目的であると思います。

今後も時間はかかると思いますが、私は一点の石器、一単位の石器群、一遺跡の石器群の技術形態学的分析を基本として、最近始めました使用痕研究による機能的分析、石器製作の訓練を通じて石器研究を進めてゆこうと考えております。

本日、この場いらっしゃる皆さんも博物館などの展示施設で石器を観る機会がありましたら、一点の石器の背景には当時の社会諸集団や個々人の様々な文化的、あるいは生活上の行為、行動、苦労が潜んでいることを理解していただけたらと思います。

以上で、本日のお話を終わりにいたします。長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。

謝　辞

本発表、本稿の執筆を通じて、多くの方々にご厚情、ご指導、ご教示を賜りました。末筆ではありますが、心よりお礼申し上げます。

前原　豊、小菅将夫、早田　勉、石川太郎、前橋市教育委員会。

追記

本稿は、平成29年８月19日の講演を基に構成し、加筆修正した論考ですが、当日の講演の趣旨と異なるものではないことを明記しておきます。

【引用・参考文献】

邦文

アロー・K1977『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社

大川洋司2009「文化変容モデルの誕生」『赤門マネジメント・レビュー』８巻７号、393～408頁、特定非営利活動法人グローバルビジネスリサーチセンター

大西雅弘2011「上白井西井熊遺跡」『上白井西井熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』10～15頁、岩宿博物館、岩宿フォーラム実行委員会

北折光隆2000「社会規範とは何か」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学　47』155-165頁。

ギデンズ・A1986ａ「第一章　機能主義－戦いを終えて」『社会理論の現代像』、24～62頁、みすず書房

ギデンズ・A1986ｂ「補論　構造化の理論についてのノート」『社会理論の現代像』、63～69頁、みすず書房

シーガル・M. H. 他1995『比較文化心理学　上巻』北大路書房

下岡順直2016「浅間板鼻褐色軽石群と前橋泥流の年代観」『ナイフ形石器文化の発達期と変革期』岩宿博物館、岩宿フォーラム実行委員会

ジンメル・G1979「余所者」『秘密の社会学』、127～136」頁、世界思想社

関口博幸2010「群馬における旧石器時代石器群の変遷」『北関東地方の石器文化の特色』６～14頁、岩宿博物館、岩宿フォーラム実行委員会

早田　勉2010「北関東地方西部の旧石器文化編年に関係するテフラ研究の情勢」『北関東地方の石器文化の特色』15～20頁、岩宿博物館、岩宿フォーラム実行委員会

パーソンズ・T1974『社会体系論』青木書店

前原　豊・諸星良一印刷中『堀越甲真木Ｂ遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会

町田　洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』東京大学出版会

欧文

Arrow, K1963 Social Choice and Individual Values (2nd ed.), John Wiley.

Berry, J. W. 1997 Immigration, Acculturation, and Adaptation. Applied Psychology, 46 (1), pp5-68.

Giddens, A1979 Central Problems In Social Theory. The Macmillan Press Ltd.

Hayden, B, Nora F, et al. 1996 “Evaluating lithic strategies and design criteria.” In George Odell, (editor), Theory and behavior from stone tools. Plenum Publishing. New York. pp 9–49.

Heinzelin and Haesaerts1983Un cas de debitage Luminaire au Paléolithique ancient：Croix-1’-Abbé　à Saint-Valéry-sur-Somme. Gallia Préhistoire. 26, pp189-201.

Max-Planck-Gesellschaft 2017 The first of our kind. Press Information.

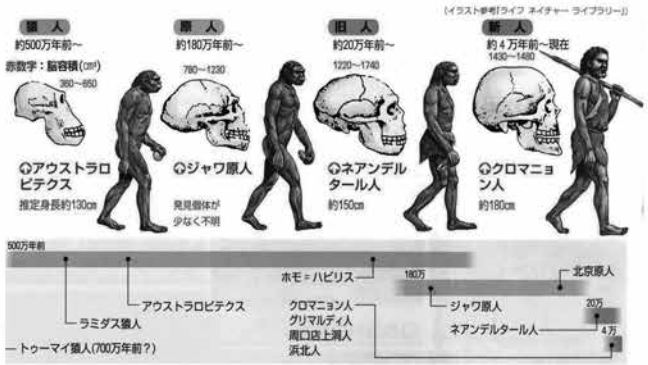
Redfield, R et al. 1936 Memorandum for the study of acculturation. AmericanAnthropologist, n. s., 38, pp149-152.

R évillion, s 1993 Qestion typologique à propos des industries laminaires du paléolitique moyen de Seclin(Nord)et de Saint-Germain-desVaux/Port-Racine(Manche)：lames Levallois ou lames non Levollois?. Bulletin de la Socié t é Préhistorique Française. 90, pp269-273.

Simmel, G 1950 The Stranger. The Sociology of Georg Simmel. New York：Free Press, pp402－408.

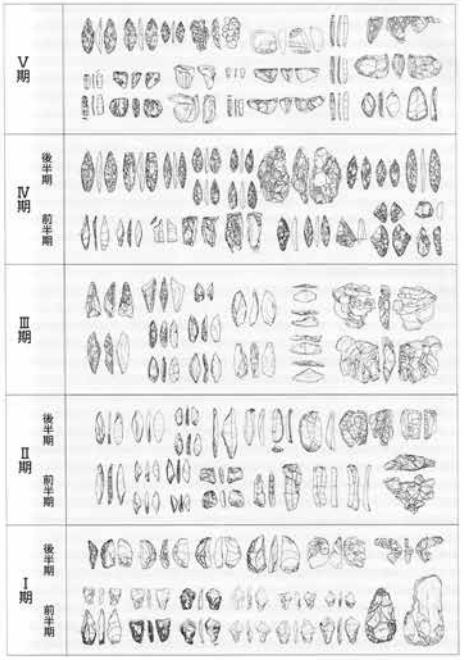
Volkman, P1983Chapter Six　Boker Tachtit：Core Reconstructions. Prehistory And Paleoenvironments In The Central Negev, Israel. Volume III, Department Of Anthropology Institute For The Study Of Earth And Man Southern Methodist University. pp127-190.

※発掘調査報告書については、割愛させていただきました。ご寛恕ください。

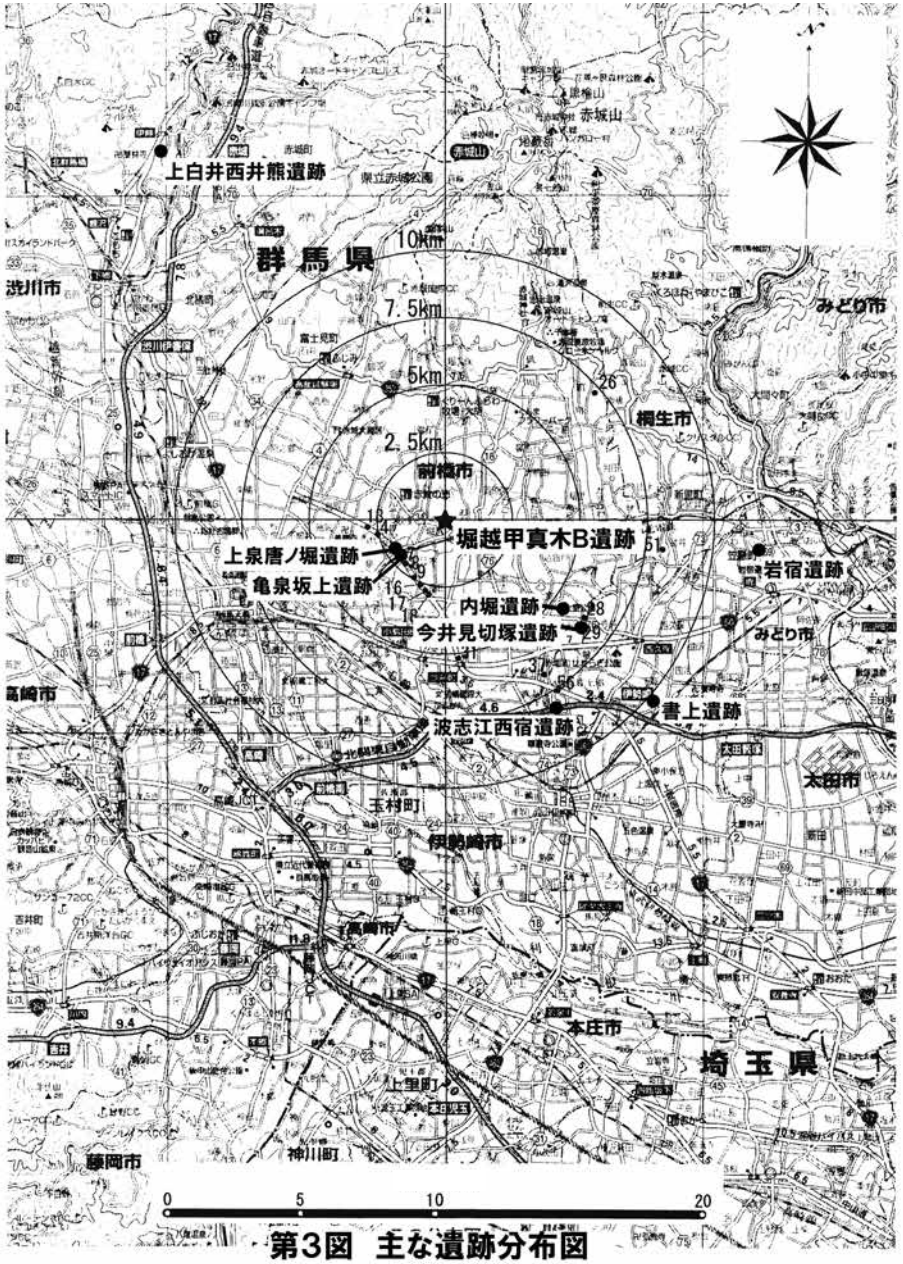


『世界史詳覧』浜島書店　2006.10改訂版　より

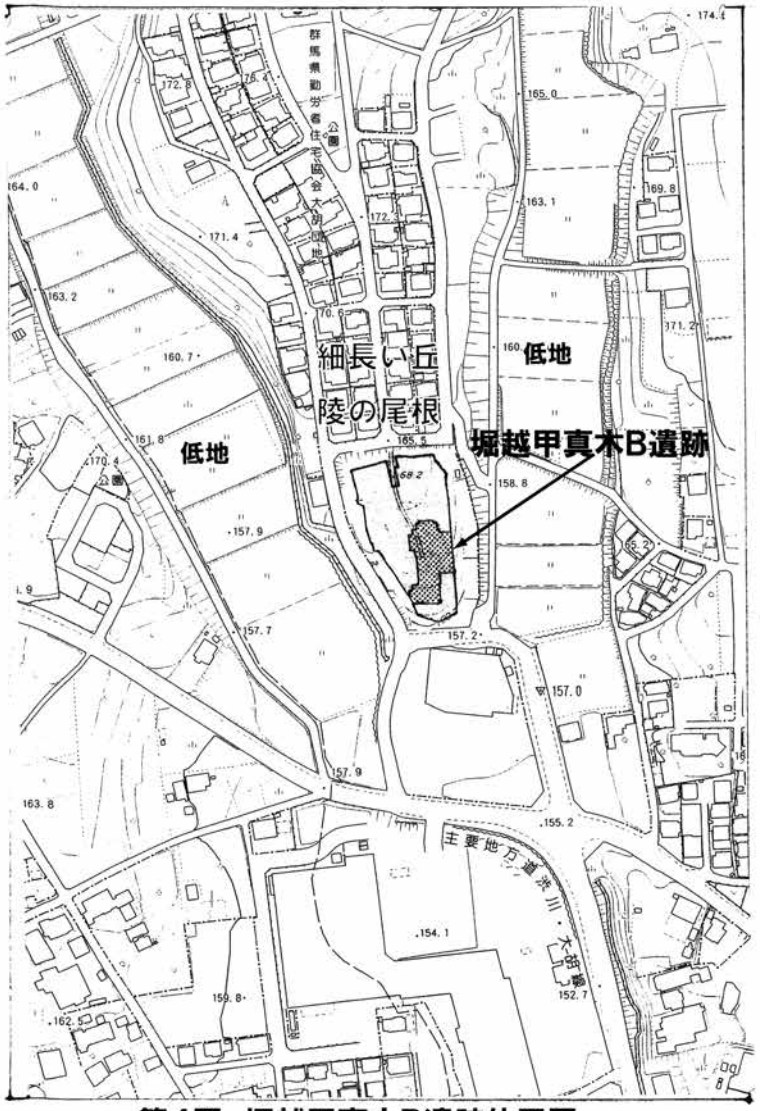
第1図　人類進化



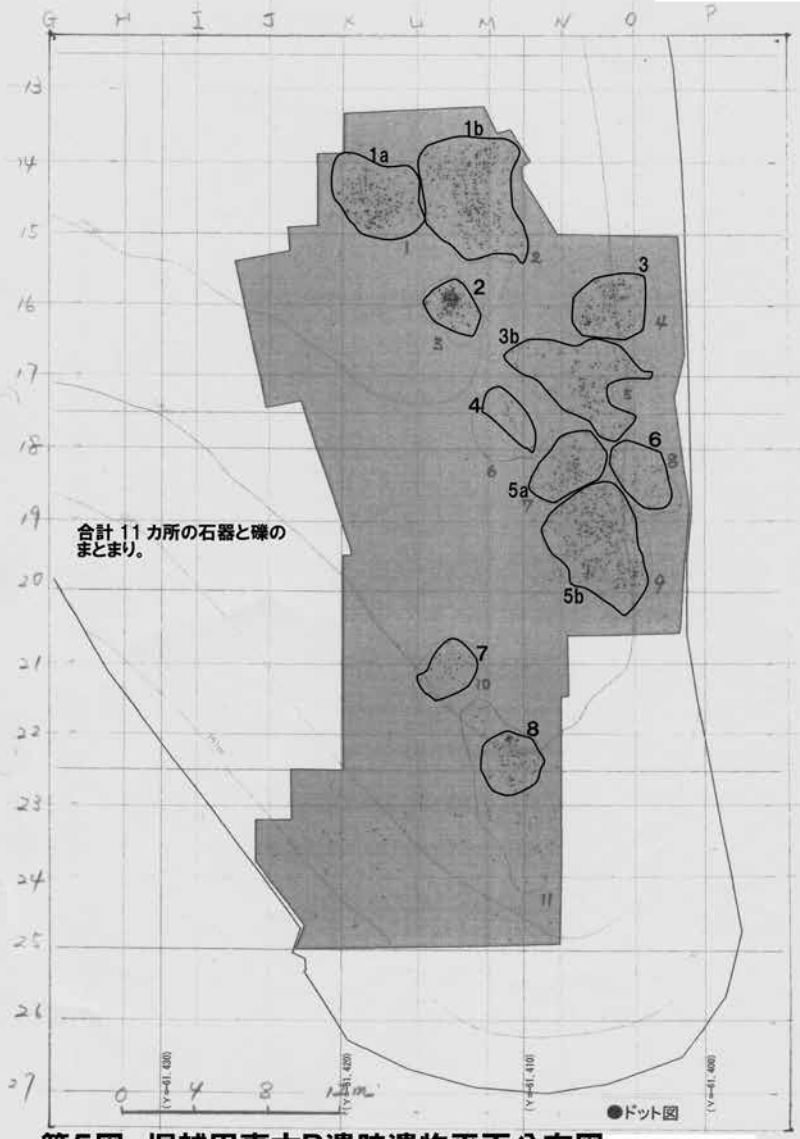
第2図　群馬県の旧石器時代遺跡編年（関口 2010）



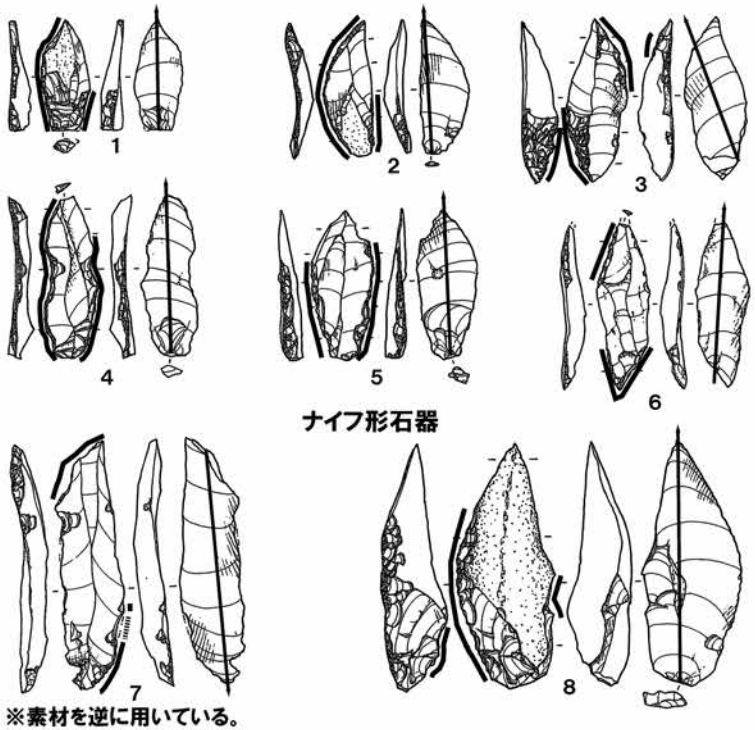
第3図　主な遺跡分布図



第4図　堀越甲真木B遺跡位置図



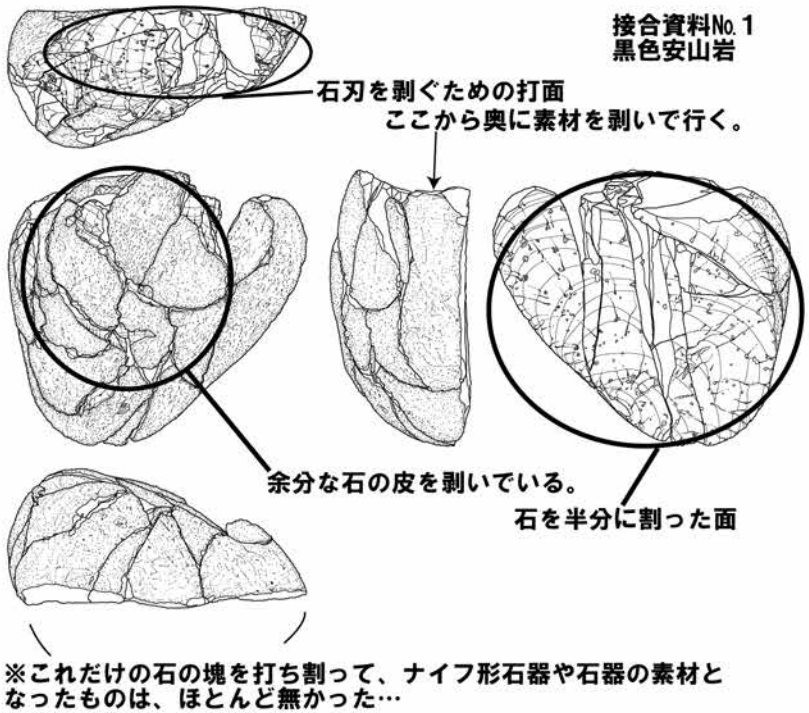
第5図　堀越甲真木B遺跡遺物平面分布図



素材の形状…様々な形がある。
素材の長軸…傾くものがある。
素材の用い方…逆に利用したものがある。
加工の仕方…素材の形を大きく変えて整えている。
様々な加工が施されている。

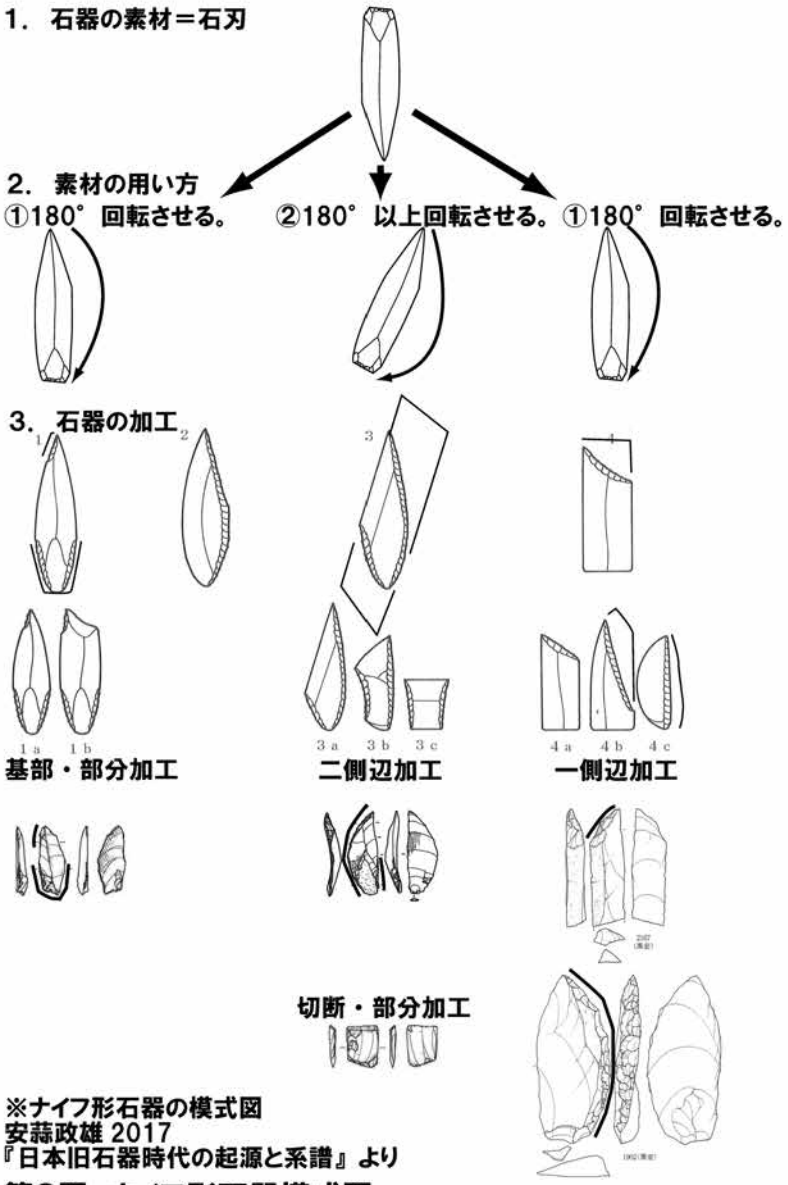
0　5cm

第6図　堀越甲真木B遺跡・石器（1）



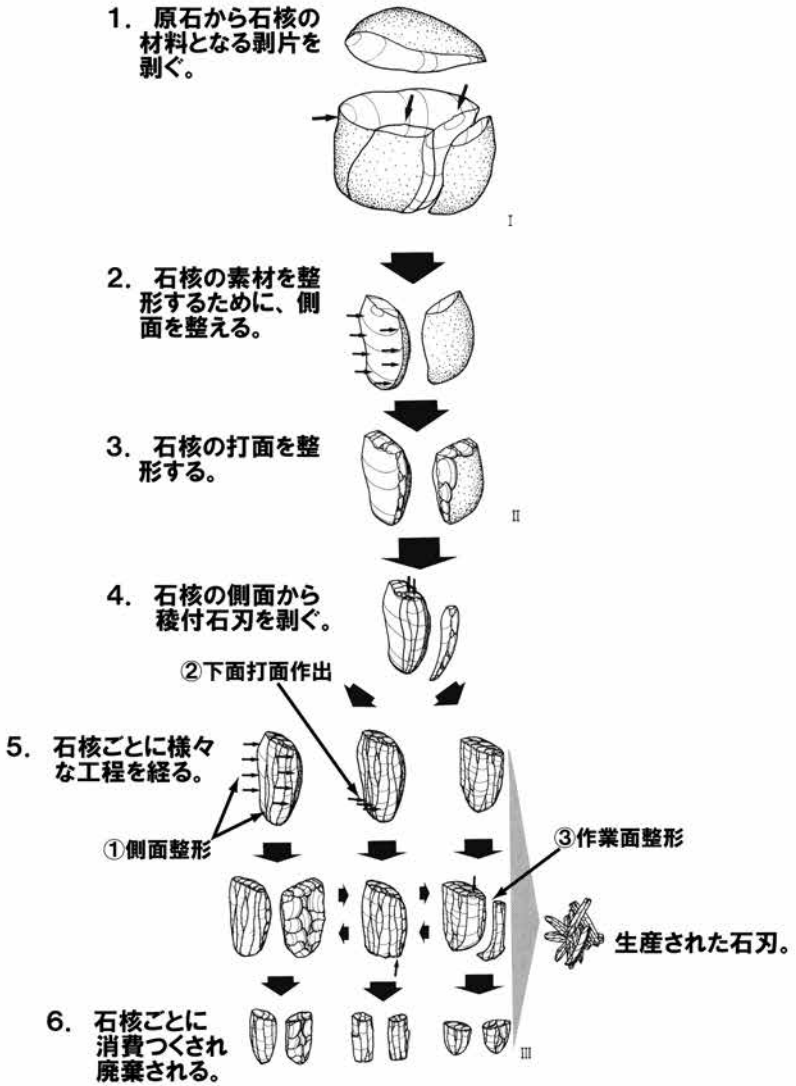
0　5cm

第7図　堀越甲真木B遺跡・石器（2）



※ナイフ形石器の模式図
安蒜政雄 2017
『日本旧石器時代の起源と系譜』より

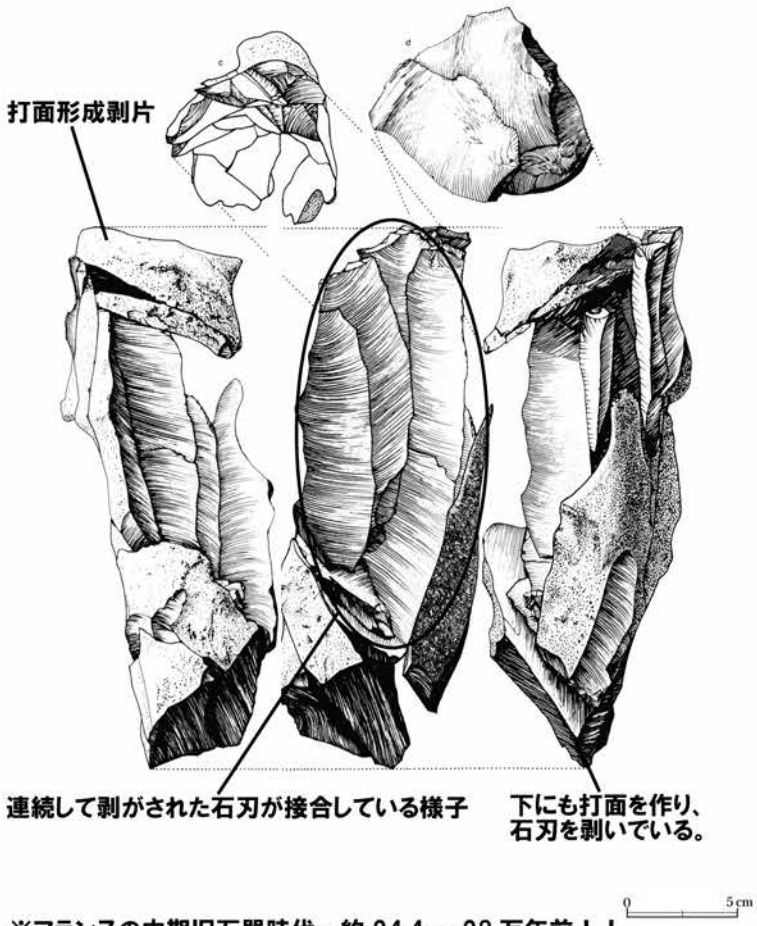
第8図　ナイフ形石器模式図



※長野県鷹山Ⅰ遺跡M地点石刃技術

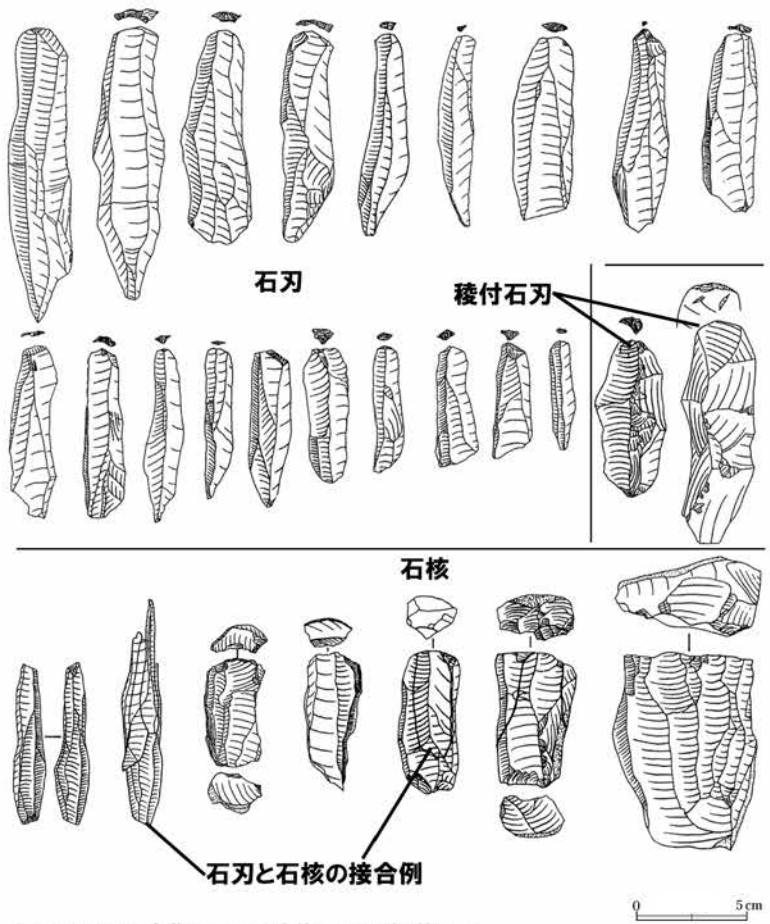
※原図は小菅将夫氏作成

第9図　石刃技術模式図



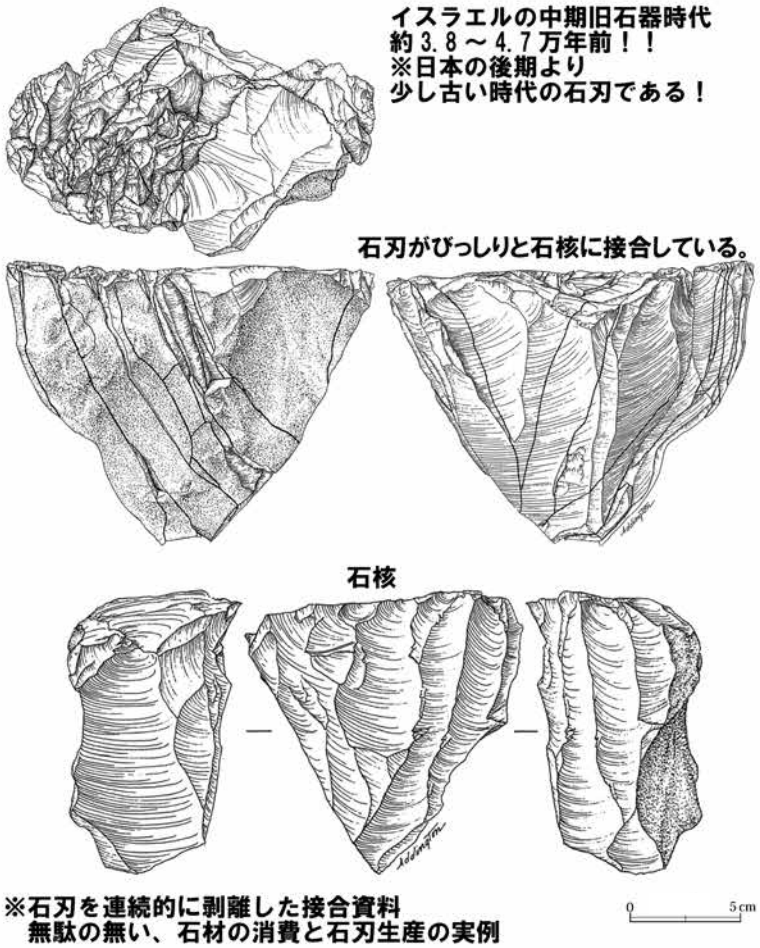
※フランスの中期旧石器時代・約 24.4 ～ 28 万年前！！
日本の後期旧石器時代より遥か昔に、
こんなに上手に石刃を作っていた人たちがいた。
主人公は誰だろうか？

第10図　フランス北部・サン＝ヴァレリー＝シュー＝ソンム遺跡・石器

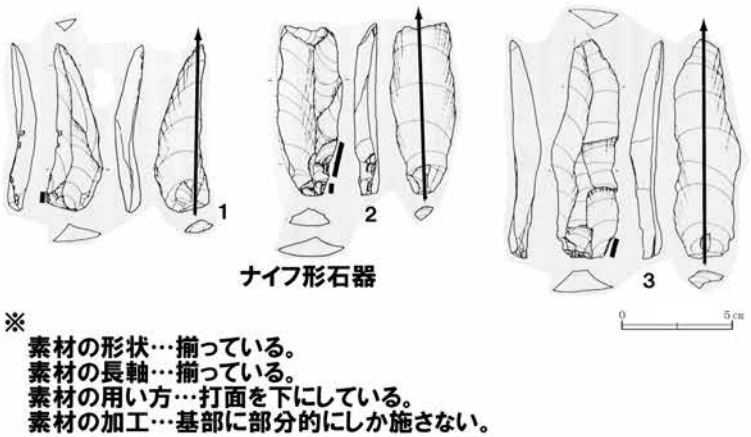


※フランスの中期旧石器時代・9万年前！！
細長い石刃を連続的に生産している。
稜付石刃を剥いでから、 石刃を生産している。
石核はプリズム形のものが多く、 技術が発達している。

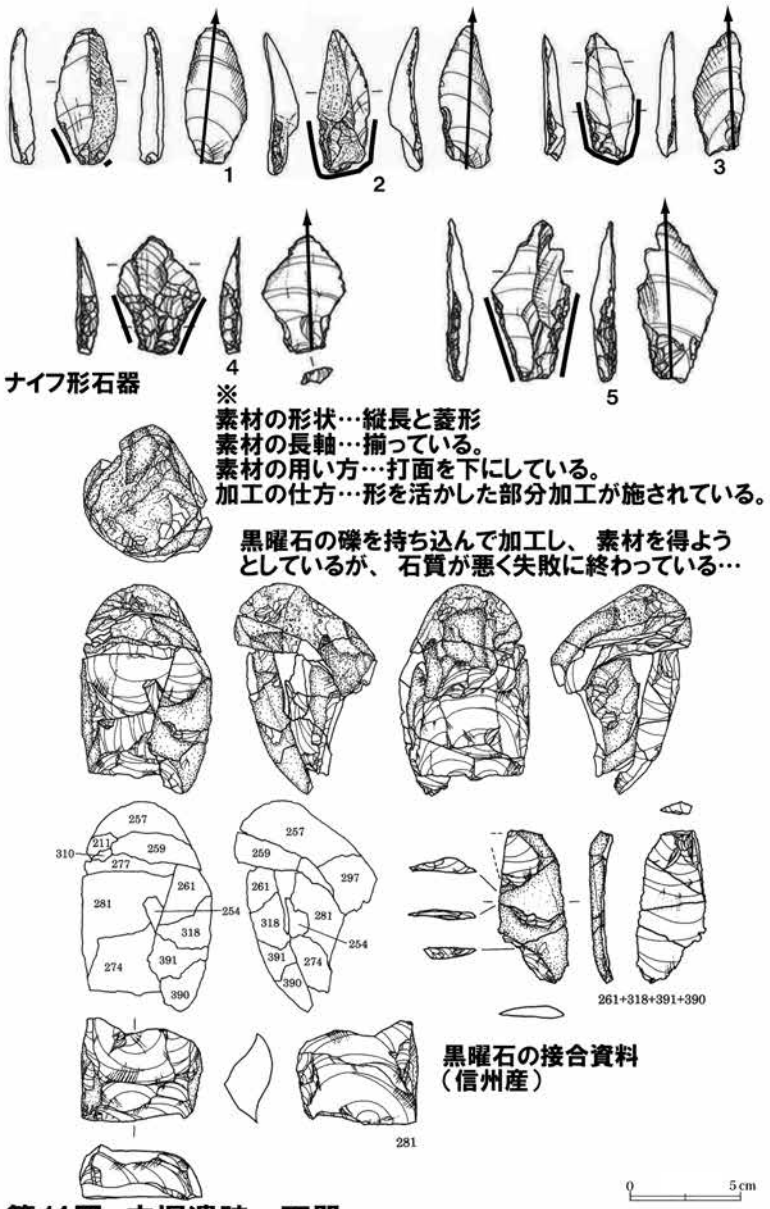
第11図　フランス北部・スクラン遺跡・石器



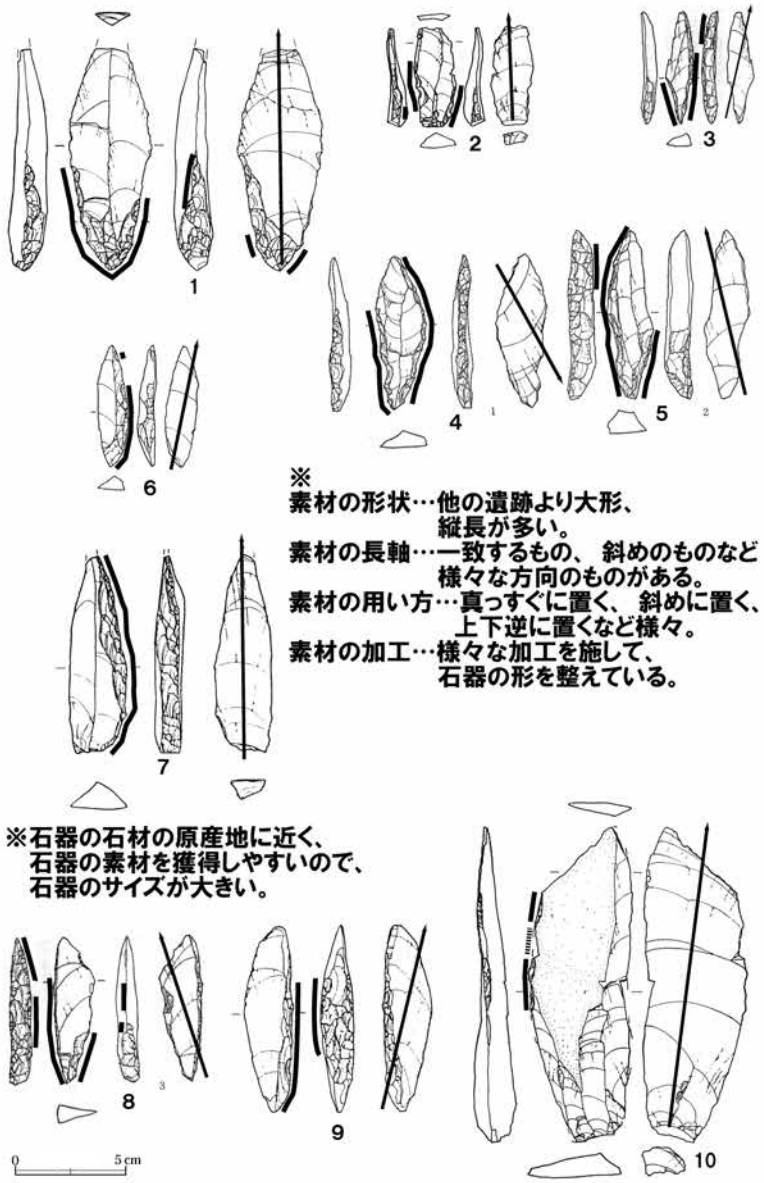
第12図　イスラエル・ボーカー・タチット遺跡・石器



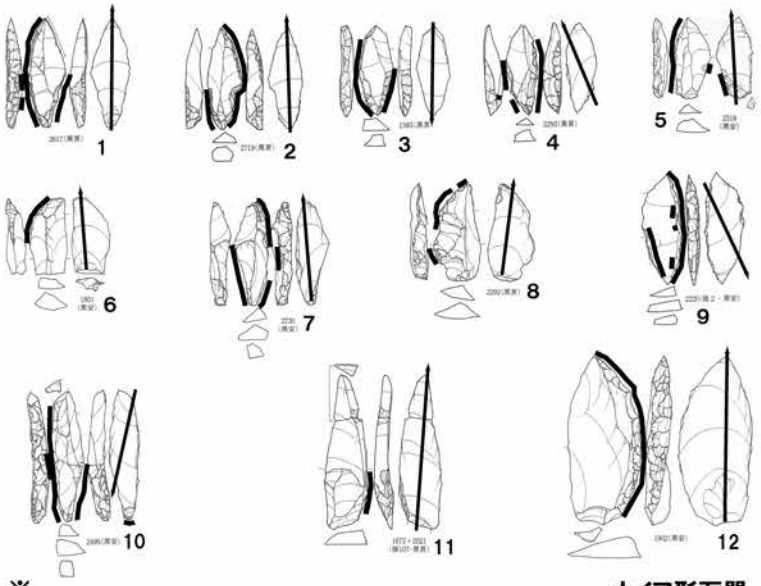
第13図　岩宿遺跡第Ⅰ文化層・石器



第14図　内堀遺跡・石器



第15図　後田遺跡・石器



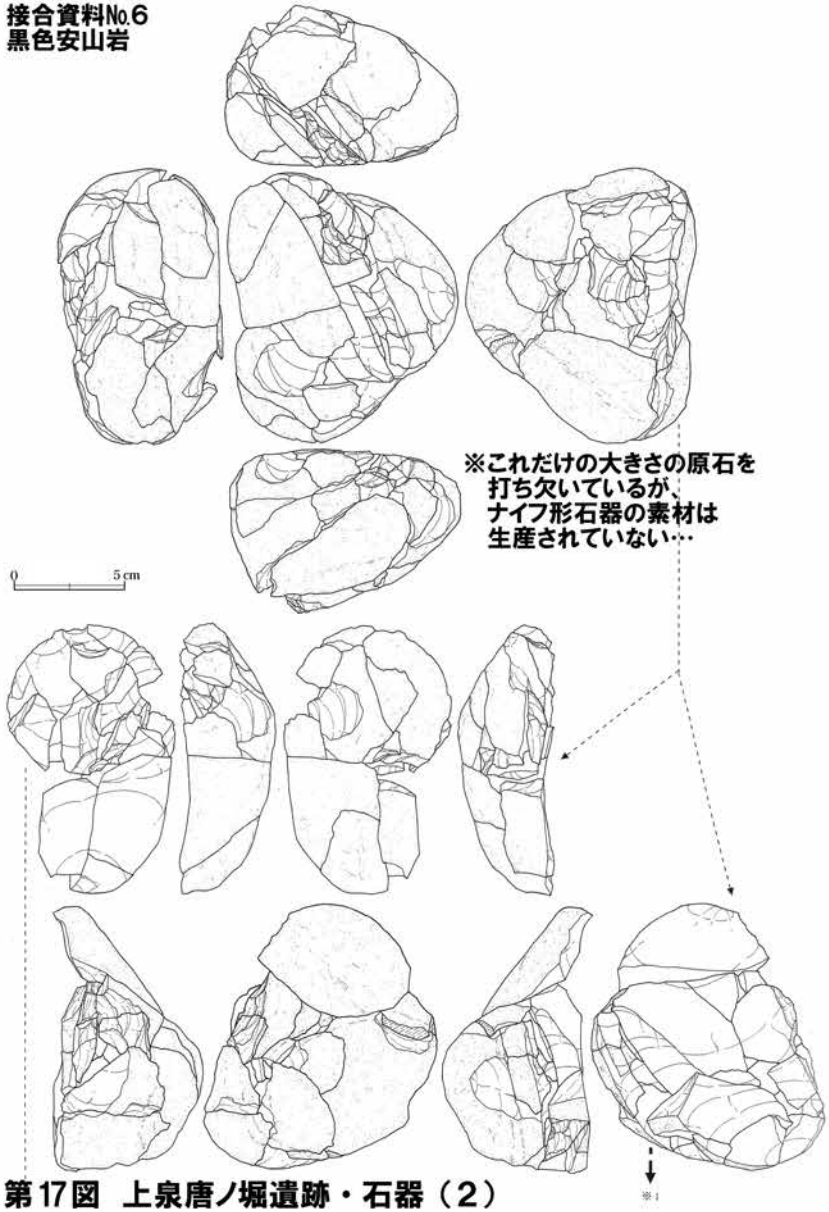
ナイフ形石器

※
素材の形状…様々な形がある。
素材の長軸…一致するもの、 斜めのものなど様々な方向のものがある。
素材の用い方…真っすぐが多いが、斜めや上下逆があり様々である。
素材の加工…様々な加工を施し、 素材の形を整形している。

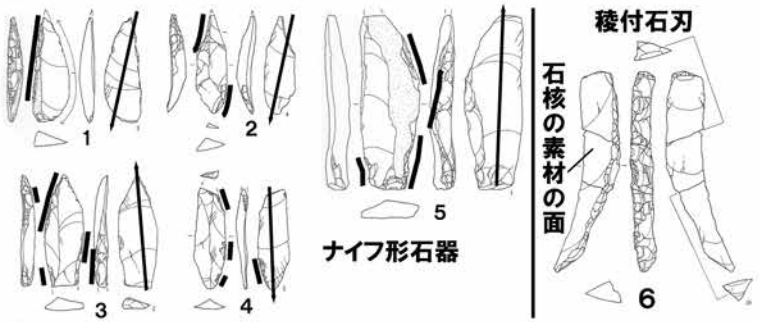
0　5 cm

第16図　上泉唐ノ堀遺跡・石器（1）

接合資料No.6
黒色安山岩



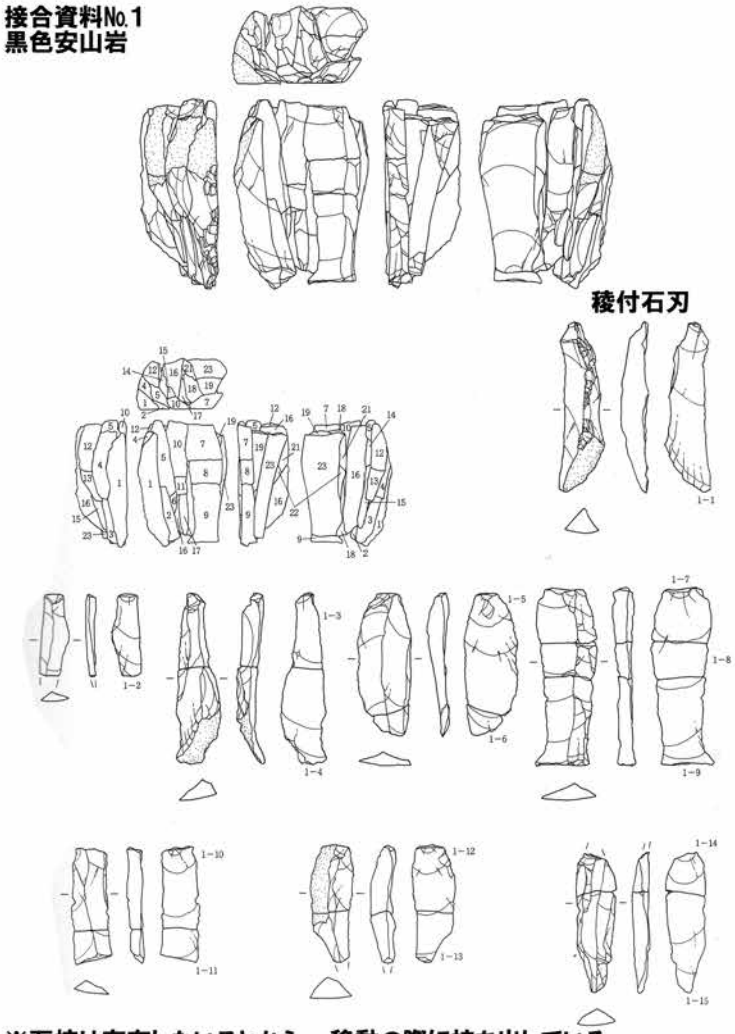
第17図　上泉唐ノ堀遺跡・石器（2）



※
素材の形状…縦長で整っているものが多い。
素材の長軸…一致するもの、斜めのものなど様々な方向のものがある。
素材の用い方…真っすぐと逆方向があり、様々である。
素材の加工…様々な加工があり、多様である。

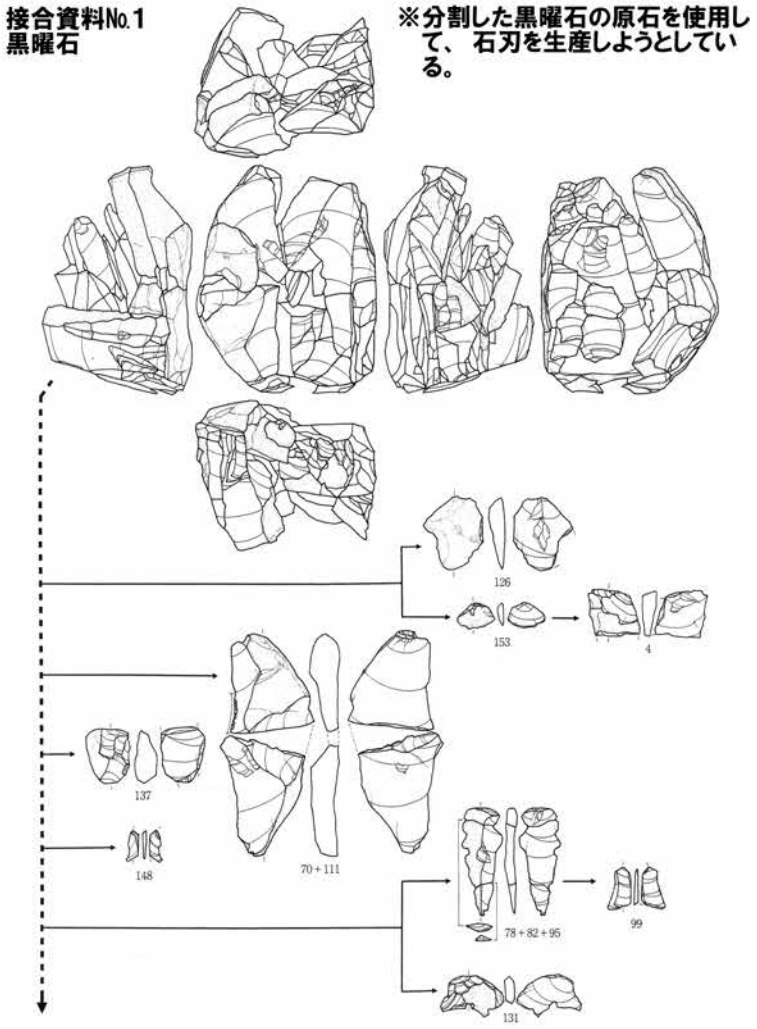
第18図　書上遺跡第Ⅲ文化層・石器（1）

接合資料No.1
黒色安山岩



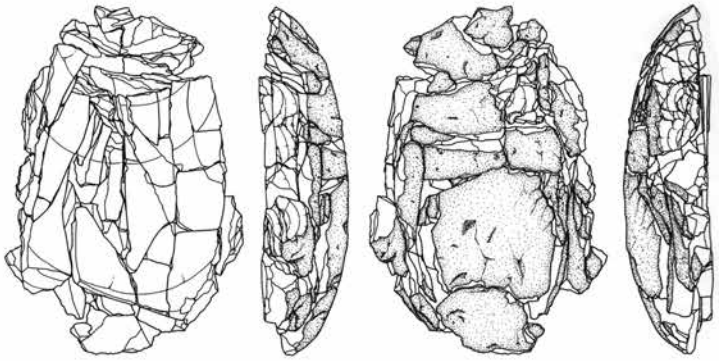
※石核は存在しないことから、移動の際に持ち出している。
素材の形状の斉一性から、この接合資料の製作者は、
達人と思われる。
無駄な原材消費をしていない。
1枚ずつ原材の状態を吟味しながら、
素材を剥離していると思われる。

第19図　書上遺跡第Ⅲ文化層・石器（2）

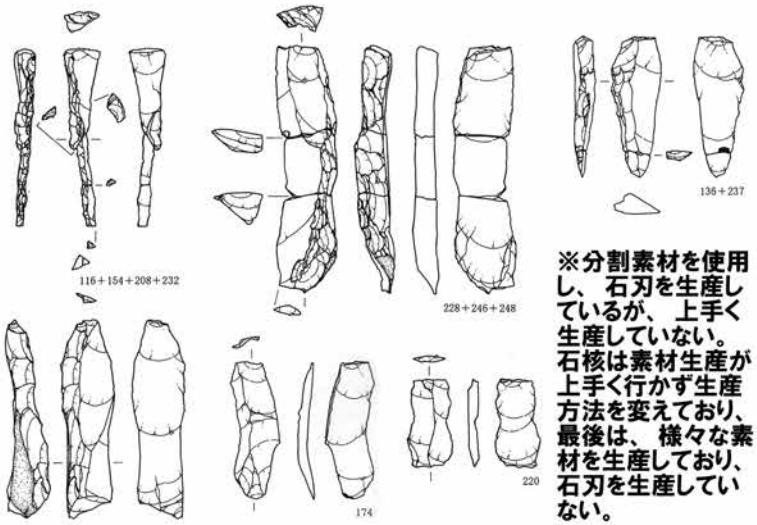


第20図　亀泉坂上遺跡第2文化層・石器（1）

第21図　亀泉坂上遺跡第2文化層・石器（2）

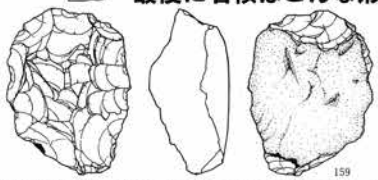


接合資料No.（1）
黒色安山岩



※分割素材を使用し、石刃を生産しているが、上手く生産していない。石核は素材生産が上手く行かず生産方法を変えており、最後は、様々な素材を生産しており、石刃を生産していない。

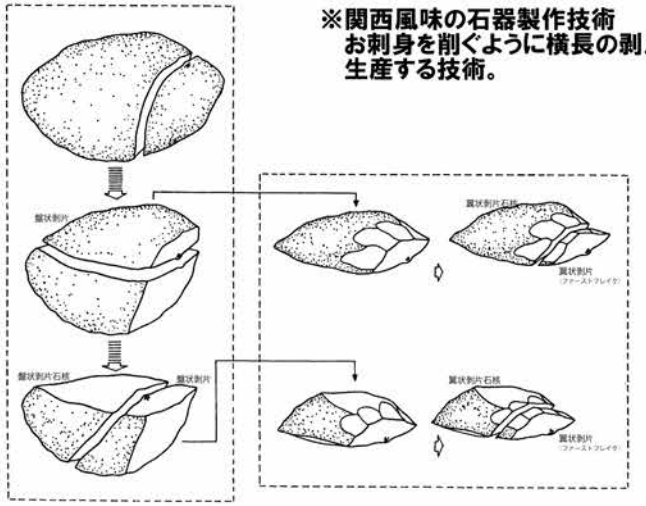
最後に石核はこんな形になった。



接合資料No.6
黒色安山岩

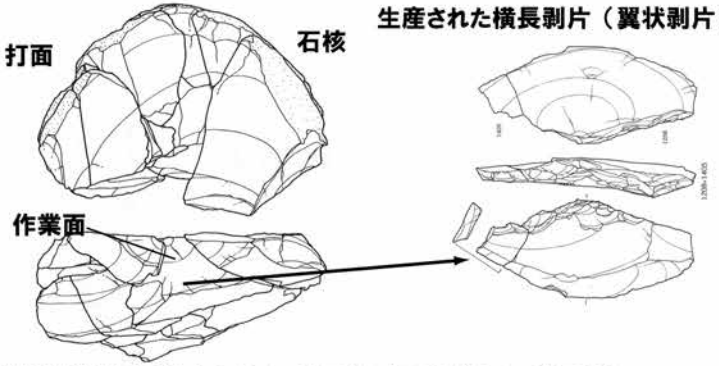
0　5cm

第22図　波志江西宿遺跡・第2文化層・石器

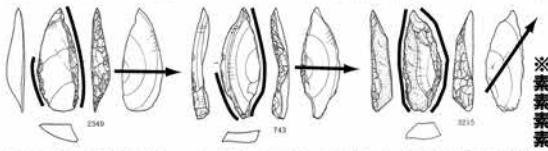


※関西風味の石器製作技術
お刺身を削ぐように横長の剥片を生産する技術。

第23図　瀬戸内技法模式図



横長剥片を素材としたナイフ形石器（国府型ナイフ形石器）



※
素材の形状…横長のみ。
素材の長軸…横方向と斜め方向
素材の用い方…横か斜めに置く。
素材の加工…加工を駆使して、形状を整形している。

※明らかに文化・伝統の異なる新しい石器技術が、群馬県にもたらされた例

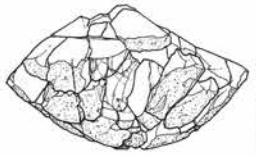
0　5cm

第24図　上白井西井熊遺跡・石器

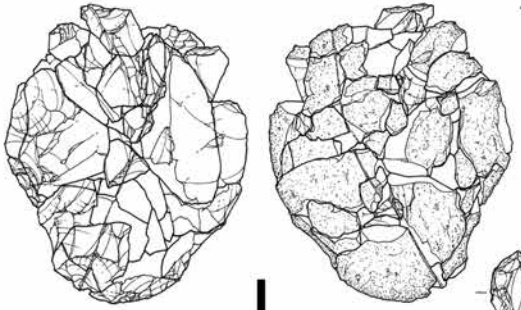
※
素材の形状…横長、縦長で不定形。
素材の長軸…一致するもの、斜め方向のものなど様々。
素材の用い方…打面を下、斜め下、横方向など様々。
素材の加工…加工を駆使して、様々な形状に整形している。

ナイフ形石器

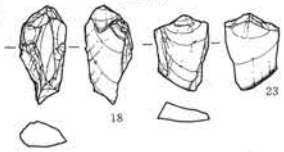
接合資料№65
黒色安山岩

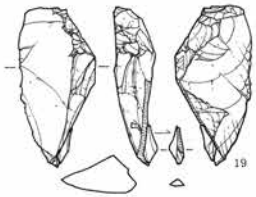


とことんまで、石材を消費つくしているが、かつてのように形の整った「石刃」は生産されていない。
→「技術構造の崩壊」



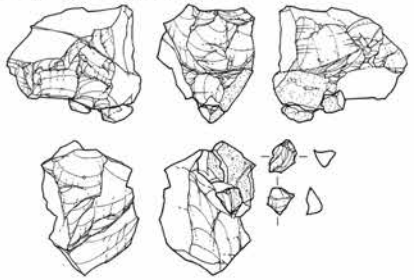
剥片





生産された剥片の形も整っておらず、形も大小様々である。

消費しつくされた石核



0　5cm

第25図　今井見切塚遺跡Ⅲ文化層・石器

第１表　各遺跡の石刃技術/剥片生産技術・ナイフ形石器・使用石材の特徴

遺跡名	石刃技術					瀬戸内技術	ナイフ形石器			使用石材			
	分割素材	打面刷新	単設打面	両設打面	生産性		素材活用型	加工依存型	国府型	黒色安山岩	黒色頁岩	黒曜石	チャート
今井見切塚遺跡Ⅲ文化層			○		×			○		◎	○	△	
上白井西井熊遺跡						○			○	◎	○	△	
波志江西宿遺跡第Ⅰ文化層	○	○	○	○	△			○		◎	○	△	
亀泉坂上遺跡第2文化層	○	○	○		△		—	—		△		◎	
書上遺跡第3文化層Ⅱ区	○	○	○	○	○			○		◎		○	○
堀越甲真木B遺跡	○	○	○	○	△			○		◎	○	△	
上泉唐ノ堀遺跡2文化層	○	○	○	○	△			○		◎	○	△	
後田遺跡	○	○	○	○	○			○		○	○	△	
内堀遺跡			○	○	△		○	△		△	△	◎	
岩宿遺跡第Ⅰ文化層	○		○	○	?		○				◎		○

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」第２回

群馬県と埼玉県に分布する坏形土器
－上毛野地域の開発と内斜口縁坏－

山　本　良　太（坂戸市教育委員会）

はじめに

みなさんおはようございます。

坂戸市教育委員会の山本良太と申します。今回は「群馬県と埼玉県に分布する坏形土器の謎」というテーマでお話しさせていただくこととなりました。いろいろと聞き苦しい部分もあるかと思いますが、精一杯やらせていただきますのでよろしくお願いいたします。

今回のお話は、古墳時代中期から後期へのちょうど変換点くらいにあたる、５世紀後半から６世紀初頭（西暦450年から500年）。地域は上毛野、北武蔵北部。群馬県の南部から埼玉県北部を中心としたエリアが舞台となります。

その中で土師器からどういったことが読み取れるのかということについて、お話していきたいと思っています。

今回のお話ではキーワードが３つあります。一つは「内斜口縁坏」、もう一つは「舟形石棺」、そして、最後のキーワードが、「榛名山二ツ岳の噴火」になります。この３つのキーワードに絡めながら、以降のお話を進めていこうかと思います。

１　土師器とは

まず、「土師器とはなにか？」という基本的なところから入らせていただこうかなと思います。土師器とは、古墳時代以降に作られた素焼きの土器のことをいいます。前の時代に弥生土器という土器ありますが、おおよそその系譜をひいて現れます。弥生土器は、地域色が非常に濃く、場所ごとに異なった形や文様の土器が作られています。

古墳時代に入ると、九州の南部と東北地方北部以北の地域を除く全国各地で、若干の違いがありますが、一様に同じような土器が作られるようになります。今回はこの地域色の部分が一つのカギになってきます。

土師器の性質について、もう少し詳しく見ていきたいと思います。色はおおよそ赤褐色、橙色、黄白色、白色などのものがあります。焼成方法は、窯などは用いずに、野焼き（覆い焼きなど）をします。焼成温度にすると約800℃から900℃程度になります。質感は比較的軟質で、柔らかくて割れやすいです。保水性の面においては、個体差がありますが、多孔質で目に見えない穴がたくさん開いているため、あまり優れていません。

古墳時代には土師器とは別に、須恵器という焼き物があります。須恵器は、灰色や青灰色の焼き物で、朝鮮半島から伝来した日本最初の硬質土器になります。土師器との違いは、まず、ろくろで成形をしています。焼き方は穴窯（半地下式の登り窯）、で焼成しています。窯ですので焼成温度は土師器に比べて高く、1000℃以上になるといわれています。そうなると、ここで決定的な違いが出てくるのですが、須恵器は還元炎焼成という焼成方法を用います。還元炎焼成とは窯にふたをして、窯の中を酸欠状態にする焼き方です。そうすることによって焼き物に含まれている鉄分が形質の変化を起こして、固く焼きしまりを起こします。そのため保水性は土師器に比べて高く保たれています。

両者を比べると、須恵器は窯や燃料が必要でそれなりにコストがかかる高価な焼き物になります。一方土師器は身近に焼くことができる焼き物になります。あと、土師器は、保水性には優れてはいないのですが、耐火性には優れています。火にかけても爆ぜにくいものになります。一方須恵器は、一度形質変化を起こしているので、もう一度火にかけると、更に形質変化を起こし爆ぜてしまいます。その点においては土師器の方が優れていることになります。そのため、火にかけるようなもの（甕や甑など）は基本的に土師器が使われ続けます。

このように両者の弱点を補い合うようにして、関東地方の古墳時代は、須恵器と土師器という２種類の焼き物が共存していた時代になります。

さて、ここからもう少しマニアックな話となってい

きますが、古墳時代の土師器の中でも、細かい時代ごとに型式の差があります。５世紀後半以降の古墳時代の土師器を鬼高式（おにたかしき）といいます。そのため、今回対象とする土器は鬼高式の土師器になります。

鬼高式の前段階の土器形式を和泉式（いずみしき）というのですが、和泉式から鬼高式に変わるにあたって、いくつかの大きな変化が起きています。

まず、調理形態に変化が起こります。具体的には、炉が消滅してカマドが導入されます。それによって炉で用いる台付甕（だいつきかめ）が減り、カマドにかける甕（かめ）や甑（こしき）が増加します。

次に、食膳形態は、床に置かれる高坏などの食器だけでなく、新たに手で持って食べる手持食器も土器の器種組成に加わっていきます。そのため、高坏の減少と、丸底坏の増加という現象が起こります。

もう一つの大きな変化は、須恵器の登場です。それによって、須恵器を模倣した土師器が作られるようになります。具体的にみていくと、須恵器の坏の蓋を真似て作った坏「模倣坏（もほうつき）」という坏などがあげられます。このような点が和泉式と鬼高式の違いになります。

今回のお話のメインテーマとなる内斜口縁坏もこのような変化の中で登場してきます。

２　内斜口縁坏とは

それでは、内斜口縁坏というのがどういったものなのかということについて、詳しくお話ししていきたいと思います。

まず、内斜口縁坏の形態的特徴ですが、口縁部が短く外反しています。短く外にはみ出すような形で、受口状の口縁部形態をしています。底部にはヘラケズリが施されていて、おおよそ丸底に成形されています。そのため地面に置くと座りが悪いです。そして、内面に斜行状のヘラミガキが施されています。上から見ると、細かい線が放射状に走っているように見えます。傾斜の方向は右のものと左のものがあります。これは利き手の問題かとは思うのですが、古墳時代にも一定の確率で右利きと左利きの人がいたのかもしれません。少し話が逸れましたが、以上がこの土器の特徴となります。今回は時間の都合上、詳細は省略しますが、大ぶりの深い埦（わん）のような個体と、小ぶりの個体という２規格の法量が存在しています。

坏の製作に用いられる土は非常に精緻なもので、成形や調整、焼きの状態、どれをとっても粗悪なものはほとんど見られません。このような土器が大量に作られているところをみると、まるで製造工場で、機械が反復作業のように淡々と製造していたかのようなイメージを抱かされます。少なくとも、ある程度管理された職人集団のような人々によってシステマティックに製作されることで、大量の坏が安定して生産できるようなシステムが成立していた可能性は十分に考えられるかと思います。

ちなみに、斜行状のヘラミガキというのは、内斜口縁坏に限らず、上毛野地域南部でつくられる坏形土器には多用される傾向があります。そのため、内斜口縁坏の特徴というよりも、この地域の坏形土器の特徴として、内側に放射状のヘラミガキ調整を施す行為があったと考えることもできるかと思います。

内斜口縁坏は古墳時代中期から後期の変換期にあたる約50年間の間、大量に作られ続けるわけですが、その短い時間軸のなかで、細かい変化を起こしていきます。

図３のように、鬼高式の土師器も時期ごとに変化を起こしていて、私はこれを３段階に区分しています。こういった図を作成するときは、内斜口縁坏単体だけで変化を追うのではなく、ほかに一緒に出てきた土器の変化も注目してみていきます。そうすることで変化の方向性などが間違っていないかクロスチェックすることができます。

それでは、具体的に土師器の変化を見ていきたいと思います。まず、甕ですが、時代が新しくなるにつれてだんだんと胴が長くなっていきます。甕の長胴化ですね。

次に高坏をみると、高坏の脚の部分が短く、低くなっていきます。さらに坏に脚をくっつけたようなタイプの高坏が新たに登場してきます。内斜口縁坏に足がくっついたような高坏も図中にあります。

次に坏をみると、バラエティが変化していきます。第Ⅰ段階では平底のものがあったりして、和泉式の前時代的な面影を残しているような印象を受けます。第Ⅱ段階以降になると、先ほど登場した坏蓋模倣坏が組成に混ざってきます。第Ⅲ段階になると、総量として模倣坏がかなり増えてきます。こういった形で、時期ごとに坏のバラエティに変化起こっていきます。

鬼高式の成立は坏形土器を大量消費する時代の幕開けでもあります。同じような形、同じような大きさ、同じような調整の施された土師器坏が大量に製作され、消費されていく時代になります。しかもそれは、それぞれの地域で独特の地域色をもって発展していく

ことになります。土師器坏の種類別分布でだいたいの文化圏が見えてきます。内斜口縁坏もこういった坏の一つになります。

それでは、内斜口縁坏がこの中でどのような変化をしていくのかについてみていきたいと思います。内斜口縁坏を個別にみていくと、第Ⅰ段階の内斜口縁坏は、器形が深い埦型や、若干四角張った箱型になっているものが多くあります。内面の斜行状のヘラミガキを見ると、底面までびっしり入っています。次に第Ⅲ段階のものをみると、器形が全体的に浅くなり、フォルムも半球形に近くなります。内面の斜行状のヘラミガキは、内面の上半にだけ施されるものが多くなります。

このように、たったの50年間ですが、土師器は様々な変化をしていることがわかるかと思います。かなりマニアックなので、みなさんからすれば、どの程度の変化として映っているのかは気になるところではありますが、「土師器は時期ごとに何となく変化しているんだな」と頭の片隅に入れて、これからの本編に入っていただければと思います。

お話の都合上、この変遷図の各段階にあえて命名をさせていただきます。第Ⅰ段階を「内斜口縁坏出現期」、第Ⅱ段階を「内斜口縁坏隆盛期」、第Ⅲ段階を「内斜口縁坏終焉期」としたいと思います。

これはまだ詳細なデータがないので確実には言えませんが、各段階の内斜口縁坏の分布の広がり方を見ると、出現期の内斜口縁坏は、高崎市の八幡台地周辺で比較的多く確認されているように思われます。平塚古墳、二子山古墳、観音塚古墳がある地域になります。引間豊岡遺跡や八幡中原遺跡では第Ⅰ段階に位置づけられるような内斜口縁坏が複数確認されています。また、八幡中原遺跡では、未焼成の高坏脚部が焼失住居からまとまって出土した事例があります。このことから、おそらく八幡中原遺跡を含む八幡の台地では土師器の生産が行われていて、内斜口縁坏のプロトタイプもあのあたりで生まれたものなのかもしれないなと朧気ながらに感じています。

第Ⅱ段階の隆盛期になると、榛名山東南麓全域に、内斜口縁坏が分布していきます。

第Ⅲ段階の終焉期には、その範囲は広がって、赤城の南麓や、北武蔵の児玉地域などにも広がっていきます。Ⅲ段階は終焉期だと言ってはいますが、内斜口縁坏の分布自体はなおも広がっていきます。しかし、それが突然パタッと消えるように作られなくなります。そういった意味で、内斜口縁坏という土器がなぜ現れ、なぜ消えたのか。そういったことについて、このあとお話しできればなと思っています。

3　内斜口縁坏が使われていたころの上毛野

ここまで内斜口縁坏について詳しくお話してきました。次に、古墳時代の上毛野の様子について少しお話していきたいと思います。

まず、内斜口縁坏が登場する前の段階、古墳時代前期の上毛野では、低湿地を中心とした開発が盛んに行われます。自然堤防と自然堤防の間に入り込んだ低湿地や、小河川沿いのジメッとしたところ、谷津や谷戸なんて地名が付くようなところですね。このような地域の水を用水路や堰で管理していくことで、土地の安定化を図り、小規模な水田経営を行っていきます。このような開発を成功に導くノウハウを持った人たちが遠く離れた東海地方から移住してきたといわれています。これによって確立された生産基盤をもとに、開発を指導したリーダーたちの大規模な古墳が造営されます。県内最大級の前方後方墳である元島名将軍塚古墳などもこの時期に造営されます。

５世紀中頃になると、それらの勢力が集約されて東毛地域と西毛地域にそれぞれ二大勢力が形成されます。西のリーダーが浅間山古墳（171m）で、東のリーダーが別所茶臼山（164m）となります。いずれも150m超えの前方後円墳で、低地開発によって確立された盤石な生産基盤のもとで両リーダーによる地域経営が行われます。

この構図が、次の段階に大きく変わります。その象徴となる現象が、東日本最大級の前方後円墳である太田天神山古墳（210m）の造営です。この超大規模古墳の造営という現象は、西毛や東毛といった　枠組みを超越した、広大な範囲を統治する首長の登場を如実に表した現象であると言えるでしょう。しかしながら、こののち太田天神山古墳に続くような超大規模古墳は当地に造営されません。このような統治構造は一代限り、一過性のものであったと思われます。

５世紀後半になると、西東で再び小地域の開発へ、経営形態の回帰が見られます。特に西毛地域では、100m前後の大型前方後円墳の高密度で造営されます。いくつか具体例を取り上げると、保渡田古墳群の井出二子山古墳（108m）や、上並榎稲荷山古墳（120m）、岩鼻古墳群の二子山古墳（115m）、八幡古墳群の平塚古墳（105m）などが挙げられます。

これらの古墳では共通した葬送形態として、刳貫型（くりぬきがた）の石棺である舟形石棺の使用がみられます。石材は観音山丘陵で切り出された凝灰岩が用いられ、西毛地域を中心に流通します。

このような熱狂的な造墓活動の背景には、水田開発の集約化による生産基盤のさらなる安定化が、大きく影響していると考えられます。自然堤防上の集落を再編成し、大規模な用水路の掘削を行います。水田は、畔で細かく区切られた小区画水田が採用されます。この小区画水田は、水の回りが早く、勾配に左右されにくいという利点を持っていて、これまで生産が不可能だったエリアを、可耕地へと変えていきます。具体的には高崎市の御布呂遺跡や高崎情報団地遺跡、前橋市の南部拠点地区遺跡群や朝倉工業団地遺跡群などで、大規模な水田遺構が確認されています。

そのほかにも、集落の周辺や、水田として開墾できない地域で畠作が行われます。

これらにより、榛名山東南麓地では生産性が大きく向上し、それを基盤とした造墓活動が行われることとなります。

用水路開発などの大規模かつ広域な範囲で行う土木工事は、複数に地域をまたぎますし、大量の労働力が必要となります。そのため複数の在地首長層たちが協力して事業を実施していたと思われます。このようなことから首長たちによる小地域経営と、それらの地域が協同して行う大規模な地域経営といった複雑な社会構造があったものと想定されます。

また、在地首長層の重要な役割の一つとして手工業の管理が挙げられます。このころ、大陸から須恵器や鉄器、馬匹生産などといった各種技術が、渡来人たちによって畿内にもたらされます。上毛野地域にも、畿内とのパイプを通じて、各種の新技術が比較的早い段階で導入されます。その先進地域の一つが渋川市のあたりになります。近年話題となった金井下新田遺跡なども、そのような位置づけの遺跡であると思われます。　ある意味では産業のハイテク地域であると言えるでしょう。

あの鎧を着た人骨も、手工業を掌握していた有力者層だったのかもしれません。

生産性の向上、産業の多様化、人口の増加という諸現象の中で、燃料となる薪炭材の確保や、各種資源確保などのための山岳開発もこのころから始まっていたのかもしれません。そのため、東吾妻町や中之条町、沼田市などといった、山間部の谷の中にも集落が点在していきます。

多様化されていく産業の中には、管理された職人によって工房で作られているといっても過言ではない土師器坏の生産も含まれていると言えるのではないでしょうか。

内斜口縁坏はこういった時代背景の中で成立していきます。

4　内斜口縁坏と上毛野地域社会

これまでは、内斜口縁坏が使われていたころの上毛野についていろいろとお話してきました。次は内斜口縁坏というものが上毛野の地域社会においてどういった意味を持っていたのかということについて、また一歩踏み込んでお話していきたいと思います。

図４は、自分が学部の卒業論文を執筆した際に作成した分布図を基に作成した図になります。データ自体は４、５年前のものになります。近年さらに出土例が増えているので、必ずしも正確なデータとは言えません。昨今話題となっている、金井東裏遺跡や金井下新田遺跡などでも内斜口縁坏が多数出土しているので、出土点数としてはここ何年かで大きく変わってきているかと思いますが、おおよそ分布の傾向としてはこの図で説明は可能かと思います。

出土遺跡の分布をみると、出土個体数や分布密度に差はありますが、群馬県全域から埼玉県北部にかけて分布しています。分布の濃い地域をみると、榛名山東南麓地域全域、とくに井野川中流域には分布が集中しています。あとは現在の渋川市のあたりにも出土遺跡が集中しています。

群馬県の北部、東吾妻町や中之条町のある吾妻川流域や、沼田市のある利根川上流域などでは、先ほどお話ししましたが、山岳資源の開発が進行していくことが要因になるかとは思うのですが、内斜口縁坏を使用する人々の集落がみられます。

榛名山東南麓地域と渋川地域は、内斜口縁坏の分布の中心域になります。内斜口縁坏が盛んに流通し、主体的に消費されていたのは、このエリアになります。

その他の地域は、散在的に内斜口縁坏が分布している地域で、中心域に比べると内斜口縁坏の出土数は少なくなります。さきほど紹介した群馬県北部の山間部、碓氷川、鏑川流域、赤城山南麓地域、埼玉県北部の児玉地域などがこれに該当します。これらの地域は内斜口縁坏の分布の外縁部となります。

あと、今回は分布図に記録できていないのですが、

埼玉県東部の加須市や宮代町でも、少数ではありますが出土例があります。

それでは、分布の中心域とその外縁における内斜口縁坏の意味について考えていきたいと思います。

まず、先ほどまでお話ししてきた上毛野地域社会の構造と、内斜口縁坏がどういった形で結びついてくるのかということについてお話していきます。在地首長層が造墓活動や水田開発、用水路掘削といった土木工事を行うには、かなり人手の必要になります。さらに、金属加工や馬匹生産といった手工業の管理、指導などにおいても、多くの職人が必要になります。在地首長層がそれぞれ事業を進めていく際に、ただただ人々に労働を強いていたわけではありません。労働の対価として人々にはそれなりの対価が支払われていたと考えています。

図７は、古墳時代の榛名山東南麓の社会構造を図式化したものになります。高崎市の若狭徹さんの上毛野地域社会のモデル図を基に作成したものになります。在地首長層と民衆の関係性などがそれぞれ表されています。水田開発、畠作、造墓活動、金属加工、馬匹生産、窯業、土器生産といった産業を管理していく中で、労働力として民衆の動員が必要になります。この当時は広範囲に水田地帯が広がる農耕が中心の社会で、付加価値的な産業として金属加工や馬匹生産といった諸産業が営まれています。そうなると、一年のサイクルは基本的に稲作を中心としたサイクルになります。稲作には農繁期と農閑期が存在します。そういったサイクルの中で農繁期は農業に勤しみ、農閑期や、農作業の合間を縫うように諸産業や、労働力を結集して造墓活動を行う。当然手工業を生業とする専業集団もいたでしょう。しかし、基本的には農業を営み、期間労働的に手工業を営むといった半分農民半分職人といった人々も一定数はいたのではないかとは思います。そういった意味では、農閑期の土木工事や手工業生産に対する対価としては、饗宴を通した富の分配っていうのには重要な意味があるかと思います。

このような中で、収穫された穀物、生産された手工業品、そういったものが集積され、再分配されていくという関係性が、在地首長層と民衆の間で構築されていきます。その富の分配構造の中に、装置の一つとして内斜口縁坏が位置づけられるのではないか私は考えています。

内斜口縁坏は饗宴を開く際の器として用いられます。饗宴において、内斜口縁坏という共通の器を用いることは、同じ集団としての意識の醸成につながり、共同体としての結束を強めていくことになったのではないでしょうか。

先ほど質問がありましたが、「宴の際に内斜口縁坏に何を入れていたのか？」ということなのですが、こればかりは推測の域でしかお話しできないのですが、一つはお酒なのではないかと私は考えています。その一つの理由となってくるのが、瓶（はそう）という須恵器の存在があります。ラッパ状に開いた壺形の須恵器で、胴体の真ん中には孔があいています。用途としては、その孔に筒を差し込んで、急須のように液体を注いでいたといわれています。そのような須恵器が、内斜口縁坏を含む土師器坏とともに出土しているケースが多く見受けられます。そういった意味では瓶を使って、内斜口縁坏にお酒を注いで、宴をやっていたと考えても面白いのかなと、自分は思っています。

これはまったくの想像ですが、その日の労働終わりに、みんなでお米を乾燥させた糒みたいなものをお湯で戻しておかゆみたいにして食べるといったような様子があっても面白いのかなと思います。このあたりは想像で楽しむ範疇の話ではありますが。

話が逸れてしまったので戻します。このように、内斜口縁坏を共有することで在地首長層と民衆、または民衆同士の結束が、器という共通項から繋がっていくということになります。そのような共同体意識というものが、榛名山東南麓の開発を成功へと導いたのではないでしょうか。

このような形の結束が各小地域内で醸成されていく。この小地域が上毛野地域内に複数存在していたと考えられます。これが100m級の前方後円墳が乱立していた小地域の単位になるのかなと思っています。

先ほど上毛野地域社会は複数の在地首長層たちによって小地域経営が行われている、連合政権のようなものという話をしましたが、それら小地域を経営していく有力者、在地首長たちが、お互いに連携していく。そのリーダー同士の仲間の証というのが、舟形石棺という共通した石棺形態の使用に現れてきます。

以上ことをまとめると、榛名山東南麓地域の社会構造は、在地首長層間で舟形石棺を共有し、在地首長層と民衆間では内斜口縁坏を共通する。こういった同じものを共有することを認め合う関係性によって、共同体意識というものを養っていたと考えられます。これが私の考える内斜口縁坏の意義となります。

これらの一連の開発は５世紀後半から６世紀初頭頃

に向かってピークを迎えていきます。山麓部分では地域経営の体制がおおよそ完成していたと思われます。しかし、榛名山東南麓地域に一つの悲劇が起こります。これが榛名山二ツ岳の噴火です。鎧を着た古墳人が犠牲になってしまった火砕流もこの時のものになります。

榛名山東南麓に広がっていた広大な水田地域は、大規模用水路や自然流路を通じて流れ込んできた泥流によって壊滅してしまいます。また、産業の中心地域だった渋川地域も、噴火直後の火砕流によって甚大な人的、物的被害を受けてしまいます。この大規模な火山災害が、先ほどお話ししてきた地域社会の構造に大きな影響を与えてしまったのは確かなことでしょう。

この災害に伴う社会構造の変化が、内斜口縁坏の消滅した一つの要因になったと考えられます。それ故に、内斜口縁坏は突然終焉を迎えてしまったわけです。

5　分布の外縁地域

ここまでは、内斜口縁坏の分布の中心域における意義についてお話ししてきましたが、次は分布の外縁地域と内斜口縁坏の関係について少し考えていきたいと思います。

榛名山東南麓と渋川地域を以外の外縁部にまで内斜口縁坏が広く流通しているのはなぜか。この疑問を考えていくうえで、詳細なデータを提示できれば、もう少し論拠に基づいた話ができたのですが、まだ資料が集めきれていないので、これについては今後の問題提起としてお話しさせていただければと思います。

外縁の地域は、図３の変遷図でいうところの、第Ⅱ段階と第Ⅲ段階、特に第Ⅲ段階に内斜口縁坏がかなり流通している印象を受けています。第Ⅰ段階にはあまりありません。これは榛名山東南麓の開発がピークに達する段階で、分布の中心域から外縁へ、内斜口縁坏の流通が拡大していったことを表していると思われます。こういった現象が起こる原因というのが何なのかということですが、現在のところ考える材料が、土器が動いているという事実しかありません。この現象にどのような意味を持たせていくのかということが、とても重要なわけですが、これはとても難しい問題です。たとえば、土器が外の地域との婚姻関係というものの中で動いていくのかもしれません。中心地域内に労働やなんらかの所用で入ってき人々の交流の証なのかもしれません。

どのような経緯で外縁部に内斜口縁坏が動いて行ったのか。これはそれぞれの地域ごとに、理由を個別検討していくべきだとは思います。しかし、外縁地域というのが、内斜口縁坏を主体的に使用している地域と、縁が深いのは確かなことなのではないでしょうか。そういった地域に、榛名山の噴火後、被災した人たちが避難先として頼っていくということもあったのかなと思います。そのような行動が、内斜口縁坏の移動を追うことで読み取れるかどうか、これは今後の課題でもあります。

6　まとめ

それでは、まとめに入っていきたいと思います。まず、内斜口縁坏は、特徴的な口縁部形態と、放射状のヘラミガキ調整が施された土師器の坏で、榛名山東南麓地域を中心に爆発的に普及していきます。

内斜口縁坏は、その洗練されたつくり方から、在地首長層のもとに管理された、職人集団によって生産されており、在地首長層のもとで集積、分配されていたものと思われます。そして、内斜口縁坏は、共同体運営の一つの手段として、饗宴の際に器として用いられ、在地首長層長と民衆が、共同体としての結束意識を養うための装置の一つとなっていたと考えられます。５世紀後半から６世紀初頭頃に、このようなシステムのもとで榛名山東南麓地域は大規模開発がおこなわれ、東国屈指の一大勢力ができます。

しかし、その後発生した榛名山の噴火に伴う一連の災害によって、この地域が壊滅的な打撃を受けてしまいます。これが一因となって内斜口縁坏が衰退していくこととなったと考えられます。

そして、内斜口縁坏の分布域の外縁には、何らかの理由によって内斜口縁坏が散在的に流通しており、噴火災害後に被災した人々が、外縁地域に移動していく流れがあると考えられ、内斜口縁坏というものが、分布の中心域と外縁地域との繋がりを示す一つの材料になる可能性が考えられます。

おわりに

最後になりますが、内斜口縁坏という坏型土器一つをとっても、かなりの情報が詰め込まれていることがわかるかと思います。

このように、土師器の坏というのは、当時の社会と密接に関わっている可能性があります。これらの研究を進め、解釈を与えていくことは、土師器がただの無機質な考古資料ではなく、人間模様や社会構造などの

大量な情報を持ったものに変えていくために必要な作業であると思います。

まだまだ未熟者ですが、これからも土師器の研究っていうのを続けていき、まさしく今回のタイトルにもある「謎」を、一つ一つ解き明かせるような研究をしていければ良いと考えております。

まとまりませんが、以上で私の話の方は終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【参考文献】

田中広明　1989 「上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産　―土器生産の転換と在地首長制―」『東国土器研究』２号　pp. 72～87　東国土器研究会

田中広明・福田　聖　1999 「遺物から見た「豪族居館」」『東国土器研究』５号　pp. 322～331　東国土器研究会

右島和夫　1990 「古墳からみた５、６世紀の上野地域」『古代文化』　42巻７号　pp. 25～40

若狭　徹　2002 「古墳時代の地域経営―上毛野クルマ地域の３～５世紀―」『考古学研究』49巻第２号　pp. 108～126　考古学研究会

群馬と埼玉に分布する坏形土器の謎

～上毛野地域の開発と内斜口縁坏～

埼玉県坂戸市教育委員会　山本　良太

はじめに

古墳時代後期（５世紀後半～６世紀初頭）、現在の群馬県にあたる地域（上毛野地域）を中心に「内斜口縁坏」と呼ばれる土師器の坏が登場する。内斜口縁坏は、５世紀後半に西毛地域を中心に爆発的に普及し、その分布は群馬県全域から埼玉県北部にまで及ぶ。しかし、６世紀初頭になると姿を消してしまう。今回の講座では、５０年足らずのうちに爆発的に普及し、姿を消してしまったこの土器が、地域社会の中でどのような意味を持っていたのかについて探ってみたい。

１　土師器とは

２　内斜口縁坏とは

３　内斜口縁坏が使われていたころの群馬

・西毛地域で大型古墳が高密度で造営される

舟形石棺を共有し、上毛野地域（西毛地域）での連合体の形成

・可耕域の拡大

水路、小区画水田の開発と畠作　→　安定した食糧生産体制の確保

・在地首長層による手工業の掌握・管理

馬匹生産、鉄器生産、土師器・須恵器生産

４　内斜口縁坏と上毛野地域社会

・榛名山東南麓地域の開発

→内斜口縁坏を利用した地域ネットワークの構築

・土木工事・造墓活動・手工業を行うことで、対価として饗宴を開く

→農閑期の生活保障

・饗宴では内斜口縁坏が使われる

→同じ器を使うことで共同体意識を養う

・上毛野地域連合

舟形石棺の共有　→　長と長の結束

内斜口縁坏の共有　→　民と長の結束、民と民の結束

・榛名山二ツ岳の噴火

→開発の中心地域が被災し、体制が崩壊する　（内斜口縁坏の消滅原因？）

→人口減少と復興事業

５　分布とその外縁

・榛名山東南麓地域の以外での内斜口縁坏

→榛名山東南麓地域の開発がピークに達する段階（Ⅱ～Ⅲ段階）の分布

・榛名山東南麓地域の人間と外縁地域の交流

旧利根川（広瀬川）の東側、赤城南麓、碓氷川流域、鏑川流域、北武蔵児玉地域

→婚姻などでの移動？

・榛名山二ツ岳の噴火後の動き

→被災地からの避難民の流入

まとめ

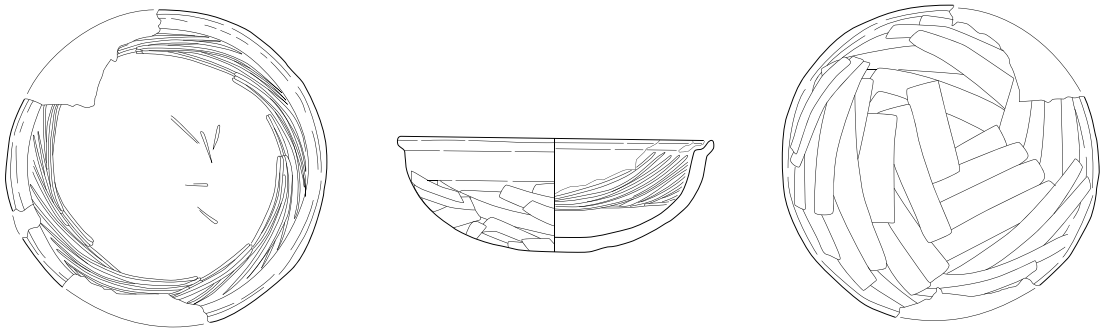
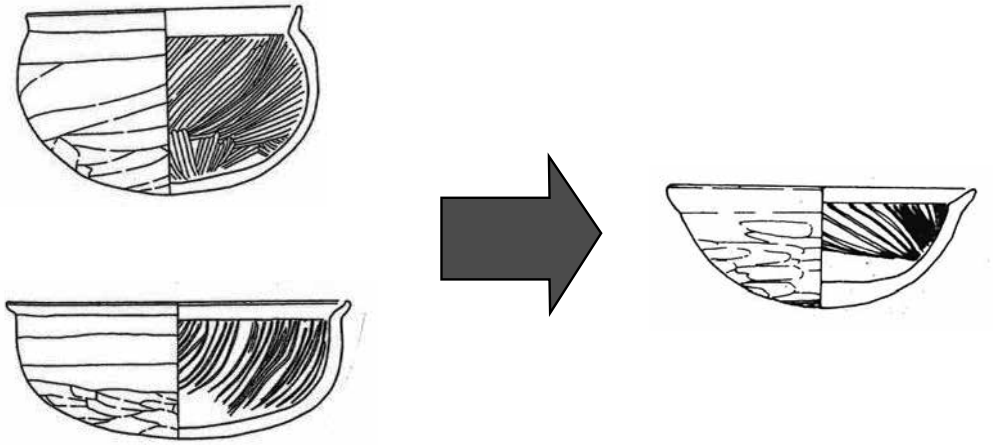


図１　内斜口縁坏

【特徴】
口縁部が短く外反
底部から体部にかけてのヘラケズリ
内面に斜行状のヘラミガキ



・深い埦型、やや箱型を呈する
・内面底部までびっしりと磨く

・浅い皿型、半球状を呈する
・内面の上半部を磨く

図２　内斜口縁坏の変遷

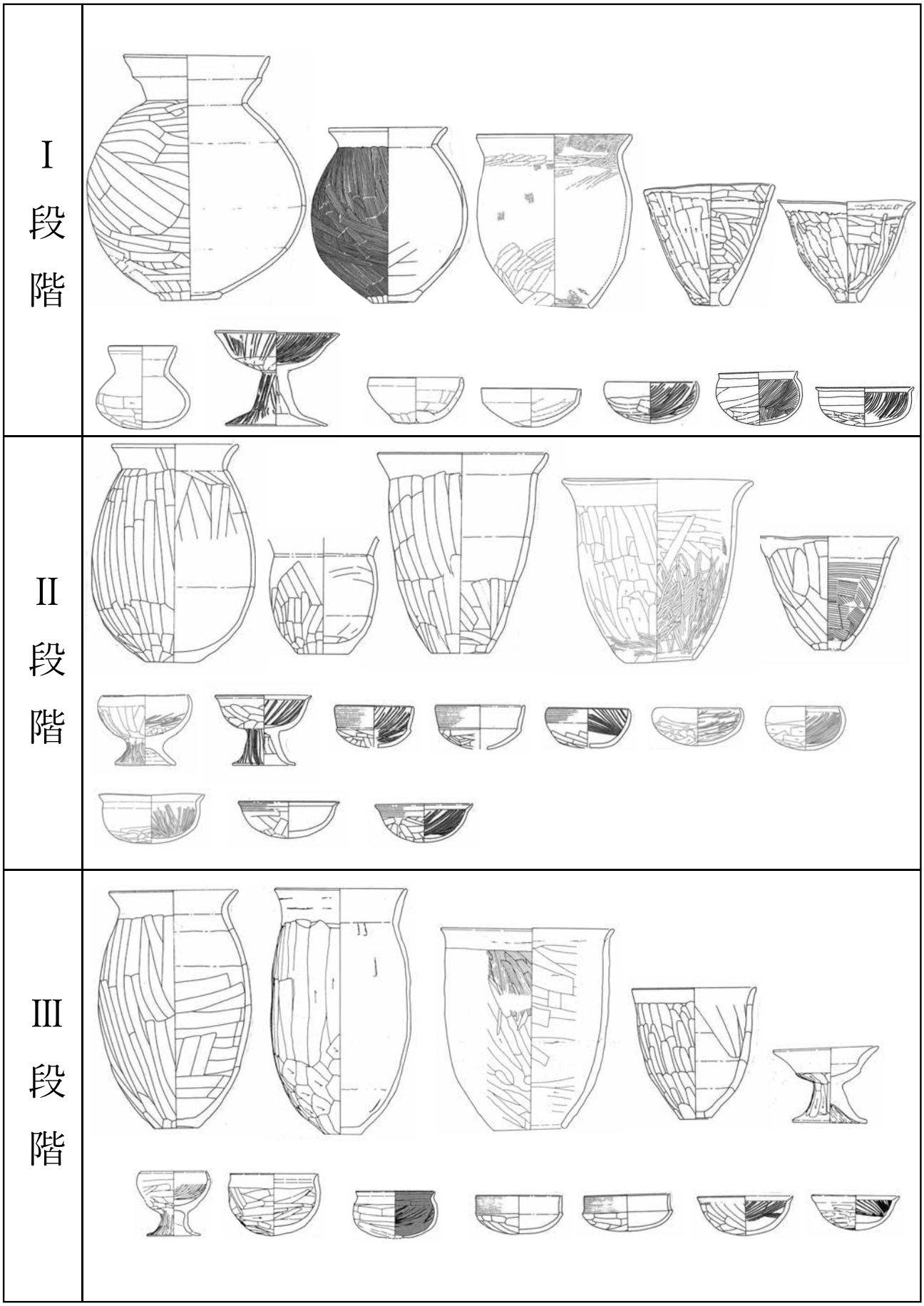


図３　土師器の変遷図

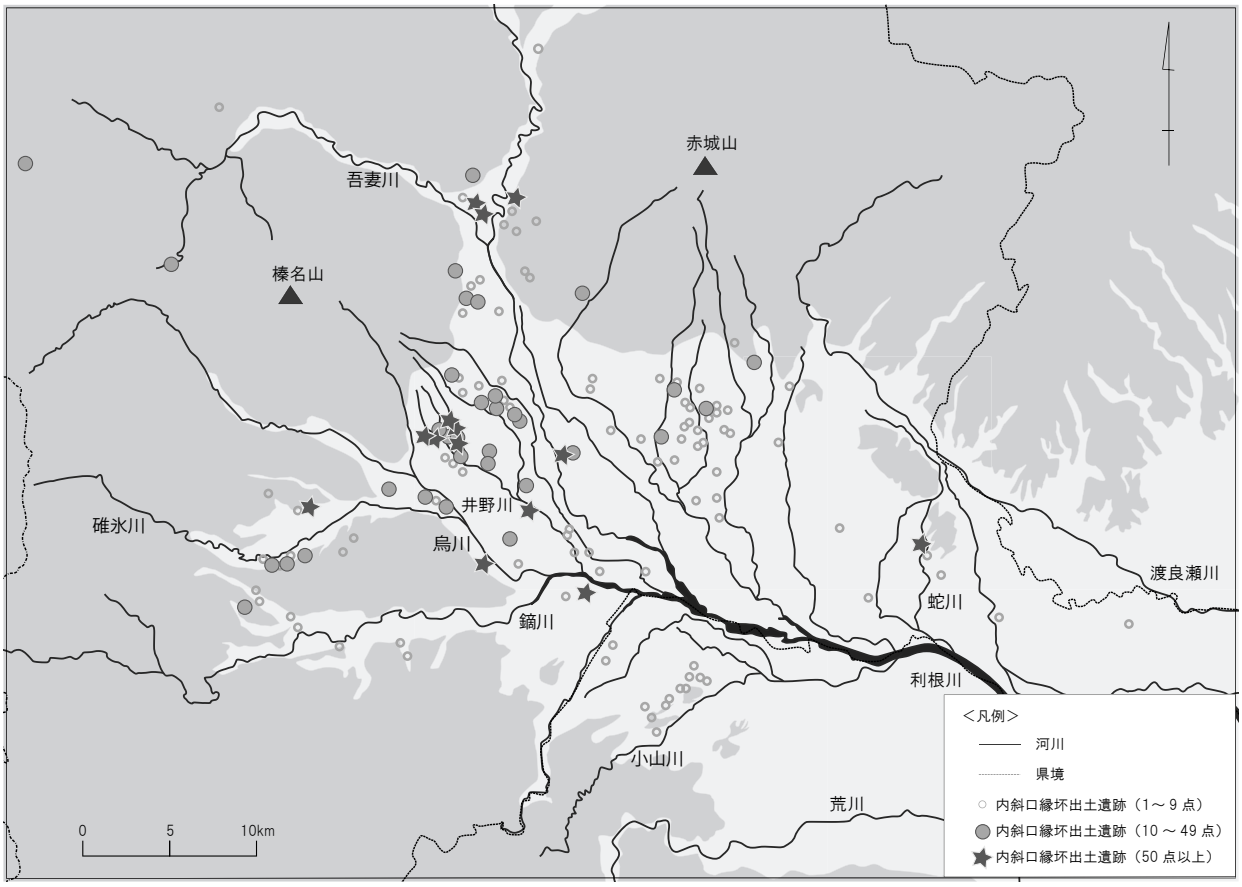
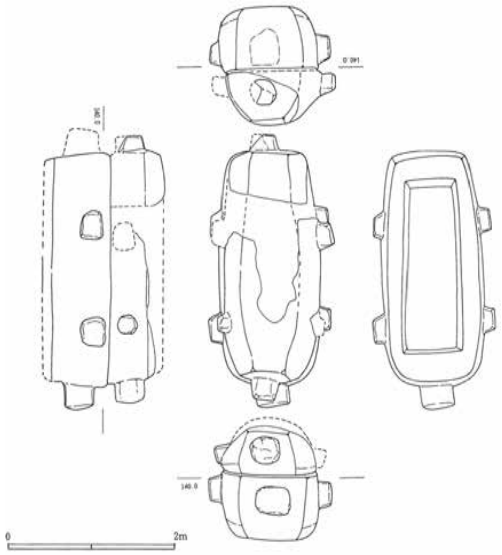


図４　内斜口縁坏の分布

赤堀村１６号墳



保渡田八幡塚古墳

図５　舟形石棺

a 遠見山古墳　bc 亀山古墳　d 保渡田古墳群　e 上並榎稲荷山　f 小鶴巻古墳
g 岩鼻不動山古墳・二子山古墳　h 若宮八幡北古墳　i 宗永寺裏東古墳
j 姥山古墳　k 平塚古墳

図６　榛名山東南麓の拡大図

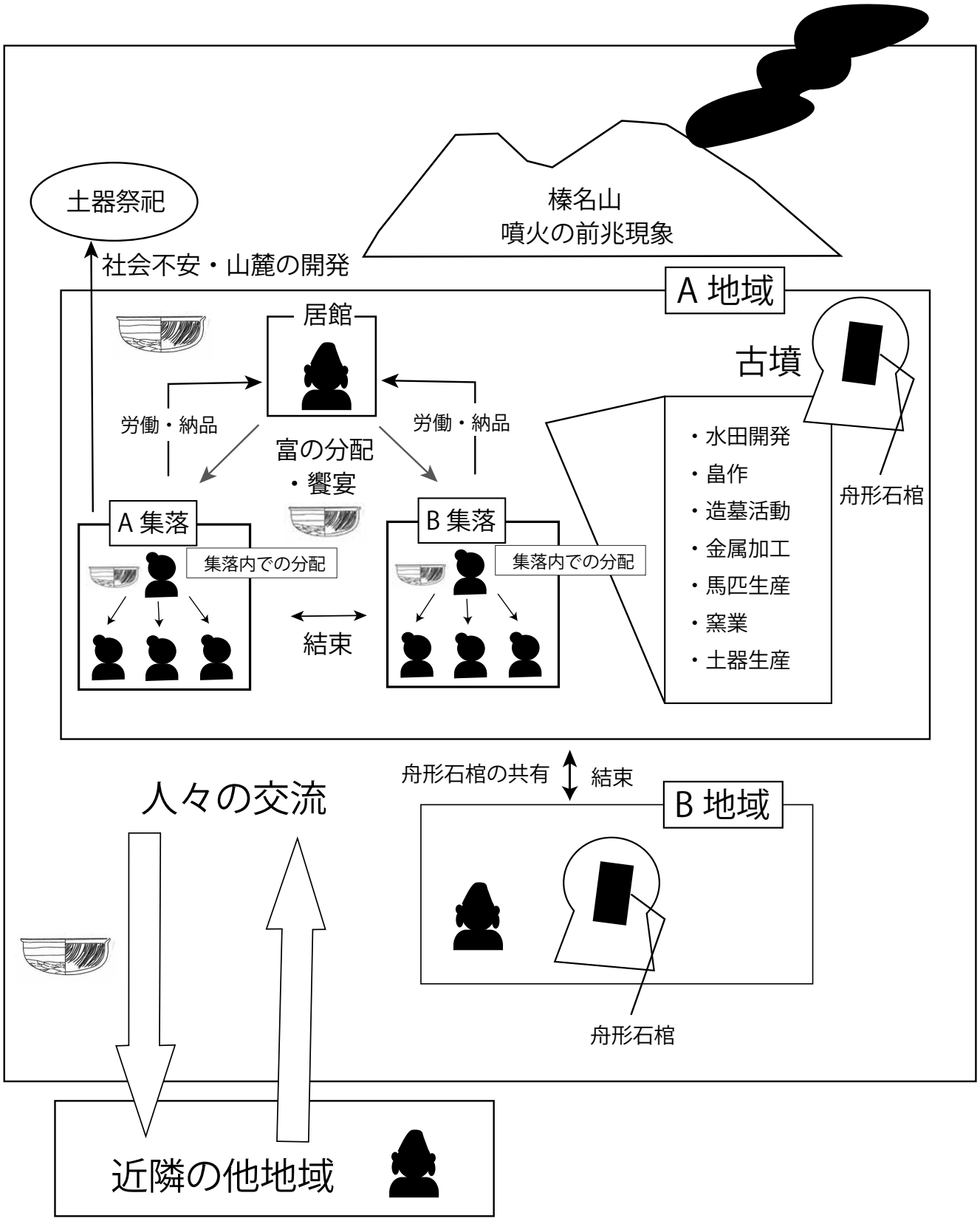


図７　５世紀後半～６世紀初頭の榛名山南東麓社会

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」第３回

総社二子山古墳の大刀をめぐって

徳　江　秀　夫（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）

今日お話しすること

皆さん、おはようございます。今ご紹介にあずかりました群馬県埋蔵文化財調査事業団の徳江秀夫です。今日は、皆さん、既によくご存じの総社二子山古墳から出土した頭椎大刀という飾り刀についてお話をしてみたいと思います。会場に、これからお話する大刀のレプリカを並べてもらいました。これは、前橋市教育委員会が作成して、総社歴史資料館に常設展示されているものです。後で良くご覧になっていただければと思います。

総社二子山古墳の概要について

大刀の話をする前に、総社二子山古墳に関する基本的な情報についてお話します。総社二子山古墳は、前橋市総社町、この総社歴史資料館の北の方、700m程にある６世紀後半に築造された前方後円墳です。総社古墳群の中には王山古墳や遠見山古墳などの前方後円墳が築造されていますが、総社二子山古墳は、総社古墳群の中で最後に築造された前方後円墳です。これに続く、総社愛宕山古墳や宝塔山古墳、蛇穴山古墳は方墳となります。

古墳の規模は、墳丘長約90mです。前方部を西側に向けています。墳丘には葺石が貼られていると考えられます。円筒埴輪の破片が採集できることから、埴輪も立て並べられていたと考えられています。

墳丘の周囲には、現在では屋並みが立てこんできて少し分かりづらくなってきましたが、周堀が廻っています。現地には、築造された当時の古墳の様子が、前橋市教育委員会により作成された案内板に復元されています。

この古墳の大きな特徴は、人を埋葬する施設である横穴式石室が通常の古墳と異なり、後円部の他に、前方部にも築造されていることです。

後円部の横穴式石室は、長さ9.4mの規模で、平面形は羽子板のような形をしています。現在、石室の様子を観察することはできませんが、これまでの研究成果を見ると、玄室の側壁・奥壁に６世紀中頃に榛名山が噴火した際に噴出した角閃石安山岩を加工した石材が採用されています。この角閃石安山岩を石室石材にした横穴式石室（これまでの研究で「角閃石安山岩削石積石室」と呼ばれている）は、高崎市の綿貫観音山古墳をはじめとした６世紀後半から７世紀初頭の古墳に採用されており、渋川市以南の群馬県内をはじめ、埼玉県春日部市にいたる旧利根川流域に分布しています。群馬県内にはこれまで129基程が築造されています。

総社二子山古墳の石室は、高崎市綿貫観音山古墳の石室と平面プランが共通した構造をしています。綿貫観音山古墳からは、これからお話しますが、総社二子山古墳から出土した頭椎大刀に極めて良く似た金・銀・金銅装の頭椎大刀が出土しています。

それから、総社二子山古墳の前方部には、輝石安山岩を石材とした長さ8.7mの横穴式石室が構築されています。前方部の石室は、後円部の石室からやや遅れて構築されものと考えられます。今日お話しする頭椎大刀はこの前方部の石室から江戸時代の1819（文政２）年に発掘されました。残念ながら実物は残存していません。この他に鈴釧、耳環、勾玉、鉄鏃、須恵器の脚台付長頸壺が出土しました。その一部は現在、東京国立博物館に収蔵されています。

ところで、総社二子山古墳の前方部の墳丘上には「豊城入彦命」と記された碑が立っています。これは、江戸時代にこの古墳が古代の豪族、上毛野君の始祖である豊城入彦命と係わりのある古墳と考えられていたからです。明治時代の初めには陵墓として墓を守る係員が置かれたこともありました。

総社二子山古墳出土の大刀の絵図について

先ほどもいいましたように、総社二子山古墳から出土した大刀は、現在、実物が残存していませんが、発見された時に写生され、絵図が作成されました。前橋市立図書館が1921（大正10）年にその絵図を模写した

ものが第１図の絵図です。この模写図にはこの図が作られるまでの履歴が記されています。1819（文政２）に発掘されたこと。1824（文政７）年に剣大明神の神号を受けたこと。そして、1921（大正10）年に模写されたことなどです。

刀の長さは、４尺６寸６分（約141㎝）と大きなものであったようです。この模写図には彩色がなされており、刀装具の材質が金、銀と注記されています。

ただ、この模写図では柄と刃の関係が反対に描かれているところが不思議なところです。絵図では完全な形をしていたように描かれていますが、実際には柄と刃が分離して、別々になっていたことも想像されるところです。この絵図をもとに復元された大刀が総社資料館で展示されているレプリカです。

この総社二子山古墳から出土した大刀ですが、綿貫観音山古墳から出土した頭椎大刀に良く似ているというより、瓜二つであることは考古学関係者の中では良く知られているところです。絵図と綿貫観音山古墳の大刀の写真と比較していただくと一目瞭然ですが、形だけでなく、装飾表現、装具の金属板の材料についても共通していることがわかります。全国の出土例を探索してみても、このような形をした大刀はこの二つだけです。古墳時代、どこかの刀作りの工房で、同じ職人集団によって製作されたものと想像されます。そして、改めて模写図の表現の細密さに気付かされます。

綿貫観音山古墳出土の頭椎大刀について

次に、綿貫観音山古墳の大刀について説明します。第２図を見てください。この大刀は、頭椎大刀の一種と考えられますが、円頭大刀と認識されたり、花冠大刀と呼ばれたりしたこともありました。

現在、この刀は柄頭、柄から刀身切先、鞘尻金具の３つに分かれています。全長は、117㎝です。鞘は鞘木がほとんど残存していませんが、鞘口金具、鞘間金具が残存しています。

鞘口金具、鞘間金具、鞘尻金具はいずれも銀の板を筒状にしたものです。隣には銅の板に金の薄板を張った責金具が接して残存していました。

鐔は小型で、江戸時代の刀のような板状をしたものではありません。断面の形は蒲鉾形で、木芯に銀の板を張ったものです。

帯に下げるための金具はありません。鞘間金具の裏側に開けられた切り込みに紐を通していたと考えられます。鞘尻金具には刀が地面に接した時に傷付かないように蟹目釘と呼ばれるスパイクが打ちこまれていたと考えられます。

次に柄頭の作り方を見ていきたいと思います。柄頭は拳のような形をしています。これが、頭椎大刀の特徴です。綿貫観音山古墳大刀の柄頭は７つの部品から構成されています。総社二子山古墳の大刀も同様の構造をしています。第３図の１は、金の薄い膜のような部品です。これに２の銀板を重ねて、１を押さえています。次に４が先になるのでしょう。これに３の部品を重ねます。３は、王冠のような形をした銀の板です。尖ったところを銀の釘で留めています。４は、銅の地板に薄い金の板を張ったものです。これを柄頭の先端にぐるりと回しています。５は紐を通す孔の部分の金具です。これも釘で留めています。そして、柄との間には６の金色のリング状の責金具があります。

柄頭の芯は残存していませんが、釘で金具を留めていることから、木芯であったと考えられます。

柄には１㎝に15・16の刻みをつけた銀の糸が２㎝の幅の中に10本巻かれています。鐔には斜め方向に刻み状の文様が付けられ、その両脇には６と同じ責金具と呼ばれるリングが付いています。

以上のように、綿貫観音山古墳の大刀には多くの金や銀を素材とした装飾が施されていることが分かって頂けたでしょうか。そして、さらにそれぞれの部品の細部を観察すると、波の文様や、斜め方向の刻み目、小さな四角・丸の列が見られます。これらは、「木彫銀張り技法」、「双直線刻み目文」、「双連珠魚々子文（そうれんじゅ なな こもん）」などという技法を用いて付けられた文様です。総社二子山古墳の大刀の絵図にもこの文様がきちんと描かれています。

それぞれの技法について見て見ますと、「木彫銀張り技法」というのは、古墳時代、５世紀の木装や鹿角装の大刀に用いられた技法です。木に文様を彫刻し、金銀の薄板を押しつけて文様を浮き出させる技法です。倭系の伝統的な日本の大刀に施された技法です。

「双直線刻み目文」は、朝鮮半島の刀装具に見られた手法です。凸の直線を三本作り、その真ん中の一本を刀で刻んで、四角が列をなしているように表現しています。大阪府峯ヶ塚古墳出土刀の木製柄頭に見られる技法です。

「双連珠魚々子文」は、綿貫観音山古墳の頭椎大刀の責金具では幅８㎜の金具の真ん中にタガネで打ち込んだ円文の連続、その両側にはおはぎのような小さな膨らみが続いています。この技法は朝鮮半島系の大刀

に見られる技法です。

総社二子山古墳出土大刀の位置づけ

日本の大刀の変化について第４図で簡単に説明します。

古墳時代の最初の頃の大刀には素環頭大刀という種類の刀、柄の先端に丸い環のついた刀が中国や朝鮮半島経由で日本に輸入されていました。

古墳時代の中頃になると朝鮮半島から装飾の施された環頭大刀が輸入されるようになります。舶載品とこれを忠実にコピーしたものが見られます。そして、日本国内では楔形柄頭大刀、捩り環頭（捩じり環付）大刀と呼ばれる倭系の大刀が製作されるようになります。

次の古墳時代後期になると、後でスライドを見ていただきますが、半島系の環頭大刀の他に、円頭大刀や圭頭大刀、頭椎大刀といった柄頭を銀や金銅板を素材として作られた、第４図では袋状大刀と記されている種類の大刀が製作されるようになります。

以上のように、古墳時代の大刀の流れには半島系大刀（朝鮮半島に直接祖形を求めることができる龍や鳳凰をモチーフにした環頭大刀）と倭系大刀（国内で製作されてきた楔形柄頭大刀、捩り環頭大刀など）、両者の要素を合わせもった折衷的な一群の大刀があります。

総社二子山古墳出土大刀は折衷的な大刀の仲間に含めることができます。次に、総社二子山古墳や綿貫観音山古墳から出土した刀と類似した大刀について紹介して行きたいと思います。これらの大刀は、半島系大刀と倭系大刀の両者の要素を合わせもった一群の大刀です。装飾に金・銀と言った素材が多く用いられています。金銅の使用はまだ少ない段階です。先ほど説明した木彫銀張り技法や双直線刻み目文、双連珠魚々子文等が用いられています。

第５図と第６図を見てください。柄頭にはいろいろな形状があります。第５図１は栃木県の別処山古墳から出土した大刀です。柄頭は匙、スプーンの形をしています。銀製で、中に鈴が入れられています。第５図３は綿貫観音山古墳の大刀です。第６図１は奈良県藤ノ木古墳から出土した大刀です。柄頭は先端の平面形が倒卵形で、研究者の中では楕円形柄頭大刀と呼ばれているものです。第６図３は島根県の上塩冶築山古墳（かみえんやつきやまこふん）出土の大刀です。柄頭は長い円頭形をしています。

柄は、環頭大刀とは異なり、いずれも刃側が内側に湾曲しています。柄の間に銀線が巻かれているのは総社二子山古墳大刀と同じです。第６図１の藤ノ木古墳大刀の柄には銀板を真似た銀板が巻かれていました。鐔は小さく、別処山古墳や綿貫観音山古墳、藤ノ木古墳出土大刀は、断面が蒲鉾形をした木芯に金属板を被せたものが装着されています。第６図２の鳥土塚古墳例や第６図３の上塩冶築山古墳のように板状の鐔が装着されたものも見られます。第５図２の千葉県城山１号墳では二つの形の鐔が付いています。

今回紹介した折衷的な大刀は、奈良県の古墳の他に関東地方や島根県の地域有力者の持ち物になっていることは大和政権と地方の関係を考える上で面白い資料であると研究者の間では指摘されています。

以上のように、半島系と倭系の大刀の折衷的な大刀は、装飾付大刀が大々的に国産化され、多数作られる前の段階のものです。総社二子山古墳の大刀は装飾付大刀のレジェンド的な存在ということができます。

装飾付大刀とは

これまで紹介した大刀がそうですが、古墳時代の大刀の中で、装飾性を強調した大刀、柄の先から鞘の先まで全てが金属の板で飾られた大刀を古墳研究者の中では、装飾付大刀や装飾大刀、飾り大刀と呼んでいます。

装飾付大刀は、実用というより生前にこの大刀を所持していた人の地位や権威を見た目で誇示する効果を持っていたと考えられています。

また、装飾付大刀は、大和政権で一元的に製作されたもの、大和政権が朝鮮半島から入手したものが、地方の豪族・有力者に分与されたものと考えられています。最近の研究では、舶載品については、地方豪族が直接入手する機会もあったのではないかと検討が始められています。いずれにしても、装飾付大刀は、大和政権と地方の豪族、有力者との関係を考える上で重要な考古資料とされています。

次に古墳時代後期の副葬品の組み合わせの中における装飾付大刀について見て見ましょう。古墳の副葬品は各時期によりその組み合わせ、珍重された品物が変化しています。

前期古墳の副葬品には銅鏡、石製腕飾類、玉類、武器（大刀・鉄剣・鉾・槍・銅鏃・鉄鏃）、農工具などが見られます。そして、前期古墳の副葬品の代表は、三角縁神獣鏡などの銅鏡や、群馬県の古墳からはあまり出土しませんが、碧玉製の腕飾り等です。

次の古墳時代中期になると武器・武具（鉄製甲冑・

刀剣)、冠・帯金具・飾履などの金銅製装身具・馬具、石製模造品の副葬が目立つようになります。ただし、この時期の金銅製品の数は、他の副葬品と比較しても極端な差が見られません。

そして、古墳時代後期になると、装身具（ガラスや石製だけでなく空玉のような金属製品も含まれる)、金銅製・鉄製の大刀・馬具、須恵器、銅製容器等が認められる。特に、金銅や鉄地金銅張などの素材が多く用いられ、金銅製の大刀や馬具が主役となります。キラキラ光り輝き、装飾性の強いもの、支配者の地位や権威を視覚的に誇示することに最大の意味を有するものが多くなります。

後期古墳の副葬品の様子は、綿貫観音山古墳や高崎市の八幡観音塚古墳の副葬品から知ることができます。総社二子山古墳も６世紀後半の古墳ですので、同様の内容の副葬品が納められていたことと思われます。今日は、綿貫観音山古墳の副葬品についてスライドで見ていただきたいと思います。

綿貫観音山古墳の副葬品の中には、前期古墳以来の伝統的な副葬品としての銅鏡、中期古墳で重要視された甲冑や鉄鏃、鉄矛などの武器・武具が含まれていました。大刀は伝統的な作り方を継承した捩り環頭大刀、新しい技法を取り入れた頭椎大刀、朝鮮半島系の系譜を引く三累環頭大刀の３種が副葬されていました。また、突起のある鉄冑や金銅製の太帯、銅製水瓶などは日本国内ではほとんど出土例のない稀少品です。

ところで群馬県内の古墳からは多種・多様、多くの装飾付大刀が出土しています。

群馬県地域は、全国的にみても、関東地方の中でみても装飾付大刀の出土数が他に突出して多い地域です。現在までに140の装飾付大刀が発見されています。

第８図の地図は、総社二子山古墳と同じ時期の古墳から出土した装飾付大刀の位置を示したものです。平野部の高崎市や藤岡市、玉村町あたりに多く見られます。これをみると大和王権、中央の有力豪族と群馬の地方豪族や有力者との連携がいかに深かったかがわかります。

装飾付大刀にはいろいろな種類があります。特に柄頭の形に特徴が見られます。スライドで群馬県を代表する装飾付大刀を見ていきたいと思います。

藤岡市平井地区１号古墳からは、単鳳（丸い環の中に一羽の鳳凰、鳥のモチーフ）環頭大刀が出土しています。柄頭から鞘の先まで全て金メッキ、金銅の板で飾られた大刀です。金の刀の代表です。また、同じ平井地区１号古墳からは、鉄地の柄頭に銀線を埋め込んで文様が描かれている大刀、銀象嵌円頭大刀が出土しています。こちらは銀の刀の代表です。

前橋市富士見町の初室古墳（しょむろこふん）から見つかった頭椎大刀の柄頭は、卵のようにつるんとしています。金メッキが施されています。藤岡市皇子塚古墳から出土した環頭大刀は、丸い環の中にキバをむく龍のモチーフが表現されています。前橋市横沢町から出土した獅嚙環頭（しがみかんとう）大刀は、獅子とも龍の顔を正面から見たものとも言われているモチーフが表現されています。最後は、高崎市榛名町奥原古墳群から発見された圭頭大刀です。柄頭が五角形をしています。

総社二子山古墳と同じ頭椎大刀は群馬県内から30例の出土が知られています。藤岡市旧美九里村の古墳から出土した大刀は、長さが135㎝の大型のものです。現在は、奈良県の橿原神宮に収められています。総社二子山古墳の大刀より新しい時期につくられたこの頭椎大刀は、全体が金銅製の金属板の素材で装飾されています。

総社二子山古墳出土大刀と古墳時代の群馬

群馬県内の有力古墳の造られた時期と地域を整理し、その変遷について見てみると、県内のそれぞれの地域、例えば旧の群馬郡域の井野川流域、旧勢多郡域の赤城山南麓と、時期ごとに様子を異にして前方後円墳をはじめとした主要古墳が造られていることが分かります。

総社古墳群では総社二子山古墳の前に遠見山古墳や王山古墳などの前方後円墳が造られています。５世紀後半以降、この周辺地域が急速に充実してきたことがわかります。

第７図は、総社二子山古墳が造られた頃、群馬県内の６世紀後半の主要前方後円墳の造られた場所を示したものです。前橋市内では１が総社二子山古墳、２が桂萱大塚古墳、３が天川二子山古墳、４が大室古墳群の後二子古墳です。いずれも最大で100m、少し小さいもので70m、この下に50mクラスの前方後円墳もあります。その様子はその後の律令期の郡域を二分三分するような範囲に一基といった状況といえます。それぞれの地域の有力者が、農耕を主体とした経済基盤を背景に前方後円墳の築造を実現させたものと考えられます。総社二子山古墳の被葬者も、そういった有力者の一人にすぎなかったと考えられます。

総社二子山古墳は、後円部に築造された横穴式石室

の石材に角閃安山岩を使用されていること。瓜二つの頭椎大刀が出土していることから見て、綿貫観音山古墳とほぼ同時期に築造されたものと考えられます。そして、両古墳の被葬者は、上毛野地域の多くの地方豪族・有力者の中で特に強い結びつきを有していたものと想像されます。

ただ異なることは、綿貫観音山古墳の周辺には７世紀の有力古墳が見られないのに対し、総社二子山古墳の方は７世紀になり、群馬県内では最上位に位置づけられる総社愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳という大型方墳３基が継続して築造されるということです。７世紀になり、総社地域の豪族は勢力を著しく伸長し、この地域は、上毛野地域で最も充実した地域になります。この背景には総社地域の豪族と大和政権やこれを構成した中央豪族との関係が大きく変化したことが原因しているものと考えられます。

今日お話したこと

今日は、総社古墳群の主要古墳の一つである総社二子山古墳から出土した頭椎大刀を模写した絵図をめぐって古墳時代の装飾付大刀についてお話をしました。

総社二子山古墳出土大刀は、綿貫観音山古墳から出土した頭椎大刀と同じ特徴を持っています。国内の刀作りの変遷を検討すると、この二つの大刀は、伝統的な倭系の刀作りの技術に、半島系の刀作りの技術が取り入れられたものであることがわかります。そして、「木彫銀張り技法」、「双直線刻み目文」、「双連珠魚々子文」などという技法等、古墳時代の刀作りには私たちが考えている以上に緻密で高度な技術が取り入れられていたこともわかっていただけたと思います。

装飾付大刀は、実用というより、生前にこの刀を持っていた人の支配者としての権威や地位を見た目で誇示する効果を持っていたと考えられています。総社二子山古墳に葬られた豪族は、大和政権や群馬県内の豪族、有力者と密接な関係を保持する中でこのクラシカルな頭椎大刀を入手したものと考えられます。

総社二子山古墳は、最初にも話ましたとおり、６世紀後半に造られた総社古墳群中で最後の前方後円墳です。その後、総社古墳群では７世紀に県内の最上位に位置づけられる方墳が３基継続して築造されました。なぜ、総社古墳群がそのような急成長を遂げたのかはここでは上手くお話することができません。今後の検討課題としたいと思います。

以上で総社二子山古墳出土の大刀に関するお話を終わりにさせていただきます。

【挿図の引用文献】

第１図　前橋市教育委員会『東国の雄総社古墳群』第２刷　2017　ｐ６・７　より

第２図　群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳石室・遺物編』1999　ｐ52・53より

第３図　群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳石室・遺物編』1999　ｐ50より

第４図　津野仁・内山敏行「武器・武具・馬具」『モノと技術の古代史　金属編』　吉川弘文館　2017　ｐ58より

第５図　橋本英将「「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研究』Vol７古代武器研究会　2006　ｐ52より

第６図　橋本英将「「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研究』Vol７古代武器研究会　2006　ｐ53より

第７図　群馬県史編さん委員会『群馬県史　通史編１』1990　ｐ835より

第８図　徳江秀夫「上野地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県古代文化センター　2005　ｐ31より

【参考文献】

群馬県史編さん委員会『群馬県史　通史編１』1990

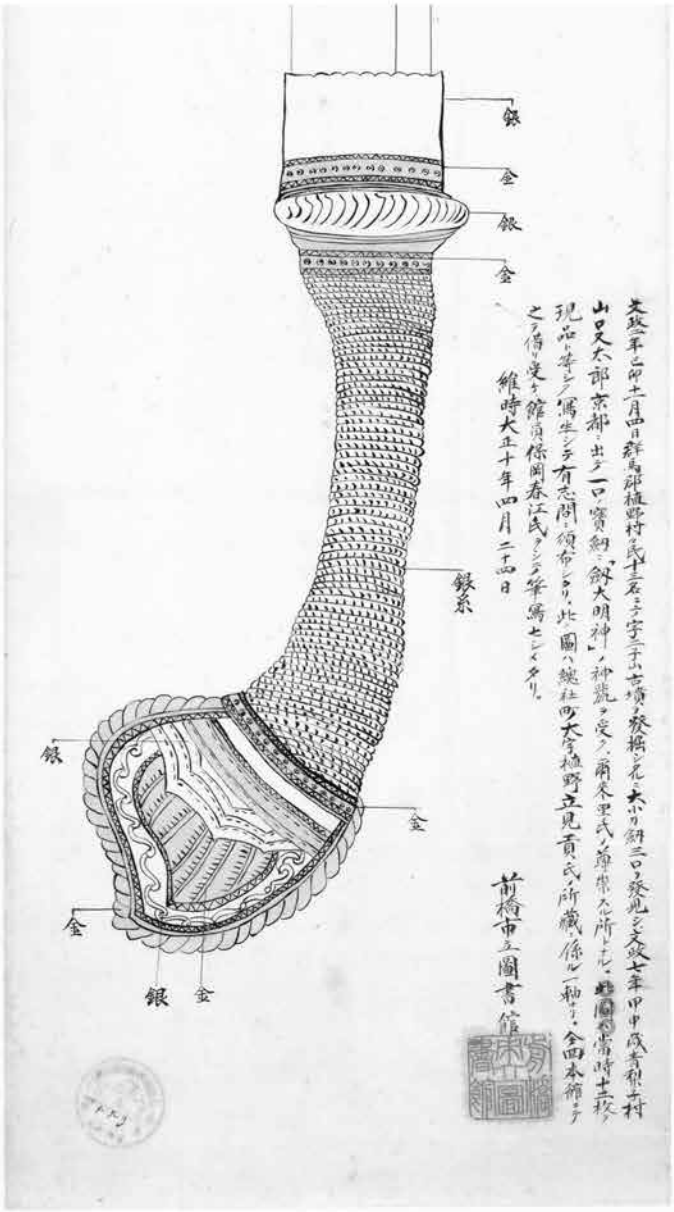
田澤金吾「上野国総社二子山古墳調査」『近畿地方古墳墓の調査２　上野国総社二子山古墳調査』日本古文化研究所　1937

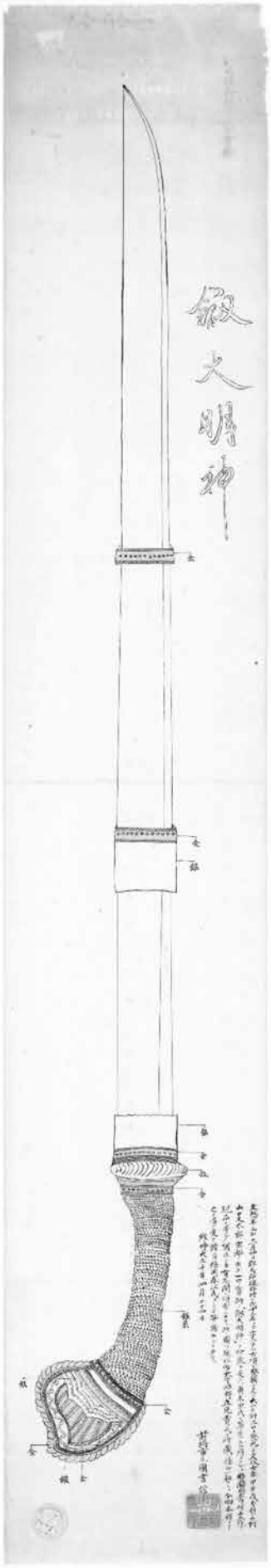
八木奘三郎「日本古剣考」『東京人類学会雑誌』第152号　1898

右島和夫「総社古墳群の研究」『東国古墳時代の研究』1994

東京国立博物館『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅲ）』1983

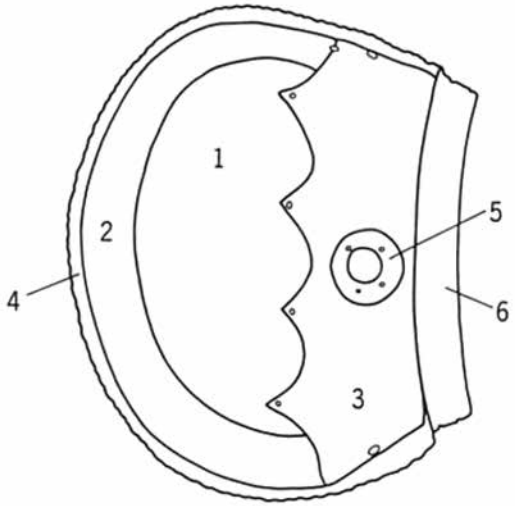
勝部明生・鈴木勉『古代の技－藤ノ木古墳の馬具は語る-』1998





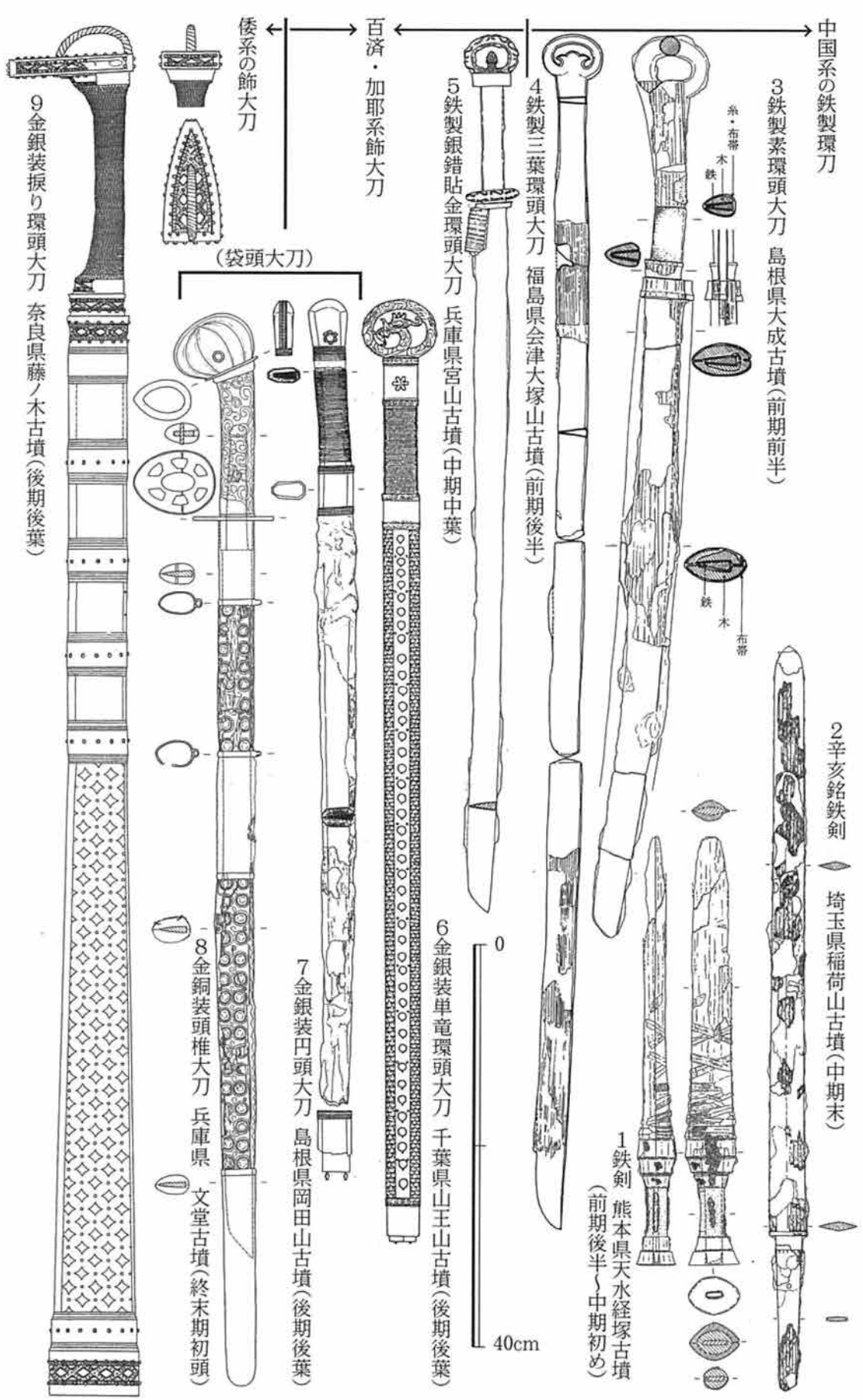
第１図　総社二子山古墳出土大刀の絵図

第２図　綿貫観音山古墳出土頭椎大刀

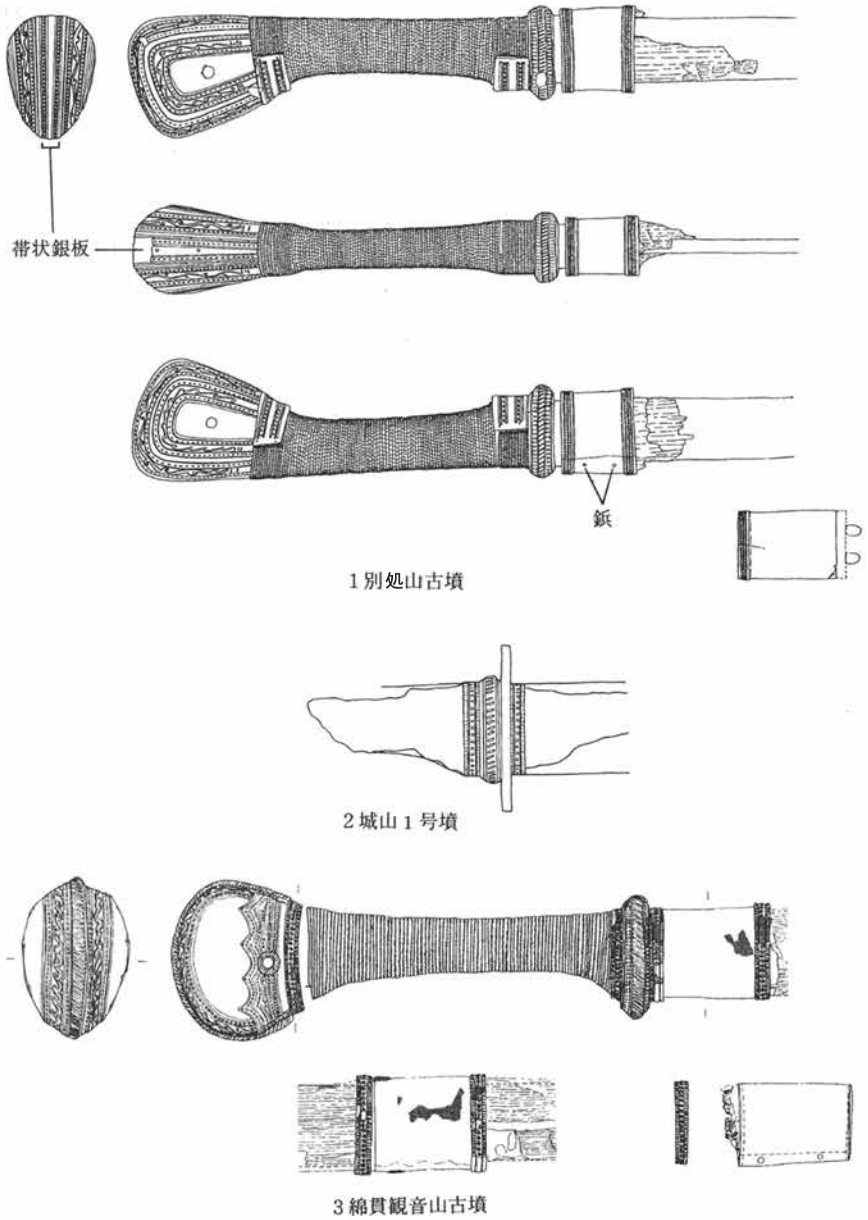


1　金板あるいは金張り板
2　銀板
3　王冠状の銀板
4　青銅地金張りの板
5　リング状の薄板
6　青銅あるいは銅地金張りの縁金具

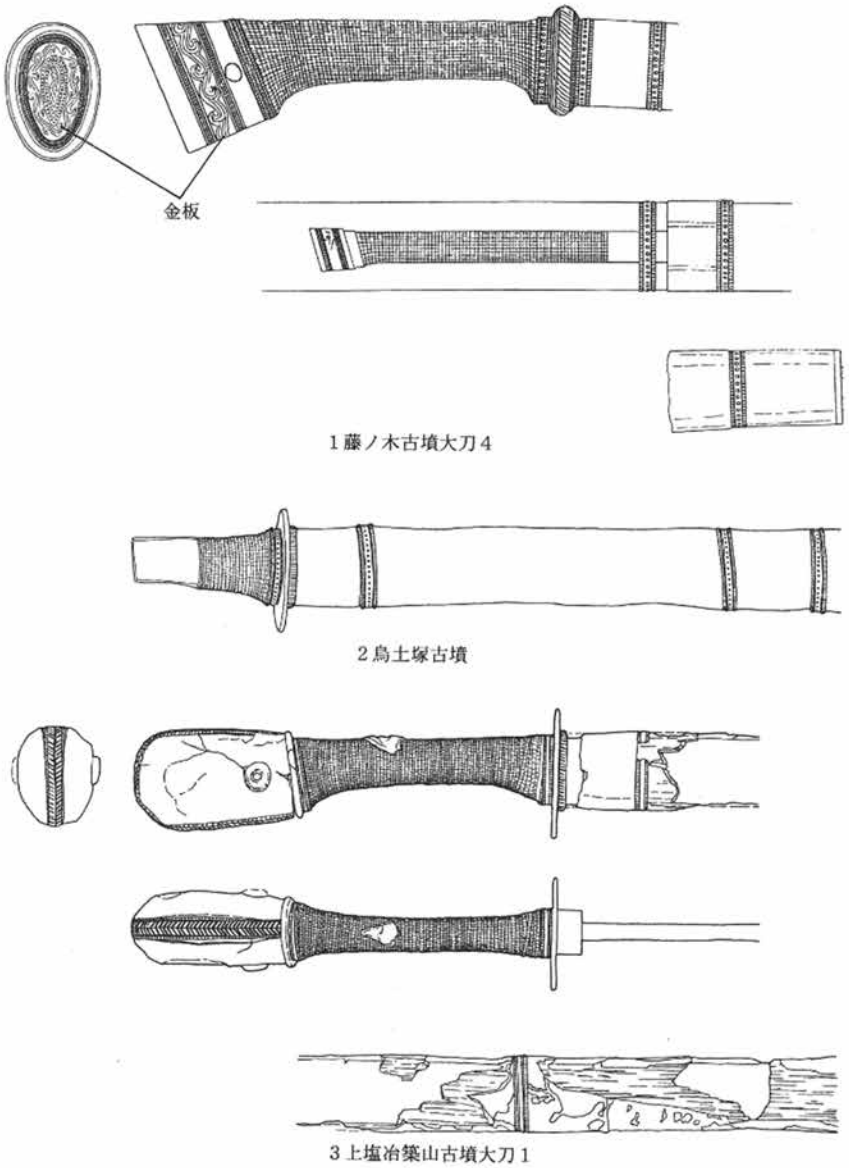
第３図　柄頭部分の部品模式図



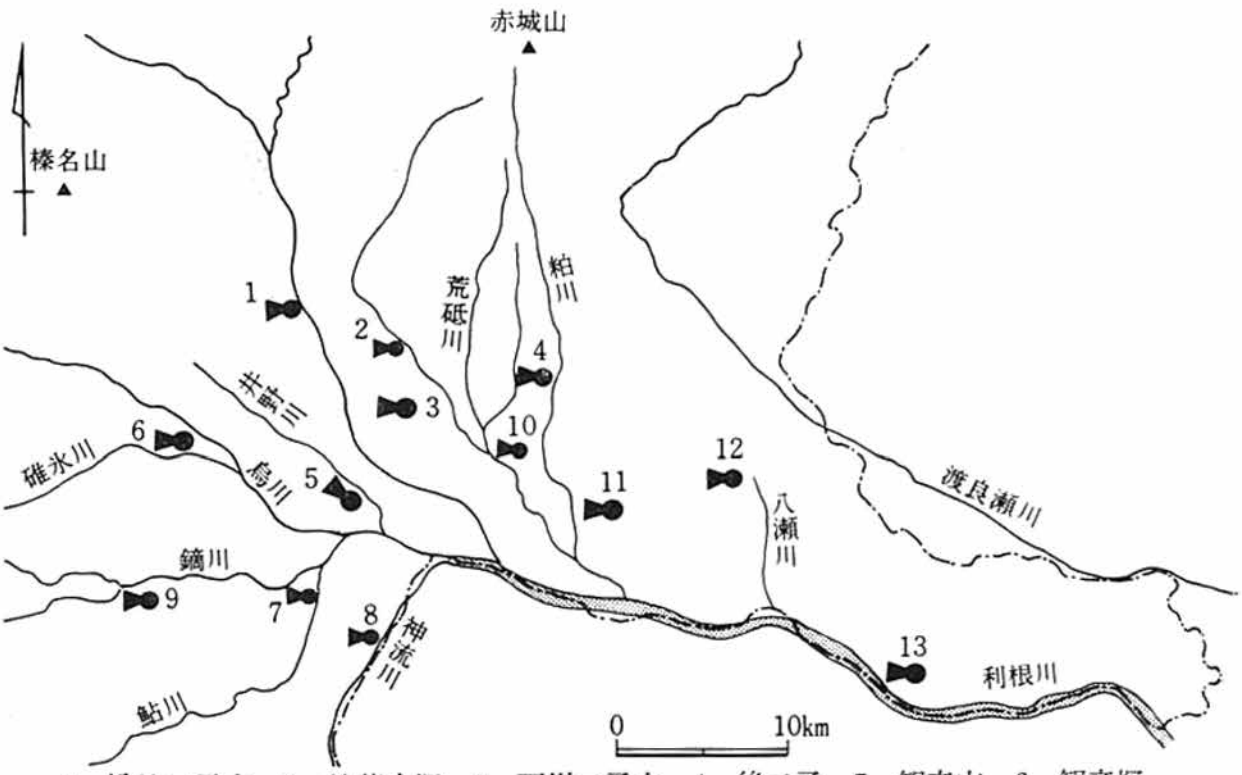
第４図　古墳時代の鉄剣・鉄刀・装飾付大刀



第５図　総社二子山古墳出土大刀を考える上で参考になる大刀（１）

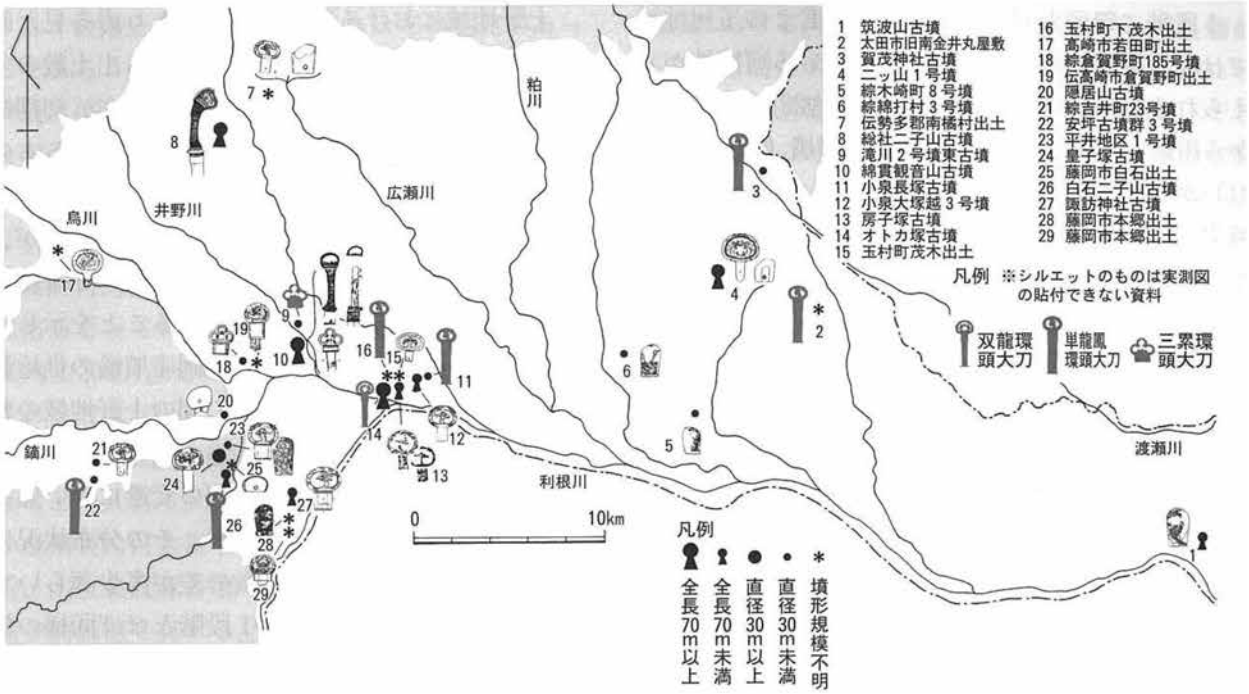


第６図　総社二子山古墳出土大刀を考える上で参考になる大刀（２）



1　総社二子山、2　桂萱大塚、3　天川二子山、4　後二子、5　観音山、6　観音塚、7　諏訪神社、8　白石二子山、9　笹森稲荷、10　安堀、11　上淵名雙兒、12　二ッ山１号、13　赤岩堂山

第７図　６世紀後半の主な前方後円墳の分布



第８図　６世紀後半の装飾付大刀の出土状況

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」第４回

渤海から上野国府へ渡った帯金具

田　中　広　明（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

はじめに

渤海国は、７世紀の末から10世紀の前半にかけて、今の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）から中国北東部、ロシア沿海地方に広がっていた国です。その国の貴人が身に付けた帯金具が、遠く離れた前橋市の鳥羽遺跡から出土しました。

日本と渤海国は、緊張関係が続いた唐や新羅とは異なり、永く友好な関係が続きました。渤海の国王は、代が変わるたびに使者を派遣し、日本もそれに応えました。鳥羽遺跡の帯金具は、その友好の証といえるのです。

しかし、よく考えると不思議です。なぜ、京の都や渤海国の使節が、来航した日本海の沿岸地域ではなく、帯金具が、内陸の上野国（群馬県）から出土したのでしょうか。

いまから10年ほど前、群馬県の発掘情報館でこの帯金具をみた私は、素直にそう思いました。というのも、それ以前に石川県の金沢市から同様の帯金具が出土したとき、意見を求められたことがあったからです。

それから数年が経ち、この帯金具のことは、気になりつつも忘れかけていました。しかし、歴代の上野国司を調べていたときのことです。御長真人廣岳という人物と、この帯金具の数奇な運命に出あったのです。

今回は、この渤海国の帯金具と御長真人広岳をめぐり、渤海国のこと、鳥羽遺跡と畝田ナベタ遺跡のこと、そして遣唐使にかかわる帯金具について話を進めていきたいと思います。

1　渤海国のこと

「海東の盛国」といわれた渤海国は、聖暦元年(698）に建国されました。大祚榮が、高句麗の末裔と靺鞨の人々を従えて建てた国です。朝鮮半島はこのころ、唐の東進政策によって百済が滅び、そして高句麗が滅び、新羅が統一します。新羅と唐のあいだに建国された渤海国は、東アジアの緩衝国として重要な位置を占めました。

もともと「渤海」とは、遼東半島と山東半島の内側、黄河が流れ出た海域を指していました。そして、この海域の沿岸に渤海郡（河北省南部）という唐の行政地域があり、唐の玄宗皇帝のとき大祚榮が、「渤海郡王」に冊封されたことから、国名が「渤海国」となったのです。

渤海国は、大祚榮から大諲譔までの15代、228年間(698年から926年まで）続いた国です。日本の年号では、天武天皇５年から延長４年にあたり、飛鳥時代の末から平安時代中頃となります。渤海国の最大領域は、北朝鮮北部から遼東半島、中国旧満州地区、ロシア沿海州などに及びました。

２代大武芸になると、独自の元号「仁安」を使用して唐と対立しましたが、３代大欽茂は、唐との関係を修復して使者や留学生を送り、その文化を積極的に吸収しました。その後、王位の混乱期を迎えましたが、６代大嵩璘は、唐と日本へ使節を送り、積極的な外交活動を展開しました。奈良時代の末から平安時代初めのことです。

さらに、その後も短命な王が続きましたが、10代大仁秀が登場すると、渤海国は中興します。安禄山の役で混乱する唐へ進駐し、行政組織も整えたことから渤海国は、「海東の盛国」と呼ばれるようになります。しかし、10世紀に入ると宗主国である唐が、弱体化し農民の反乱が続くと、渤海国も不安定になりました。

同光４年（926)、ロシア連邦のシラムレン川流域に建国された契丹国が、渤海国へ進軍します。渤海国は、新羅に応援を求めましたが、内通によってついに滅亡しました。

ところで、渤海国は、唐の行政組織を模倣した三省を中央に置き、地方には五京、十五府、六十二州を置きました。そして、それらは放射状にのびた道路網によって結ばれていました。また、海上交通も活発で、三つのルートで日本へ使節が送られました。

一つは塩州（現在のロシア連邦沿海地方クラスキノ）を船出し、朝鮮半島東海岸を南下、対馬海峡を経

て筑紫の那津浦（福岡市）に到着する「筑紫路」。二つは、南京南海府の吐号浦（現在の北朝鮮鏡城）を船出し、同じく朝鮮半島東海岸を南下、対馬海峡を経て筑紫に付く「南海路」。三つは、塩州から日本海を一気にわたり越前、加賀、能登、佐渡に渡る「北路」でした。

さて、北朝鮮は鉱物資源に恵まれた国です。渤海国も鉄が豊富に産出し、鉄製農具を用いた牛耕が盛んに行われていました。また、馬の飼育も盛んで渤海国の軍事力を支えていました。唐への朝貢品としては、鷹や隼、太白山（白頭山）のウサギ、扶余の鹿などがありました。とくに「海東青鶻」と呼ばれた白隼は、鷹狩りに用いられ、その羽で作られた裘（かわころも）は、とても貴重でした。また平安貴族は、渤海人がもたらすテンの皮を珍重しました。

さらに、渤海国の言語は、はじめ靺鞨語でしたが、のちに漢語となり、漢字が用いられました。教育はとくに盛んで、唐へたくさんの留学生を送っていました。それを裏付けるのが、菅原道真と渤海国大使の裴頲の間で行われた漢詩の応答です。当然、道真は日本語、裴頲は漢語で会話をしていましたが、漢文を筆談で交わしあい、宴席では漢詩を交歓し、友情が育まれたのです。

この渤海国で用いられた帯金具が、石川県の畝田ナベタ遺跡と群馬県の鳥羽遺跡から出土したのです。そこで、日渤交流の証であるこの金具の命運を探る前に、両遺跡について少し考えてみたいと思います。

2　鳥羽遺跡と畝田ナベタ遺跡のこと

(1)　鳥羽遺跡

鳥羽遺跡は、前橋市の西郊、推定上野国府の西域に形成された遺跡です。昭和58年４月から59年３月にかけて、関越自動車道にかかわり発掘調査がされました。古墳時代から平安時代の竪穴住居や掘立柱建物がたくさん発掘され、なかでも宮本長二郎氏によって復元された「神殿建築」は、国府の近傍にこのような宗教的施設が存在したことを裏付ける画期的な発見となりました。

この鳥羽遺跡の南側には東山道の駅路、北側にはやや離れて上野国分僧寺と尼寺、東側に上野国司の館や官舎群、そして国庁が棟を並べていました。おそらく上野国府は、利根川の渡河点付近に前橋（厩橋）のもととなった駅家を置き、古市町付近に国府市を設け、東山道に沿ってたくさんの建物群が、鳥羽遺跡の西側まで広がっていたと考えられます。

さらに、鳥羽遺跡の北には上野国分寺や山王廃寺付近まで掘立柱建物や竪穴住居などの建物群がありました。畠や水田も営まれ、渋川市の有馬にかけては、牧が営まれていました。

このような環境のなか、７世紀末から８世紀にかけて、鳥羽遺跡に「神殿建築」が設けられました。それは、三重の溝と一重の柵に囲まれた方形区画内に二間四面の掘立柱建物跡で構成された遺構でした。二間四面とは、廂付き建物の表現方法で、核となる身舎の柱間が二間、身舎から出た廂が四方に付帯した建物ということです。

この建物は、側柱建物である五間屋と重複していますが、前後関係は明らかではありません。建物跡の直接的な年代を示す資料は乏しいのですが、周囲をめぐる三条の溝から７世紀末から８世紀の土器が出土していることや、平安時代の遺構、とくに竪穴住居跡が重複して構築されたことから、９世紀以降は埋没し、機能していなかったと考えられます。

神殿建築は、宮本氏の復元によると、東側の区画溝を渡り、鳥居をくぐって玉垣に囲まれた空間へ入ります。建物の妻側には階段が設けられ、建物へ上れます。建物の四周には、欄干を廻らした廂（縁）が廻っています。

神殿建築は、掘立柱構造の高床建物です。地面に丸い穴を掘り、そこに柱を埋め、柱の頭を地上から１メートルほどの高さに揃え、その上に台輪を廻らし、台輪の上に柱をさらに立てました。柱と柱の間には、壁板が落とし込まれ、東妻の右壁には、観音開きの扉が設けられました。切妻の屋根には板が葺かれ、交差する波風板は、千木となり、棟木の上には、堅魚木が置かれました。

さて、この神殿建築が、どのような役割を担ったのか。どのような人物とかかわるのか。はっきりとわかりませんが、上野国府や国司とかかわる重要な役割を担ったことは、間違いないでしょう。

なぜならば、この神殿建築の周囲にめぐる区画溝から出土した土器が、特異だからです。一般集落跡から出土する種類と同様の土器もありますが、畿内系の暗文土器や須恵器の有蓋高台付椀、高台付盤、高脚付き盤（高坏）、無台の椀などの食器が、420点以上出土しています。これらの食器は、神前に備えられたり、直会に用いられたりしたのでしょうか。

また、長頸壺や短頸壺、横瓶、平瓶などの瓶類も豊

富で、これも一般集落からほとんど出土しない種類の土器です。それが、49点出土しています。さらに、蔵骨器に用いられた有蓋短頸壺、とくに上野型短頸壺までも出土しています。

具体的な復元は難しいのですが、上野国府の官人たちがかかわる饗宴や神事、儀式を支えた物品と考えられます。

このような神殿建築や物品の出土した区域（H区）から、渤海国の帯金具が出土しました。残念ながら遺構を確認している最中に出土したようで、どのような遺構かはっきりわかりません。なお、この金具には、「A140－2605」という註記がありました。

(2) 畝田ナベタ遺跡

畝田ナベタ遺跡は、石川県金沢市の北郊、金沢港近くで行われた土地区画整理事業に伴い、平成11年から15年にかけて発掘調査されました。SD68という溝跡（小河川または運河）を挟んで、50棟におよぶ掘立柱建物跡が配置されていました。伊藤雅文氏は、発掘調査報告書のまとめで当初は、付札木簡や倉庫群からこの遺跡を「物流センター」と考えたようですが、これを否定し、正殿と脇殿から構成される「国あるいは郡が管理する施設群」とされました。

ではいったい、それは何かという疑問もわきます。桁行の長い側柱建物が、河川や水路に沿って棟をそろえて並ぶ景観は、宮城県多賀城市市川橋遺跡（砂押川）、栃木県さくら市森後（もりうら）遺跡（江川）、静岡県浜松市井通（いどおり）Ⅰ遺跡（井伊谷（いいのや）川）、石川県金沢市戸水C遺跡（旧犀川支流）、埼玉県行田市築道下（ちくみちした）遺跡（元荒川）（カッコ内は関連河川）などと共通した「川津」にかかわる遺跡です。

川津は、河川や港湾が古代道路網と交差する地点に設けられた物流、人々の往来について拠点となる場所です。地域の経済や政治の拠点として、国府や郡家の管理下に置かれ、地域の豪族が運営していました。そこには、勅使や国司たちの往来や宿泊のため、給食センターの厨（くりや）や馬を準備した厩（うまや）、宿泊施設の館（たち）、租穀を収めた正倉などが設けられていたと考えられます。

畝田ナベタ遺跡が形成されたのは、８世紀中葉から10世紀です。同じころ、大野川を挟んで戸水遺跡群が形成されました。とくに戸水C遺跡は、大型建物群や初期貿易陶磁器などが出土し、加賀国の「国津」とされています。国内の旅行者や物資の流通だけではなく、渤海国の使節を迎える外交施設が置かれた重要港湾遺跡と考えられます。

ところで、越前国から加賀国が立国したのは、弘仁14年（823）のことです。畝田ナベタ遺跡や戸水C遺跡の急速な成長について、この加賀立国と関連させる考え方があります。渤海国使の来日に伴い、越前国に置かれた松原客館とは別に、加賀国や能登国にも客館（便処）が設けられました。国津は、その役割も担っていたのでしょう。

さて、問題の帯金具は、B地区の18号掘立柱建物跡の東側を南北に流れる小溝から出土しました。この小溝は、18号建物や31・25号建物の雨落ち溝を兼ねた区画溝と考えられます。これらの建物は、B地区の第２期、総括編の３段階、北陸古代土器編年のⅢ期、９世紀前葉から中葉前半に相当します。この段階に帯金具は、この溝に埋没したと考えられます。

なお、18号掘立柱建物跡は、桁行２間×梁行９間の細長い建物です。間仕切り、または床束の柱穴が設けられています。畝田ナベタ遺跡のなかでも最大級の建物です。その建物にかかわる小溝から帯金具が出土したのです。

3　帯金具のこと

ここで鳥羽遺跡と畝田ナベタ遺跡の帯金具について、詳細に観察しておきましょう。

(1) 鳥羽遺跡

大きさは、長さ15.9㎜、幅19.3㎜、厚さ2.0㎜です。正方形に近く、中央やや下に垂れ飾りを付けた四隅の丸い垂孔（すいこう）であることから、「巡方（じゅんぽう）」と考えられます。裏面の四隅には、鋲が付いています。帯革を通し、裏金具を留めた鋲です。なお、裏金具はすでに失われています。

この金具の表面には宝相華（ほうそうげ）唐草文が、四辺を枠取りした中に描かれています。青銅の地金にレリーフ模様を描き、鍍金が施こされています。一部に黒色の部分あり、漆を施したのかもしれません。文様は、魚子（ななこ）状の打ち出しによって、造り出されています。

径0.5㎜と径0.2㎜の円形の打ち出しがみられ、二種類のタガネを使っていたようです。連続的に一気に打たれていることから、とても熟練した工人による作品と考えられます。

表面には、鍍金が施されていますが、ところどころ剥落しています。とくに左上の剥落が著しく、地金の腐食が進み、文様の復元をとても難しくしています。

なお、裏面は鍍金されませんでした。

文様の宝相華唐草文は、まず、垂孔の上部中央に萼を置き、そこから花弁を左右に開いて、蕊を立ちあげるように描いています。萼は二股に開き、花弁から下向きに唐草文が巻き込みます。蔓は、垂孔の左と右の上端から巻きあがる唐草文と絡み合います。また、垂孔の左右には、下から巻き上がる蔓もあります。さらに、垂孔の中央下から太い幹が続き、そこから左右に蔓が、うねりながら伸びています。

(2) 畝田ナベタ遺跡

大きさは、長さ17.25㎜、幅18.80㎜、厚さ2.10㎜です。方形の金具で、中央やや下に長方形の垂孔をあけた「巡方」です。この金具は、レリーフ文様のある銅製の巡方の上に漆を塗り、金製の薄板を貼り付けています。「金薄板貼帯金具」（植田2006）と命名されています。

垂孔の四隅は丸く、裏面には、対角線上に四つの鋲が付きます。この鋲を帯革、裏金具に通して叩き締め帯に留めます。残念ながら裏金具は残っていません。

表面の意匠は、鳥羽遺跡とよく似ています。四辺を枠取りし、宝相華唐草文を立体的に描いています。地金は青銅で鍍金を施しています。漆で金板をその上に貼りつけ、さらに黒漆を塗り、凸部が黒地に浮き上がるように磨き上げています。また、凹部には径0.4㎜の円形文様が、魚子のように残っています。金製の板を圧着するための細かな打ちこみと考えられます。

表面の宝相華唐草文は、異なる三つの唐草文と宝相華文から構成されているようです。植田氏によると、奈良県の東大寺正倉院にある中倉の密陀彩絵箱と共通するということです。しかし、この金板を貼り付け、凹部を黒漆で被覆したことで、本来の文様が復元しにくくなっているそうです（植田2006）。

(3) 両者の比較

両者は、ほぼ同じ大きさの方形金具（巡方）であること、同じ位置に隅丸長方形の垂孔があること、宝相華唐草文が酷似すること、裏面の同じ位置に４つの脚鋲を鋳出すこと、垂孔の左側の幅が右側より狭く、その比率も等しいことなどが共通します。

そのいっぽう、畝田ナベタ遺跡の帯金具は、地金、鍍金、黒漆、金板、黒漆の四層構造ですが、鳥羽遺跡の帯金具は、地金と鍍金（黒漆）の二層構造です。また、鳥羽遺跡の帯金具は、粗い魚子打ちがみられますが、畝田ナベタ遺跡の帯金具は、細かな魚子打ちであることなどが相違します。

これらから両金具は、共通の鋳型で製作されたと考えられます。それは、同一の工房で作った別の帯に付けた金具か、一つの帯に付いた別の金具と考えられます。相違点は、鳥羽遺跡の金具は、地金の上に打ち付けた金板が外れたと考えるか、畝田ナベタ遺跡の金具が、補修で金板、黒漆塗りを施したと考えてみてはどうでしょうか。

(4) 東アジアの帯金具

畝田ナベタ遺跡の帯金具は、小嶋芳孝氏が、北東アジアの帯金具を通じて詳細な検討をされています。中央アジアの帯金具と共通し、唐の帯金具と異なる北東アジアの帯金具は、表面にレリーフ文様、鍍金などが施されています。小嶋氏は、契丹国（遼）や渤海国、あるいは唐、新羅の「花文帯金具」を集成し、その型式学的な検討を行われました。

まず、遺跡からの事例について出土状況、金具の種類や文様構成、共伴遺物の時期などの詳細なデータを提示し、花文帯金具が、８世紀から11世紀にみられるとされたのです（小嶋2002）。なかでも花文の左右に唐草文を配置した文様は、渤海国や契丹国の地域にみられるといいます。このころの唐や新羅、日本では、表金具に文様を施しませんでした。唯一、韓国済州島にある龍潭洞遺跡の帯金具は例外です。

このことは、８世紀末から９世紀前半になると唐の辺境や周辺国では、帯による規範が曖昧になり、「有文鍍金の帯金具が、貴族・王族層に限らず、使用されるようになった」（小嶋2002）ようで、吉林省査里巴遺跡や内蒙古自治区李家営子遺跡の帯金具が、その状況をよく示しているそうです。

ところで、渤海国では漆を生産する技術がありませんでした。小嶋氏は、宝亀７年（776）、朝廷から金漆や漆が渤海使に贈られたことを前提として、日本の漆の技術者が渤海国にわたり、その国営工房で花文帯金具を作ったのではないかとされました。

また、畝田ナベタ遺跡の帯金具の文様構成が、パルメット文の系譜にあること、遼代に入り花文帯金具が多数みられるとされました（小嶋2006）。しかし、この帯金具が単独では、馬具の革帯か人の腰に締めた革帯か、判断はむずかしい。畝田ナベタ遺跡の帯金具もどちらともいえないとされました。

なお、この花文の基本パターンは、中央に花弁、左

右に巻草文を対称に配置し、蔓は途中で枝分かれして巻草となり、逆方向に始まります。蔓の先端は、蕨状や「の」の字状となって、毛羽状の表現が施されることもあります。一般的に文様の変化は、複雑な文様から単純な文様へと進みます。毛羽の喪失、蔓の巻の簡略化、対称性の逸脱などが、変化の方向性としてあげられます。

このようなことから、畝田ナベタ遺跡の帯金具と、鳥羽遺跡の帯金具は、やはり契丹国や渤海国、遼、なかでも、渤海国で作られた可能性が高いといえるのです。

4　御長真人広岳

鳥羽遺跡の帯金具は、どのような経緯をたどったのでしょう。その接点は、上野国介であり、送渤海客使となった御長真人廣岳にありました。

御長真人廣岳は、奈良時代の中ごろから平安時代の初めごろに生きた人物です。父親の池田王は、天武天皇の孫、舎人親王の子であり、母は、橘諸兄の孫、橘奈良麻呂の娘です。親王家と橘家の血筋を引く廣岳は、申し分のない家柄に生まれました。しかし、その幼少期から青年期にかけては、とても不遇でした。

廣岳の生まれた天平20年（748）のころは、母の祖父、橘諸兄の絶頂期でした。諸兄は正一位に上り詰め、恭仁京への遷都、盧舎那仏（るしゃなぶつ）の鋳造などが行われていました。また、父の池田王は皇孫であるため、蔭位によって従四位下となっていました。

しかし、廣岳９歳のとき、祖父の橘奈良麻呂に乱の嫌疑が懸けられます。奈良麻呂の娘の子供である廣岳と兄弟の４人は、皇籍を離れ「御長真人」の姓を受けました。なお、のちに丹後介、伊豆守、左兵庫頭などを歴任した御長真人仲嗣は、廣岳の兄弟といわれています。

いっぽう、父の池田王は、皇太子に推挙されましたが、淳仁天皇のときに親王宣下を受けます。廣岳17歳のとき、藤原仲麻呂の乱に加担した池田王は、親王から諸王に降格し、土佐国へ遠流（おんる）となります。仲麻呂の政権に関与し、乱のとき馬を準備したためです。

その後、廣岳がどのような青春時代を過ごしたか分かりません。おそらく、一般の官人たちと同様に廣岳は、試験を受け実務官僚としての道を歩んだのでしょう。各地の国司や宮内の下級官司を歴任し、延暦15年（792）には、前の除目で正六位上上野介となっていました。44歳のときです。

国司といっても、つねに任国に赴任していたのではありません。四度の使いやそのほかの理由で京にいることも少なくありませんでした。その廣岳に大役が、舞い込んできたのです。その前年に、出羽国へ漂着した渤海国の使者を本国へ送り届ける役割です。臨時の「送渤海客使」に抜擢されたのです。

このときの渤海国使は、苦難の連続でした。延暦14年11月３日、渤海国使の呂定琳は、出羽国の志理波村（能代市）に漂着しました。しかし、志理波村のあたりは、まだ国家に編入されていない人々や土地が多く、この異国の人々は襲撃され、朝廷への贈答品の一部も略奪されてしまいました。

その後、使節一行は、出羽国に保護され、出羽国はことの次第を朝廷に報告しました。朝廷は、渤海国使たちを越後国へ移すと、翌年の４月27日、入京を許しました。使節は方物（特産物）を献上し、渤海国王の「啓」（格下の者が、格上の者へ差し出す書状）を提出しました。

その啓には、渤海国王の大欽茂が没し、大嵩璘が王位を継承したこと、修好を進め交易を行いたいことが、記されていました。しかし、桓武天皇は、「これまでに渤海国からきた啓は、文体も整っていたし礼儀もかなっていた。けれども、今回の啓は文体も礼もなっていない。呂定琳を渤海国へ突き返かえせ。」ということになりました。

そして、渤海国使たちを本国へ送る使節団の長官として、御長真人廣岳に白羽の矢が立ったのです。次官には、式部大録の桑原公秋成（正六位上）が、抜擢されました。なお、桓武天皇は、在唐学問僧の永忠を介して絹20疋、絁20疋、糸100絇、綿200屯、砂金小300両を渤海国王へ贈りました。

渤海国に渡った廣岳は、嵩璘と謁見すると、桓武天皇の詔書を渡しました。その詔書には、嵩璘の王位継承を称え、定琳の遭難を憐れんだいっぽうで、今回の啓は好ましくない。礼を欠いている。今後、外交を続けることはできないとありました。

そうはいっても渤海国は、南から新羅、西から唐の軍事的干渉を受けています。日本との友好関係を維持し、少なくとも新羅とは対抗しなければなりません。そのため、唐の冊封を受けるいっぽう、日本との仲を修好する必要がありました。そこで、嵩璘は廣岳の帰国のとき、渤海国使を同行させることで、外交は継続している証にしようとしました。

しかし、その事情を察知した廣岳は、使者を連れて帰国することを拒みます。一歩間違えば、廣岳は渤海国の捕虜となり、帰れなくなるかもしれませんでした。ところが、嵩璘は新しく啓を作り直すこととし、廣岳が日本へ渡海する船を準備させました。

そして、延暦15年10月２日、廣岳は帰国します。新しい啓には、前回の啓の無礼を謝罪し、嵩璘が唐から冊封を受けたこと、日本と定期的な相互交流を行いたいこと、渤海国では大きな船が作れる巨木がないので、日本が大型船を準備して欲しいことなどが記されていました。

なお、渤海国は、東アジア情勢の均衡を保つことだけではなく、日本の特産物や贈答品が欲しかったのです。とくに桓武天皇について嵩璘は、「その徳は歴史上の誰よりも高い」と称えました。廣岳の持ち帰った啓は、朝廷で絶賛され、群臣たちは大国意識に沸きました。

二日後、廣岳はその労をねぎらわれ、正六位上から従五位下となります。次官の秋成も正六位上から外従五位下を与えられました。なお、五位以上は通貴といい、位田・職田などに差があるほか、蔭位などの特典がありました。二人は貴族（通貴）の仲間入りを果たしたのです。

しかし、廣岳のその後は、あまり明らかではありません。いっぽうの桑原公秋成は、帰国の年、10月27日に大和介、３年後の延暦18年（799）正月29日に主計助となっています。廣岳が、延暦18年４月１日に大学助となる（51歳）までの３年間は、上野介だったのでしょう。このとき、鳥羽遺跡の帯金具が、上野国府へもたらされたと考えられます。

廣岳は、大同元年（806）２月16日に正五位下で左中辨となります（58歳）。左弁官局は、中務・式部・治部・民部の四省を掌握し、太政官関係のすべての文書を取り扱かう文書事務官の次官となったのです。実務官僚の実質的なトップです。廣岳を起用した桓武天皇の信任が、いかに厚かったかわかります。

ところが、そのわずか一か月後、桓武天皇は突然、崩御してしまいます。翌日、臨時の任官が行われ葬儀に備えられました。廣岳は、葬儀の衣服や調度・設営などを司る御装束司となります。跡を継いだ平城天皇は、廣岳を大同３年（808）８月３日、宮内大輔（60歳）としましたが、その19日後、再び左中辨にもどしました。

平城天皇は、大同４年（809）４月１日、病気のため嵯峨天皇に譲位します。しかし、大同５年（810）９月６日、平城還都の詔を出し、嵯峨天皇との対立は決定的となります。ついに、弘仁元年（810）９月10日、嵯峨天皇は行動に出ます。平城京から東国への出口である伊勢国、近江国、美濃国へ使者を遣わし、関を固めたのです。

平城上皇が大海人皇子にならい、東国から挙兵することを防ぐためでした。このとき廣岳は、従四位下近江使となり、近江国へ遣わされました（62歳）。乱の首謀者である藤原仲成と薬子は捕えられ、平城上皇は出家し乱は収束します。

廣岳は、そのまま同月16日、伊勢国守となります。その後どのような余生を送ったか、わかりませんが、弘仁８年（817）３月27日に69歳で没しました。そして、散位従四位外勲五等が贈られています。

5　遣唐使と帯金具

ここで遣唐使とかかわる腰帯を二、三紹介したいと思います。

まずは、群馬県の伊勢崎市多田山12号墳から出土した鉄製腰帯具です。多田山古墳群は、唐三彩の陶枕が出土したことで、ご記憶の方も多いと思われます。その陶枕が出土した古墳（15号墳）の近く、12号墳から鉄製の腰帯が出土しました。

奈良時代に日本の官人たちは、衣服令によって服の色や靴、大刀などの持ち物、そして腰にしめた帯などが、決まっていました。とくに腰帯は、五位以上が金銀装、六位以下が烏油と決まっていました。烏油腰帯とは、銅製の金具に黒漆を塗った飾りをつけた革帯を言います。金具は、方形やかまぼこ形でやや下に細長い穴が開いています。

渤海国の金具のように文様はありません。唐も日本と同様です。けれども、日本には鉄製腰帯の規定はありません。つまり鉄製腰帯を付けて宮内はおろか、京内、国府、郡家などでは、使用できなかったのです。そもそも日本では、作っていなかったでしょう。ところが、唐には位階をもたない庶人が、鉄製腰帯をしめる規定がありました。

ですから、この腰帯を獲得する機会は、唐へ渡航するか、唐から渡来した人物から入手したと考えられます。それは、遣唐使です。たとえば、古墳の時期や出土遺物の共伴関係から、大宝２年（702）第８回か、養老元年（717）第９回の遣唐使が、蓋然性が高いといえます。とくに第９回遣唐使は、白村江の戦い以

降、途絶えた国交の回復を図って、557人もの人々が派遣されました。

唐に残留した者を差し引いても多数の人々が、日本へ帰国したと考えられます。彼らのなかには、鉄製腰帯を入手して、唐朝の儀式に参列した者もいたことでしょう。

同じような鉄製腰帯が、青森県八戸市の古墳から出土しています。この腰帯も唐へ渡った人物が、日本へ持ち帰ったと考えられます。こちらは、丹後平（たんごたい）29号墳といういわゆる「末期古墳」から出土しました。末期古墳とは、東北地方で８世紀に入ってから作られた古墳をいいます。こちらは、遣唐使に従って唐へ渡った蝦夷でしょうか。

ところで、多田山12号墳は、７世紀後半に築造された古墳です。截石切組積みの横穴式石室が構築され、入り口（羨門（せんもん））前の前庭には、大型の土壙が掘られていました。８世紀後半に入り、その土壙の一部に小さな穴が掘られ、鉄製腰帯具や多数の鉄釘が、焼土、炭化物とともに埋められていました。

この状況から火葬された人物は、鉄製腰帯をしめたまま棺に納められ火葬されたことがわかります。火葬骨は、壺に納められ、火葬墓に埋められました。燃え残った鉄製腰帯や釘などが、炭や灰とともに片付けられ、この小穴に埋められたと考えられます。

丹後平29号墳の場合も同様です。鉄製腰帯は、埋葬主体部に副葬されたのではなく、古墳の周溝から出土したのです。古墳の直接被葬者ではなく、関連した人物が、少なくともこの古墳群に関連した人物が、鉄製腰帯をしめていたことになります。

八戸市の蝦夷や伊勢崎市の豪族が、海を渡り唐朝の儀式に参列したのでしょうか。あるいは、唐の庶人と接触して獲得したのでしょうか。市で購入したのでしょうか。いずれにせよ、鳥羽遺跡の帯金具のような複雑な経緯が、あったことに違いありません。

最後にもうひとつ、唐からもたらされた帯金具について紹介します。滋賀県高月町（現長浜市）の井口遺跡から出土した石製巡方です。透明白色の軟らかい石に獅子文がレリーフされています。いわゆる有文白玉帯です。日本に有文帯の規定はありません。いっぽう、獅子文や龍文、鳳凰文などを描いた白玉帯が、唐の皇帝や貴族の墓から出土しています。

この井口遺跡の獅子文石帯は、唐から訪れた使者や唐から帰国した人物がもっていたのかもしれません。この白玉帯は、小野妹子や犬上御田鍬といった外交官を多く排出した近江国ならではの出土遺物といえます。

まとめ

今回の講座では、前橋市の鳥羽遺跡から出土した帯金具が、石川県金沢市の畝田ナベタ遺跡の帯金具と共通すること、両者が日本海を隔てた渤海国の帯金具と共通することを明らかにしました。そのうえで、渤海国と上野国を結び付ける人物、御長真人廣岳について考察を進めてきました。

また、伊勢崎市や八戸市から出土した鉄製腰帯は、日本の衣服令の規定にないことから、遣唐使によってもたらされた唐の腰帯であった可能性を示しました。さらに、唐からもたらされた滋賀県井口遺跡の獅子文白玉帯を紹介しました。

海外から、また日本から様々な人々が、海を渡り往来していました。その契機は、外交や交易、戦争、移住などが考えられます。彼らの渡航は、『天平の甍』や鑑真の例を引くまでもなく、まさに命懸けでした。その痕跡のいくつかが、今回示した帯金具なのです。

渡来人の痕跡は、土器や古墳などにも見出せます。なかでも、帯金具、とくに腰帯は、奈良・平安時代の官人という一握りの社会集団について、その動向を掌握するには、とても好都合な考古学資料です。それは、今回の講座で明らかにしたように帯金具が、国によって形や文様が少しずつ異なるからです。型式学的な検討が可能な研究素材だからです。

ほかにも、これまでに発掘調査によって出土していながら、研究の俎上に載っていない資料が、まだまだあると思います。角度を変えて研究することで、新しい歴史が構築されていくことでしょう。鳥羽遺跡の帯金具が、その第一歩となったら幸いです。

渤海（ぼっかい）から上野国府（こうずけこくふ）に渡った帯金具（おびかなぐ）

（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　　田中　広明

1　は　じ　め　に

2　畝田（うねだ）ナベタ遺跡と鳥羽遺跡（とりばいせき）の帯金具

（１）帯の復元

（２）東アジアの装飾帯金具

（３）御長真人廣岳（みながまひとひろおか）

3　多田山（ただやま）15 号墳の鉄製腰帯（てつせいようたい）

4　ま　と　め

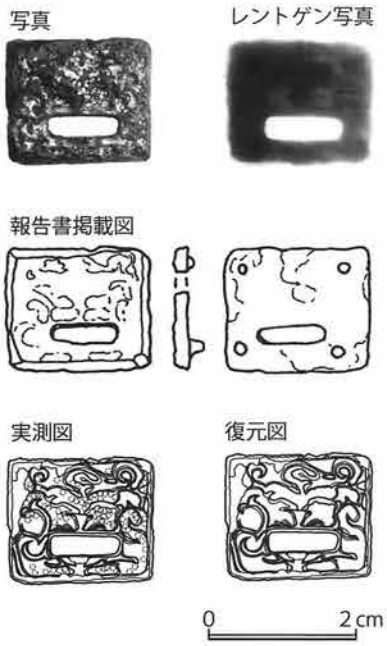


図1　鳥羽遺跡の帯金具

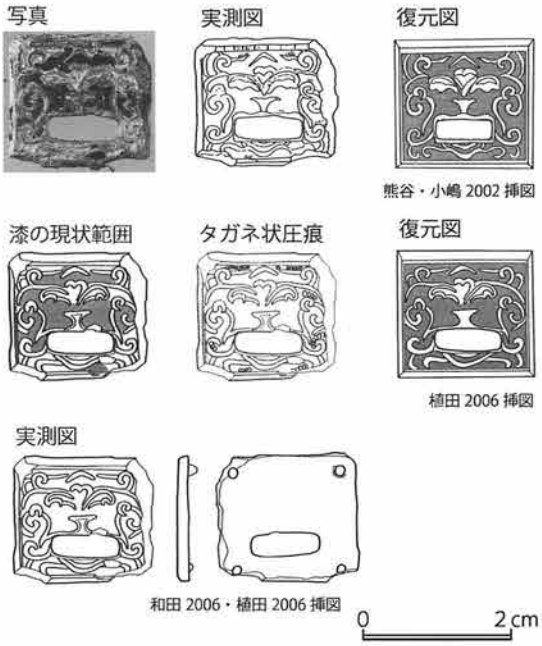


図2　畝田ナベタ遺跡の帯金具

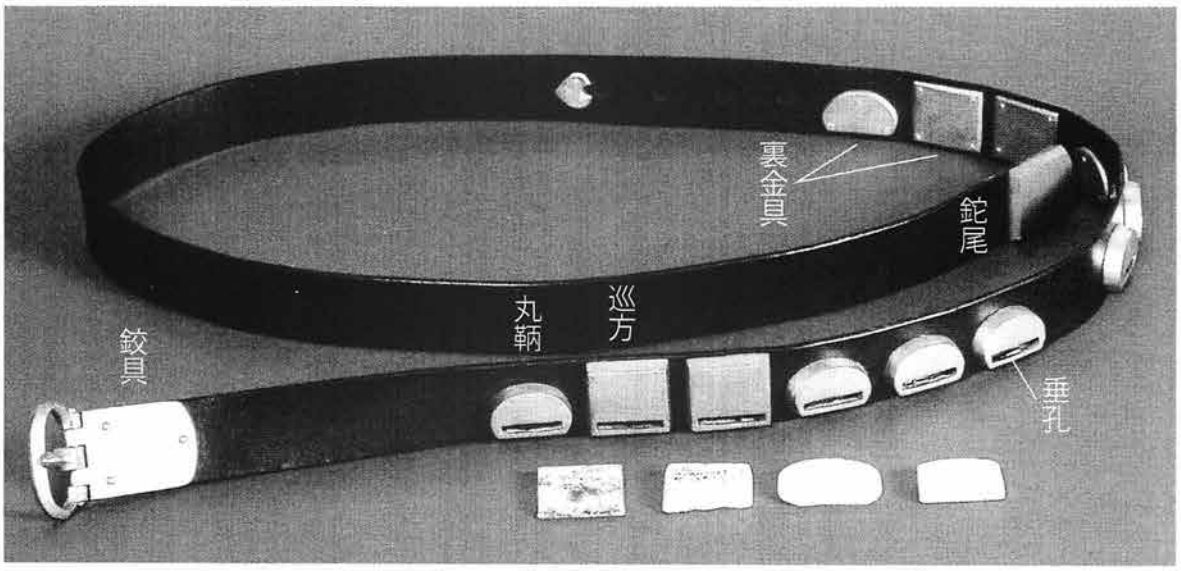


図3　復元した金銅装腰帯

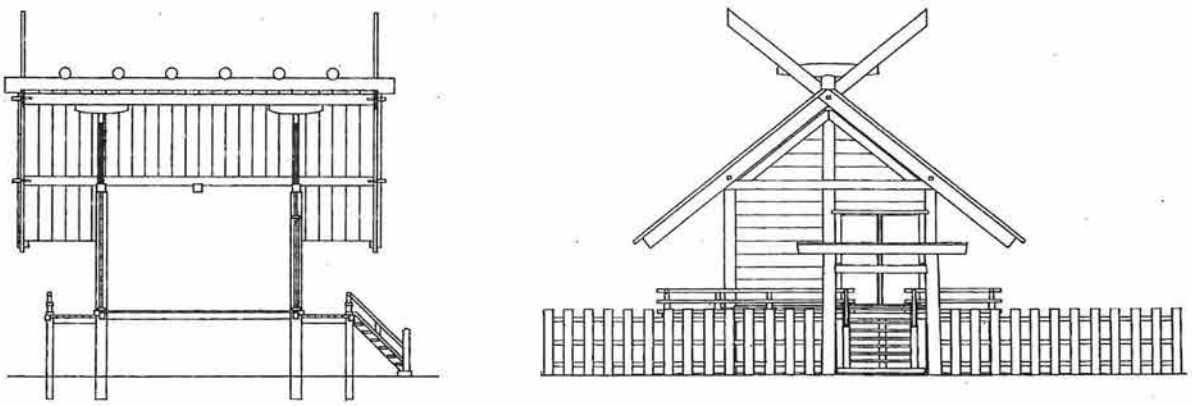


図4　鳥羽遺跡の復元建物

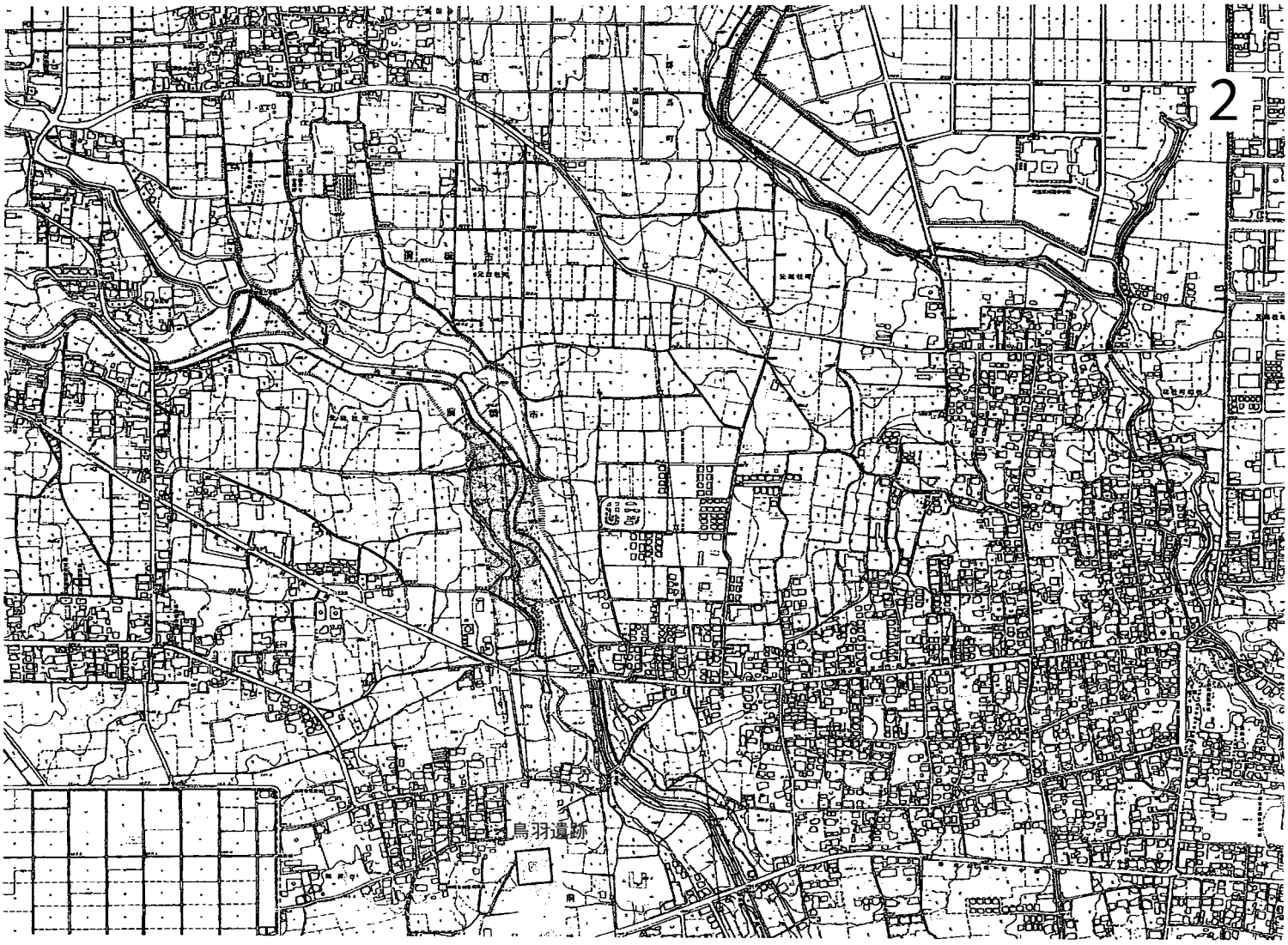


図5　鳥羽遺跡の位置

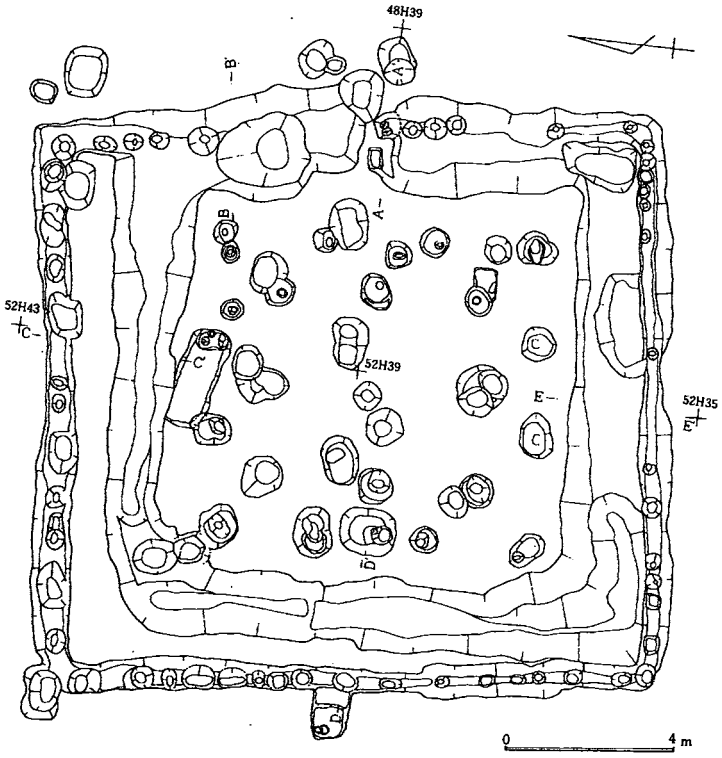


図6　二間四面建物①

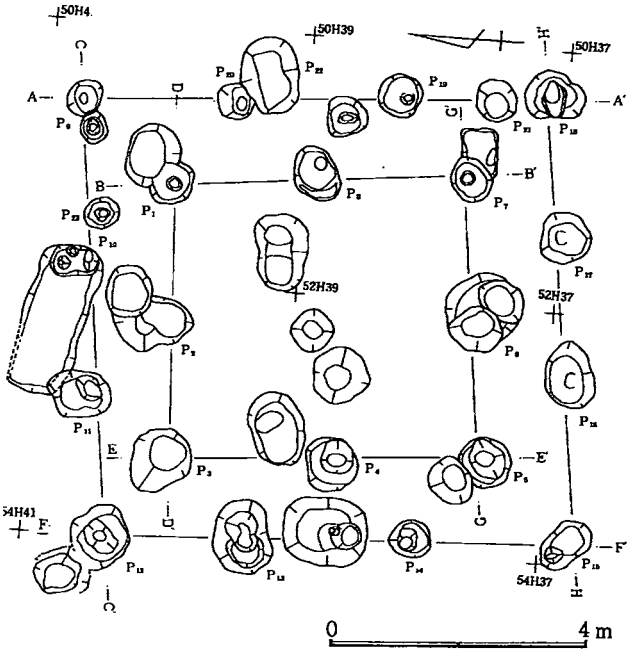


図7　二間四面建物②

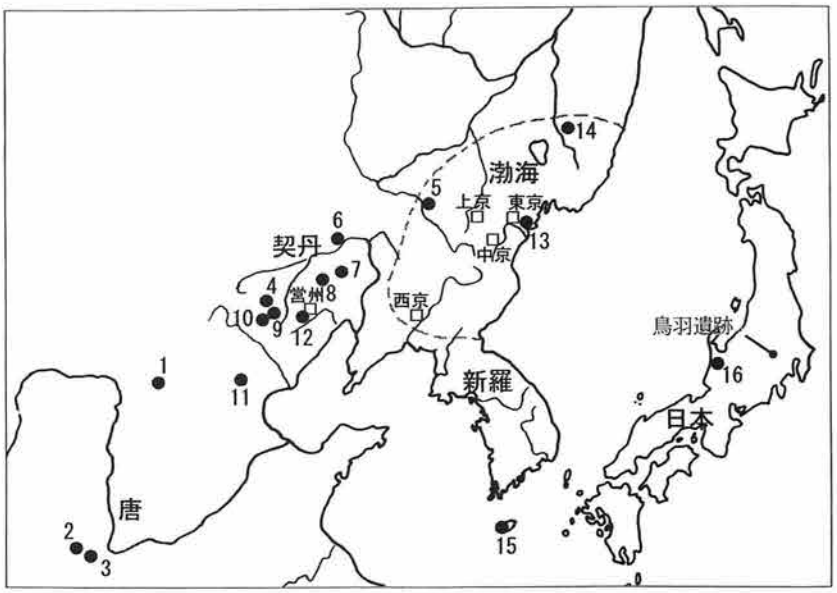
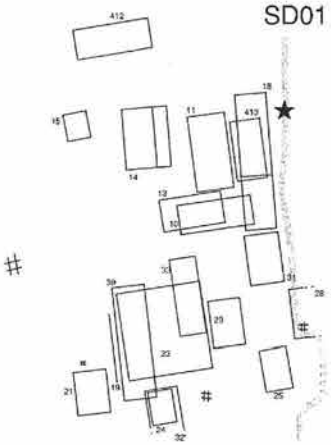


図8　花文帯金具の出土遺跡（小嶋 2006 に加筆）



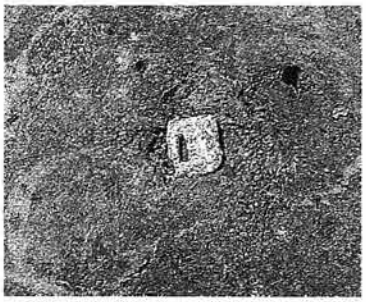


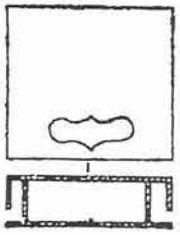
図9　畝田ナベタ遺跡第2期

御長真人廣岳（みながのまひとひろおか）

天平20年（748）　誕生。
　　父は池田王（天武天皇の孫、舎人親王の子）。
　　母は橘奈良麻呂の娘。
天平宝字元年（757）橘奈良麻呂の乱
天平宝字8年（764）　藤原仲麻呂の乱
延暦14年（791）　渤海国使呂定琳、出羽国漂着。
延暦15年（792）　正六位上上野介。送渤海客使。
　　同年10月　渤海国から帰国。従五位下となる。
延暦18年（799）　大学助。
大同元年（806）　正五位下左中辨。桓武天皇崩御。御装束司。
大同3年（808）　平城天皇の宮内大輔→左中辨。
弘仁元年（810）　藤原薬子の乱。固関のため従四位下近江使。
　　同年9月　伊勢守。
弘仁8年（817）　散位従四位下勲五等御長真人廣岳没（69歳）

図10　畝田ナベタ遺跡の位置

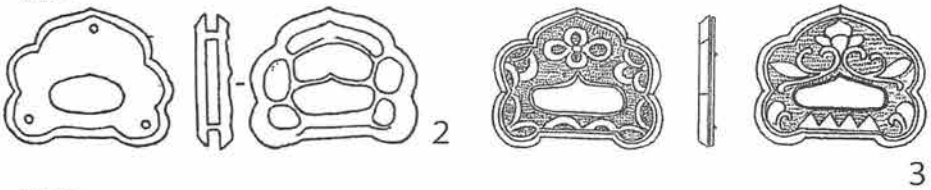
唐代



1 河北省蔚県九宮口墓（唐代）　2 吉林省永吉揚屯大海猛遺址（墓・渤海）
3 吉林省永吉査里巴靺鞨墓地（渤海）　4 内蒙古自治区哲里木盟奈林稿壁画墓（遼代）
5 遼寧省阜新海力板墓（遼代）　6 内蒙古自治区奈曼旗遼陳国公主駕駙馬合葬墓（遼代）
7 内蒙古自治区敖漢旗大横沟 1 号墓（遼代）

垂孔の型式
　垂孔の上辺・下辺中央が、口唇状に突出する→上辺のみ突出→垂孔が扁平化

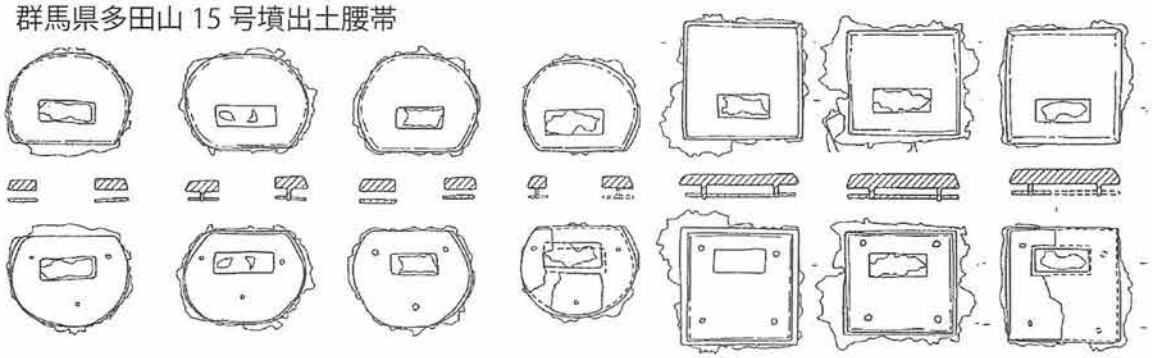
渤海



遼代

図 11　中国東北地方の腰帯具

群馬県多田山 15 号墳出土腰帯



青森県丹後平 29 号墳出土腰帯

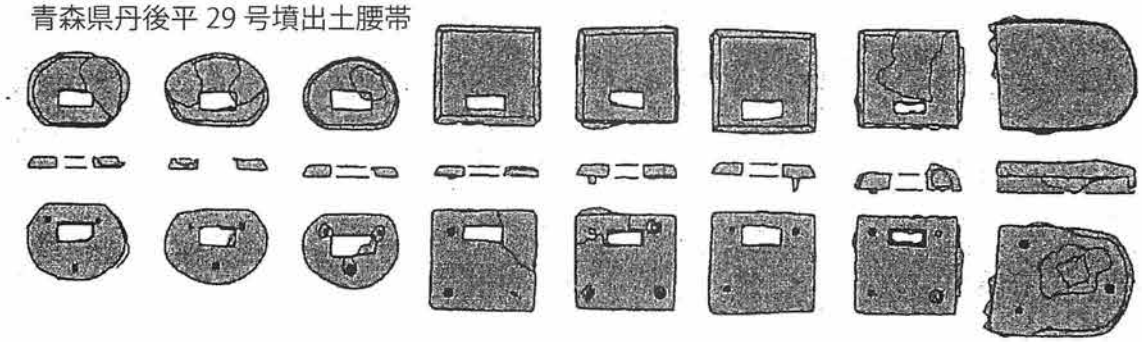


図 12　鉄製腰帯

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」第５回

群馬大学附属中の地下に眠る縄文晩期　西新井遺跡

設楽博己（東京大学大学院）

はじめに―縄文文化をどのようにとらえるか―

1968年にアメリカで、『Man the Hunter』（マン・ザ・ハンター）という書籍が出版されました。『人間、狩りをする者』と訳せましょうか。これは1966年に人類学者のリチャード・リーとアーヴィン・デュボアを中心にシカゴで開かれたいわゆる採集狩猟民の性格に関するシンポジウムの記録です。この集会で議論されたのは採集狩猟民社会の実態で、これまでの採集狩猟民にまとわりついていた貧しくみすぼらしい姿が払拭されるような意見が開陳されました。その一つが文化人類学者マーシャル・サーリンズの「Original Affluent Society」すなわち「原始豊潤社会」という見方で、かれは非文明の採集狩猟社会の技術が実は洗練されていたというのです。モーガンやエンゲルスらの社会進化論によって採集狩猟社会を最も遅れた社会ととらえ、その対極にあるヨーロッパの文明社会を進んだものとする、優劣の価値判断を盛り込んだ進歩史観が幅を利かせていた時代にあって、目から鱗の理論でした。

北西海岸の考古学を研究するケネス・エイムスさんは、サーリンズのいわゆる“裕福な採集狩猟民”をComplex hunter-gathererrsすなわち「複雑採集狩猟民」と呼び変えて、次のような性格を指摘しています〔ケネス・M・エイムス2016〕。

１）半定住ないし定住生活
２）高い人口密度
３）世帯を基礎とした経済
４）食料資源の多角化と集中化
５）食料の貯蔵
６）森林の火入れなど自然への働きかけ
７）物質文化に対する高い技術と専業化
８）遠距離交易網の整備
９）名声・威厳・地位などに応じた社会階層の存在

エイムスさんは、北西海岸の複雑採集狩猟民が考古学的にどこまでさかのぼることができるのか追跡するとともに、考古学的にみてもそれがかつて世界のあちこちに存在していたことを主張し、縄文文化もその一つにあげています。

青森市三内丸山遺跡の発掘調査などをきっかけとして、縄文集落がこれまで考えられていたような小規模なものばかりではないのではないかという議論がさかんになってきました。こうした意見に対しては、見かけは大規模でも長期にわたる居住の累積の結果であり、一つの時期に分解してみると２～３棟の住居からなる小ぶりなムラを単位としているという批判も根強いものがあります。実際のところはどうなのでしょうか。縄文早期になると竪穴住居跡が各地で見出されるようになり、旧石器時代の遊動生活から定住化が促進されたことがわかります。さらに縄文前期には環状集落が形成されるようになりますが、これらは完新世の温暖化を背景として人口が増えた結果でしょう。２～３棟では環状集落を形成するのに小さすぎるような気がします。

縄文後・晩期になると、巨石記念物などモニュメントが建設されます。また、装身具や身体装飾の複雑化、漆製品の技術がさらに洗練度を増していくといった現象もこの時期を特徴づけています。しかし、こうした現象にしても、精神文化や儀礼の発達は後・晩期の寒冷化に起因する集落の衰退などの社会的な矛盾に対処するためだというネガティブな理由から、社会の複雑化を反映したものだとするポジティブな理由まで、理解の仕方は多様です。実態として、関東地方などでは縄文晩期に人口が０になる地域がいくつも出現する一方で、環状盛土遺構のように直径が100mに及ぶ巨大で儀礼の道具などが集中するような社会施設が出現するなど、相反する事象があらわれるのは、相対する意見のいずれもが正しいことを物語っているのかもしれません。

縄文社会をどのようにとらえるのかは、１万年以上に及ぶこの時代の長い時間の経過のなかで、地域的な変異を加味しながら読み解いていかなくてはなりませんが、その基礎として個々の地域や集落の動態をつぶ

さにとらえて、遺跡の性格を深く掘り下げていくことがかかせません。なぜならば、社会をどうとらえていくかという命題に対しては、社会の進化や変化のモデルを設定したり、社会学や人類学のモデルを借りながら仮説を立てて、その実態がいかなるものなのか推測していくのが有効な方法の一つですが、考古学である以上、それをたんなる仮説にとどめることなく、検証していかなくてはならないからです。仮説の検証は、個々の遺跡のデータが基礎になることはいうまでもありません。

群馬県でも縄文後・晩期になると、赤城山麓に展開していた中期の集落の多くは姿を消していきます。そのなかで私が出会った前橋市の西新井遺跡は特異な存在といってよいでしょう。縄文後期前半から晩期終末に及ぶ遺物が採集され、古利根川の氾濫原に立地しているという状況に加えて、採集された遺物のなかに直径が５㎝を超えるような巨大な土製耳飾りが多数含まれている点に特異さがあらわれています。

ここではこの遺跡がどのようにして発見され、世に知られるようになったのか、小さいながらも発掘調査がおこなわれましたが、それらを踏まえてこの遺跡と遺物にどのような意義があるのか、先ほど述べました縄文文化と社会を研究する基礎をいささかなりとも提供できればと思い、文章にしました。

この遺跡が発見されたのは今から50年ほど前のことですが、実は私もその発見に多少なりとも関わりをもっています。その後、長らく遺物を採集し、宅地化の波にのまれまいかと心配して今でも帰省するたびに遺跡へと足を運んでいます。この文章は、いってみればこの遺跡のお守役が、自分史も兼ねてとどめておくものですが、たんにノスタルジックな理由からではありません。この遺跡はやがて消え去ってしまわないとも限りません。その日が来ないことを祈るのみですが、そのために遺跡の内実を後世に書き残しておかなくてはならないという、発見にかかわり、お守役を務めた者の、大げさに言えば使命感のようなものも後押ししてのことです。

１　西新井遺跡の発見

1960年代のはじめは、高度成長経済に入って間もないころで、農地改良や圃場整備などで大掛かりに田畑が整備されていました。前橋市の郊外、上沖町にもその波は及び、暗渠の設置や区画の整理などで大規模な工事が入ったようです。遺跡の発見は、市の土木関係の方々が測量などをおこなって掘削にかかったところ、土器や石器が出土したことをきっかけとします。関係者のお一人が兄の小学校の旧友のお父さんだったのです。自宅に持ち帰った遺物を旧友は学校に持っていきます。兄たちは当時小学４年生で、ちょうど社会科で日本の歴史を太古の昔から習い始めた時にあたり、拾ってきた遺物が話題になったそうです。そこで、遺跡に行ってみようということになり、小学１年の私を含めて出かけたのが、50年に及ぶこの遺跡とのつきあいのはじまりでした。

旧友の家の隣には、群馬大学で考古学を教えていた故尾崎喜左雄先生が住んでおられ、兄とともに遺物を見てもらい、いろいろなことを教えていただきました。私どもが当時の子供のおもちゃではないかといってコロコロ転がして遊んでいた丸い滑車形の土製品が耳飾りであること、遺物を拾ったところがどこか月日が経つうちに忘れてしまうので、拾った遺跡の名前と年月日を遺物に書いておくとよいことなど、とても親切に教えていただいたことをよく覚えています。

今、兄が遺物に注記した年月日で一番古いものを探しますと1963年６月となっていますが、学年からするとおそらく1963年の３月頃に拾いはじめたのだと思います。あいまいな記憶でしかありませんので、市の耕地改良の記録をたどってみないとなりません。

前橋市は地形と地質の特徴から、以下の四つの地域に区分されます。

１）北東部の赤城火山斜面
２）南西部の洪積台地
３）これに挟まれた沖積低地の広瀬川低地帯
４）現利根川氾濫原

遺跡は（３）の広瀬川低地帯に立地します。（１）の台地までの距離はおよそ500mあります。遺跡の東、およそ50mには700mほど南で桃ノ木川に合流する竜ノ口川が流れています。遺物が散布していたのは北と南におよそ60m隔てて一か所ずつ、それぞれ30mほどの範囲に広がっていました。南の地点を第１地点、北を第２地点と呼んでいます（図16）。標高は第１地点が104.5m、第２地点は106mです。第１地点はすぐ北の農道から段をつけて１mほど下がって平らになっていますが、水田の造成以前は、緩やかに傾斜した地形だったと思われます。

第２地点は現在群馬大学附属中学校の校庭の下になっていますが、盛り土がされているのでおそらく破壊されていないでしょう（図２）。それぞれの地点か

ら採集された遺物には、特段の違いはありません。

2　採集した遺物

⑴　採集した遺物の種類と数

遺物を採集し始めたころは、この場所の地籍を確かめることもせずに、上沖あるいは幸塚などと呼んでいましたが、のちに前橋市教育委員会の前原豊さんが調べてくださり、上沖町字西新井でしたので、西新井遺跡と呼ぶことにしました。

群馬県は二毛作地帯で、西新井遺跡は夏場は水田に、冬場は畠に利用されていました。秋に稲を刈り取るとさっそく天地返しをして畠作の準備をします。そして６月頃に麦を刈り取り、やはり天地返しをして初夏に水を入れて水田稲作の準備をします。遺物の採集は天地返しのあとがねらい目でしたので、秋から冬休みと春休みがかき入れ時でした。日曜日もせっせと出かけて中学３年までのおよそ10年間、採集した遺物も大変な数になりました。土器の破片は数百片、石鏃246個、スクレイパー（ナイフ）13個、打製石斧（土掘り具）23個、磨製石斧３個、磨石・石皿類（ドングリ類の製粉具）25個、石錘（魚とりの網のおもり）６個、土偶９個、土製耳飾り87個、土版・岩版（護符）２個、石棒（男性器模倣のまつりの道具）７個などです（図３）。

⑵　土器にみる遺跡の継続性と交流の一端

土器は、縄文後期初頭の称名寺Ⅰ式土器が１片あり、増えてくるのは縄文後期前半の堀之内２式あたりからです。もっとも多いのは後期後半の高井東式土器から晩期中葉の天神原式まででしょう。晩期終末の千網式土器もわずかに含まれています。西暦でいいますと縄文後期初頭が紀元前2300年ころ、縄文晩期終末が紀元前600年ころですので、どこかに移動してまた戻ってくることはあったかもしれませんが、およそ1700年間は利用され続けた遺跡であると言えましょう。

主体をなす後期後半から晩期前半は、南関東地方では安行式土器が用いられていました。晩期初頭は安行３ａ式と似たような土器が主体を占めますが、後期では高井東式という中部高地地方とも連絡した北関東地方に通有の土器型式が、晩期前半から中葉には安行３ｂ～３ｄ式に併行する天神原式というこれも固有の北関東地方通有の在地の土器型式が主体となります。晩期の粗製土器には土器をつくるときにできる粘土紐の積み上げ痕をわざと消さずに残した、これも在地の性格の強い土器が用いられました。

よその地方から運ばれた土器、あるいは模倣された土器には、東北地方の後期後半の瘤付土器や晩期の大洞Ｂ１～Ｃ$_2$式土器などがあります（図４）。近畿―東海地方の縄文後期終末のいわゆる橿原文様をもつ土器片も１片見つかりました。

⑶　食料の多角化

石皿や磨石が多いのはドングリ類の植物食が彼らの食生活を支えていたことを物語っていますが、石鏃の多さは狩猟が活発におこなわれていたことがうかがえます（図５）。東日本では縄文後・晩期に狩猟活動がさかんになりますが、西新井遺跡もその例に漏れないわけです。石鏃は長さが１㎝ほどのとても小さなものから６㎝に及ぶ大きなものまであります。鳥から、イノシシや二ホンシカなど多様な大きさの動物に備えたために大きさのバリエーションが豊かになったのでしょう。

魚をとる網のおもり、石錘もいくつか見つかりました。淡水魚をとっていたのです。石鏃のなかの小さなものは、鳥のほかに魚を狙った可能性は否定できません。南アメリカ南端のヤーガンという部族は、小さな矢尻をつけた弓矢で川の魚をとるそうです。

いずれにしましても、採集狩猟にかかわる食料資源の多角化が、道具のバリエーションの豊富さからうかがえます。では、彼らは農耕はやっていなかったのでしょうか。近年、土器をつくる時に表面に偶然混ざり込んだ植物種子などが焼けて抜け落ちた結果あいた穴にシリコンを入れて型どりし、それを電子顕微鏡で観察して、植物の種子の種類を同定する研究が進み、大きな成果があがっています。それによりますと、縄文中期の信濃地方などではダイズを栽培して食料にしていたことがわかってきました。その一方で、イネやアワなどの穀物は弥生時代を待たないと登場しないこともわかっています。西新井遺跡の土器の表面も観察して、穴を型どりしましたが、栽培植物は検出できませんでした。数が少ないこともありますが、生業の中心は自然のめぐみだったようです。

⑷　遠隔地との交易と社会の階層化

飛行機鏃と呼ばれる側面に段をもつ形の石鏃や五角形の石鏃など、形もさまざまですが、信濃地方や東海地方と共通する形のものがあるのは、その地方との交流の結果だと言えそうです。これは石材の点からも

いえることです。石鏃の石材は安山岩とチャートが多いようですが、信濃地方からもたらされた黒曜石製の石鏃が含まれていました。また、茨城方面からでしょうか、メノウやオパール製のもの、あるいは柄の部分にアスファルトが付着したものは新潟県域あるいは山形県域など日本海側からもたらされたものと思われます。磨製石斧のなかに赤い石材で大変優美なものがありますが、これなどは新潟県域の西部あたりからもたらされたものかもしれません。

兄の旧友が採集した遺物のなかに、ヒスイの勾玉がありました。これは新潟県の西部、糸魚川地域の小滝川流域でとれたものに違いありません。岩版が採集されましたが、これなどは白いやわらかい凝灰岩製のもので、東北地方から運ばれてきたものと思われます。土偶にも埼玉県域から出土した土偶と瓜二つのものが含まれていて、この地域からもたらされた可能性があります（図６）。

このように土器や石器あるいは土製品や石製品から、遠隔地との交易が盛んだったことが偲ばれます。そして、岩版やヒスイの勾玉はただ１点だけであり、遠隔地からの希少な品を手に入れる労力や、それを手に入れた人がほんの一握りであったことを考えますと、単純な平等社会といってよいか疑問が出てまいります。

⑸　通過儀礼と地位表示と出自表示

この遺跡を特徴づけるのは、何といっても100点に近い数発見された土製耳飾りです。滑車形の土製耳飾りは、縄文早期に鹿児島県域で生まれますが、すぐにすたれてしまい、再び登場するのが縄文中期の東日本です。縄文後期の終わりころから晩期にかけて、特に関東地方で大きくて優美な装飾のある土製耳飾りがさかんにつくられました。

西新井遺跡で採集された土製耳飾りから、いろいろなことがわかります。図７を見ると、文様のあるものとないものの区別や、文様があるものでもバリエーションが豊富なこと、そして文様のあるものもないものも大きさがいろいろであることです。図８は小さいものから大きなものまで並べたものです。小さいもので直径が１㎝ほど、大きなものでは８㎝に近いものまであります。大きさをグラフに落としてみると、直径にいくつかのピークのあることがわかります。そもそも土製耳飾りというのは、耳たぶに孔をあけて装着した装身具です。直径８㎝に達するものが本当に耳たぶに孔をあけてつけていたものなのか、疑われるかもしれません。しかし、非文明社会ではよくある身体装飾であり、何よりも実際に長野市宮崎遺跡から頭蓋骨の耳の部分から直径が５㎝ほどで重さが80ｇほどの大きな耳飾りが出土していますので、これが耳飾りであったことを疑うことはできません（図８）。

直径１㎝の耳飾りを耳たぶにあけたばかりの孔にいきなり入れるのは無理です。おそらく骨針のようなもので孔をあけてから木の枝などを刺して徐々に孔を広げて、１㎝に近くなった時点で土製耳飾りに変えたのでしょう。その後はさらに大きなものへと土製耳飾りは付け替えられていったことがグラフからわかります。そうしますと、木の枝から晴れて土製耳飾りに付け替えられるのは喜ばしいことだったはずです。縄文時代には、抜歯という現代に生きる我々にとっては恐ろしい習慣がありました。生前、健康な歯を抜いてしまう儀式です。虫歯や歯槽膿漏に悩む人は、なんてもったいないと思うかもしれません。上下合わせて10本ほど抜かれている人骨もありますから、成人式をはじめとする人生の節目でおこなわれた儀式であり、文化人類学などでは通過儀礼と呼ばれています。土製耳飾りもつけ始めから付け替えを経ていることからすると、通過儀礼の役割があったとみてよいでしょう。

文様のあるものとないものの違いは何でしょうか。文様のあるものにも装飾性が豊かなものとそうでないものがあります。勾玉などを引き合いに出して、縄文後・晩期には社会のなかに身分的な格差が生まれていた可能性を考えました。土製耳飾りにも、原始工芸の極致と表現してよいほど素晴らしい装飾のものがあります。破片ではありますが、似たものは西新井遺跡でも採集されましたが、ただ１点でした（図９）。これをつけることができたのは、身分の高い人だったのかもしれません。これほどではなくても、リングの内側にブリッジを渡した耳飾りは優秀です。西新井遺跡では直径が１㎝半ほどとごく小さなもので、ブリッジがついたものがあります（図10）。この意義を別の角度から見てみましょう。図11は抜歯の写真で、この人物はさらに上あごの切歯４本に切り込みを入れてフォークのようにしています。叉状研歯といいますが、これもごく限られた人になされた身体変更で、幼少期から切り込みを入れて青年になって完成させたようです。このことから、縄文晩期には身分的に固定した家系のようなものがあったのではないかとされています。そうであれば、ブリッジのついたきれいな耳飾りは小さ

い時から装着することが許された人物がいた別の証拠です。

図12の雲形の装飾も優美です。これも特別の者が身につけた耳飾りかもしれませんが、また別の役割があった可能性を考えてみましょう。それは、雲形の装飾が信濃地方を中心にさかんにつけられた文様だという点です。静岡県域にも広がります。土製耳飾りは遺跡の一角から捨てられた状態で多量に見つかることがよくあります。何らかの集団的な儀礼がおこなわれた後に、廃棄された可能性があります。その際の集団儀礼は、親しい関係をもっているがめったに往来のないような遠隔地の人を招いておこなわれた場合もあったでしょう。石鏃の石材や形のところでお話ししたように、信濃地方などは石器石材の交易などで結びつきをもっていた地域でした。その地方からやってきた人々は、つけている耳飾りで区別できたのではないでしょうか。図13は千葉市加曽利貝塚から出土した同じ時期の耳飾りです。違いが際立っています。

土製耳飾りの文様には身内とよそ者を識別するための表示の意味、すなわち出自表示の目的があったのではないでしょうか。西新井遺跡の土製耳飾りの文様には雲形文が多いので、信濃地方と密接な関係を結ぶなかで土着化して自分たちの表示として定着していった可能性も考えなくてはなりませんが。

土製耳飾りをいろいろと分析して、このような役割があったのではないかということを図にしてみました(図14)。親族組織を基盤として、交易や婚姻などで結びついた他の集団との間に、儀礼などを通じて密接な関係をもちながら、自他を区別していきます。それとともに、身内のなかにも格差が生じていったという、複雑な社会組織を構成していった縄文後・晩期社会のあり方を、土製耳飾りは示しているのではないでしょうか。

大学に入学して考古学の専攻に入り、教授であった市原壽文先生に採集した遺物をリュックサックに入れて持って行き見ていただいたところ、土製耳飾りがたくさんあることに目をとめられました。といいますのも、先生は静岡県清水天王山遺跡という縄文後・晩期の遺跡を戦後間もなく調査し、土製耳飾りを多数発掘して報告されていたからです。先生のアドバイスもあって、私の卒業論文は縄文時代の土製耳飾りとなり、つたないものですが活字にもなりました。また、先生の80歳の記念論集にも西新井遺跡の耳飾りを論文にして献呈させていただいたのですから、こちらも40年に及ぶ長いおつきあい、ご指導の結果と言ってよいでしょう。

3　西新井遺跡の発掘調査

表面採集というのは地下に眠る遺跡から遺物が地表に出てきたものを拾う作業で、それはそれで楽しく、西新井遺跡の場合は期せずして農家の方が耕作のたびにそれを手伝ってくれていたわけです。あるときなど、遺跡に行ってみると畦に巨大な石棒（図15）がドーンと置いてありびっくりました。しかし、地中の秘密を知りたいのが考古学に憑かれたものの性というものです。考古学を学習していくうちに、縄文時代で沖積低地に立地するのはそれほど多くないことも知り、なぜこのような土地を選んで生活していたのか不思議に思うようになりました。遺跡に行くと耕作の過程で地面の下から出てきた大きな川原石があぜ道にゴロゴロと捨ててありました。農家の方にとってはさぞ邪魔だろうと思うのですが、地中がどうなっているのか頭の中を駆け巡っていました。

文化財保護法のもとで遺跡は保護されていて、やたらに発掘はできないことになっています。私が小学生の頃は、西新井遺跡は遺跡として登録されておらずに、文化財保護法の及ぶところではなかったのですが、そんなことを小学生で知っているわけでもなく、ただよそ様の田畠を荒らしてはいけないという常識が掘ってみたいという衝動をかろうじて抑えていました。しかし、その誘惑には抗しがたく、あるとき移植ごてを持参して少し掘ったことがありました。さっそく田畠の持ち主の関知するところとなり、こんな悪さをするのは附属小の子に違いないということで、つきとめられて教室にまで怒鳴り込んできたことがありました。この一件以来、すっかり震え上がってしまい、二度と掘るまいと心に決めたのです。考古学の仲間は膨大な量の採集遺物を見て、「相当掘ったな」と言われますが、長い年月の表面採集の結果なのです。

尾崎先生は、『前橋市史』に「なお、幸塚町の北部白川右岸の水田地帯で、土地改良工事中、多数の土器片や石器の出土を見た。土器は主として縄文後期のものであるが、精巧な耳飾りもあり、そこは利根川の旧流路の一つである桃ノ木川にも近く、低地であるので、その遺跡の性格は判断しがたい。白川の流れによる漂流物にしては狭い範囲に多数出土しているし、住居跡とも考えられない。」と記されているのが西新井遺跡のことです。兄の同級生の親御さん、あるいは私

どもが持参した資料にもとづいたものでしょう。

正々堂々と地中の秘密を解き明かす機会が、ようやくやってきました。採集した地点から100mほど西に行ったところ、幸塚町になりますが、民間の老人ホームが立つことになり、2013年12月に前橋市教育委員会の指導のもと、（有）毛野考古学研究所により発掘調査がおこなわれました。私も数日間、学生を連れて発掘に参加させていただいたのですが、かつていっしょに採集していた上原清君、小野久米夫君、また最近になって歴史研究に目覚めた平方敦君など同級生も来跡し、移植ごてで積年の思いを晴らしたわけです（図18）。

この地点のほかにもう一箇所縄文後期の遺物が採集された地点が西北にあり、そこが第３地点、今回の調査地が第４地点とされました（図16）。調査されたのはエレベーターの空間だけ６×６ｍという狭い範囲でしたが、出土したのは縄文後期から晩期に及ぶ遺物で、とくに晩期の遺物が多く見受けられました。なかには遮光器土偶という東北地方固有の中空の土偶を見よう見まねでつくった胴体の部分の破片も出土し、皆を驚かせました（図17）。土製耳飾りが１点も見つからなかったのは不思議なことです。調査面積が狭かったためかもしれませんが、あるいは第１・第２地点との間に役割の違いのようなものがあったのでしょうか。

発掘調査の結果、遺物を包含している層の下から大きな川原石がびっしりと出てきて長い間の疑問が解決し、清々としました（図19）。川原石は大小さまざまで、西北から東南という一定の方向に重なるように堆積していました。これは河川における礫のあり方と等しく、川筋の流れの作用によるものとのことです。ここは古利根川ないしその支流の氾濫原であり、流れが変わって離水した後に縄文人が利用していたことがわかり、第１・第２地点も似たような状況が想像できたのです。ちょうど群馬県庁の裏手の利根川の河川敷を連想すればよいでしょう。

問題は氾濫原の利用の理由です。大きな石皿や磨石など重い道具がかなり採集されたことを思うと、一時的な利用ではなく、ある程度定着した暮らしがあったはずです。尾崎先生が西新井遺跡のことを書かれた1971年ころは、縄文時代の遺跡といえば高燥な台地の上というイメージが強く、河川利用の低湿地、たとえば埼玉県川口市赤山陣屋遺跡など河川を利用してドングリ類の水さらしをおこなうような遺跡の調査は限られていましたので、お手上げ状態だったのも無理はありません。

群馬県域では縄文後・晩期になると、こうした河川の利用がさかんになります。最近調査された東吾妻町唐堀遺跡もそのひとつで、トチノキの実の殻がおびただしく堆積していました。ドングリ類の加工所の一角だったのでしょう。縄文後・晩期になると気候が寒冷化して、それまで盛んに利用されていたクリにトチが加わります。トチノキは低地付近にも生えており、その実は水さらしなどアク抜きをしないと食べられませんので、低地の河川が大いに利用されたのです。東日本を中心にアク抜きのための水さらし場遺構はあちこちでみつかるようになりました。

また、みなかみ町矢瀬遺跡では河川敷で川原石を利用しながら配石墓を構築していました。唐堀遺跡でも自然に堆積した川原石を動かして、何らかの石組施設をつくっています。今回の調査では確認できませんでしたが、西新井遺跡でも、場所によっては配石墓などの儀礼の施設をつくっていた可能性があります。西新井遺跡の地中の秘密はまだまだ解き明かされていないので、今後の調査に期待することにしましょう。

今回の調査で試みたことの一つに、土壌中から花粉の化石やプラント・オパールという植物のガラス質の細胞化石を回収して分析し、どのような植物が生えていたのか、またどのように利用していたのか推定することでした。そのために（株）パレオ・ラボの佐々木由香さんにお越し願って壁面の土壌をサンプリングしてもらいました。例の縄文農耕もその解明の糸口がつかめるかもしれないと思ったからです。

西新井遺跡の地表まで堆積した土層（図20）は８つにわけられました。下からⅧ層が自然堆積の川原石の礫層で、遺跡の基盤になる層です。その上のⅦ層が湿り気を帯びた黒色の土層で縄文後・晩期の遺物を包含する層です。厚く堆積しています。Ⅵ層が赤茶色で、浅間山の噴火で噴出したＣという軽石を含む層で、古墳時代の４世紀以降のもの、Ⅴ層が黒いシルト質の土壌で、直上の白いⅣ層が1108年、平安時代の末期に噴火した浅間山のＢという軽石の層ですからⅤ層はそれ以前の地層です。Ⅱ・Ⅲ層はＢ軽石を含んだ平安時代以降の地層です。

酸性の土壌で花粉は分解されてほとんど残っていませんでしたので、プラント・オパールだけに頼らざるを得ないのですが、縄文時代のⅦ層にはイネのプラント・オパールはまったくありませんでした。それが出現するのがⅥ層の上部で、Ⅴ層すなわち平安時代の層

から多量のイネのプラント・オパールが見つかって、水田がつくられていたことがわかりました。Ⅱ層では減少してしまいますので、火山噴火はのちのちまでも影響を及ぼしていたようです。

第４地点の遺物のなかに耳飾りはありませんでしたが、遺跡の年代などそのほかの傾向は第１・第２地点とさほど違いはありません。そこで、今回の調査で気がついたことを一点お話ししておきましょう。図16を見るとわかりますように、遺物の分布範囲が人々の活動の拠点を示しているとすれば、それほど広くない範囲の活動の拠点がほぼ等間隔に四か所あったことになります。またそれが、環状をなしていることも気になります。縄文前期以降、関東地方では環状集落がさかんに形成されることを冒頭にお話ししました。環状集落の成り立ちを分析した國學院大學の谷口康浩さんによりますと、もともとは二つのグループで一つの集団を構成していたムラが、やがて肥大化するとともに、四つあるいはそれ以上のグループに分かれて環状のムラをつくるように成長を遂げていったというのです。このようないくつかのグループに分かれる集落構造を分節構造と呼んでいます（図21）。これは社会学者のデュルケームが、ミミズなど環節構造をもつ動物から名付けたものです。分節単位のそれぞれは等質の傾向があります。アメリカのボロロ族などに典型的な二分された社会構造を双分制と呼んでいますが、双分制社会では分節集団どうしは一般的に相互扶助を旨として、そのなかで婚姻関係を結んでいくようです。分節の単位の実態はよくわかりませんが、血縁関係を基本にした出自を等しくして共通の祖先をいただく氏族のような出自集団であった可能性が高いと思われます。

４　西新井遺跡の意義

ここまでお話ししてまいりますと、西新井遺跡はエイムスさんのいう複雑採集狩猟民の定義の多くに当てはまることに気づかれたことと思います。プラント・オパール分析や土器圧痕のレプリカ調査の結果、ほかの縄文時代の遺跡と同様に稲作など穀物栽培の証拠はなく、かれらが採集狩猟民であったことはまずもって確かでしょう。生業関係の道具のバリエーションは、自然界のあちこちから食料資源を求めていたことが分ります。土製耳飾りや装飾性が豊かな各種の儀礼の道具は、物質文化に対する技術水準の高さをうかがわせます。輝石の存在、土器や石鏃の系譜などから、遠隔地との交易がおこなわれていました。環状集落の構造からすれば、比較的平等な社会が成り立っていたことがうかがえます。縄文時代のほかの遺跡の墓は、副葬品が多数供えられていたものもまれにありますが、弥生時代の一部の地域に見られる巨大な墳丘墓、古墳につながるような高塚の存在は明らかでないことからも、縄文社会は支配・被支配のような権力構造をもっていなかったといえましょう。しかし、耳飾りのところで触れましたように、格差は生じておりますから、社会的な不平等、あるいは社会階層化は存在していた可能性が考えられます。

広い面積の発掘調査がおこなわれていない現在、竪穴住居は見つかっておらず、人口密度も確かめるすべはありません。また集中して確保した食糧資源があったのかどうか、食糧貯蔵があったのかどうかも発掘調査で植物遺体や土坑などが見つかって初めて明らかになることでしょう。未知の事柄も多いのですが、西新井遺跡がいわゆる複雑採集狩猟民としての性格をもつことは間違いありません。これはなにも西新井遺跡ばかりでなく、東日本の縄文後・晩期の集落であれば普通に兼ね備えている性格でもあります。

さらに遺跡の全貌が明らかになることを望みますが、現在の状況だけからでもまだその性格をさらに深く研究する手立てがあることを紹介してこの文を終わりにしたいと思います。

複雑採集狩猟民の定義のなかに、世帯の重要性がありました。世帯が社会活動や組織の基盤になるのは疑いないことなのですが、世帯が寄り集まって集落ができあがっていると、そのなかにもあるいはよその集落との間にも人々の関係性を明確にする必要が生じてきます。狩猟場を利用する権益の調停や婚姻を結ぶなど、その必要性はいろいろなものがあったに違いありません。その時に基礎になるのは血縁的な結びつきを基礎にした出自集団であり、親族組織であったと思われます。それがどのような仕組みで構成されていたのかという問題は、考古学では手に負えないものがあり、文化人類学などに頼って類推してがまんするしかなかったのですが、ある方法でそれに切り込んでいったのが、春成秀爾さんでした。その方法とは、抜歯の型式です。

抜歯は図11に代表されるように、縄文晩期に複雑化していろいろなタイプが生まれますが、下顎の歯の抜き方によって４Ｉ系（切歯４本抜くタイプ）と２Ｃ系（犬歯２本抜くタイプ）に分かれ、それは婚姻時の抜き方だと春成さんは考えます。一種の出自表示であ

り、伴う装身具の優劣でそれぞれが集落生え抜きなのか、婚入者なのか、そして男が嫁ぐのか女が嫁ぐのかという規定にまで推測を広げていったのです〔春成2002〕。しかし、人骨の年代測定の結果、二つのパターンが時期の差ではないのかという批判が生じて、盤石と思われた抜歯による社会組織の研究の難しさが明らかになってきたのです〔山田ほか2016〕。その難しさは、抜歯そのものからは細かな年代がわからないことによります。考古学は年代学でもありますから、究極には１年単位で物事の移り変わりが議論できれば本当はありがたいのです。その点、土器はめまぐるしい文様などの変化によって、せいぜい四半世紀くらいですが、変化を追うとてもよい素材になっています。

そこで注目できるのが、耳飾りです。土器と同様に文様の変化が大きいのと、集団によって文様などに何らかの違いがありそうなことはすでにお話ししたことです。したがいまして、出自表示物の可能性がある耳飾りの変遷や地域性、集団間の違い、様式の変化などをつぶさに追うことができれば、この問題に迫ることができるのではないかと思うわけです。

耳飾りの総合的な研究は、まだおこなわれていません。西新井遺跡から出土した耳飾りを手始めにそれに着手して、私の長年の研究の総決算とするのが老後の楽しみです。それがこの遺跡の意義を引き出すことにつながるのではないでしょうか。

【参考文献】

ケネス・Ｍ・エイムス＋ハーバート・Ｄ・Ｇ・マシュナー著、佐々木憲一監訳、設楽博己訳　2016　『複雑採集狩猟民とはなにか－アメリカ北西岸の先史考古学』雄山閣

尾崎喜左雄　1971　「古代人の生活　縄文土器」『前橋市史　第１巻』129～144頁のうち131頁、前橋市

設楽博己　1984　「前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料（上）」『群馬考古通信』第９号、１～22頁、群馬県考古学談話会

設楽博己　1983　「土製耳飾」『縄文人の精神文化』縄文文化の研究第９巻、206～217頁、雄山閣

設楽博己　2013　「群馬県前橋市上沖町西新井遺跡の土製耳飾り」『日本先史学考古学論集－市原壽文先生傘壽記念－』101～129頁、六一書房

春成秀爾　2002　『縄文社会論究』塙書房

山田康弘・日下宗一郎・米田穣　2016　「東海地方縄文晩期における抜歯習俗の再検討」『一般社団法人日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』206～207頁

有限会社毛野考古学研究所編　2014　『西新井遺跡第４地点　老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』前橋市教育委員会

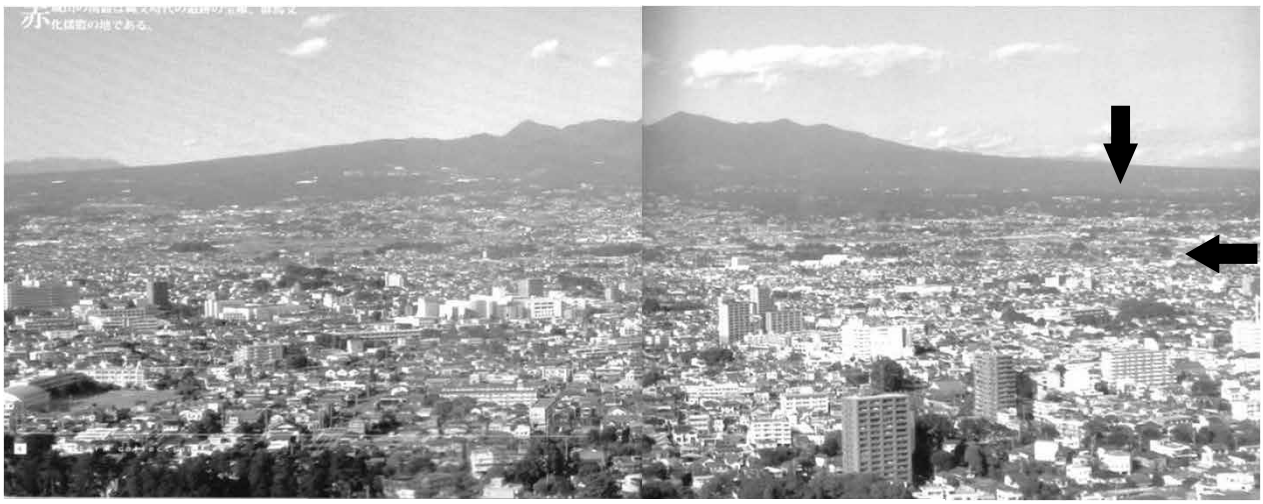


図1　赤城山麓に広がる前橋の市街地　矢印の交わるところが西新井遺跡

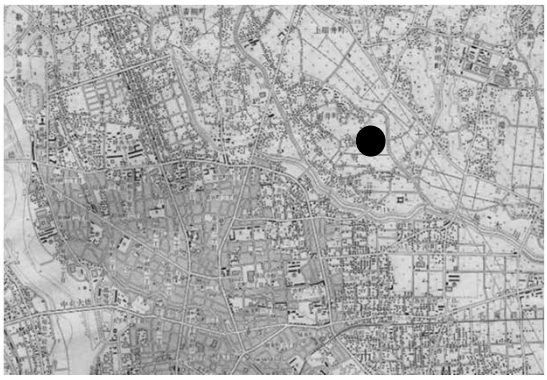


図2a・2b　西新井遺跡の近景と地図　　遠くに見えるのが赤城山で、写真の左端に群馬大学付属中学校の校舎が写る

図3　採集した遺物（末松正義氏撮影）

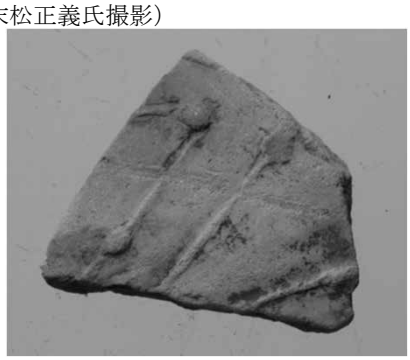


図4　左から縄文後期後半の高井東式土器の把手（幅3.4cm）、赤い色の残る縄文後期東北系の瘤付土器（幅3.8cm）、縄文晩期前半の大洞Ｂ－Ｃ式土器を模倣した土器（幅10.3cm）で、福島県域の影響がうかがえる（末松正義氏撮影）

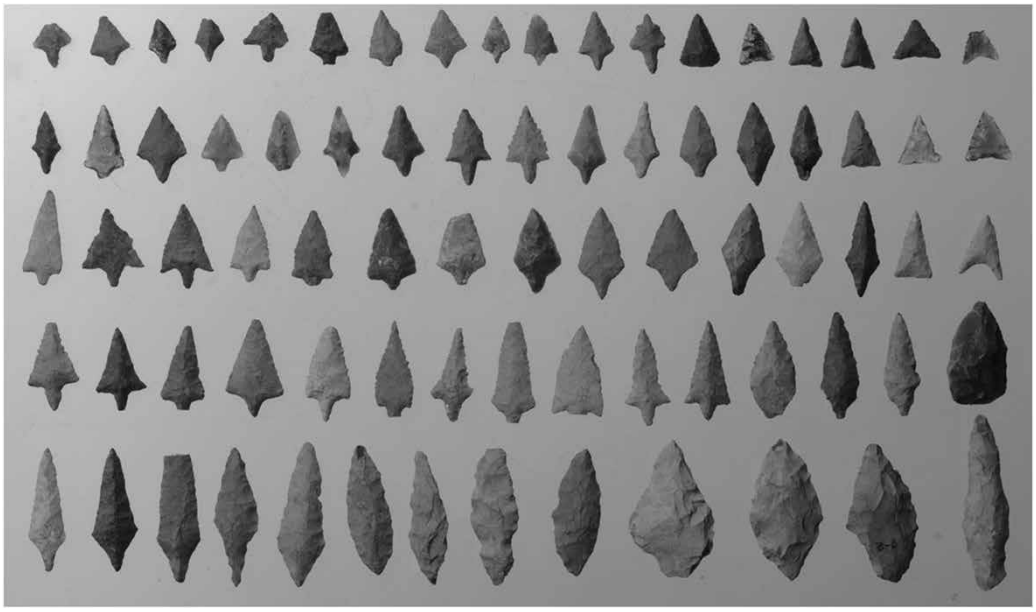


図5　いろいろな形と大きさと石材の石鏃（末松正義氏撮影　左上長さ1.5㎝、右下長さ5.7㎝）

図6　縄文後・晩期のミミズク土偶　左（縦7.1㎝）と右から2番目（縦6.7㎝）は西新井遺跡（末松正義氏撮影）
左から2番目は埼玉県真福寺貝塚（高さ20.2㎝）、右は埼玉県馬室遺跡（高さ18.2㎝）

図7　西新井遺跡の土製耳飾り（末松正義氏撮影・右上径7.8㎝）

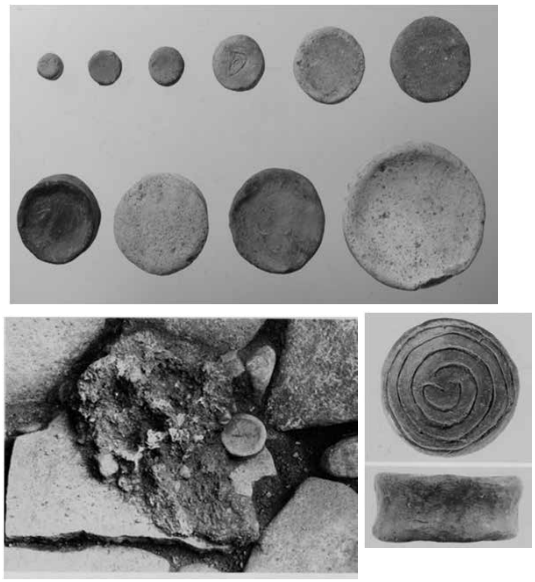


図8　西新井遺跡の耳飾り（末松正義氏撮影
左上径1.3㎝、右下径7.8㎝）と宮崎遺跡の耳飾り（径5.5㎝・重さ78ｇ）

図9　西新井遺跡の透かし彫りの耳飾り（末松正義氏撮影・幅3.3㎝）と群馬県千網谷戸遺跡の類似品（径8.25㎝）

図10　西新井遺跡のブリッジのついた耳飾り（末松正義氏撮影・径2.0㎝）と新潟県樽沢開田遺跡の土製耳飾り

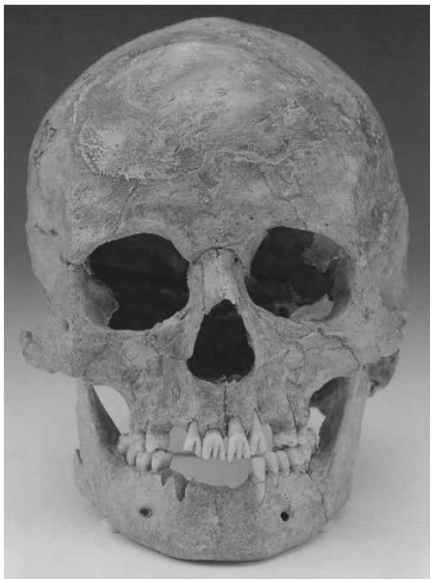


図11　愛知県保美貝塚の叉状研歯人骨

図12　西新井遺跡の雲形文のある耳飾り（末松正義氏撮影・径4.6㎝）と長野県エリ穴遺跡の土製耳飾り

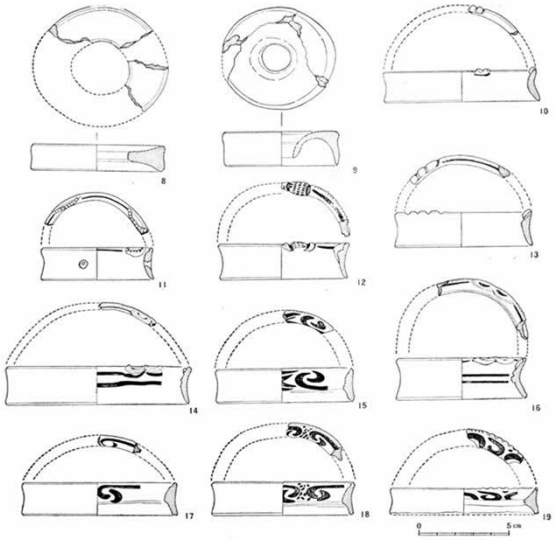


図13　千葉県加曾利南貝塚の土製耳飾り

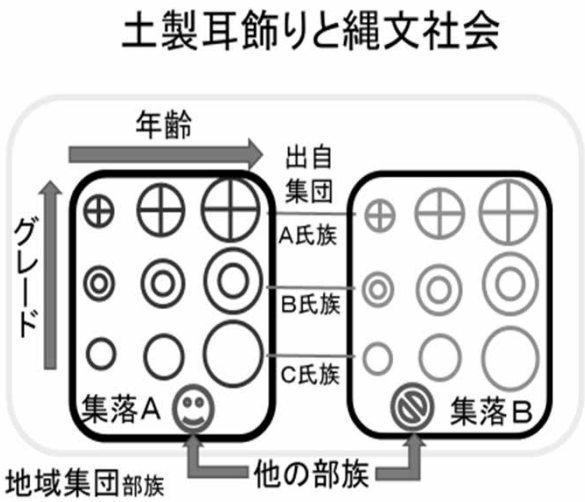


図14　土製耳飾りと縄文社会

図15　西新井遺跡の石棒（末松正義氏撮影・長さ52㎝）

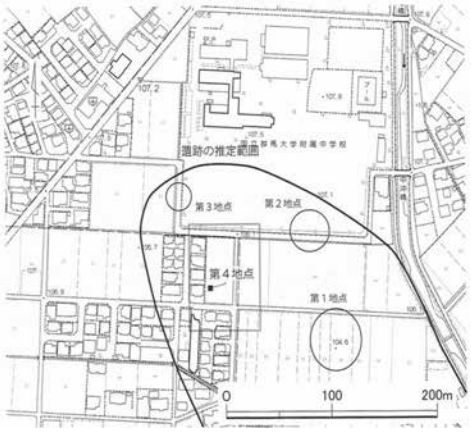


図16　西新井遺跡の地図

図17　西新井遺跡の遮光器土偶と青森県亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶

図18　西新井遺跡第4地点の発掘調査

図19　旧友との発掘

図20　西新井遺跡の地層

図21　環状集落の分節構造（谷口康浩2005『環状集落と縄文社会構造』学生社より）

3　考古学講座2017「赤城と榛名山麓の古代を学ぶ」野外学習編

榛名山東南麓の古墳めぐりバスツアー

深澤敦仁（群馬県立歴史博物館）

1　はじめに

群馬県は１万3000基を超える古墳があることが、群馬県教育委員会が実施した「古墳総合調査」の結果、最近明らかになりました。

これらは、東日本最大の前方後円墳、墳丘長210mの太田天神山古墳から、墳丘径10m未満の円墳までと、その規模をとってみても様々です。そのひとつひとつには、いずれも、当時の人々の思いが託されており、死者を弔う気持ちとともに、末永く、安心した社会を維持しようとする気持ちも古墳には託されていたであろうことも、最近は積極的に唱えられています。そうした意味では、全ての古墳に同じだけの重要性と歴史的意義があるわけです。

本日、見学する「榛名山東南麓の古墳」は、そうした同等の価値を持つ古墳の中でも、とりわけ、５世紀以降の群馬の発展を辿ることのできる古墳がそろっています。

５世紀の群馬県は、渡来文化を積極的に取り入れ、全国でも有数の発展を成し遂げた地域のひとつとしてあげられます。さらには、「群馬」という県名の由来とも言える「馬文化」がこの地に定着したのもこの頃がはじめと言われていますので、まさに「群馬のルーツを辿るツアー」とも言えるかもしれません。

2　南下古墳群（北群馬郡吉岡町南下）

南下古墳群はこの地域を代表する後・終末期群集墳で、Ａ～Ｆ号古墳の存在が確認されています。昭和24・30・45年には、群馬大学によって発掘調査され、さらに、昭和52・54年には、松本浩一・櫻場一寿・右島和夫氏らによってＡ・Ｅ号古墳の截石切組積石室の測量調査が行われ、截石各所の朱線の存在を公表するに至っています。

南下Ａ号古墳（約27m：円墳）は、近年では石室内への立ち入りが制限されており、本日は石室内を見学することはできませんが、平成５年12月に吉岡町指定史跡になった終末期古墳です。ほぼ完存する截石切組積横穴式石室を持ち、さらに、県内では希少事例である朱線が玄室内に部分的に残存しています。

群馬県古墳総覧

榛名山東南麓の古墳

南下古墳群

南下Ｂ号古墳（約30m：円墳）は、残存状況のよい両袖型横穴式石室をもつ古墳です。この古墳も、平成５年12月に吉岡町指定史跡になりました。

なお、南下古墳群の南南西約1.6㎞には、平成５年に吉岡町教育委員会による発掘調査によって、その実態が明らかになった、群馬県内唯一の八角形墳である三津屋古墳（対角長23.8m：八角形墳）があります。この古墳は、平成７年３月に県指定史跡になり、全国的にも希少な存在感を放つ終末期古墳です。

南下古墳群

３　高塚古墳（北群馬郡榛東村新井）

高塚古墳は、この地域のみならず、群馬県地域を代表する前方後円墳のひとつです。昭和34・35年に群馬大学によって発掘調査が実施され、墳丘長60mの前方後円墳の詳細が明らかにされました。墳丘の一部が榛名伊香保テフラ（Hr－FP）に覆われていることからは、この古墳がその噴火以前の築造であると判明している点も重要といえます。当時の発掘調査時には、墳丘の形象埴輪類や円筒埴輪列が大量に出土しました。武人埴輪など、その一部は、群馬県立歴史博物館に寄託収蔵されています。埋葬施設は、全長10.6mの両袖型横穴式石室であり、群馬県地域に新たな葬制としての横穴式石室が導入されたのちに、いち早く大型・定型化した横穴式石室としても有名です。高塚古墳の横穴式石室は、大きな石材を用いた石室の全貌がつぶさに見学できる数少ない石室でもあります。

高塚古墳

なお、平成24年３月、高塚古墳から北約１㎞の地点、吉岡町南下で墳丘長約60mの前方後円墳「大藪城山古墳」の存在が明らかになりました。数多くの前方後円墳が存在することで知られる群馬県地域の中でも、高塚古墳は標高約170mの位置に築かれており、大藪城山古墳（北群馬郡吉岡町）とともに県内では最も北に位置する前方後円墳のひとつとして知られています。

昭和34年８月には、群馬県指定史跡になりました。現在は、群馬県林業試験場敷地内にあるため、通常の見学の際は事務室への連絡が必要です。

高塚古墳石室

４　北谷遺跡（高崎市冷水町・引間町）

北谷遺跡は、三ツ寺Ⅰ遺跡と並ぶ、規模と歴史性を有する古墳時代豪族居館跡です。平成12年に発見され、三ツ寺Ⅰ遺跡の発見以来の本格的な豪族居館として注目されました。その後の発掘調査でその規模や時期等の情報が明らかにされていきました。

平面規模は一辺約90mの方形であり、各辺には張り

北谷遺跡

出し部を持つことが確認されています（南側は未確認）。居館を取り囲む濠は幅約30m（あるいはそれ以上）もあり、まるで、大型古墳の周堀のようです。この濠の中には、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA）及びその洪水堆積物が堆積していることから、この居館の機能していた時期は、５世紀後半から末までと考えられます。

平成17年７月に国指定史跡になりました。居館内部の発掘調査は大型竪穴建物の存在など、ごく一部のみが明らかにされていますが、それ以外は未着手で有り、今後の発掘調査に期待が寄せられます。

５　三ツ寺（みつでらいち）Ⅰ遺跡（高崎市三ツ寺町）

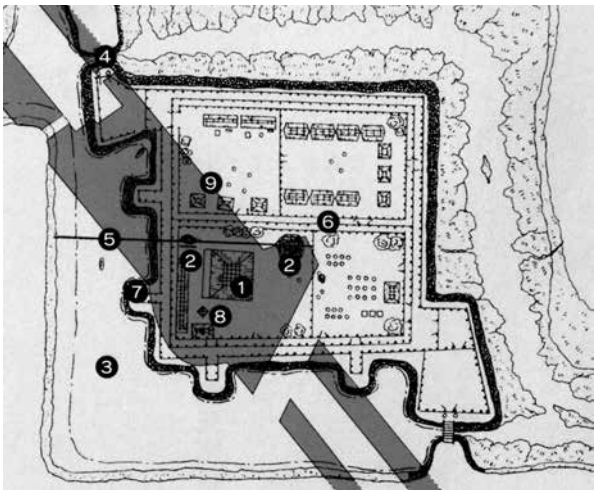
三ツ寺Ⅰ遺跡は、日本を代表する古墳時代豪族居館跡のひとつです。昭和56年に上越新幹線建設に伴う発掘調査でその一部が発見されました。中世城館を彷彿とさせる方形遺構の検出でしたが、それを巡る幅30m以上にも及ぶ濠を埋めている土層には榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA）及びその洪水堆積物が堆積していることが確認され、この遺構が５世紀後半から末に機能したものであることが判明し、中世城館ではないことが明らかになりました。この発見以前には、こうした古墳時代遺構の発見はなかったことから、その性格付けには、当時相当議論が交わされたようですが、最終的に、「古墳時代の豪族居館」として公表されたとのことです。それまで、古墳時代豪族の存在は全国、特に近畿地方を中心にその研究が進んでいましたが、その居所となる明確な調査事例はなかったことから、この三ツ寺Ⅰ遺跡の発見のニュースは全国的の研究者に衝撃を与えました。

現地をみるとおわかりのように、この豪族居館はまだ一部が発掘調査されたのみであり、半分以上は未発掘のまま、当時の居館の構造を現在の地形に残したまま存在していることは驚きです。

６　井出地区（いでちく）遺跡群（高崎市井出町）

井出地区遺跡群は、高崎市教育委員会が現在発掘調査継続中の遺跡です。通常、発掘調査中の遺跡は、教育委員会等の調査主体が、「遺跡現地説明会」と称し、日を決めて地域住民に公開しますが、本日は特別に発掘調査中の遺跡を見学させていただけることになりました。

群馬県は古墳時代に３度の大噴火による厚い降灰がありました。その１回目は西暦300年頃の浅間山噴火であり、この時の火山噴出物（以下、テフラ）を「浅間Ｃテフラ（As-Ｃ）」と言います。２回目は、西暦500年頃の



三ツ寺Ⅰ遺跡模式図

三ツ寺Ⅰ遺跡

井出地区遺跡群

井出地区遺跡群

榛名山噴火であり、この時のテフラを「榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA)」と言います。３回目の噴火は西暦500年以降550年以前の榛名山噴火であり、この時のテフラを「榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP)」と言います。この３回の噴火によるテフラで覆われた水田跡が重層的にかつ良好な残存状況で確認できるエリアは群馬県でもこの地域に限定されると考えられます。その意味では、目の前で検出されている水田面は極めて貴重な古墳時代遺構といえます。

なお、この遺跡のすぐ北西には県立高崎北高等学校がありますが、今から30年以上前にこの学校の建設に伴う発掘調査でこの３つのテフラで覆われた水田跡が重層的に発見されました。遺跡名は同道遺跡といいますが、この同道遺跡と同様の内容をもつ遺跡が、井出地区遺跡群ということになります。同道遺跡発掘当時では馬の蹄痕跡などの存在は明らかにされていませんでしたが、井出地区遺跡群では、テフラ下の水田面から多数の馬の蹄跡も検出されており、検出される遺構情報は同道遺跡よりも増えています。

（※なお、当日は発掘調査担当者である、高崎市教育委員会文化財保護課の山本ジェームズさんにその調査概要を解説してもらいました。）

井出二子山古墳

保渡田八幡塚古墳

保渡田八幡塚古墳

保渡田薬師塚古墳

7　保渡田（ほどた）古墳群（高崎市保渡田町・井出町）

保渡田古墳群は、５世紀後半～末に築造された大型前方後円墳３基で構成される古墳群です。

井出二子山古墳は、昭和５年に東京帝室博物館、昭和46年に群馬県教育委員会、昭和59年に群馬町教育委員会（当時)、平成15～17年に高崎市教育委員会が発掘調査を実施し、その内容を明らかにしています。中島を有する周堀を伴う墳丘長108mの前方後円墳であり、埋葬施設には凝灰岩製の舟形石棺を採用しています。副葬品としては、金銅製冠または履、金銅製馬具、甲冑等多数があります。墳丘や区画内からは円筒埴輪や形象埴輪群、中島からは須恵器等が出土しています。５世紀後半の築造であり、保渡田古墳群中、最初に築造された首長墓です。

保渡田八幡塚古墳は、昭和４年に福島武雄氏、平成５～８年に群馬町教育委員会（当時）が発掘調査をし、その内容を明らかにしています。中島を有する周堀を伴う墳丘長96mの前方後円墳であり、埋葬施設には凝灰岩製の舟形石棺と竪穴式小石槨が存在します。副葬品としては甲冑や馬具、鉄製農工具や鉄鏃、玉類などがあります。墳丘からは樹立されていた円筒埴輪類のほか、中堤に設置された区画内から、形象埴輪群

がまとまって出土、中島からは須恵器等が出土しています。５世紀後半～末の築造であり、井出二子山古墳に続き、築造された首長墓です。

この２つの前方後円墳、井出二子山古墳と保渡田八幡塚古墳では、その被葬者が朝鮮半島との対外交流を実現させた地域首長であることが想定されます。

なお、もうひとつの前方後円墳である保渡田薬師塚古墳は昭和63年に群馬町教育委員会（当時）、平成16年に高崎市教育委員会が発掘調査を実施していますが、整備に伴う発掘調査は実施されていません。墳丘長105mの前方後円墳であり、埋葬施設には凝灰岩製の舟形石棺が採用されています。５世紀末の築造であり、保渡田八幡塚古墳に続き、築造された首長墓です。

保渡田３古墳はいずれも、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）降下以前の築造であり、南西約１㎞にある三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族居館とは同時期の存在です。このことからは、保渡田古墳群は、三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族の奥津城であると考えられています。

昭和60年９月に保渡田古墳群として、国指定史跡になりました。平成10年春には、サイトミュージアムとして、かみつけの里博物館がオープンしました。

保渡田八幡塚古墳・王の儀式

ガイダンス施設・上野国分寺

８　上野国分寺跡（こうずけこくぶんじあと）

（高崎市東国分町・引間町／前橋市元総社町）

上野国分寺は、天平13年（＝741年）、聖武天皇による国分寺・国分尼寺建立の詔により、建立された寺院です。国分寺は全国68ある、国ごとに造られたとされていますが、上野国分寺は、これまでの発掘や研究の成果により、750年頃に建立されたということが明らかにされ、全国でも早い段階に建立された国分寺及び国分尼寺といえます。

大正15年10月に国指定史跡になりました。昭和55年から63年まで、群馬県教育委員会が発掘調査を開始し、平成６年までに保存整備を行ってきました。平成24年からは群馬県教育委員会によって発掘調査が再開され、中門や回廊の発見など、新たに加わる情報によってその全貌がより一層明らかにされつつあります。

東西規模約220m、南北規模約235mであり、築垣で囲まれていました。現在では、塔や講堂等が基壇と礎石が復元されています。なお、南大門の南東にはガイダンス施設「上野国分寺館」があります。

上野国分寺七重塔

８　山王廃寺（さんのうはいじ）（前橋市総社町）

山王廃寺は、７世紀後半に建立された東日本屈指の

山王廃寺

地方古代寺院跡です。近年の前橋市教育委員会による発掘調査により、約80m四方を回廊に囲まれた寺院であることが判明しました。北には講堂。その南に塔と金堂が並ぶ、法起寺式と呼ばれる伽藍配置をしています。

世界の記憶国内候補（ツアー当時）である上野三碑を構成する山上碑（国特別史跡）に刻まれている「放光寺」とはこの山王廃寺であることが、昭和56年の発掘調査で出土した文字瓦の存在から明らかになりました。

この廃寺は、塔心礎や石製鴟尾、石製根巻石などが今もこの地に残っていることがすばらしく、約1300年前の最先端の石加工技術を目の当たりにできます。さらに、平成９年にはこの地のすぐ西で、塑像片が3000点以上も発見されました。これらの塑像は、国宝である法隆寺五重塔の塑像群と類似し、その技術は当時の国内では最高峰のものと考えられています。こうしたひとつひとつの新たな発見によって、山王廃寺の歴史的価値はより一層高くなっています。

昭和３年に「山王塔阯」として国指定史跡になりましたが、平成20年に追加指定も含めて「山王廃寺跡」に名称変更されました。

9　宝塔山古墳（前橋市総社町）

宝塔山古墳は、総社古墳群では最大の方墳であり、７世紀後半の築造と考えられます。昭和43年に前橋市教育委員会と群馬大学、平成20・21・23年に前橋市教育委員会が発掘調査した、一辺約66mの方墳です。埋葬施設は、複室構造をもつ截石切組積の両袖型横穴式石室であり、切石表面には漆喰が施されています。玄室にある家形石棺には四脚部間が格狭間形に刳りぬかれており、古墳文化に仏教文化の影響をうかがうことができます。昭和43年の発掘調査により、それまで埋没していた前庭部の構造が明らかにされ、平成20年度の発掘調査によって、周堀幅は約18mとなることが判明しました。

昭和19年11月に国指定史跡になりました。

10　蛇穴山古墳（前橋市総社町）

蛇穴山古墳は、総社古墳群では最後の大型古墳であるとともに、群馬県地域における最終末の首長墓として位置づけされる古墳です。７世紀末の築造と考えられています。昭和50年、平成21年に前橋市教育委員会が発掘調査した、一辺約44mの方墳です。埋葬施設は、截石切組積の横穴式石室であり、羨道部を持たず、玄室は各面を一石で構成する構造です。平成21年の発掘調査では、葺石をもつ中堤と２重周掘を確認しています。

蛇穴山古墳

宝塔山古墳

総社歴史資料館

昭和49年12月に国指定史跡になりました。

宝塔山古墳と蛇穴山古墳の様相からは、７世紀後半から末にかけての上毛野地域の首長墓が、同時期に建立される山王廃寺（放光寺）の建築とシンクロする技術や思想を採用して築造されていることがうかがえます。

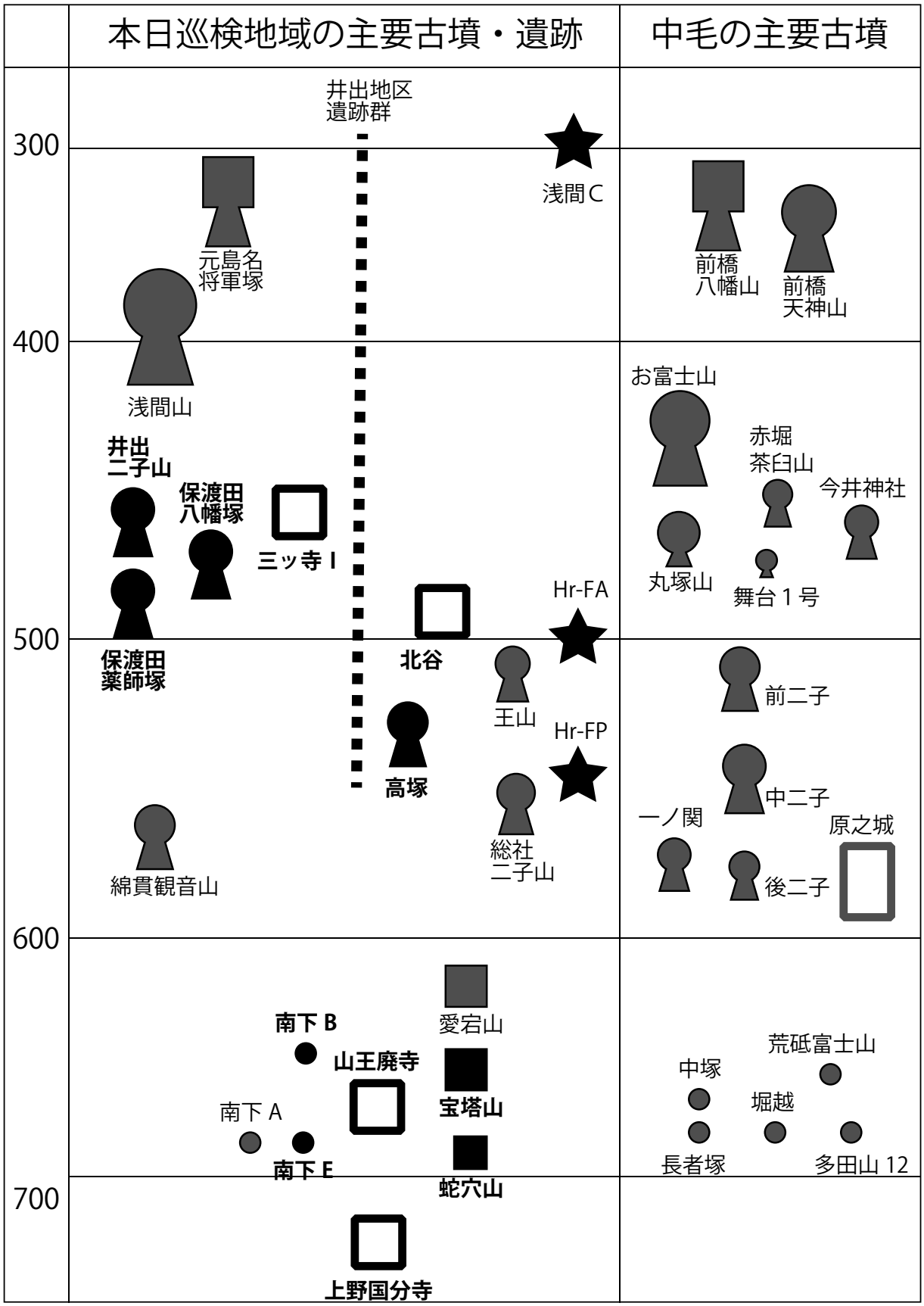
11　おわりに

本日の冒頭で、「群馬のルーツを辿るツアー」と言いましたが、そのことを振り返るために、最も適した施設が、ここにある「総社歴史資料館」だと思います。

是非とも復習をかねて見学していただき、本日の榛名山東南麓の古墳の理解を深めていただければと思います。

榛名山東南麓の古墳めぐりバス・ツアー

平成 29 年 9 月 9 日（金）　講師：深澤敦仁（群馬県立歴史博物館）

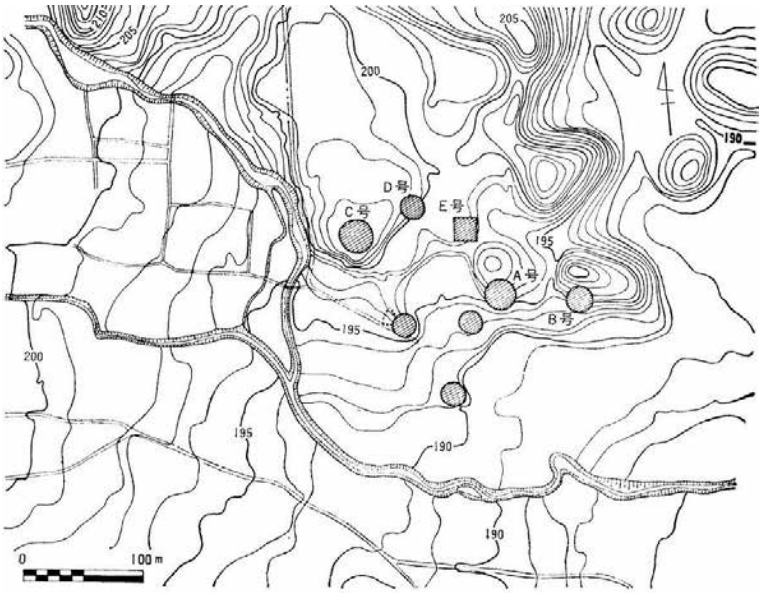


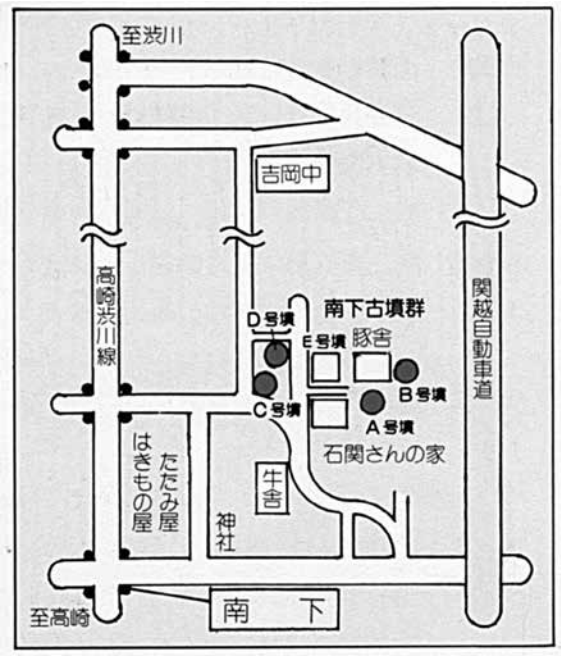
（右島和夫・徳江秀夫・南雲芳昭「上野」『全国古墳編年集成』雄山閣出版　平成七年　を再構成）

1

1　南下古墳群（みなみしもこふんぐん）

所在地…北群馬郡吉岡町南下
墳形…円墳
埋葬施設…横穴式石室　　**築造時期**…６世紀～７世紀
文化財指定…Ａ号古墳とＢ号古墳が町史跡
古墳の特色…榛名山東南麓を代表する終末期古墳群のひとつ。
Ａ号古墳とＥ号古墳は截石切組積石室である。
特に、Ｅ号古墳石室には朱線が残存し、貴重。

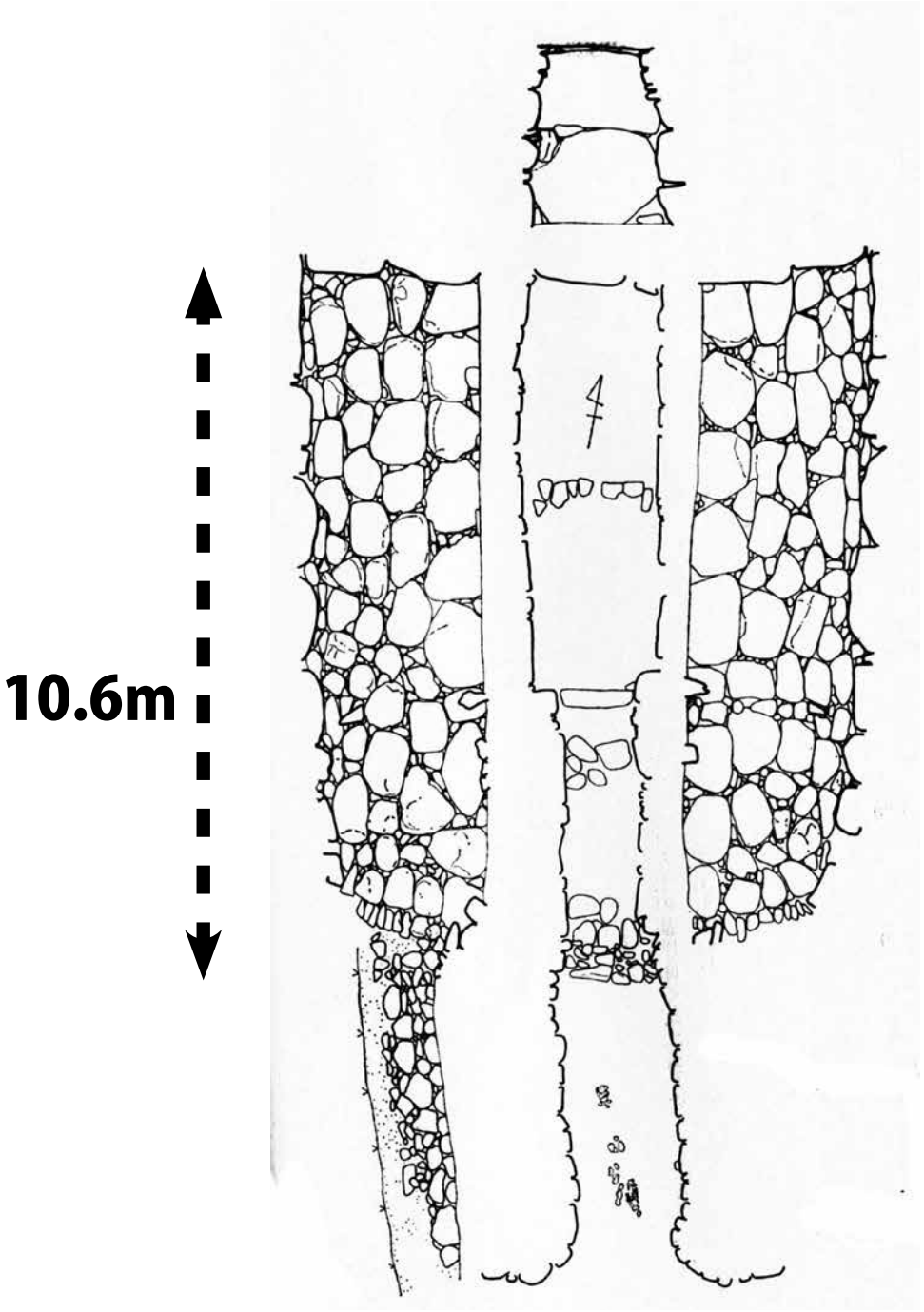




2

2　高塚古墳（たかつかこふん）

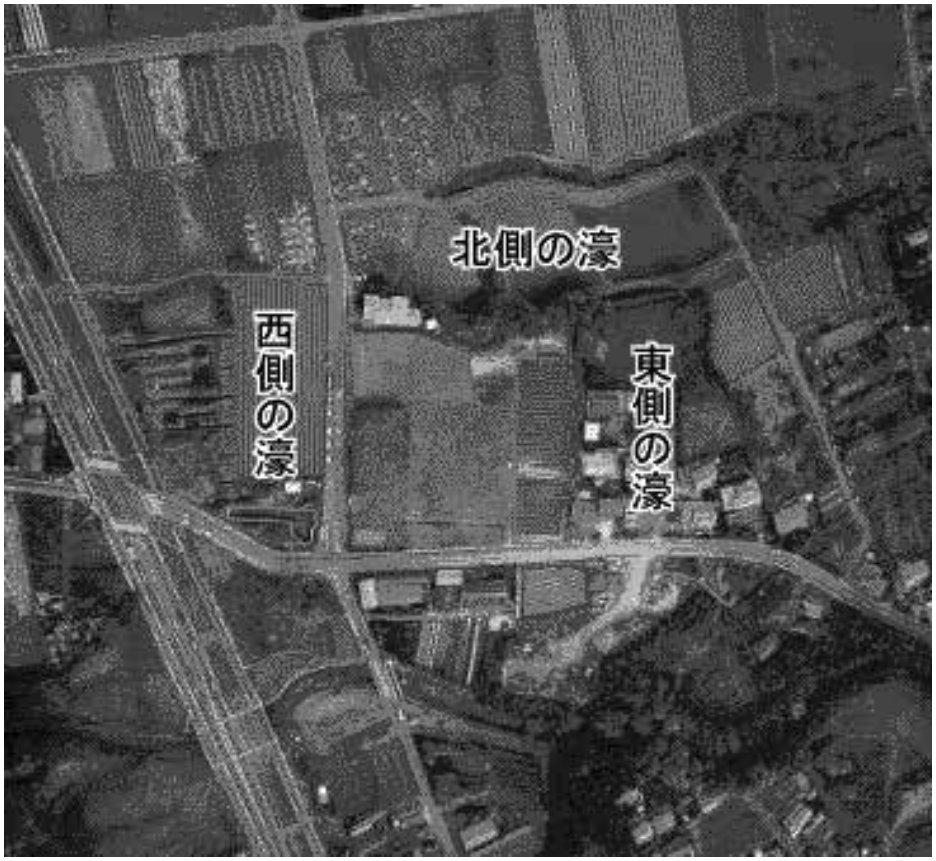
所在地…北群馬郡榛東村新井
墳形…前方後円墳　　**規模**…墳丘径 60 m
埋葬施設…横穴式石室　　**築造時期**…６世紀前半
文化財指定…県史跡（墳丘）
古墳の特色…群馬県最北域の前方後円墳のひとつ



3

3　北谷遺跡（きたやついせき）

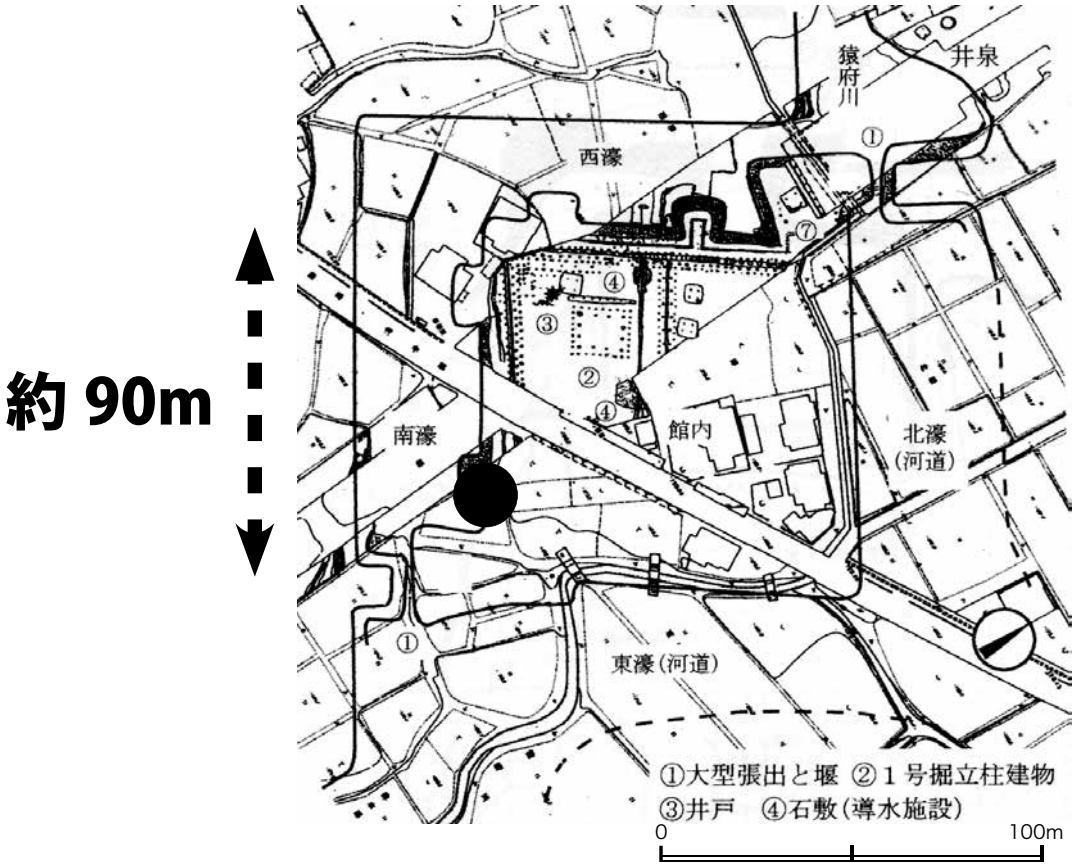
所在地…高崎市冷水町・引間町
種類…豪族居館　　**規模**…一辺約 90m
築造時期…５世紀後半～末
文化財指定…国史跡
古墳の特色…三ツ寺Ⅰ遺跡の発見以来の本格的な居館



4

4　三ツ寺Ⅰ遺跡（みつでらいちいせき）

所在地…高崎市三ッ寺町
種類…豪族居館　　**規模**…一辺約 90m
築造時期…５世紀後半～末
文化財指定…未指定
古墳の特色…国内初、かつ内容が解明されている本格的な豪族居館



5

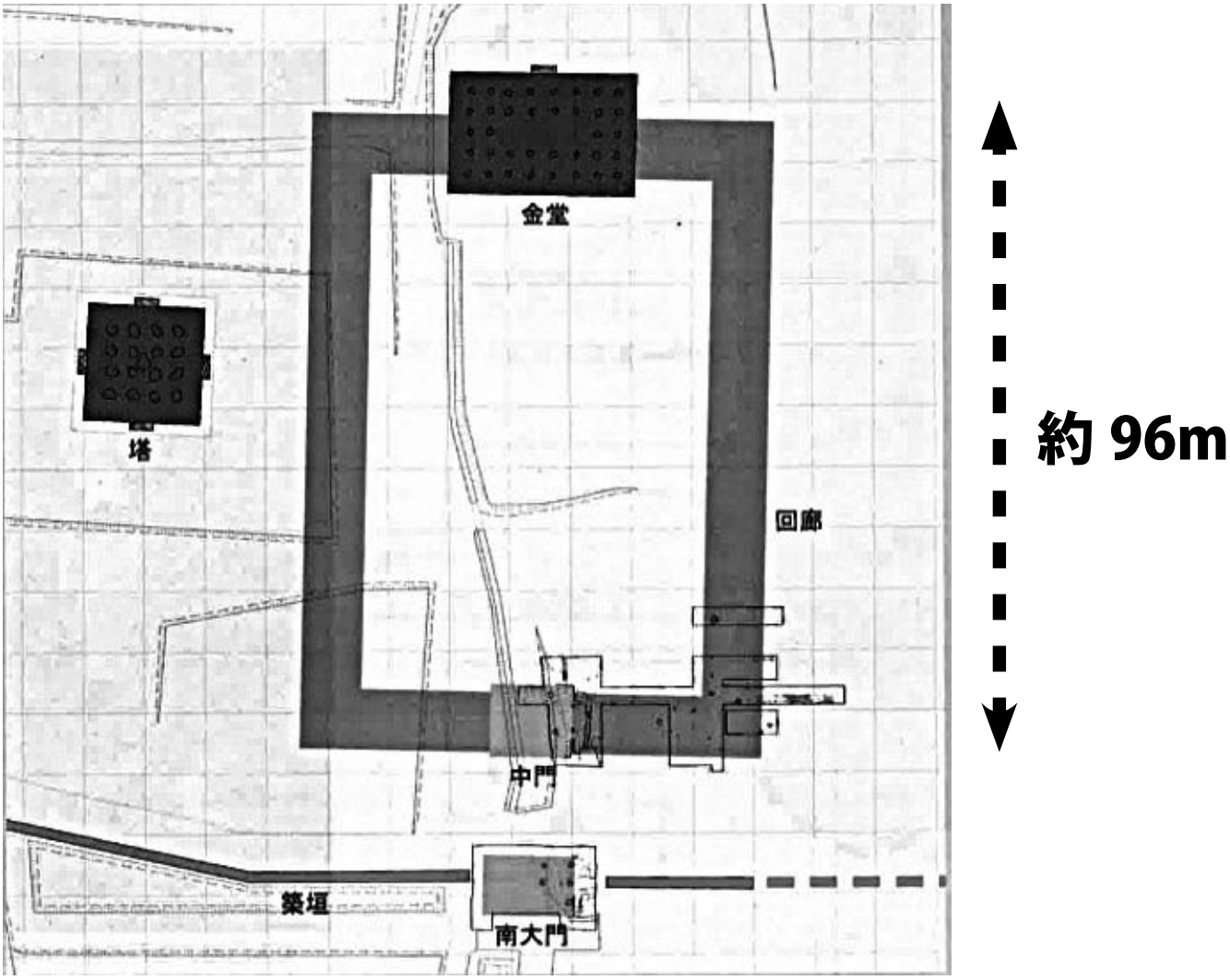
5　保渡田古墳群（ほどたこふんぐん）

所在地…高崎市井出町・保渡田町
墳形…前方後円墳　　**規模**…各約 100 m
埋葬施設…舟形石棺
築造時期…５世紀後半～末　　**文化財指定**…国史跡
古墳の特徴…東日本屈指の５世紀後半の首長墓

6

6　上野国分寺跡（こうずけこくぶんじあと）

所在地…高崎市東国分町・引間町 前橋市元総社町
種類…寺院
規模…南北長、東西長約 200 m
建立時期…８世紀中頃　　**文化財指定**…国史跡
遺跡の特徴…天平 13 年（741）、聖武天皇の命で建立。

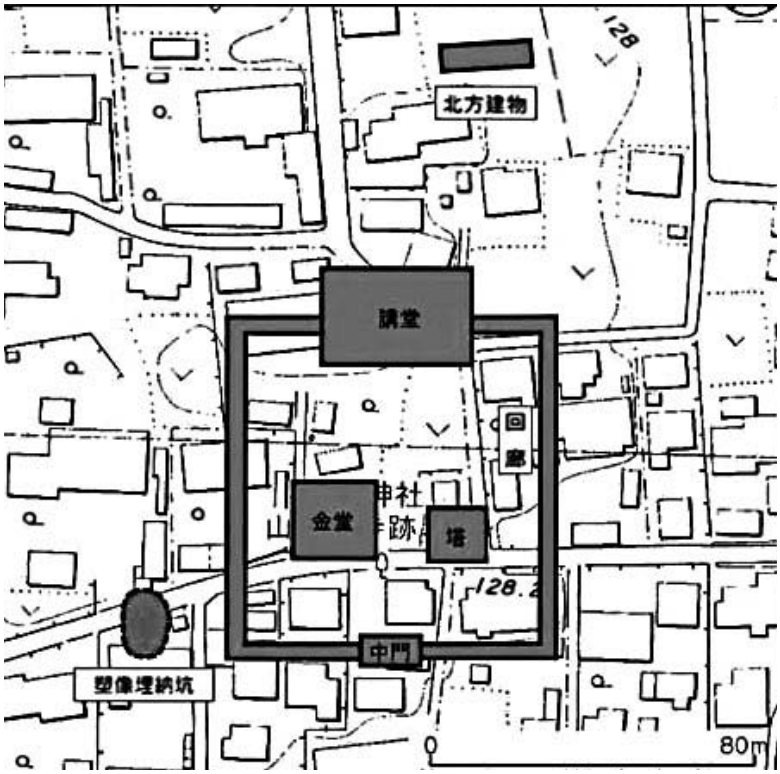


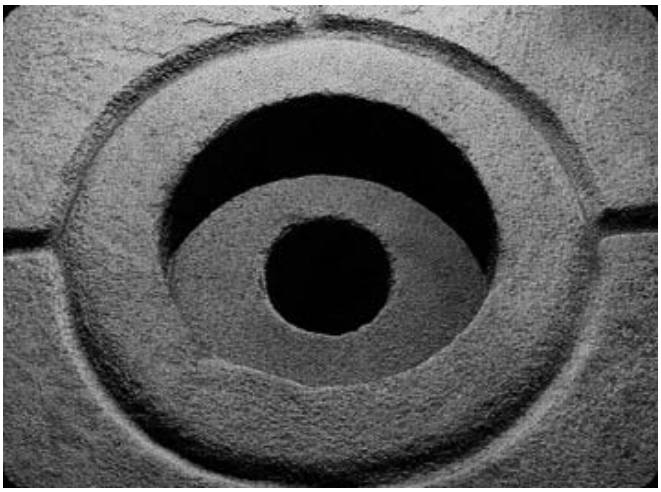
7

7　山王廃寺（さんのうはいじ）

所在地…前橋市総社町
種類…寺院
規模…南北長、東西長約 200 m
建立時期…７世紀後半　　**文化財指定**…国史跡
遺跡の特徴…東日本屈指の地方古代寺院。「放光寺」

約 80m



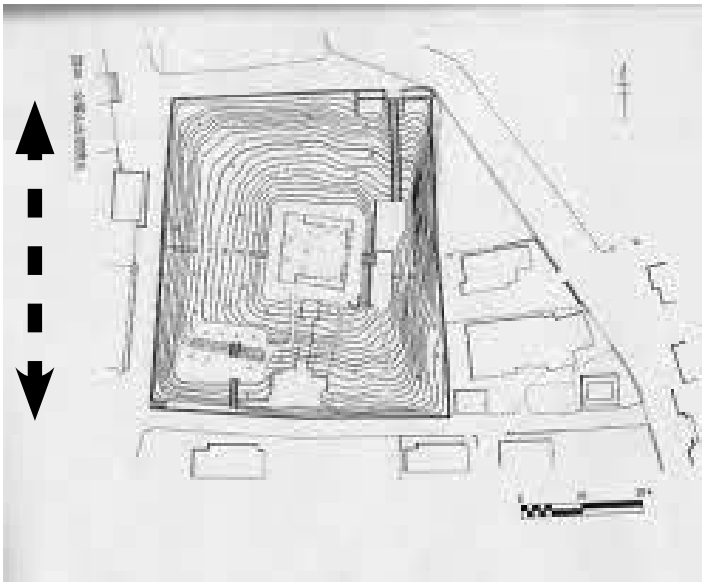


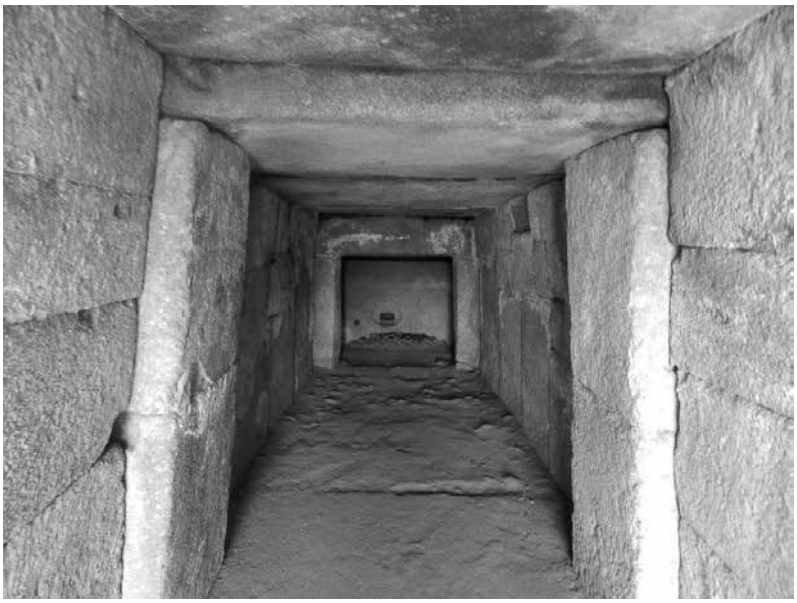
8

8　宝塔山古墳（ほうとうざんこふん）

所在地…前橋市総社町
墳形…方墳　　**規模**…一辺約 60 m
築造時期…７世紀後半　　**文化財指定**…国史跡
遺跡の特徴…県内最大の方墳。格狭間をもつ家形石棺。

約 60m

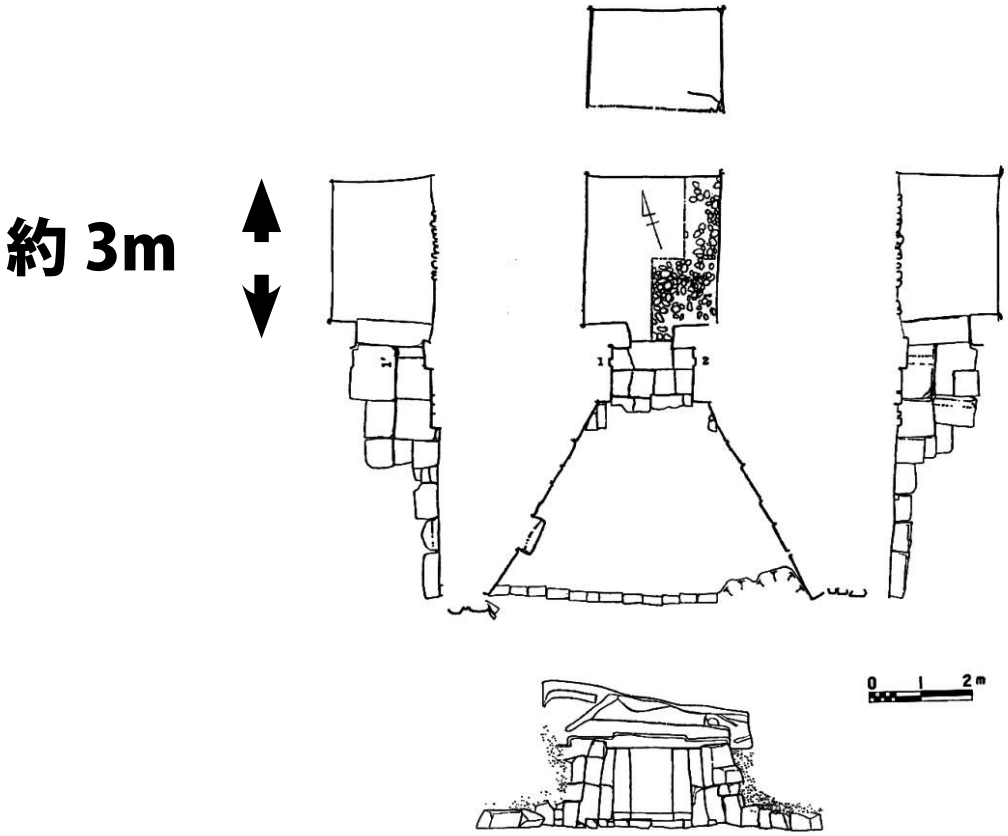




9

9　蛇穴山古墳（じゃけつざんこふん）

所在地…前橋市総社町
墳形…方墳　　**規模**…一辺約 40 m
築造時期…７世紀末　　**文化財指定**…国史跡
遺跡の特徴…県内最後の首長墓方墳。



10

付録１

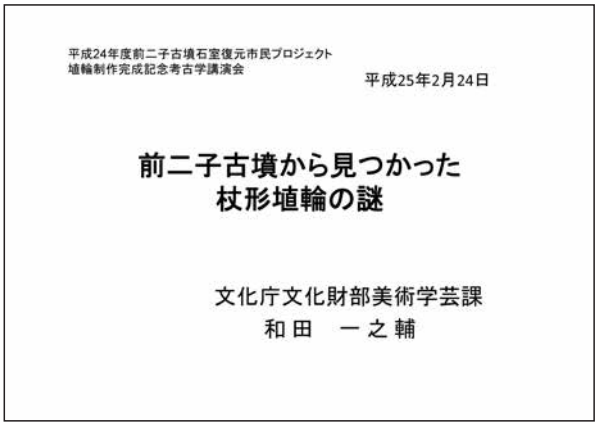
平成24年度前二子古墳石室復元市民プロジェクト埴輪制作完成記念考古学講演会

前二子古墳から見つかった杖形埴輪の謎

和　田　一之輔（独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所）

（スライド１）

今日の講演会よりも、私の後ろに並んでいる、この完成した埴輪の披露会がメインのひとつですけれども、市民の方々が参加されて作った埴輪たちを並べて



おります。私も仕事柄全国いろんなところへ参るのですけれども、このように良い機会を創れる地域というのは、決して多くはありません。こうした良い機会を創るためには、まずは地元の方が郷土の、地元の文化財に愛着を持って理解を示してくれること、それに加えて本日ご挨拶にもあった実行委員会の先生方、そして前橋市の日々の普及・活用に尽力している、そうした三位一体となって初めて実現するということですので、これからもこのような郷土の文化財への愛着を育んでいく体制を是非とっていただけるようにお願いします。

私から見ても非常に多くの上手な埴輪だらけですね。私もいきなりこれを作って下さいと言われても、中々実際できないということを言ってしまうと、今日の私の話はちょっと信じられないと思うこともあるかもしれませんが、非常に上手に作られています。実は名前が書かれておりますけれども、中には文化財関係の方も作られていますが、そんなことは関係なく一般の方々が皆上手に作っている埴輪だと、私はこれを非常に感激しております。

今日は、タイトルでありますように、前橋の前二子古墳から見つかった杖形埴輪というものをお話します。実際にこちらが前二子古墳から見つかった本物の杖形埴輪になります。こちらもまた本物の埴輪になりまして、両側に皆様が造られた杖形埴輪がある、この真ん中にある杖形埴輪についてお話したいと思います。

（スライド２）

杖形埴輪という名前を先ほどから言っていますが、この埴輪を見てまず杖ってなんだろうと、これを見て杖形埴輪と中々わかっていただける方は多くはないと

思っております。そういう意味ではこの杖形埴輪に関しまして大きく三つ研究上の謎があると思っています。

まずは先ほど申しました杖形埴輪ってなんだろうと、なんで杖という名前がついているのだろうという謎がひとつあります。これをまず一番最初にお話したいと思います。

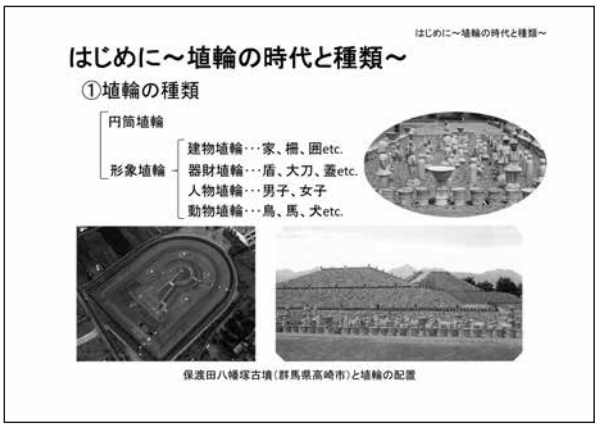
その次には、二つ目としましてこの杖形埴輪がどのように出来上がって、そして日本全国に散らばっていったのかというお話をいたします。

最後、三番目としては、ではこのように全国的に展開する杖形埴輪だけれども、どうしてここ、群馬県の

前二子古墳にこの埴輪が伝わってきたのだろうか、そもそもこの杖形埴輪をもつ人たちはどういう人なのだろうかということを考えてみたいと思います。おそらくこの会場の中にも埴輪作りに参加された方がいると思いますが、非常に苦労して作られたかと思います。非常に難しいですね。先ほど実行委員長からもお話がございましたが、首がもげてしまったり、ゆがんでしまったりと非常な苦労があるんですけれども、こうした苦労をしてでも古墳の上にこうした埴輪を立て並べることの意味、そうしたことも若干触れていけたらと思っております。

（スライド３）

まず、簡単に埴輪についてお話をしたいと思います。埴輪は古墳時代に作られたものです。古墳時代というのは、西暦でいうと４世紀、５世紀、６世紀と



いった約300年間を古墳時代とします。この300年の間にほぼずっと作られたのが、この埴輪ということになりますので、今から1600年くらい前から300年間絶え間なく作られていたものです。

埴輪には大きく２種類あって、まず円筒埴輪なんですけれども、こちらの円筒埴輪というのは、字のごとく円い筒状をした埴輪です。どのように古墳に立て並べられるかというと、隣の高崎市の保渡田古墳群の八幡塚古墳ですが、隙間なくこのように埴輪を立てて区画をするものです。墳丘の上に列状に並べているのが円筒埴輪ということになります。

その一方で、もうひとつの話、こちらが今日のメインとなりますが、形象埴輪というものがあります。形象埴輪は読んで字のごとく形を象った埴輪ということになります。こちらの写真で申しますと、人を象った埴輪であったり、あるいは馬を象った埴輪であったり、いろんな器物や動物、人物を象った埴輪がございます。こちらの形象埴輪は円筒埴輪のように列のように並べるわけではなくて、ひとつの場面を表す形で集中的に並べる例が多いといった違いがあります。

（スライド４）

もう少し埴輪の種類を見ていきたいと思います。まず一番初めは建物の埴輪と呼ばれるものですが、こちらは大阪の高槻市にある今城塚古墳ですが、どなたが

ご覧になってもわかるように家を模したものです。こちらは日本最大級の２m近くある家ということになります。それに加えて近年は、これは門なんですが、ここに土製の扉があって開閉するという、非常に変わった埴輪なんですが、門と柵を表すものであったり、家の周りには当時も生垣のようなもの、あるいは板塀のようなものがあったということがわかっておりまして、それを模したのが、家の周りを囲うということで、囲形埴輪というような呼び方をするものがあります。従来は、これらをまとめて家形埴輪という呼び方をしていましたが、実際には門や囲いというものは家には該当せず、いわゆる建造物、建物ということで、総称とした名前としては建物埴輪がよろしいかと私は考えております。

それから、下段のほうですが、こちらが器財埴輪ということになります。昔の偉い人たちが持っていた器物のようなものを象ったもので、こちら蓋という字を書きますが、蓋（きぬがさ）形埴輪と呼びます。そのモデルとなったのは、今の菅笠のような笠で、実はこれは偉い貴族のような人の日除けであったり、あるいはあまりお顔を見せないような形で顔を隠すような機能を持っていたものであります。

こちらは刀ですね。こちらが有名な藤ノ木古墳から出土した大刀のレプリカですが、これと同じような形を象ったものがあるということになります。

（スライド５）

一番種類が豊富な人物埴輪、動物埴輪です。上側が人物埴輪で代表的なものを並べていますが、姿形で言えば立っている人、座っている人、男の人、女の人、

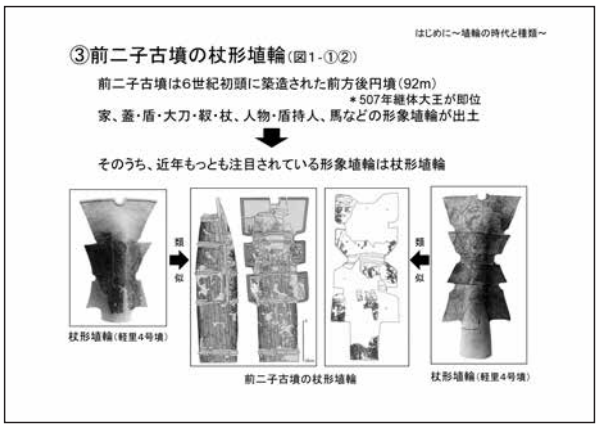
そういったいろんな種類があります。埴輪研究は非常に面白いものでして、当時の習俗等を知ることができます。

例えば、最近日馬富士が横綱になったという話もありますが、力士ですね。力士というのは、実はもう古墳時代からいたということが、この埴輪からわかってまいります。それから、下のほうが動物の埴輪です。動物の埴輪も人物に負けず劣らずいろんな種類があるわけですが、鶏であったり、あるいは水鳥のようなもの、あるいは今回このプロジェクトでも作られている馬形埴輪といったものもあります。馬でもこちらの写真は馬だけなんですけれども、皆さんが造られたものには馬の上に人が乗っているような形のものもあるということになります。

こちらが犬なんですけれども、犬は縄文時代から日本にいるんですけれども、この埴輪も面白くて、ちょっと小さくて見えないんですが、ここに首輪がついているんですね。つまり、古墳時代にはイノシシを追いかけたり、狩猟に使われていたのですが、そこには人間が首輪をつけて管理していたということがわかるという面白いいろんな情報を持っている埴輪ということになります。

（スライド６）

それでは、今回のメインの話になる杖形埴輪ですが、今まで言ったどの埴輪に該当するのかということですが、少し結論だけ先に申し上げると、今回の杖形埴輪というものは、先ほど４つの話をしたうちの器財埴輪のひとつになります。そのことを少しこれからお話したいと思います。まず、この前二子古墳の造られ



た時代ですが、先ほど古墳時代が４世紀から６世紀の300年間というふうに申しましたが、その中で前二子古墳は、６世紀つまり古墳時代の最後の方に造られた古墳ということになります。

この６世紀初頭、今から1500年前の時代ですが、前二子古墳が造られていた時代に何があったかといいますと、一番大きな歴史的出来事といいますと、507年に継体大王が即位したということがございます。継体大王は、歴史上では非常に謎めいた大王で、それまでの天皇の系譜からは断絶した、非常に画期的な大王であるということが言われていますが、まさにそうした大王が活躍していた時代に前二子古墳が造られたということになります。この前二子古墳、94mと非常に大きな古墳なんですが、形象埴輪が非常に多く出ておりまして、何種類もあるんですけれども、その中でも一番埴輪研究者の中でも注目されているもの、私の偏見もかなり混じっていますが、それが杖形埴輪ということになります。

では、この杖形埴輪を紐解いていくためには、いくつか手順がありますが、まず、これに似た埴輪は実際何だろうか、先ほども申しました通り、これだけでは杖だかわからない、だから他の類例を探してみると、どんな埴輪があるんだろうと探してみると、実は、今回のこちら、大阪府にある古墳ですが、同じような埴輪として作られているんですけれども、大阪と奈良ですね、つまり近畿に比較的同じような埴輪が存在するということがわかってきました。実際には形が少し違うんですが、こうした円筒のところにいくつも鰭（ひれ）を持ってるような形というのは非常に似ているということで、まずはこの前二子古墳の杖形埴輪を紐解くにあたっては、まず近畿地方でよく出ているこの埴輪を見てみようということになります。

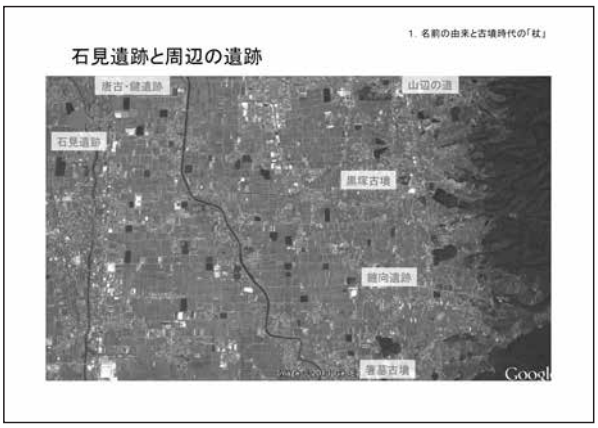
（スライド７）

その代表というのが、奈良県の石見遺跡（いわみいせき）で見つかった埴輪ということになります。今、こちらが群馬県になりまして、これからお話しする近畿はこれくらい離

れている、400～500㎞でしょうか、これくらい距離が離れている場所のお話をしますけれども、こちらが前二子古墳に似た埴輪、石見遺跡の埴輪ということになります。タイトルに「昭和初期に新たに見つかった」と書いてありますが、実は形象埴輪というのは、非常に昔から知られておりまして、明治あるいは大正の頃には、ほとんどの種類が知られておりました。そういう意味では1931年（昭和６年）に石見遺跡でこのような新しい形の埴輪が見つかったというのは非常に画期的なことでありました。ただ、それだけに、この埴輪がいったい何だろうというのは当時から非常に問題になっておりました。これは余談なんですが、石見遺跡というのは、非常に面白くて、こちら、かわいらしい人物埴輪が出ておりまして、奈良県のある研究所がこのようなかわいいマスコットキャラ（イワミン）を作っていて、石見遺跡というのは非常に親しまれている遺跡のひとつでございます。では、少し石見遺跡の場所であったり、周辺の状況を見てまいりたいと思います。

（スライド８）

石見遺跡の場所なんですけれども、先ほど奈良県にあるというお話をいたしました。では、奈良県のどこにあるかというと、奈良県は南がほとんど山なので、奈良県の北部になるんですけれども、石見遺跡はこちらにございます。で、ここに箸墓古墳という非常に有名な古墳がございます。昨日おとといぐらいでしょうか、宮内庁の立ち入り調査があったということで、非常にニュースでも取り上げられておりましたけれども、研究者の人たちの大部分はこれが卑弥呼の墓であ



ると考えていて、邪馬台国の卑弥呼の墓であるということが言われているような古墳であります。その北側には、これまた有名になりました桜井市の纒向遺跡です。最近のニュースで、発掘調査をした結果、多くの建物が見つかって、卑弥呼の館じゃないかといわれているものですね。更にもう少し北にまいりますと、黒塚古墳というのがあります。これは、私が学生の頃1996年（平成８年）くらいに発掘調査をされまして、三角縁神獣鏡が30数枚見つかったという古墳です。いわゆる三角縁神獣鏡というのは、卑弥呼が中国からもらった鏡だと言われていて、それが大量に副葬されているということで、近畿の人間は、まさにここが邪馬台国なんだというふうに考えてます。そのすぐ近くにあるのがこの石見遺跡ということになります。

（スライド９）

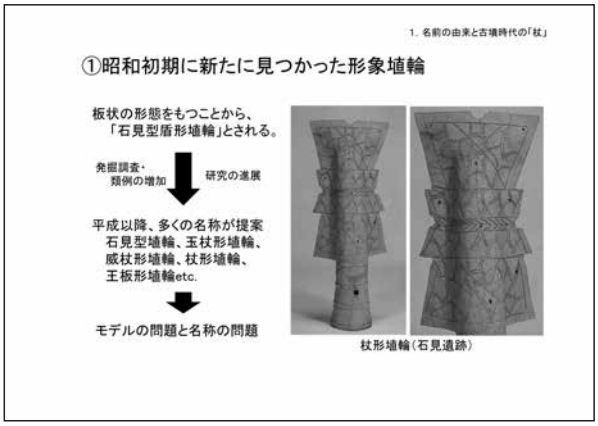
こちらは現在の石見遺跡の一コマですが、奈良は南に山があるので、川はすべて北流するんですけれども、この川岸に石見遺跡がございます。現地は残念な

がら建物が建っておりまして、住宅地になっておりますが、地元の方が、このようにバスの待合所みたいになっておりますが、埴輪のレプリカを作ったり看板を立てて、この石見遺跡に関して情報を発信しておられます。どの埴輪のレプリカを作っているかというと、

実は今日メインの話になります杖形埴輪を作っておりますし、先ほどの「イワミン」ですね、これを作ったりして非常にいい形で情報を発信しています。

（スライド10）

このような形で石見遺跡で前二子古墳と同じような埴輪が見つかっております。特徴といたしましては、この形ですね、真ん中がくびれて鰭状の形になるとい



うのが大きな特徴、それから、文様ですが、×印と弧状の文様を描く、考古学の難しい言葉で直弧文というんですけれども、こうした文様を描いていること、そしてもうひとつが、いろんなところに小さな孔が開いております。これは、形象埴輪の中でもごくごく一部の埴輪にしか開かないのですが、この杖形埴輪にはほぼ100％の確率でこの孔が開くということが大きな特徴になります。それで、1931年（昭和６年）にこの埴輪が発見された時には、この板状の形をもとに盾形、これは盾なんだという形で研究が進みました。ただし、盾なんだけれども普通の盾とは違うので、遺跡の名前をとって、石見型盾形埴輪なんだというふうに理解がされました。ただですね、その後発掘調査が増加いたしまして、これは盾ではないんじゃないかと、あるいはここに示しましたように、いろんな名称ですね、これは杖なんだ、私は杖だと思ってますが、杖なんだとか、王の杖なんだとかいろんな案が提示されてきました。そこで、本題に入りますけれども、じゃあ本当にこれは何をモデルに作った埴輪で、なんという名前で呼ぶのが正しいのかということをご紹介したいと思います。

（スライド11）

その中で、タイトルにありますように結論といたしましては、杖形埴輪と呼ぶんですけれども、じゃあ杖というのは何なんだという話です。最近は、発掘調査

が進みまして、いろんな木や皮でできたものも発掘されるということになってまいりました。形象埴輪のモデルの問題で、なぜモデルがわからないのかといいますと、実際に作られた木や皮の器物が非常に残りにくいということが原因で研究が進まないんですけれども、発掘調査の結果、そうしたものが良く残る例がいくつか出てまいります。で、こちら杖形の木製品と書いてありますけれども、画面ではスケールがわからないんですけれども、長さが１ｍくらいある非常に大きなものなんですね。その頭部を見ると、こういった形、あるいは壷のような形であったり、丸いものに鰭が付くような形があります。この中で注目したいのが、このふたつですね。この形、こちらに図を描いて示しておりますが、この上の部分の形というのが、この杖形埴輪の上半分と非常に良く似ていると、これですね、ちょうどこちらの横の帯がですね、この横方向のこの板を表現していまして、この一番上の突起がこの上の板です。で、この真ん中に食い込みがあるというような形が実はこの手の形象埴輪と非常に類似しているんだということがわかってきました。

（スライド12）

こうした同じような形を表したものは、いくつか見られます。こちらは三重県の宝塚１号墳ですが、この

船形埴輪、船なんですけれども、この上にいくつもの器財を乗せております。こちらが刀ですね、こちらの端の方が先ほどご紹介いたしました蓋（きぬがさ）、笠状のものを乗せております。そして、この真ん中のふたつ、これを見るとですね、まさにこの杖形埴輪とまったく同じ形だということがわかってまいります。更にもう少し見ますと、杖というこれ自身が何なのかということを示すのが、この人物埴輪になります。こちらは千葉県にあります埴輪の窯跡なんですけれども、この正面の杖がまさにこの杖形埴輪の上の部分に非常に近い形をしております。この後ろ側の丸いもの、実はこれは人物の頭部です。人の頭を表現しておりまして、この埴輪は顔の前にこの杖形埴輪と同じ板状のものを捧げ持っているという形になります。また、こちら奈良県の方なんですけれども、皮で作られた槍の先の装飾なんですけれども、これも杖形埴輪の上半分に非常に似ている形をしております。また、パワーポイントでは図示していませんが、お手持ちの資料の３枚目にパワーポイントのスライドと同じ図面を載せておりますが、その中に図４の線刻画というところに、実はこの三重県松阪市の宝塚１号墳と同じような絵が描かれています。これは、円筒埴輪のところに描かれている絵でして、真ん中より左側の一番高いまっすぐに立った棒の先に、この杖形埴輪の上半分と同じような形をしたものが認められます。このように、こうした杖形埴輪に似たようなものが全国的に認められるということがわかります。そして、先ほどご覧いただいた杖状の長い棒状の木製品であったり、こちらの埴輪のような状況から考えると、これは杖と呼ぶんですけれども、現在のように歩く時に体を支えるような杖ではなくて、偉い人が権力を示すために持っている杖ということが考えられます。

（スライド13）

名称の話の結論なんですけれども、こちらが杖形埴輪のモデルでして、こちらも初期の例なんです。初期の杖形の木製品です。こちらがですね、先ほど見ていただいた杖形木製品を反転させたものを上下に並べたんですけれども、この形というのがまさにこれである、上下対称になっている形というのが杖形の埴輪であり、木製品として出現しているというようなことが考えられます。従って、このモデルについては、先ほど奈良の鴨都波（かもつば）１号墳のように槍の装飾のようなものもありますが、その形態の核になる

のはあくまでも杖なんだということがわかってまいります。そして、その杖というものは、体を支えるものではなくて、権威を示すための器財の一つである杖だということが結論として得られます。そこで、名称についてなんですけれども、じゃあ何て呼べばいいのかということですが、これまでの研究者の中でも玉杖であったり、威杖であったりと呼ぶ案もありますが、玉というのがいわゆるヒスイのような玉という材質を表すものであったり、あるいは同音異義語で呼びにくい名前があることから、単純に杖形埴輪と呼ぶのが適切だろうというふうに私は思っています。杖と呼ぶだけでも、古墳時代の杖というものは権威を表すものなんだということを提起しておけば、十分にこの名前で適当だというふうに思っています。例えば、蓋も権威を表すんですけれども、そこに威杖の威であったり儀式の儀ということを付け加えた名前になっていないので、杖というものがそもそも古墳時代は首長、偉い人が権威を示すために持っているものなんだということを提言しておけば、十分にこの名前で通るだろうというふうに思っております。

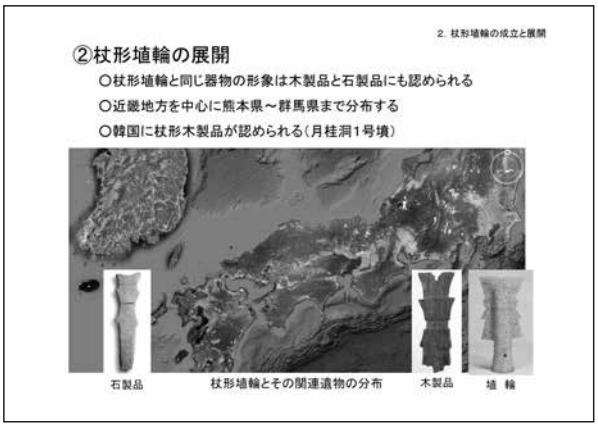
（スライド14）

モデルがひとまず杖なんだということが、恐らく皆さんの目にも、杖だろうというふうに見えてきたと

思っています。次にその杖形埴輪というのは、どこで成立したのかというお話を簡単にしたいと思います。杖形埴輪は、先ほどもいろいろと杖に類似するものをご覧いただきましたけれども、実はですね、５世紀の初めの頃に出来あがっております。前二子古墳が６世紀の初めに築造されますので、それよりもだいたい100年古い時期に既にこの杖形埴輪というものは成立しております。どこで出来あがったのかと申しますと、少し説明を省きますけれども、実は大阪にあります古市・百舌鳥古墳群で出来あがったということが考えられております。これはなぜかというと、古市・百舌鳥古墳群で今のところ古い５世紀前半段階の杖形埴輪が集中しているということが理由であります。現在、古市・百舌鳥古墳群は世界遺産登録を目指して様々な動きをされておりますけれども、有名な仁徳天皇陵であったり、これは480mくらいあって日本で一番大きな古墳ですけれども、そうした古墳があったりする５世紀段階における日本で一番偉い天皇のお墓があるようなところで杖形埴輪は成立しております。これは、杖形埴輪がなぜ出来たのか、なぜ立てるのかということにも関連してくる重要なことかなと思っております。もうひとつですが、今回の前二子古墳も、こちら見ていただくとこの四角い鰭が３個、こちらのものは４個というふうに３つのものと４つのものがございます。これは、全く違うものなのかと思うと、実は一緒のものでして、こちら三重県の宝塚１号墳のものですけれども、こちらもこの段が３個のものと４個のものが同種であるということがわかっております。ですから、この前二子古墳というのは、成立から100年経っているんですけれども、実は成立当初の姿をそのまま残している貴重な事例ということになります。これが３つと４つのものが、実はひとつの古墳から出るということは非常に稀なことで、何度も出ております大阪の軽里４号墳の埴輪でしかほとんど見られないというくらい貴重なものでございます。

（スライド15）

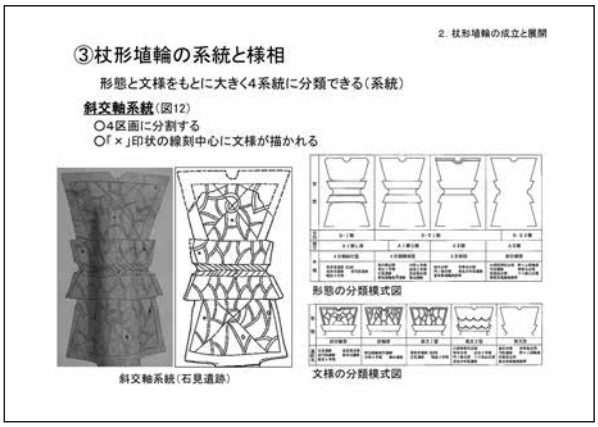
では、この杖形埴輪というものが、どれくらい日本で認められるのかというのを示したものがこちらの図になります。これまで埴輪という言葉を使っておりますけれども、実は古墳には埴輪以外にも、同じような形を象った木製品が立てられることもございます。同じく九州の有明海沿岸には、石で造って立て並べるという習俗もございまして、この杖形の埴輪には、仲間



として埴輪と木製品と石製品という合計３つの仲間がいます。これをどこで出土しているかを見ますと、こちら群馬県なんですけれども、群馬県で少し出土が認められます。ですが、一番多いのがこちら赤い点が大きいのですが、近畿ですね、奈良、大阪に圧倒的多数が分布しているということがわかります。更に視野を広げますと、この近畿の周辺から西側ですね、これが兵庫、岡山、広島まで来るんですけれども、この西側に向かって広く分布しているということがわかります。九州にもですね、一部認められるんですけれども、実は九州で認められているのは、すべてこの石見型の石製品ということになっていて、まだ埴輪が出土したという事例は認められません。（※横澤真一氏の御教示によると、福岡県権現塚古墳で出土しているようである。）逆に東側に行くと、東海にぽつぽつとひとつふたつ認められるんですけれども、最も集中するのが今回の話になる前二子古墳と周辺の地域ということになります。加えてもう一点重要なのが、実はこの杖形の木製品の方なんですけれども、韓国に一例だけ認められます。これは非常に珍しいことで、他の形象埴輪を見ても、韓国に日本と同じ埴輪があるというのは、形象埴輪の中でも杖形埴輪だけということになりますので、この杖形埴輪が持っている意味を考える上でも、この韓国の一例というのは非常に重要になってくるという形になります。

（スライド16）

今、近畿を中心として西側にいっぱい認められますよというお話をいたしましたけれども、それらが全て同じ形をしておるわけではありません。また、この杖形埴輪は５世紀前半に出来まして、６世紀中頃までありまして、ざっと150年くらいはずーっと作り続けられますので、その中にも少しずつ変化があったりします。その変化を少し見ていきたいと思います。運がよ



ければ前二子古墳と同じような埴輪が見つかるのではないかという感じで、細かい違いを見ていきたいと思うんですけれども、分ける手順といたしましては、文様ですね、文様がどういうふうに描かれているのかということと、形、これを基準として分けます。まず、一番きちんとしたといいますか、一番形が整った杖形埴輪というのが、こちらになります。今回作られました石見遺跡のものが、この斜交軸系統というものになります。名前が少し難しいですけれども、最初に申し上げました斜めの×印、これを斜めの線が交わるということで斜交軸と申すんですけれども、この斜めの×点を中心として周りに円弧状の模様を刻んでいる、それが、この斜交軸の系統ということになります。この真ん中の部分も全て円弧、丸みを帯びた曲線で描かれているのが大きな特徴であります。

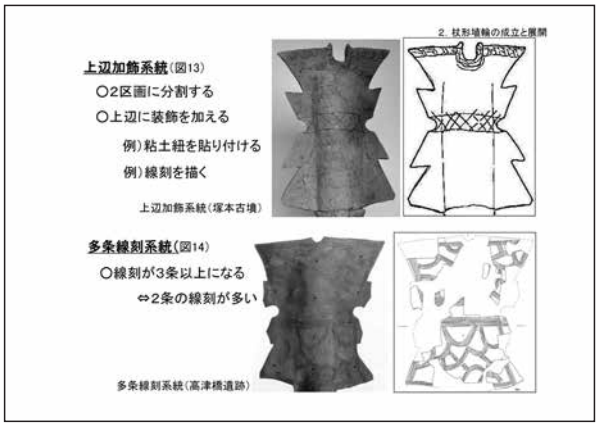
（スライド17）

次はですね、この斜交軸というものがなくなりまして、斜軸というのですけれども、直線がこのようにハの字形に描かれるという一群がございます。これを斜

軸系統と申しまして、このカタカナのハの字状の周りに円弧を描きます。この真ん中、先ほどはここも円形の曲線で描かれていたんですけれども、この一群は全て三角形ですね、直線の三角形を組み合わせたものになってくるというのが大きな特徴です。それに加えまして、一番上に、これには何も突起が付いていないんですけれども、写真のように上に突起が付くというような共通点がございます。

（スライド18）

残りのふたつですが、上側の方は、写真では見にくいのですが、この上側に粘土を貼り付けて、ここに装飾を加えているという一群がございます。この一群



は、この真ん中だけにこのような斜格子状の文様を描いて区分するというのが特徴です。ですから、先ほどのものよりも文様を簡略化した一群ということになります。最後の一群ですけれども、線刻が多条になっているということで、多条線刻と申します。これは、杖形埴輪の文様というのは、ほとんど２条一組ですね、２本の線をひとつに組み合わせて文様を描いているんですけれども、この最後の多条線刻系統というのは、３条であったり、６条であったり、この図面のように多くの線で描いているような特徴のあるもの、そうしたものがまた別の系統としてくくれるという形になります。

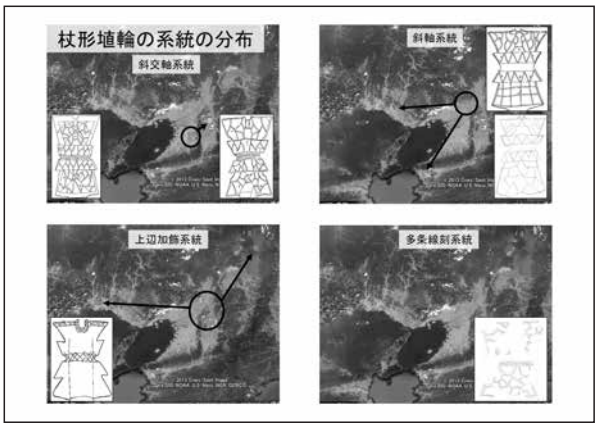
（スライド19）

これが先ほど150年間のうちに少しずつ変遷しているというお話をいたしましたけれども、一番きちんと

した形のものがこの斜交軸の系統であると、そこからこの斜めの×点の印がなくなって、波状になったり、真ん中が曲線で描かれているものが三角文で描かれるというふうに変化していくという形になります。そして、その後突起が付いたり、こちらになると文様が省略されて、上の辺に装飾を加えるといったような変化が認められます。同じようにひとつの変遷だけでは済まずに、派生的にいろんなものが生まれてきます。そのひとつが先ほどお話しいたしました線刻が多条になる、複数の線で描かれるようになるといった形で、系統が派生して出てくるという変遷になります。

（スライド20）

こうしたものは、少し詳しく見ていくと、実は近畿の中でもいくつかの地域によって特徴が違うということがわかってまいります。少し細かい話なんですけれ



ども、こちらが最初の石見遺跡のですね、これと同じ斜交軸を持つ系統、これはですね、先ほども申し上げましたけれども、大阪の古市・百舌鳥を中心としたところに一番集中しております。そこから周辺の地域には点状に出土が認められるということで、おそらく生産の中心がこの古市・百舌鳥にあるんだろうということがわかっております。そして、その次の段階の斜軸、このハの字形になってまいりますと、中心が古市・百舌鳥から離れまして、今の大阪の高槻にあたります。で、高槻といえば、先ほどもお話ししました今城塚古墳という継体大王のお墓があり、そこで焼いている埴輪窯があるということになります。ですから、今黒丸で中心にしているところには、実はその地域の中心となるような埴輪生産地があるという形になります。それが埴輪の変遷とともに、その場所を動かしていくというような展開になります。こちらが、文様がほとんどなくなって、上の部分に粘土紐を貼り付けるものですが、これに至っては、京都南部から奈良北部の一体に集中するという傾向が見出せます。これについては、残念ながらまだ中心となる埴輪の窯跡は見つかっていないんですけれども、明らかにこちらに集中して、ここから広がりを見せるという展開過程が追えます。

（スライド21）

埴輪の文様から変遷を辿ってきましたが、もう一つ、前二子古墳の杖形埴輪にいく前に、杖形埴輪のもう一つの特徴である小さな孔について、少しお話しを

しておきたいと思います。この小さな孔は、先ほど杖形埴輪にはよく見られるというふうに言いましたが、この埴輪以外にもいくつか例が認められます。一番多いのが、この家形埴輪なんですけれども、こちらが入母屋造りの下屋根と上屋根がありますが、この屋根の部分に無数に孔が開けられます。こちらは、人物埴輪なんですけれども、人物が盾を持っているので、盾持人物あるいは盾持人というような呼び方をしておりますが、こちらの写真、これが前二子古墳の次の段階に造られる中二子古墳というのがございます。こちらの方に、写真が暗くて見づらいのですが、この左右と真ん中に直径１㎝あるかないかくらいの孔が開けられているということがございます。こちらも岡山の例なんですけれども、同じ盾持人で、この角に孔が開いている。こちらが、一時有名になりました和歌山の大日山35号墳の日本で唯一の滑空している状態を示す鳥形埴輪ということで、非常に有名になりましたが、この鳥形埴輪にも至る所に、この鼻の眉間にも開いているんですけれども、翼の先端にも無数に孔が開いているということがわかっております。この孔なんですけれども、大体水平方向に開けられるわけではなくて、斜め上から孔を開けられます。その孔は、裏面まで貫通している孔もあれば、貫通していないものもあるといった違いがございますけれども、孔の中に鉄の棒が残っ

ている例があります。つまり、この孔に何か軸になるような棒を挿しているというふうなことがわかってまいります。

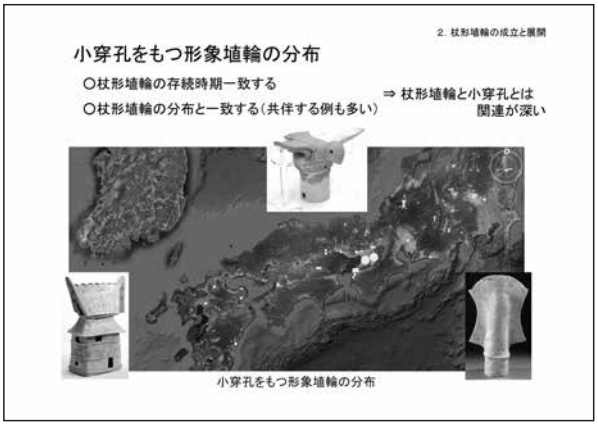
（スライド22）

それを更に紐解くための資料がございまして、それが箸墓古墳の北にある纒向遺跡から出土してきた埴輪というのがございます。その埴輪を見ると、この孔の

周りに帆立貝状の、壺のように見えるという人もいるんですけれども、線刻を描いています。こうした事例が、ほかにも２例ございまして、お手持ちの資料では、４枚目の図10と記したところに図面を載せておりますが、下側にはこの同じ纒向遺跡の杖形埴輪を載せておりますけれども、その上には岡山県にあります前内池古墳群の杖形埴輪の破片を載せております。そこにも、破片なんですが、同じように帆立貝のような形をした線刻を描いているということがわかっております。このような例は、実は杖形埴輪だけではなくて、もう一点ございまして、和歌山には家形埴輪の屋根の破片に同じような帆立貝の線刻を描いているという事例がございます。これについて、もう少し視野を広げてみますと、お手持ちの資料の同じページの図11にこちらと同じ写真を載せておりますが、これは古墳の石室から出てきた副葬品なんですけれども、上のものが静岡の三池平古墳例なんですけれども、この帆立貝形にした石製品、石ですね、帆立貝を模した石製品が複数副葬されています。もうひとつこちらはですね、天皇陵として治定されております奈良県の佐紀陵山古墳から出てきたものなんですけれども、こちらも同じように帆立貝のような形をした石製品があります。いずれも、真ん中に孔が開いておりまして、何かを留めるような痕跡があるということがわかっております。こちらのものとこちらのものとを考え合わせるのならば、実は埴輪本体ないし本物のモデルとなった器物には、このような帆立貝のようなものを貼り付けていたということがわかっております。従って、穴の中に鉄の棒が残っているというお話をしましたが、そうしたものは実はこうした帆立貝のようなものを埴輪に付けていた軸棒だけが残って、実際には貝自身は残念ながら土の中で腐ってなくなってしまったというものであろうということになります。そうしますと、今回のこの造っていただいた杖形埴輪の孔のところにもひょっとすると貝のようなものが付けられていたという可能性が考えられます。ただ、先ほども申しましたけれども、この孔には貫通しているものであったり未貫通であったり、いろいろな種類の孔がございますので、全てが恐らく貝を付けていたというふうに考えることは難しいかなと、恐らく貝をつけているための孔と当初意識されていたけれども、時間がたってまいりますと、孔を開けるという行為だけが人々の頭の中で言い伝えられて、貝自身は実際には付けていなかったというふうにも考えることはできます。

（スライド23）

これと合わせまして、先ほど前二子古墳の後の時代に築られました中二子古墳の人物埴輪にも孔が開けられているということをお話しいたしましたけれども、

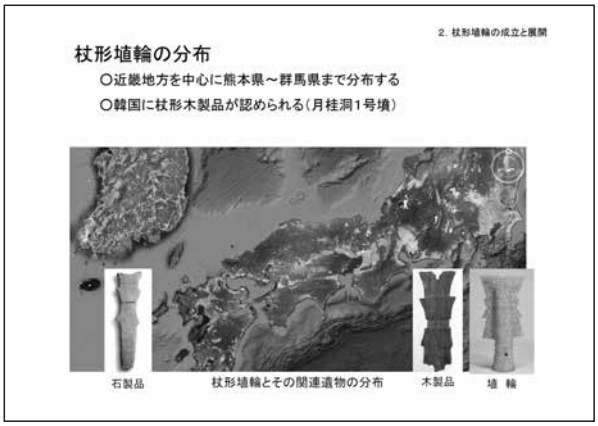


それが前二子と中二子、ごく近くの古墳にあるということは、偶然なのかどうかということを少し調べた図がこちらになります。こちら小穿孔を持つ形象埴輪といたしまして調べた結果ですけれども、まずひとつに時期の問題があります。杖形埴輪は５世紀前半から６世紀の中頃くらいまで造られ続ける埴輪だというお話をしましたけれども、それが調べてみますと、この杖形埴輪が造られる時期に同じように小穿孔を持つ形象埴輪を認められるということがわかってまいりました。つまり、時期としては、全く一致するものであるということ、それから、分布について見てみますと、

杖形埴輪と同様に近畿に集中するということがわかってまいりました。近畿に集中するとともに、杖形埴輪と同じように西側の兵庫や岡山、こうした瀬戸内の北岸ないし南岸の方にも分布するというように、近畿から見て西側に多く分布するということ、それから、ここ群馬県にもいくつか例があるということになります。杖形埴輪と分布の傾向が非常に一致するということで、この小穿孔を持つ埴輪と杖形埴輪というのは、非常に有機的な関係を持っているんじゃないかと、無関係ではなく、密接な関係を持っているということが考えられます。この分布図を目に焼き付けていただいて、次のページお願いします。

（スライド24）

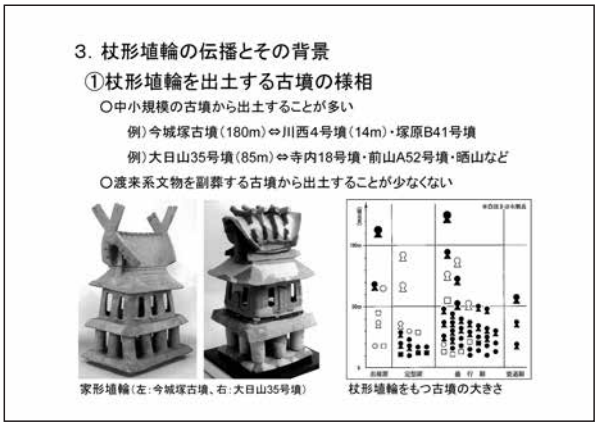
こちらが先ほどお見せしました杖形埴輪の分布図です。少しこちらの方が例が多いんですけれども、同じように近畿を中心に西側に分布しているということ、



それから、東側を見ると群馬県周辺くらいしか見られない点が一致しているということがよくおわかりになるかと思います。

（スライド25）

では、最後の本題の方にまいりますけれども、こうした杖形埴輪を持つ古墳の様相について考えてみたい

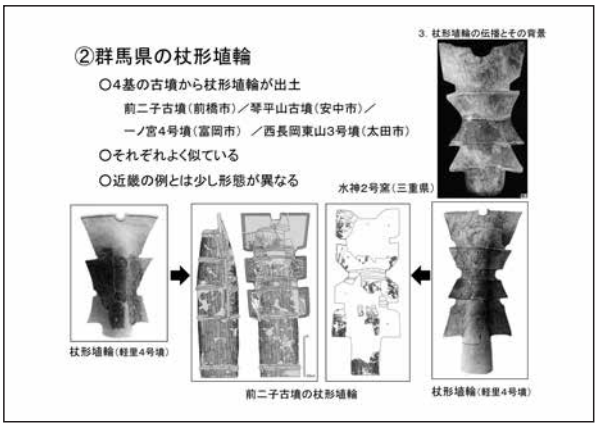


と思います。杖形埴輪を持つ古墳あるいは形象埴輪を持つ古墳というのは、いろいろな古墳から出てきていまして、きちんとしたルールであったり制度というものは、中々見出しにくいのですけれども、まず古墳の大きさに注目したいと思います。右下の図ですね。こちら杖形埴輪ないし木製品を持つ古墳の規模をグラフにしたものであります。この列のものがだいたい５世紀代のもの、そして、この列が前二子古墳と同じ６世紀代の古墳で調べた結果になります。これを見ますと、こちらが100m、そしてこれが50mと規模を区切っております。羽曳野の野中ボケ山古墳という古墳のように、中には120mを超すような大きな古墳にも認められるんですけれども、一見してわかるように、大多数のものが50mよりも小さな古墳で出ているということが大きな傾向として指摘できます。もちろん、50m以上の古墳がないとは言わないですけれども、数としてこちらにより集中しているということが言えます。つまり、杖形埴輪を持つ古墳というのは、比較的小さな古墳に立てられているということが言えます。それをですね、より具体的に示す例がふたつございまして、大阪の高槻にあります今城塚古墳、そして、和歌山市岩橋千塚古墳群にある大日山35号墳です。この地域で見ますと、この今城塚古墳、そして川西４号墳も同じ高槻市の新池埴輪製作遺跡というひとつの遺跡から埴輪が供給されていることがわかっておるのですけれども、発掘調査をした結果、今城塚古墳からは杖形埴輪の破片は一点も出てまいりません。ですが、その周りの川西４号墳、これは、直径が14mくらいの非常に小さな古墳です。それから、塚原Ｂ41号墳というのは、群集墳と申しまして、直径が10mくらいの円墳が何百と造られるようなお墓の１基なんですけれども、そうした古墳には杖形埴輪が立てられているということがわかっております。それから同じように大日山35号墳、こちらは岩橋千塚古墳群のひとつなんですけれども、その古墳群の内の一番偉い人の墓はこれぐらいの規模で造られるんですけれども、こうした80mくらいの古墳には、杖形埴輪の破片は一点も出てまいりません。同様に、周りの小さな古墳を調査してみると、周りの小さな古墳からは杖形埴輪が出てくるんですね。ということは、明らかに意識的に大きな古墳には入れないで、小さな古墳に入れているということがわかります。更におもしろいことに、この今城塚古墳と大日山35号墳の埴輪というのは、非常にといっては少し語弊がありますけれども、よく似ております。

その一つの例が、この家形埴輪なんですけれども、同じように円筒状の柱を表現しておりまして、この部分が高床の部屋になるんですけれども、こちらは壁を表現している。それから、入母屋のもので、ここに棟持ちの柱の表現があるということ、それから、千木の細かな表現は異なるんですけれども、この埴輪２ｍくらいあるので、１回では焼けないので、これを分割して焼いております。その分割箇所がここで１カ所、そして、ここでもう１カ所で、３つのパーツに分けて焼いておるんですけれども、それと全く同じことが、この和歌山の古墳でも見られます。ここで分けていて、そしてここで分けているというように、全く同じ場所で３分割にして焼いているということで、技術的にも形態的にも非常に似通っているということがわかっております。こうした似通った地域、似通った埴輪の製作の中で、大規模な古墳には杖形埴輪は入れずに、小規模な古墳には杖形埴輪を入れるということが明らかとなっております。この大日山35号墳には、杖形埴輪こそないんですけれども、この屋根の部分に小さな穴が開いております、これが先程来話しておりました小穿孔を持つ形象埴輪のひとつで、杖形埴輪とセットになっており時期や分布が重なるようなので、強い関連性があると申したものなんですけれども、これが大日山35号墳にはあります。ですが、杖形埴輪は、あえて立てないというようなことが守られているということがわかります。それからもう一つなんですけれども、渡来系の文物を副葬する古墳から出土することがあるというわけなんですけれども、こちらに関しましては、副葬品の中に例えば耳飾りであったり、あるいは飾りの付いた靴、つまり履飾であったり、あるいは冠、そうしたいわゆる朝鮮半島に起源を持つ器物というものを副葬する古墳が、中には認められるということになります。これは、渡来系の文物を持つということは、もちろん当時の東アジアの中で日本の中の首長が活動していたことを示すんですけれども、こうした渡来系の文物を持つというのは、偶然手にしたというものではなくて、何らかの形でそうした朝鮮半島との交流に携わっていた被葬者たちであったというふうに考えることができます。

（スライド26）

そのように見ていきますと、では群馬県の杖形埴輪というのは、どのくらい出ていて、どんな形態をしているのかというお話を、ようやく本題なんですけれ

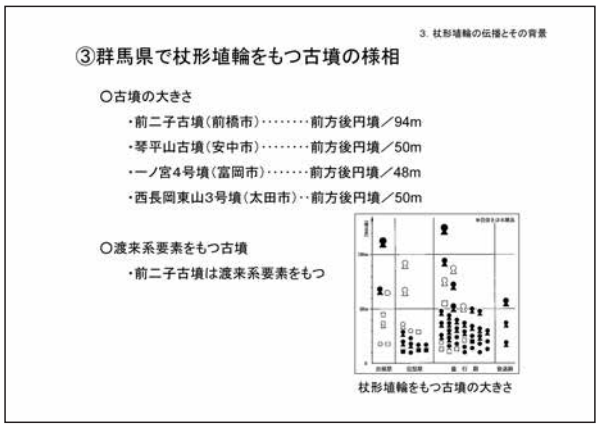


ども、したいと思います。現在、群馬県の中からは、この杖形埴輪というのは、前二子古墳を代表といたしまして、４つの古墳から出ております。今回のスライドでは、前二子古墳しか載せていませんが、お手持ちの資料の２枚目をご覧ください。２枚目の①としたのが、まさにこの３段タイプの杖形埴輪ということになります。２枚目の②としたのが、こちらですね、４つ鰭がつくタイプの杖形埴輪ということになります。これに加えまして、前橋市の周辺にあります安中市と富岡市でもそれぞれ出ております。安中市の琴平山古墳なんですけれども、２枚目の図版は全てスケールを合わせておりますので、実際の大小が視覚的にご覧いただけると思うんですけれども、③というのが一番よく残りがあるんですけれども、鰭がほとんど３つほど残っているというような状態がわかります。まさにこの辺の部分ですね、この辺が１、２、３段と残っているもの、そして、左側の写真を見ると、鰭と鰭の間に帯状の線が描かれておりますけれども、これが前二子古墳と同様に突帯状のもので区画しているというように、非常に似通っている形態ということになります。この鰭の形も、こういう四角い形が同じく認められると思います。近畿で見られるような少し三角形の形状をしたものとは少し距離があるということがわかるかと思います。そして、琴平山古墳の⑥というところに小さな破片がありますけれども、その破片が、この上側の孔のところの破片であるということで、恐らく全体像としては、この３段の杖形埴輪に非常によく似た形態に復元できるということがわかっております。ちなみに、先ほど小さな孔の中に鉄の棒が残っているという事例があると言いましたけれども、その内のひとつがこの琴平山古墳のもので非常に重要かと思っております。同時に琴平山古墳の埴輪の中には、小さな孔を持つ盾形埴輪も出土しておりまして、杖形埴輪を持っているし、小穿孔を持つ形象埴輪も一緒に持っ

ているという非常に特徴的な古墳ということになります。それから、もうひとつ富岡市の一ノ宮４号墳なんですけれども、こちらは比較的小さな破片なんですけれども、下の⑧番という破片です。その破片がこの四角く抉った一番上の部分の破片ということになります。加えて、⑨番、⑩番、⑪番というのが、四角い鰭を伴っているんですけれども、それがこういうところだけが割れてしまって残っているというのが一ノ宮４号墳の資料ということになります。⑪番には、鰭の部分に少し縁取りをしたような線がありますが、これも前二子と同様の赤彩のような痕跡があるという形になっております。３つの例だけ見ても、それぞれこの鰭が３つあるタイプで、四角い形をしたものと非常に形態がよく似ています。つまり、群馬県内で出ている杖形埴輪は、それぞれよく似ているということが言えます。ただし、似ているんだけれども、近畿のものと比べてしまうと、どうしてもこれとこれが直接には結びついてこない、少し形が違うということが、わかるかと思います。近畿のようなものは、こういうですね、四角くはなくて三角形を重ねたような形をしているのに対して、前二子古墳は四角というような大きな違いがございます。

（スライド27）

近畿の方で見たときに、杖形埴輪を持つ古墳というのは、どういう古墳なのかを見てきましたが、では、群馬県の４つの古墳というのは、それと同じ様相をしてるのか、あるいは違うのかということを次に見たいと思います。群馬県で出ているこの４つのうち、一番大きなものが前二子古墳のものになります。ちなみに、この４つの古墳の時期、細かいことは置いておきまして、全て６世紀に属するものということになります。ですから、杖形埴輪の成立から100年弱くらい経った最後の方の段階ということが考えられます。この前二子古墳が一番大きくて、墳丘長が94mもあるんですけれども、この表でいきますと、まさにこれが前二子古墳です。実は、日本の中で、杖形埴輪を持つものの中で第２位くらいに位置する大きな古墳が、この前二子古墳ということになります。ただ、その他の安中の琴平山であったり、一ノ宮４号墳、あるいは太田の西長岡東山３号墳というものは、大体古墳の大きさが50mくらいにおさまるものです。この図でいいますと、ちょうどこの線上くらいに位置する古墳たちだと言うことができます。つまり、近畿で見たように、10mや20mくらいの小規模なものではないんだけれども、50mという中規模くらいの古墳に集中して存在しているということが言えます。逆に、前二子古墳の大きさというのが、際だったものとして位置づけられるという形になります。それから、もうひとつの傾向といたしまして、渡来系の要素を持つ古墳としてあげられておりますけれども、これは近畿でも様々な渡来系の要素を持つ、副葬品を持つ古墳があった訳なんですけれども、前二子古墳には、これまでに指摘されているものとしては、渡来系の要素を持つものとして、例えばこうした須恵器、装飾器台なんですけれども、ここに小さな小像ですね、動物の小さな小像が付いていたりするというのも、朝鮮等に類例が認められます。また、石室の中からフック状の鉄製品が見つかっております。そちらは器物を引っかけるためのものなんでしょうけれども、そうしたフック状のものというのが、類例としては朝鮮半島に起源が認められるといった具合に、前二子古墳に渡来系の要素が副葬品の中で認められるという現象がございます。ただ、残りの３古墳、なかなか埋葬施設が残っておりませんで、渡来系の要素を持っていたのかどうかというところまでは突き止められないというのが少し残念なところではあるんですけれども、少なくとも前二子古墳には、このような渡来系の要素を持つということが指摘できるかと思います。



（スライド28）

群馬県への杖形埴輪の伝播とその背景を考えてきた時に、少しまとめとしてお話をしておきたいんですけれども、まず、群馬県に杖形埴輪が伝わってきたというのは、６世紀初頭のことということになります。これは、先程来申し上げているように、５世紀の前半に大阪古市・百舌鳥古墳群で成立してから、大体70～80年は経った後に群馬県に伝播しているということが認

まとめ～群馬県への杖形埴輪の伝播とその背景～

- ○6世紀初頭、群馬県へ杖形埴輪が伝播して、県内に展開する
- ○県内では形態が類似しているので、伝播の契機は1回の可能性がある
- ○近畿の杖形埴輪とは形態が少し異なるため、近畿から直接伝播したのではなく、近畿以東の周縁地域から伝播したと推測できる
- ○小穿孔をもつ形象埴輪も同時に伝播している（工人の移動）
- ○主に中規模古墳に認められる
- ○つまり、器物の伝播という単純なものではなく、理念や制度も共有する
- ○大型古墳の築造、つまり前二子古墳の築造を契機とする

められます。これは、群馬県への伝播がことさら遅いということを言っている訳ではなくて、実は、６世紀の段階で杖形の埴輪というのが全国的にも広く展開いたします。これは、５世紀の後半にはほとんど古い例というのは近畿でしか認められません。でも、それが近畿から外に出て行くというのが、まさに６世紀の段階ということになります。この６世紀というのが、果たして最初に言ったように、507年の継体大王との政治的なつながりが果たしてあるのかどうかということを含めて、非常に意味深なことでございます。そういう意味では、群馬県も他の地域と同様に、６世紀の早い段階で杖形埴輪を受け入れていると、伝わってきたということが言えるかと思います。二つ目ですが、群馬県内の杖形埴輪を見てみますと、現在発見されているものだけで見れば、前二子古墳と形態が全て類似している、四角っぽいこの形態をしているというのが県内で共通しております。つまり、群馬県内の杖形埴輪を見ても、形態がバラバラなわけではなくて、比較的類似しているということから、群馬県内に杖形埴輪が伝播した契機というものは、古墳ごとに来たわけではなくて、実は、１回だけ群馬県に杖形埴輪が来て、それが県内に広がっていったと考える方が妥当であろうということが言えるかと思います。これは、前二子山古墳と例えば一ノ宮４号墳とで全く違う造り方をして、全く違う形をしておれば、古墳ごとにその都度その都度に違う地域と交流を持って、そこから杖形埴輪を受け入れているということができるんですけれども、やはり、形が同じということは、しかもこの形態が必ずしも近畿では見つかっていないので、この形態を持つということは、群馬県内での関連を認めて、対外的な契機としては１回の可能性があるんではないかというふうに考えられます。もちろん、これはまだまだ発掘が進めば違う形のものが出てくるかもしれませんけれども、少なくとも古墳群単位で、古墳単位で伝播の契機があったわけではないということを強調しておきたいと思います。それから、３点目ですが、まさにこの形態が四角くて、近畿のものとは似ても似つかないという点です。じゃあ、どこから来たのかというようなことを考えるんですけれども、実はその答えというのが、私の方でまだ用意ができておりません。ただ、お手元の資料で申しますと、５枚目に杖形埴輪の図面をたくさん載せておりますけれども、右下の図15というところですね、１枚埴輪の写真を載せております。これは、異系統の杖形埴輪というタイトルで載せておりますけれども、こちらも実は、近畿の中では形が繋がってまいりません。ただ、愛知県であったり、もう１点三重県にこうした例があるんですけれども、三重と愛知の例というのが非常によく似ているというような傾向があります。その傾向を見てみますと、近畿の杖形埴輪と比べると、非常に簡略化されたと申しますか、直線的な形態になっているというようなことが指摘できます。群馬県のものも愛知の水神２号窯とは全く別の形態なんですけれども、非常に簡略化された傾向ということができます。単純に、近畿との距離だけでこのような話ができるとは思っておりませんけれども、近畿以外の地域で杖形埴輪が伝播していく中で変容していった結果、群馬県にはこのような形で展開していったのではないかということが言えるかと思います。つまり、近畿の人たちと群馬の人たちが、埴輪の工人レベルで直接的に影響を与え合っている、あるいは交流を持っているということは、少し杖形埴輪からだけでは認められないというふうに考えております。それから４つめなんですけれども、小穿孔を持つ形象埴輪というのも、先ほどご紹介したように、前二子古墳の次の段階の中二子古墳、それから、杖形埴輪を持つ安中の琴平山古墳で認められております。そうしたことから、杖形埴輪だけが群馬県にもたらされたというよりも、一連の工人の移動というものを想定できるかと思うんですけれども、そうした小穿孔を他の形象埴輪にも開けていくような考え方というものも、一緒に伝わってきているんだろうというふうに理解できます。そうした意味で、琴平山古墳の孔の中に鉄製の棒が残っていたというのは、まさに琴平山古墳の盾形埴輪には、何かしら付けていた、そうした考え方も共有するような形で、伝播していったんだろうというふうにとらえることができます。５つめで、古墳からの出土、古墳の様相といたしましては、近畿と少し規模が違うんですけれども、大体50mくらい、あるいは

それよりも小さいような古墳で杖形埴輪を持つというような傾向が、近畿と群馬でも共有されているんだろうということが言えます。つまり、群馬に杖形埴輪が入ってきた時に、全ての100m級の首長層に取り入れられたというわけではどうもなさそうだと、小さな古墳に立てるものなんだよという、強い制度ではないんですけれども、ある程度の考え方が共有されていたんではないかというようなものが、下から２つめの文章ということになります。つまり、杖形埴輪だけが単純に入ってきたのではなくて、これを立てる埴輪の被葬者というものがどういった人なのか、あるいはどれぐらいの大きさの古墳を造る人に、この杖形埴輪を立てるんだというような、漠然とした考え方、きちんとした制度ではないんですけれども、そうした緩やかな意識の共有というものがあったんだろうというふうに考えております。最後に、この群馬県の中に杖形埴輪が入ってくるということの契機としましては、やはり時期的にも一番古い前二子古墳が、大きなきっかけになったんだろうというふうには恐らく考えられるかと思います。これに関しては、傾向としては90mくらいの古墳に杖形埴輪を立てるというのは、少し傾向としては近畿とは違う形になるんですけれども、これを解釈するとすれば、この時期６世紀初めの段階というのは、前二子古墳も含めて群馬県内ですね、例えば横穴式石室が入ってくる、そうした時期とも一致しております。前二子古墳も横穴式石室を導入する最初の首長たちの一人であるというような考え方をされておりまして、同様にこうした杖形埴輪を導入するような契機として、こうした大型古墳の築造が契機となるということもあるのかなというふうに捉えております。これと同じような現象が、岡山県の津山周辺でもあるんですけれども、前方後円墳として６世紀の初めに造られた、90mはなかったと思うんですが、80mくらいの前方後円墳の首長、十六夜山古墳というのが造られるんですけれども、それが最初のきっかけとして地域に入っていくというような現象もあるようなので、近畿以外の地域では、こうした一番最初に新しい文物、新しい石室であったり、新しい埴輪、そうした形式を取り入れるためには、地域の偉い首長の築造を契機とするというような傾向が読み取れるかなというふうに考えております。

そうすれば、この前二子古墳、94mの古墳が造られますけれども、この大室古墳群の契機となった古墳なので、それを契機として、杖形埴輪も入ってくる、同時にそれ以後に関しましては、50mクラスの古墳に集中して展開するというようなことも言えるかなと思っております。群馬県になぜ、前二子古墳になぜ入ってくるのかについての明確な答えは難しいのですが。ただ、実は近畿からずーっと東に追っていくと、近畿にあって、三重、愛知にあって、その後は、群馬県までこの杖形埴輪を持つ古墳というのは、飛んでしまいます。その間は一切見つかっていないんですね。そうした中で、なぜ群馬県なのかということなんですけれども、もちろんその解答は、容易には用意できないんですけれども、少し戻って、日本地図の分布図というのが出ますでしょうか。群馬県がこちらにありまして、ここが近畿になります。西への広がりというのは、この６世紀段階というのは、交流の主要なルートというのが瀬戸内海航路に変更される時期になります。そういう意味で、瀬戸内の北岸と南岸に位置するというのは、まさにこの瀬戸内航路に乗って埴輪の工人も移動するし、杖形埴輪を立てる風習というか制度も広がってくるというふうに理解できます。併せてこの瀬戸内航路をある程度主体的に利用したというのがこの紀ノ川に本拠地をおく紀氏の水軍というのがあるんですけれども、まさにこの紀ノ川流域にも杖形埴輪というのが存在するというようなことは、この瀬戸内航路の重要性というのが埴輪の方からもある程度保証できるのであろうというふうに理解ができます。この他にも、今回は分布図等用意しておりませんけれども、ほかに特徴的な埴輪等も、小穿孔を持つ形象埴輪も同様ですけれども、西側、この瀬戸内沿岸に分布するということが指摘できます。ですから、西側を見ると、この山陰の方にはこうした６世紀の段階で、近畿と同じような埴輪は存在しない、ほとんど認められないというようなことが、やはりこの航路との関係ということで指摘できるのかなと思います。では逆に東側を見たらどうなのかというふうになると、非常に難しいんですけれども、三重と愛知までというのは比較的、三重までは陸路も存在するんですけれども、三重から愛知というのは同じように海路で通じている、これは、杖形埴輪だけに限らず他の時代の土器なんかも同じような傾向を示すのですが、この辺までは上手く何らかの現象の現れとして理解できるんですけれども。じゃあ群馬県だけ、これはどういう経路を伝わって群馬に来たのか、これは非常に難しくて、もうご覧のとおりですね、真ん中山しかないようなところなんですけれども、今後発掘調査が進展したり、まだ杖形埴輪がそれ

ほど研究者の間にも十分認識されていないので、発掘して出てるんだけれども実はわからないというようなことがあるとすれば、まさに長野の地域だろうというふうに私個人は思っております。それは、江戸時代でも有名な東山道、古代の道としてもあるんですが、東山道のルートとして前橋の少し南を長野を通って抜けるルートがございます。これはもう私の想定であり、そのまま出てくるとも思わないんですが、ひょっとすると群馬を抜けたところで長野の方でこうした杖形埴輪のようなものが出てきてもおかしくないのかなと思います。もちろん、東山道というのは、古墳時代には存在していないでしょうけれども、それに準じるような道路というのが少しずつ指摘されているというところなので、もちろん人が移動するので、何らかの道がないと人が移動できない、道なき道を埴輪工人が歩いて行くというようなイメージもできませんので、ある程度そうした幹線道路に近いような道路をこの時代の人も持っていて、そのルート上に埴輪が入ってくるというようなことも考えられると思っております。そうした意味で、渡来系文物を持つ古墳の分布であったり、その他共通するような古墳、そうしたものの分布を調べていくことで、前橋の方と、あるいは西日本の近畿、あるいはそれ以外の地域との結びつきが、今後見つかるかもしれないというふうに考えております

それでは、ひとまず私のお話はこれで終了したいと思います。長時間ご静聴ありがとうございました。

〈質疑応答〉

Ｑ１：興味つきないお話をありがとうございました。深く確かなことが言えない中での質問で大変申し訳ないんですが、この杖形埴輪の成立に関わるんですけれども、玉杖とかのお話がありましたけれども、石製のものは４世紀代の古墳から出てくることが多いかと思いますけれども、ひとつはこの杖形埴輪が出てくるのは、先生は、そういう石製品から埴輪に替わるようなことを想定されているのかということをひとつお聞かせ願えればと思います。あと、これが器財埴輪であるというと、この出土状況ですね、古墳から出てくる他のこういう器財形埴輪との関係なのかがどうかということ、欲張ってもうひとつだけ教えてください。石製品の出土がこれ、奈良県に多いようにも思うんですけれども、古市・百舌鳥で埴輪として登場してくる背景をもし先生の方で何かお考えがありましたら教えていただけたらと思います。その３点をお願いします。

Ａ１：まず、４世紀から出てくる石製品との関係なんですけれども、今ご指摘いただいた石製品というのが、恐らくこちらのスライドの石製品になるのではないかと思っております。確かに、この石製品、我々一般的には、琴柱形石製品と呼んでおるんですけれども、その理由はこの辺がそうなんですけれども、これを天地ひっくり返すとですね、楽器の琴の弦を受ける琴柱に似ているから琴柱形石製品という呼び方をします。で、確かにこちらの石製品は、古墳時代を４世紀から６世紀と申しましたが、その中でも４世紀、一番古い古墳からたくさん出てまいります。これとこれ、非常に形がよく似ていると思うんですけれども、実は、この石製品の研究からも、このモデルとなったのは、杖なんだという研究がございます。杖の中でも鹿角、鹿の角を加工した杖であろうということが考えられております。そうした意味からは、これとこれというものは非常によく似ておるんですが、どうしてもやはり、ここが４世紀くらいで、まさにこの辺が杖形埴輪が出てくる直前なんですけれども、どうしても形があまりにも変化してしまって、杖形埴輪とこれとがなかなか直接結びつかないんですね。そういう意味では、杖というものをモデルにして、この石製品が出てくるんだけれども、別のルートとして杖からこの杖形の埴輪が展開してくるというのが、別の系統としてあると考えています。でも、モデルとしては同じ権威を表す杖なんだというふうに理解しております。ですからこの琴柱とは直接関係はないんだけれども、親戚のようなものですね。なにせ、この杖の、この琴柱形石製品ですね、この小さなものがですね、ひとつ５㎝くらいの小さなものなんですね、その小さなものが埴輪としてこれほど大きく表現されるというのもなかなかすぐには理解が難しいということ、それから時期が新しくなると非常に形が崩れてしまっているので、これを祖型とするのは難しいという点から、琴柱形石製品から埴輪になったというふうには考えにくいだろうというのが、一つ目のお答えでございます。

それから、二つ目なんですが、出土状況のお話で、この杖形埴輪は、本当に器財なのかどうかというご質問だったかと思うんですけれども、なかなか難しいですね。出土状況がわかっている古墳というの

は、非常に少なくて、実は、わかっている出土状況としては、一番最初にですね、円筒埴輪というものが列状に並ぶというお話をしましたけれども、その円筒埴輪の要所要所にこの杖形埴輪を配置するというような並べ方がございます。何分、その埴輪の配置というものは、５世紀と６世紀とそれぞれ変化しておりますので、必ずしも器財埴輪が、イメージとしては例えば後円部の墳頂に並べられるというような時期には、この杖形埴輪は実はまだなかったんですね。そうした意味で、出土状況から器財という限定は出来ないんですけれども、モデルを考える中で、これが権威を表す杖であるというふうに規定するならば、やはり器財埴輪というふうに考えるのが妥当であろうというふうに思っております。

それから、三つ目なんですけれども、古市・百舌鳥で５世紀前半に成立した、そのことについてなんですが、まさにですね、形象埴輪というのは、４世紀の最初の段階から全ての種類が揃っているわけではないんです。実は、時代ごとに少しずつ種類が増えてきます。一番最初は、家形埴輪と鶏形埴輪しかありませんでした。その後、器財埴輪ですね、盾であったり、蓋であったり、あるいは矢を入れる靫であったり、そうしたものが出現してきます。それぞれの形象埴輪を出現させるというのは、当時の埴輪工人が勝手に自分たちが作りたいものを作ったから新しい形式が増えたというわけではないんですね。新しい形式が増える時には、例えば埴輪の配置であったり、あるいは、その時期に大きな天皇陵ができる、そうした時期と符合してきます。ですから、新しい形式の埴輪を作るということは、その背景に政治的な意味合いが非常に強いというふうに理解できます。そういう意味で、古市・百舌鳥で５世紀前半にできて、６世紀には日本列島中に展開するということは、この成立の背景に政治的な意味合いが強いということ、なおかつ、形象埴輪、この杖形の中で唯一韓国にまで分布が認められるというのは、ただの器財ではないという位置づけもできるかなというふうに思っております。お答えになっておりますでしょうか。

Ｑ２：今のお話にあった、韓国にもあるという話で、逆に渡来系のものが出る古墳からは出てこないというところは、何となく矛盾するような気がするんですが、それはどういうことなんでしょうか。

Ａ２：渡来系の話は私は弱いんですけれども、傾向としては多くはないんだけれども渡来系の文物があるというのは、杖形埴輪を持つ古墳の特徴であると考えています。それと、韓国にも杖形埴輪が出土するというのは、お互いに交流の結果、日本から韓国へは杖形埴輪というものが行く古墳もある、反対に朝鮮半島からもたらされた文物が日本の古墳に葬られるということで、ばくっとした話としては一致するのかなというふうに思っております。ちなみに、日本から韓国の方に行く文物というのは、非常に珍しくて、古墳時代を三つに、４世紀、５世紀、６世紀と見た時に４世紀の段階では、一部の甲冑であったり、あるいは青銅製品が一部韓国に行くんですけれども、その後は日本のものが韓国へ行くということはほとんどなくなります。６世紀になると杖形の木製品以外に、コウヤマキの木棺というのがあって、日本ではコウヤマキは非常に匂いのいいもので、防腐効果もあるんですけれども、コウヤマキを木の棺として使うことが多いんですけれども、それが古墳時代の日本から韓国へ行っている文物のひとつであるというふうに位置づけられています。

Ｑ３：権威の象徴である杖が、首長に限られていることになりますが、それに替わりまして杖形埴輪になりますと、中小規模の古墳に多く出るということは、杖本来の意味と杖形埴輪の本来の意味が違うということになるのでしょうか。

Ａ３：鋭い質問をされ、時間が欲しいところなんですけれども、確かにそうですね。現状この手の杖というのは、実際に集落から出てきた時に、どれくらいのレベルの首長なのかということは、実はあやふやにして話をしております。つまり、首長にもいくつかランクがあって、まさに100mを超えるような地域の首長であったり、あるいは50mくらいの比較的小規模な地域を治める首長、いろんなランクの首長がいるんですけれども、その中でも、じゃあ集落で出てくる場合には、どのランクの首長から杖が出てくるのかということは、実は、わかりきっていないんですね。そのひとつは、こうした木製品が残るというところは、流路から、川の河道ですね、旧河道からしか出てこないので、例えば住居であったり、明確な集落域を持つところからは出ていないこともあって、そこがなかなか一対一に示し得ないというふうに、私は逃げたいのですけれども。同志社大学

におられた辰巳和弘先生は、こうした杖を持つというのが非常にトップレベルの大首長なんだというような言い方をされます。それは、根拠は乏しいんですけれども、奈良県の極楽寺ヒビキ遺跡という非常に大きな集落を掘った時に、恐らくこの特徴的な土坑にはこうした杖が立てられていたんだろうという想定でしかないんですけれども。まあ、そういった形で、実は集落と古墳というのは、古墳の研究も全てそうなんですけれども、なかなか集落と一対一には比定しきれていないということもあって、この杖も実際に生前はどのレベルの人が持っていたのか、持ち得たのかということは、ちょっとまだわかっていないということでございます。すいません、これはちょっと難しすぎて答えられません。

Ｑ４：先ほど、玉杖の話があったんですが、玉杖と元々の杖、木製の杖と、別々のものが基本的にはあったというお考えでいいんでしょうか。

Ａ４：元々は、恐らく同じ杖だと思ってます。玉杖というのは、玉でできた杖という意味なので、材質を頭に付しているだけなので、本来は杖という同じものを表現しているというふうに理解しています。

Ｑ５：要は木製の杖が、基本的にはずっと古墳時代６世紀前半くらいまで首長なりが持っていたものがあったという考えでよろしいんでしょうか。

Ａ５：そうですね、杖自身はあったと思っています。それが、古墳の出現期からなのか、あるいは大阪の加美遺跡では六角の杖というのが実際に出ていますので、弥生時代から続いていた可能性もあります。そうした器財が、実際に古くからあって、それを埴輪に写し取ろうというふうに決断を下されたのが、５世紀前半だというふうに理解しております。

追記：なお、東国の石見型埴輪について、本講演の一部論旨を変更して『利根川』に発表されているので、そちらもあわせてごらんください。

和田一之輔　「石見型埴輪の東国波及と上番」『利根川』37　ｐ77～ｐ96　利根川同人　2015年５月

「杖形埴輪の謎」を講演する和田一之輔先生

主催者のあいさつ、山本龍市長

付録２

前二子古墳石室復元市民プロジェクト事業の経過

前原　豊（前橋市教育委員会）

平成18年度

国指定史跡前二子古墳石室を市民の手で発掘当時の明治11（1878）年の状態に復元展示するプロジェクトを企画。プロジェクトは３年計画。平成18年度の１年次は土器、２年次は杏葉と鏡板の金属製品、３年次は装身具の制作に取り組む。

８月２日＝前二子古墳石室復元市民プロジェクト実行委員会総会・委嘱式。委員10名、監事１名、顧問３名

８月26日～28日＝職員試作須恵器を鼻毛石町一心窯にて焼成

９月１日～９月25日＝広報まえばし、新聞、ホームページ等で土器制作ボランティアの募集。45名の応募があり、抽選で35名を採用

10月７日＝大室古墳群の見学、オリエンテーション

10月21日～11月２日＝土器制作ワークショップ。会場＝総合福祉会館造形創作室。制作点数＝須恵器60点・土師器35点。延べ参加者数＝750名

12月２日～４日＝須恵器を鼻毛石町一心窯で還元焔焼成。窯焚きの合間を縫って土師器の覆い焼き焼成

２月17日＝土器制作完成念考古学講演会。時間＝14：00～16：00。会場＝総合福祉会館多目的ホール。講師＝白石太一郎氏（奈良大学教授）。テーマ＝「前二子古墳の石室と副葬品」。受講者＝170名

２月21日～28日＝須恵器・土師器制作品の展示。会場＝市役所１階市民ロビー

５月27日＝須恵器・土師器制作品の納め式。前二子古墳石室に公開展示を開始

平成19年度

国指定史跡前二子古墳石室を市民の手で発掘当時である明治11（1878）年の状態に復元展示するプロジェクトを実施。プロジェクトは３年事業。平成19年度は３年計画の２年次にあたり、金属製品（杏葉と鏡板）を制作した。

７月26日＝前二子古墳石室復元市民プロジェクト実行委員会総会と委嘱式。委員12名、監事１名、顧問３名

９月１日～22日＝広報まえばし、新聞、テレビ、ホー

写真１　オリエンテーション（前二子古墳石室前）

写真２　前二子古墳筒形器台の制作

写真３　前二子古墳須恵器の窯出し（鼻毛石町一心窯）

写真４　制作品完成記念考古学講演会（白石太一郎先生）

ムページ等で馬具制作ボランティアの募集。23名の応募で全員を採用

10月５日ほか計３回＝原田委員長、八木委員、山本委員、担当職員による試作。安中市磯部町の平出豊顧問アトリエほか

10月６日＝大室古墳群の見学並びにオリエンテーション。「大室古墳の語り部」ボランティア解説員による古墳案内。プロジェクトの概要説明など

11月２日～５日＝馬具制作ワークショップ。会場＝総合福祉会館造形創作室。制作点数＝45点

１月９日～３月16日＝前橋・高崎連携文化財展「東国千年の都」で制作馬具と土器（平成18年度制作品）を展示。会場＝前橋プラザ元気21・高崎市シティギャラリー・かみつけの里博物館。見学者数＝9,939人

３月16日＝馬具制作完成記念考古学講演会。会場＝前橋プラザ元気21ホール。テーマ＝「前二子に葬られた人－輝く黄金・煌めくガラス・神秘な鏡－」杉山秀宏先生（県立歴史博物館）。「古代の金工の魅力とその素材の周辺－私の彫刻へのかかわり－」平出豊先生（彫刻家）。受講者＝103名

３月16日＝制作馬具の巡回展示。会場＝前橋プラザ元気21を皮切りに文化財保護課・粕川歴史民俗資料館

平成20年度

市民ボランティアの手により、国指定史跡前二子古墳石室を、発掘当時の明治11（1878）年の状態に復元する。今年度は３年計画の３年次にあたり、装身具（ガラス玉、鏡）を制作した。

７月24日＝実行委員会総会と委嘱式。委員12名、監査１名、顧問３名

９月１日～９月22日＝広報まえばし、ホームページ等でボランティアを募集。63名の応募があり全員採用（２コース参加可）

10月３日他計８回＝実行委員スタッフ、担当職員による検討会と試作。安中市磯部町平出豊顧問アトリエ（安中市）ほか

10月４日＝オリエンテーション。「大室古墳の語り部」による古墳案内、活動内容の説明

11月２日～５日＝ガラス玉制作ワークショップ、会場＝総合福祉会館調理実習室ほか。制作数＝2000個以上

11月29日～12月３日＝鏡制作ワークショップ。会場＝文化財保護課。制作＝石膏型34点

２月７日＝鏡鋳込み１（錫使用）。会場＝文化財保護課。制作＝23枚

２月21日＝鏡鋳込み２（青銅使用）。会場＝安中市磯部町平出豊顧問アトリエ。制作＝３枚

写真５　前二子古墳の双葉剣菱形杏葉をつくる

写真６　前二子古墳出土の珠文鏡石膏雌型をつくる

写真７　制作された前二子古墳の土器、金属製品、装身具

写真８　前二子古墳石室納め式

３月15日＝制作品完成記念考古学講演会。会場＝前橋プラザ元気21ホール。講演＝「大室古墳群の国際性－前二子古墳の横穴式石室と副葬品を通して－」講師＝右島和夫先生。参加者＝120名
３月16日＝装身具制作品の巡回展示。会場＝文化財保護課、粕川歴史民俗資料館ほか

平成22年度

市民ボランティアの手により、国指定史跡前二子古墳の石室を、発掘当時の明治11(1878)年の状態に復元展示する。平成18年度から20年度までの第１期事業の成果を踏まえて、平成22年度から新たに第２期３ケ年事業として実施する。今年度は装飾須恵器を制作した。
８月23日＝実行委員会総会と委嘱式。委員10名、監事１名、顧問１名
９月１日～９月27日＝ホームページ等でボランティアを募集。24名の応募。全員採用
10月９日＝オリエンテーション。「大室古墳の語り部」による古墳案内、活動内容の説明
10月30日～11月７日＝土器製制作ワークショップ。会場＝総合教育プラザ教材制作室。制作＝15個
12月18日～26日＝須恵器の還元焔焼成。会場＝鼻毛石町一心窯
２月27日＝完成記念考古学講演会。会場＝総合福祉会館多目的ホール。講演＝「日韓の古墳と装飾土器－新羅・加耶土器の造形－」。講師＝山本孝文先生（日本大学准教授）
３月３日＝装飾土器の展示。会場＝総合教育プラザ。ただし東日本大震災に伴う節電のため３月18日以降は休止した。

平成23年度

市民ボランティアの手により、国指定史跡前二子古墳の石室を、発掘当時の明治11（1878）年の状態に復元展示する。平成18年度から20年度までの第１期、平成22年度から24年度を第２期として事業を実施する。
今年度は山王町にある金冠塚古墳から出土した冠を制作した。
８月22日＝実行委員会総会、実行員委８名、監事１名、顧問１名
９月15日～10月10日＝広報まえばし、ホームページ等でボランティアを募集
10月29日＝オリエンテーション。「大室古墳の語り部」による古墳案内。活動内容の説明

写真９　装飾須恵器の制作

写真10　制作品完成記念考古学講演会（山本孝文先生）

写真11　装飾須恵器の窯出し（鼻毛石町一心窯）

写真12　制作品完成記念考古学講演会（右島和夫先生）

11月３日～16日＝冠制作ワークショップ。会場＝総合福祉会館造形創作室。制作＝27点
12月１日～27日＝制作品の展示。会場＝総合教育プラザ
２月26日＝制作品完成記念考古学講演会。会場＝総合福祉会館多目的ホール。講演＝「古墳時代後期における朝鮮半島と東国－金冠塚古墳の冠をとおして－」右島和夫先生（県文化財保護審議委員）

平成24年度

大室古墳群史跡整備事業の完成を記念して、前二子古墳石室を市民の手で復元展示する「前二子古墳石室復元市民プロジェクト」を実施している。平成18～20年度にかけて第１期事業として、前二子古墳出土の土器や金属器、装身具の制作を行い、完成品を前二子古墳の石室に納めた。

平成22年度からは第２期事業として、前二子古墳に関連した装飾須恵器や山王金冠塚古墳出土の金冠などを制作し、第２期事業の最終年度に当たる今年度は、前二子古墳出土の杖形埴輪や大阪市四天王寺宝物館に収蔵される伝群馬県出土の「人が乗る馬形埴輪」（後二子古墳出土と考えられる）、その他関連する埴輪を制作した。
６月５日～９月２日＝市立図書館展示室の夏季企画展『前二子古墳出土品のルーツを探る～日韓の古墳と装飾土器～』を開催し、平成23年度制作品を展示
７月20日＝実行委員会総会を開催。委員10名、監事１名、顧問１名を委嘱
８月31日～９月18日＝広報まえばしやホームページ等でボランティアを募集。36名の応募があり、32名が参加。
10月６日＝オリエンテーション開催。「大室古墳（つか）の語り部」よる古墳案内、活動内容の説明
10月12日～11月５日＝埴輪制作ワークショップ。前半は総合教育プラザ理科教材準備室、後半は文化財保護課会議室を会場として開催。のべ参加者数は217名（ボランティア157名・実行委員63名）36点の制作品が出来あがった。
12月８日～１月12日＝埴輪の焼成。会場＝鼻毛石町一心窯。のべ参加者数＝62名。すべて良好に焼きあがった。
２月24日＝埴輪制作完成記念考古学講演会を総合福祉会館で開催。講師＝文化庁調査官和田一之輔氏。講演＝「前二子古墳出土の杖形土器の謎」と題して講演を行った。来場者数＝74名。９割以上の来場者から「面白い」、「興味深い」との回答が得られ、好評を博した。
３月６日～３月30日＝総合教育プラザ教育資料展示室にて、企画展「杖形土器の謎を探る～前二子古墳出土の杖形埴輪から～」にて平成24年度制作品を展示

写真13　完成した金冠塚古墳の冠

写真14　杖形埴輪の窯出し（鼻毛石町一心窯）

写真15　制作品完成記念考古学講演会（和田一之輔先生）

写真16　四天王寺宝物館での資料調査

前二子古墳石室復元市民プロジェクト実行委員会

◆実行委員会

委 員 長：原田　恒広
副委員長：八木　孝男
委　　員：山本　幸枝・右島　和夫・桜岡　正信・杉山　秀宏
委　　員：西大室自治会長・東大室自治会長・荒砥中学校校長・管理部長・指導部長
監　　事：前橋観光コンベンション協会事務局長
顧　　問：白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）
顧　　問：佐藤　博之（前橋市教育委員会教育長）

◆参加者

青木かおり・阿久澤智和・浅見　純子・阿部　上枝・阿部　信一・粟岡エミ子・池内　麻美・池田千恵子
池田　武士・石田　夏美・石倉　稔夫・石原　　勉・石原　義夫・稲垣　泰子・稲村　久美・井上　和久
岩崎　道子・岩崎みづ穂・牛込　美子・江部　美鈴・大塚　京子・大渕登喜子・岡田　雅子・尾田　正子
悴田　勇也・加藤くに子・加藤　有紀・金子　　薫・狩野　義雄・上島　和子・唐木　克巳・北爪　英男
木村　　哲・髙澤　京子・後藤智惠子・後閑　　茂・小林志津江・小山　　晃・小山　清子・金万　倫子
財　　正美・斉木　泰彦・斉藤　清美・斎藤真奈美・定方　信子・佐藤　佳子・品田　　栄・柴崎まさ子
柴田　敏子・清水　良子・関口美穂子・高沢　京子・多賀堂理恵・高橋千代子・高橋　笑子・高山　和枝
武井　光代・田嶋　　都・谷嶋　靖夫・津金　英子・角田はる子・坪井真由美・出川　未涼・渡木　秋子
戸丸　澄江・長井　一之・永井　智教・永井　聡美・中澤　都子・中村　佳子・長屋万里子・奈良　啓子
櫛島美千子・沼野　玲子・野田　知恵・萩原　智子・橋本　実枝・橋本ちづる・橋本　昌彦・服部　友美
長谷川波子・長谷川理恵・幡野　昭子・林　　綾子・廣田　　治・深澤　英子・藤田　　進・福田　紀子
布施　節子・星野　和子・堀口　武子・堀越　恵美・堀込とよ江・本間　　寛・松井　克子・松口　尚子
松田　昭治・松原　　睦・松宮由美子・松本喜久子・松本　君江・真庭　武志・峰岸あや子・横澤　真一
横沢　智子・吉田真理子・淀　　幸子・渡辺　　明　　（敬称略・順不同）

◆協　力

石井　政幸（一心窯主宰）・平出　　豊（彫刻家）

◆事務局

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

平成18年度・土器をつくる

平成19年度・馬具をつくる

平成20年度・鏡・玉をつくる

◆制作品の経過

平成18年度…前二子古墳石室土器をつくる
平成19年度…前二子古墳石室馬具をつくる
平成20年度…前二子古墳石室鏡・玉をつくる
平成22年度…日韓の筒形器台をつくる
平成23年度…古墳時代の冠をつくる
平成24年度…石見型（杖形）埴輪と四天王寺の馬をつくる

◆制作品完成記念考古学講演会

平成18年度　「前二子古墳の石室と副葬品」
　　白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）
平成19年度　「古代の金工の魅力とその素材の周辺～私の彫刻へのかかわり～」
　　平出　　豊（彫刻家）
　　「前二子古墳に葬られた人～副葬品から見た前二子古墳～」
　　杉山　秀宏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
平成20年度　「大室古墳群の国際性～前二子古墳の横穴式石室と副葬品～」
　　右島　和夫（群馬県立歴史博物館館長）
平成22年度　「日韓の古墳と装飾土器～新羅・加耶土器の造形～」
　　山本　孝文（日本大学教授）
平成23年度　「古墳時代における朝鮮半島と東国～金冠塚古墳の冠をとおして～」
　　右島　和夫（群馬県立歴史博物館館長）
平成24年度　「前二子古墳から見つかった杖形埴輪（石見型埴輪）の謎」
　　和田一之輔（奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一研究室）

（敬称略）

平成22年度
日韓の筒形器台をつくる

平成23年度
古墳時代の冠をつくる

平成24年度
石見型（杖形）埴輪と
四天王寺の馬をつくる